

上田市文化財調査報告書第100集

史跡信濃国分寺跡

平成14(2002)年度～平成17(2005)年度記念物保存修理事業に伴う
史跡信濃国分寺跡僧寺北東域及び僧寺南大門推定地発掘調査報告書

2006. 2

上 田 市
上 田 市 教 育 委 員 会

序

史跡信濃国分寺跡は、古代信濃を代表する遺跡であるとともに、全国の国分寺跡のなかでも特に歴史的重要性の高い遺跡として広く認められています。

史跡指定は昭和5年(1930)に遡りますが、昭和38年から46年(1963～1971)にかけての発掘調査によって、僧寺跡と尼寺跡の伽藍の具体的構造とともに、それらが隣接して立地する特異性も明らかになりました。遺跡の重要性に対する認識を受けて、同43年(1968)に史跡指定範囲の拡大と公有地化が推進され、続いて行われた整備事業により史跡公園化されました。これは国分寺跡の本格整備としては、全国でも最も早い事例に属しています。史跡範囲は古代伽藍跡にとどまらず、八日堂縁日や蘇民将来講(国選択無形民俗文化財)でもつとに名高い現在の国分寺と、蚕室住居に代表される歴史的建物を残す門前の集落などをも含んでいます。このように、古代伽藍跡と、その法灯を伝えながら信仰の場として現在に息づいている寺院とが史跡内で併置していることも、信濃国分寺を際立たせている特徴です。

その一方で、史跡公園も開園から30有余年を数え、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期にきていました。

上田市では、史跡の保全に万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、平成14(2002)年度から、史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会(委員長 山中敏史 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 遺跡調査技術研究室長)によって、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針を示すとともに、平成元年以降の史跡公有化事業で取得した範囲を主たる対象として、改めて史跡の構造解明のために、発掘調査に着手しました。

今回は、僧寺の北東域と僧寺南大門跡推定地を対象に、従前の調査では未詳であった僧寺の区画施設について発掘調査による究明を図りました。残念ながら、築地塀等の区画施設は確認できませんでしたが、南大門跡が確認され、新たな知見を蓄積することができました。

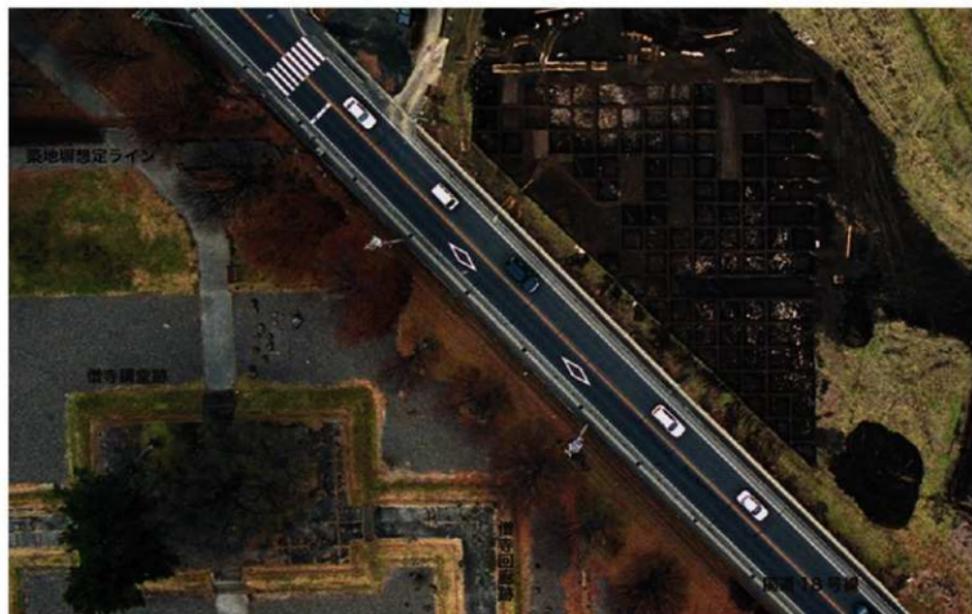
信濃国分寺跡の整備と調査は、全体から見れば、まだ緒に就いたところといえます。今回の調査にあたり、御指導をいただいた史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会の委員各位と、ご協力をいただいた地元住民、調査作業員の皆さんに心から御礼申し上げ、序のことばといたします。

平成18年2月

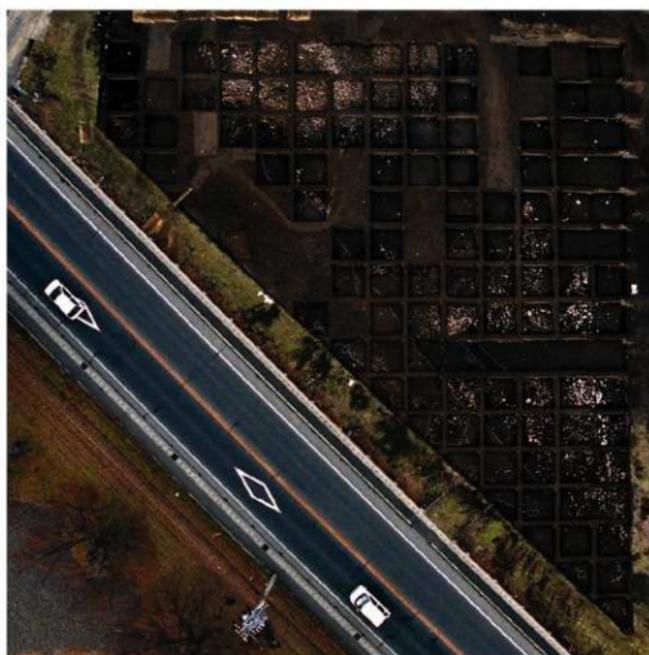
上田市教育委員会教育長 森 大和



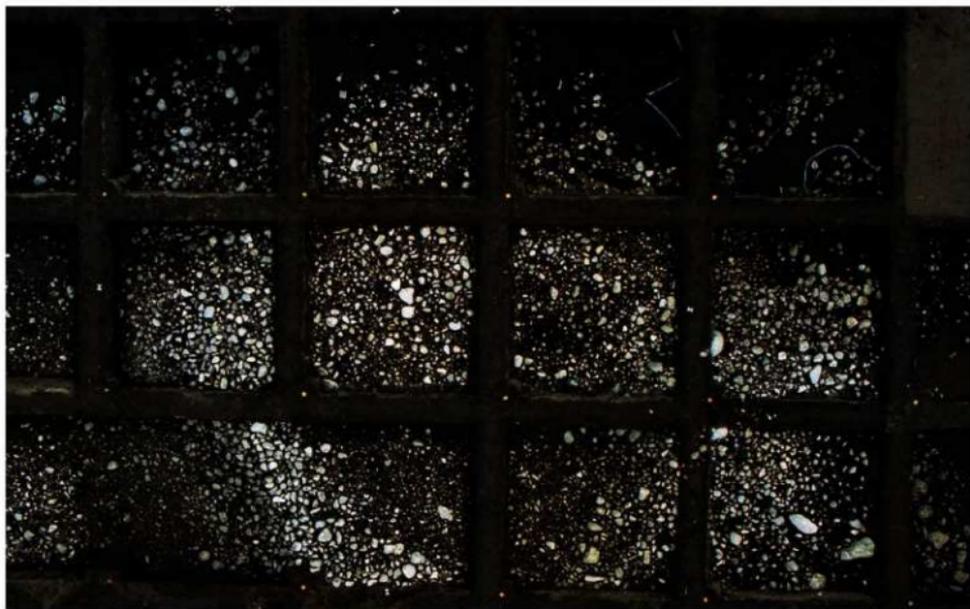
PL.1 信濃国分寺跡航空写真(平成17年3月)



PL.2 H14 僧寺北東城調査区全景 (真上)



PL.3 H14 僧寺北東城調査区全景 (真上)



PL.4 H14 僧寺北東域段状石敷遺構(真上)



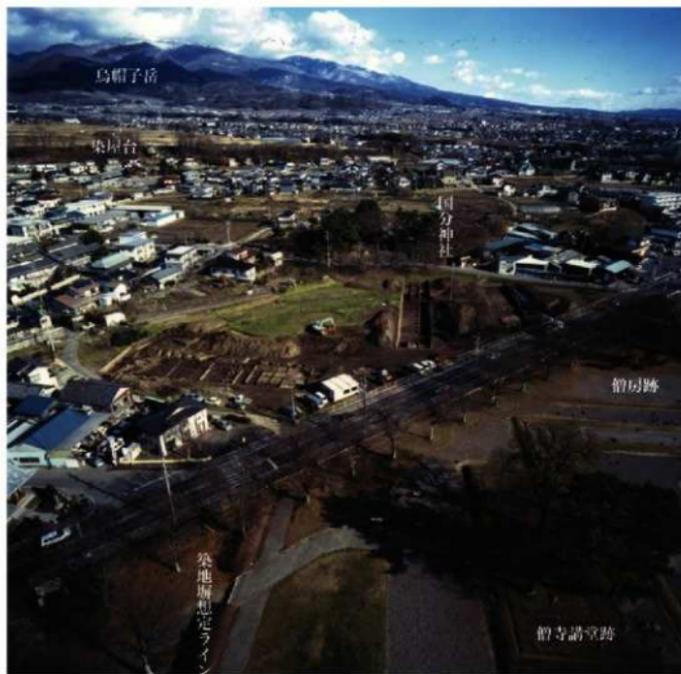
PL.5 H14 僧寺北東域段状石敷遺構(北)



PL.6 H15 僧寺北東城調査区全景 (真上)



PL.7 H15 僧寺北東城調査区全景 (東)



PL.8 H15 僧寺北東城調査区全景 (西)



PL.9 H15 僧寺北東城調査G地区全景(真上)



PL.10 H15 僧寺北東城調査H地区石積(南)



PL.11 H15 僧寺北東城調査G地区
段状集石遺構断割(南東)



PL.12 H15 僧寺北東城調査H地区
地業下の溝(東)



PL.13 H15 僧寺北東城調査H・I地区全景(真上)



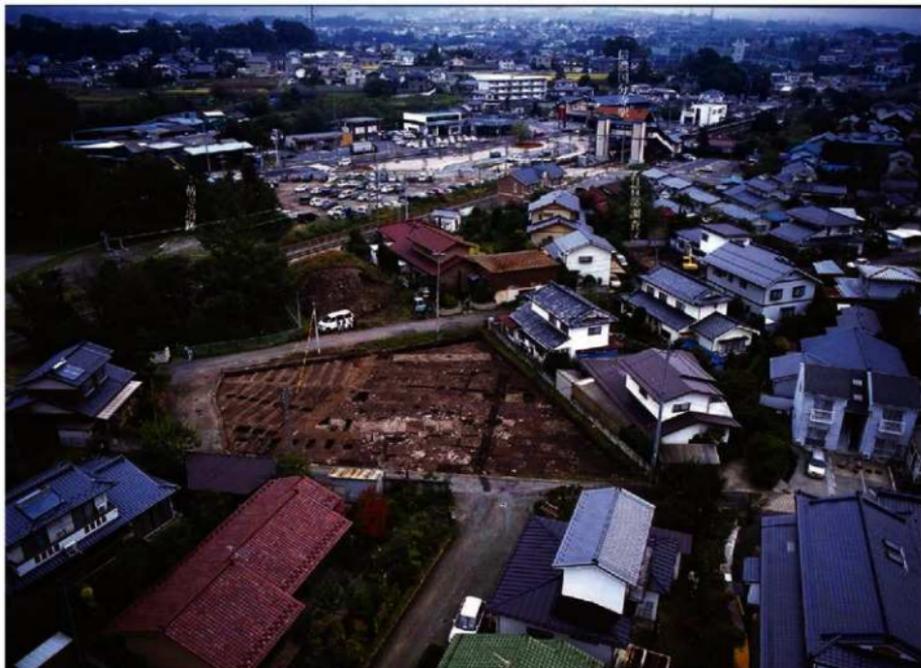
PL.14 H16 僧寺南大門調査地及び僧寺伽藍跡(南)



PL.15 H16 僧寺南大門調査地全景(真上)



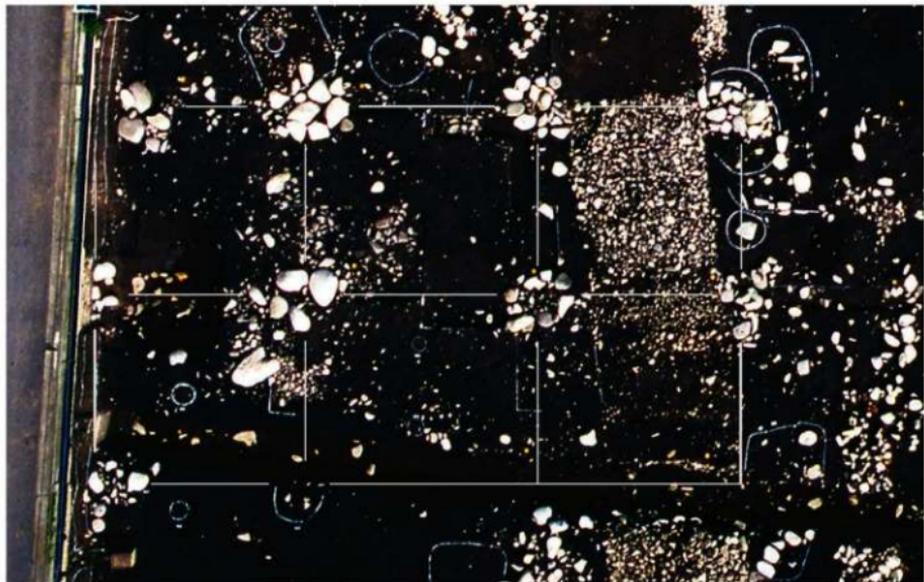
PL.16 H16 僧寺南大門調査地及び僧寺中門跡(真上)



PL.17 H16 浄寺南大門跡調査地 (西)



PL.18 H16 浄寺南大門跡調査地 (東)



PL.19 H16 僧寺南大門跡調査地南大門根石(真上)



PL.20 H16 僧寺南大門跡調査地南大門根石(SX-01)と暗渠排水遺構(SD-01)断ち割り(南)



PL.21 H16 僧寺南大門跡調査地南大門根石(SX-06)と暗渠排水遺構(SD-01)断ち割り(南東)



PL.22 H16 僧寺南大門跡調査地 SD-02 セクション(北)



PL.23 H16 僧寺南大門跡調査地 SD-03 セクション(北)



PL.24 僧寺北東域及び南大門跡調査地出土軒丸瓦・軒平瓦集合写真(撮影:小川忠博)



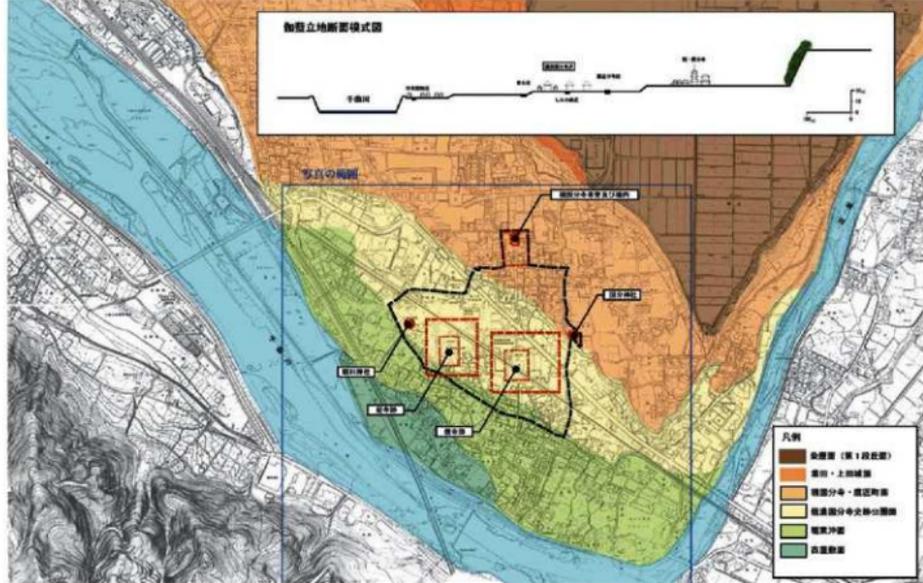
PL.25 僧寺北東域調査地出土猿型把手(撮影:小川忠博)



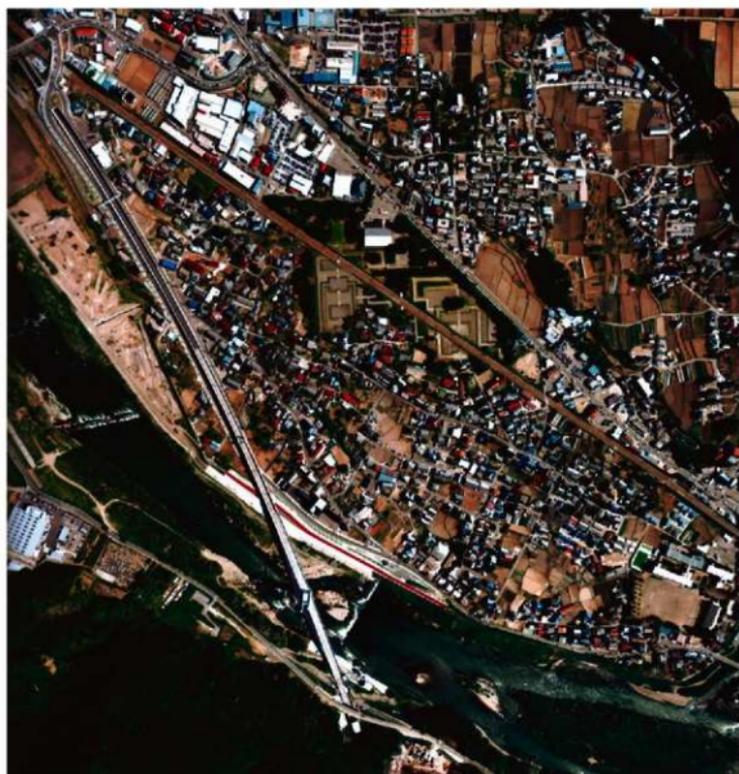
PL.26 僧寺北東城調査地出土軒丸瓦・軒平瓦 (撮影: 小川忠博)



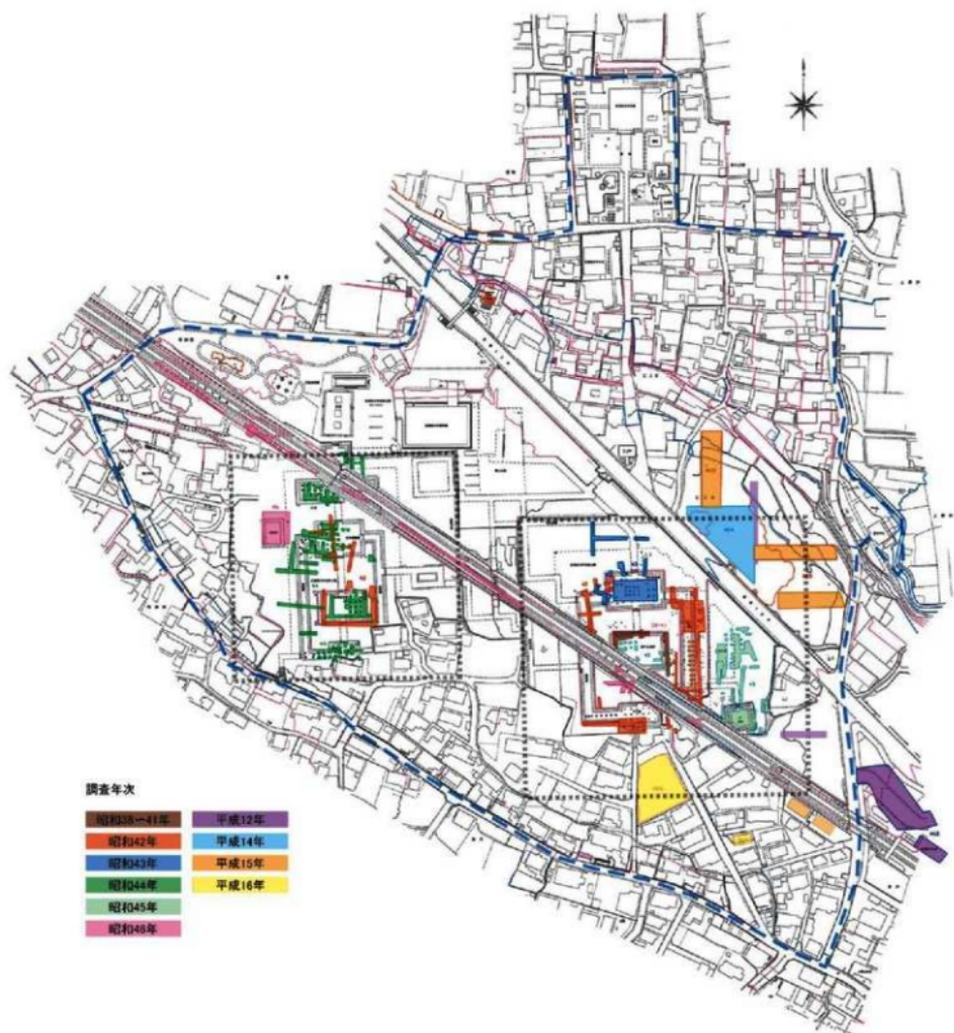
PL.27 僧寺南大門調査地出土軒丸瓦 (撮影: 小川忠博)



第1図 史跡信濃国分寺跡の立地



PL.28 史跡信濃国分寺跡広域航空写真 (平成10年撮影)



第2図-1 史跡信濃国分寺跡発掘調査履歴図

例 言

- 1 本書は、長野県上田市大字国分が所在する史跡信濃国分寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業記念物保存修理事業及び長野県補助文化財保護事業により、上田市が実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局文化振興課が行った。
- 3 現地調査は、平成 14 (2002) 年 10 月 28 日から翌 1 月 10 日及び平成 15 (2003) 年 10 月 6 日から翌 1 月 6 日ならびに平成 15 (2004) 年 6 月 24 日から 10 月 29 日にかけて実施し、整理・報告書作成作業は、平成 17 (2005) 年 2 月までの間に断続的に実施した。
- 4 基準・水準点設置、メッシュ (グリッド) 設置に係る各種測量、空中写真測量及び空中写真撮影は、株式会社写真測図研究所及び国際航業株式会社長野営業所に委託して実施した。また、遺構断面等の補足実測作業は、養場奈那江・井沢光子・大井敬子・田村まり子・山本万里が行った。
- 5 整理・報告書作成作業は、養場奈那江、井沢光子、石合好江、市村みつ子、大井敬子、田村まり子、田村雄二、丸田由紀子、山本万里が行った。
- 6 本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真は委託業者が撮影したものを使用した。また、瓦の写真と巻頭カラー写真の瓦・遺物写真は、小川忠博が撮影したものを使用した。
- 7 本書の執筆は、第四章を倉沢正幸 (上田市立信濃国分寺資料館長) が、その他を中沢が行った。なお、第一章第 1 節及び第二章については、史跡信濃国分寺跡保存整備基本計画書 (平成 17 年 3 月上田市教育委員会) のものを転載した。
- 8 本調査に係る資料はすべて上田市教育委員会の責任下に、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 9 本調査にあたり、多くの方々のご協力をいただいた。芳名を期して感謝する。(順不同・敬称略)

史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会

[山中敏史 (独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所所蔵文化財センター遺跡調査技術研究室長・委員長)、桐原健 (長野県考古学会会長)、佐藤信 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)、小池雅夫 (上田市文化財保護審議会会長・平成 15 年 6 月 10 日退任)、川上元 (上田市文化財保護審議会委員・平成 15 年 6 月 11 日着任)、佐々木邦博 (信州大学農学部森林科学科教授)、堀内法道 (国分寺住職・大正大学教授)、山浦英典 (下堀自治会代表)、宮沢孝 (国分自治会代表)、竹内良一 (上沢自治会代表)、市原富士夫 (文化庁文化財部記念物課)、出河裕典 (長野県教育委員会文化財生涯学習課・平成 16 年 3 月 31 日退任)、西山克己 (長野県教育委員会文化財生涯学習課・平成 16 年 4 月 1 日着任)] 神川地区自治会連合会、上沢自治会、国分自治会、下堀自治会、宗教法人国分寺、(社) 上田地域シルバー人材センター

作業員の皆さん

養場奈那江、養場雄太、秋山八栄子、新井邦雄、池田市郎、井沢光子、石合好江、石川三郎、石巻賢忠、市村みつ子、内山仁志、大井敬子、逢坂徳雄、小川博子、小沢幸子、尾沢正江、久保田和江、倉沢寿、甲田五夫、小林竹子、児玉一夫、小松正明、小山政友、佐々木英夫、清水閣二、滝澤七郎、滝原久夫、竹内侑子、竹内和好、竹花満子、田村まり子、西澤とくい、古沢辰男、北条健、保屋野友延、三浦澄子、満木重雄、村田宣子、丸田由紀子、山越直子、山本万里、横沢生枝、横沢昇、和田和英

現地指導

倉田芳郎 (駒澤大学名誉教授)、太田喜美子 (駒澤大学講師)、塩入秀敏 (上田女子短期大学教授)、五十嵐幹雄 (上田市文化財保護審議会委員)

凡 例

遺構

- 1 遺構の略号は次のとおりで、続く番号は、本調査地内で任意に振ったものである。竪穴住居址…SB-、溝…SD-、土坑…SK-、集石…SX-、ピット…P-、竪穴住居址のピット…p
- 2 実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。
- 3 縮尺は、原則として原図 1/10 と 1/20 に 1/3 縮小をかけて 1/30、1/60 とした。
- 4 レベルの標記はすべて海拔高（単位：m）である。
- 5 網点は焼土を示す。
- 6 遺構観察表の長さの単位は m で、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。
- 7 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。
- 8 遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

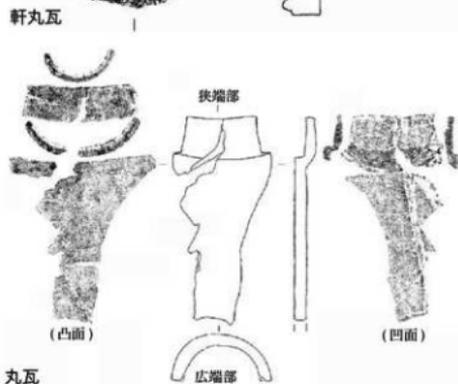
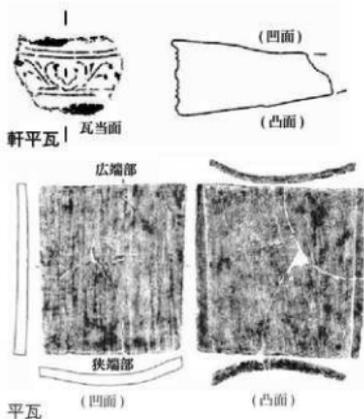
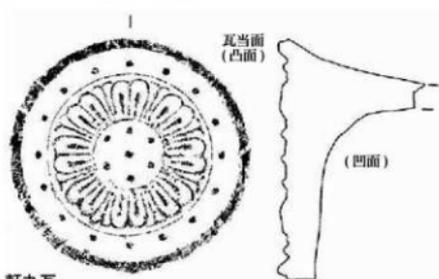
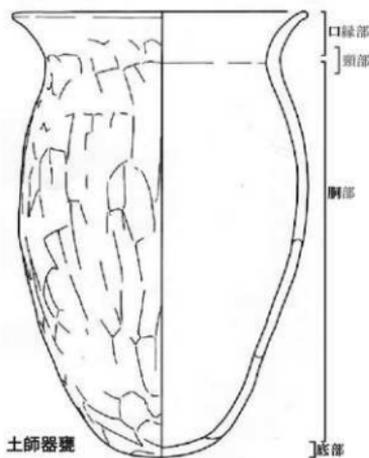
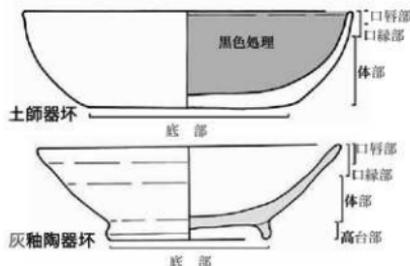
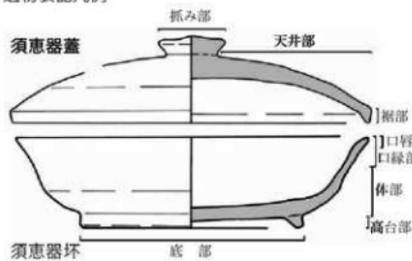
- 1 土器・石器・鉄器実測図は、原図 1/1 に 1/3 縮小をかけて 1/3 とし、瓦実測図は原図 1/1 に 1/4 もしくは 1/6 縮小とした。
- 2 遺物観察票の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。分量の単位はすべて cm である。
- 3 土器・石器・鉄器写真の縮尺は任意とし、瓦写真はおおむね 1/4 縮尺とした。

調査の体制

調査は、上田市教育委員会事務局文化振興課が事務局となって実施した。なお、組織機構改編により、事務局は、平成 17 年 3 月 31 日まで「生涯学習課文化財係」が担当し、以降は「文化振興課文化財保護係」が担当した。その体制は次のとおりである。

教育長	我妻 忠夫（平成 14 年 12 月 20 日 退任）、森 大和（平成 14 年 12 月 21 日 着任）
教育次長	内藤政則（平成 16 年 3 月 31 日 退任）、中村明文（平成 16 年 4 月 1 日 着任）
文化振興課長	塩野崎利英（平成 14 年 5 月 19 日 退任）、宮下省二（平成 14 年 5 月 20 日 着任、平成 16 年 3 月 31 日 退任）、関和幸（平成 16 年 4 月 1 日 着任、平成 17 年 3 月 31 日 退任）、岡田洋一（平成 17 年 4 月 1 日 着任）
文化財（保護）係長	細川修（平成 14 年 5 月 19 日 退任）、小林浩（平成 14 年 5 月 20 日 着任、平成 16 年 3 月 31 日 退任）、土屋俊彦（平成 16 年 4 月 1 日 着任）
文化財（保護）係	中沢徳士、尾見智志、塩崎幸夫（平成 17 年 3 月 31 日 退任）、久保田敦子（平成 16 年 3 月 31 日 退任）、小井土直子（平成 17 年 4 月 1 日 着任）

遺物表記凡例



本文目次

巻頭カラー図説	
例言	
凡例	
目次	
第一章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
1 信濃県分寺・国分寺の歴史	
(1) 創建	
(2) 衰退と再興	
(3) 国分寺の廃止	2
2 研究史と保存運動	
(1) 信濃県分寺の研究史	
(2) 信濃県分寺保存会に至る経緯	3
3 史跡指定と発掘調査の経緯	
(1) 史跡指定と指定区域の拡大	
(2) 史跡区域化までの発掘調査	
4 発掘調査事業	4
(1) 事業の概要	
5 平成時代の信濃県分寺	5
第2節 調査の方法	
1 遺跡名と略号	
2 調査区の設定	6
3 グリッドの設定	
4 遺跡写真	
5 遺跡の割り上げ	
第3節 調査日記	7
第二章 遺跡の発見	11
第1節 自然発見	
1 上田の気候	
2 上田の地形と地質	
3 信濃県分寺跡周辺の地形と地質	12
4 上田の植生	
第2節 歴史的発見	13
1 先史～縄文時代	
2 弥生時代	
3 古墳時代	14
4 律令期	
5 中世	15
6 近世	
7 近代	16
第三章 調査の結果	17
第1節 曾ヶ森北条城の調査	
1 調査の概要	
2 出土遺物	18
3 出土土瓦	65
4 出土瓦	91
第2節 曾ヶ森南大門の調査	115
1 調査の概要	
2 出土遺物	117
3 出土土遺物	130
4 出土瓦	133
第3節 その他の調査	153
1 調査の概要	
(1) 曾ヶ森築地帯想定ラインの調査	
(2) 曾ヶ森南東部築地帯想定ラインの調査	
(3) 曾ヶ森南大門南東部築地帯の調査	
2 出土遺物	154
3 遺物	157

第四章 ヘラ抜き文字・出土瓦の考察	159
第1節 曾ヶ森北条城出土のヘラ抜き文字について	159
1 ヘラ抜き文字「佐久」	
2 ヘラ抜き文字「丹」	
3 ヘラ抜き文字「大」	
4 高石石段古堂地帯と御田古堂地帯	160
5 文字瓦からみた郡名ヘラ抜き文字の意味	
第2節 曾ヶ森北条城出土の瓦割について	161
1 瓦子文解九瓦	
2 平瓦	
第3節 曾ヶ森南大門御田出土瓦割、築地帯土遺物について	162
1 軒九瓦・九瓦・平瓦	
2 築地帯土遺物	
写真目録	165
報告書抄録	224

表目次

1 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城発掘調査遺物観察表	64
2 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (1)	75
3 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (2)	76
4 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (3)	77
5 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (4)	78
6 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (5)	79
7 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (6)	80
8 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (7)	81
9 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (8)	82
10 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (9)	83
11 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (10)	84
12 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (11)	85
13 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (12)	86
14 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (13)	87
15 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (14)	88
16 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (15)	89
17 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土遺物観察表 (16)	90
18 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (1)	107
19 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (2)	108
20 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (3)	109
21 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (4)	110
22 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (5)	111
23 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (6)	112
24 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森北条城出土瓦観察表 (7)	113
25 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門御田発掘調査遺物観察表	129
26 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土遺物観察表 (1)	131
27 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土遺物観察表 (2)	132
28 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (1)	145
29 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (2)	146
30 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (3)	147
31 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (4)	148
32 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (5)	149
33 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (6)	150
34 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森南大門出土瓦観察表 (7)	151
35 史跡信濃県分寺跡曾ヶ森その他調査出土遺物観察表	158

図版目次

1 史跡信濃県分寺跡の位置	巻頭
2 1 史跡信濃県分寺跡発掘調査発掘図	
2-2 平成12(2000)年度～平成16(2004)年度調査位置図	
3 史跡信濃県分寺跡発掘調査メッシュ配置図	6

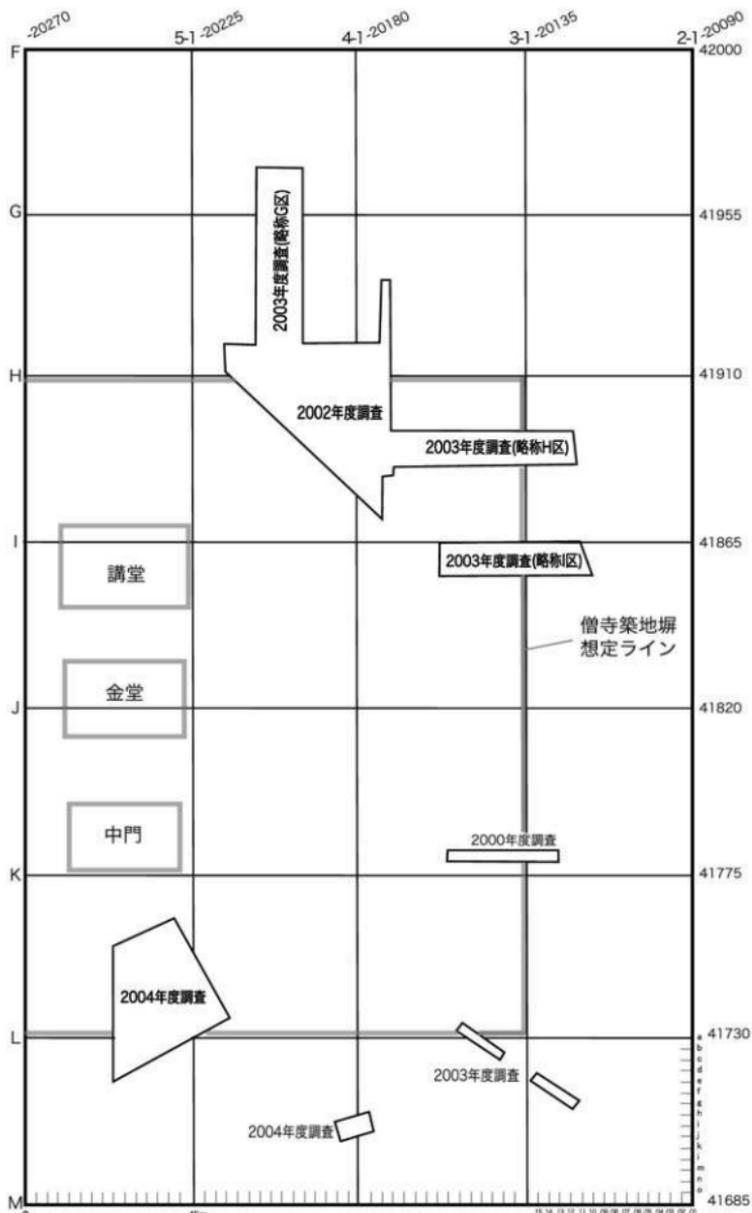
4	上田市の街角・街区風貌、平均気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ	11
5	上田市の地形区分(1)及び地形断面図(下)	12
6	平成14(2002)～15(2003)年度曾ヶ寺北東風見処調査記録(平山雄樹編)	18
7	平成14(2002)年度曾ヶ寺北東風見処調査記録(関野)	19
8	平成15(2003)年度曾ヶ寺北東風見処調査記録(関野)	20
9	平成15(2003)年度曾ヶ寺北東風見処調査記録(関野)	21
10	平成15(2003)年度曾ヶ寺北東風見処調査記録(関野)	22
11	曾ヶ寺北東風見処調査記録(1)	23
12	曾ヶ寺北東風見処調査記録(2)	24
13	曾ヶ寺北東風見処調査記録(3)	25
14	曾ヶ寺北東風見処調査記録(4)	26
15	曾ヶ寺北東風見処調査記録(5)	27
16	曾ヶ寺北東風見処調査記録(6)	28
17	曾ヶ寺北東風見処調査記録(7)	29
18	曾ヶ寺北東風見処調査記録(8)	30
19	曾ヶ寺北東風見処調査記録(9)	31
20	曾ヶ寺北東風見処調査記録(10)	32
21	曾ヶ寺北東風見処調査記録(11)	33
22	曾ヶ寺北東風見処調査記録(12)	34
23	曾ヶ寺北東風見処調査記録(13)	35
24	曾ヶ寺北東風見処調査記録(14)	36
25	曾ヶ寺北東風見処調査記録(15)	37
26	曾ヶ寺北東風見処調査記録(16)	38
27	曾ヶ寺北東風見処調査記録(17)	39
28	曾ヶ寺北東風見処調査記録(18)	40
29	曾ヶ寺北東風見処調査記録(19)	41
30	曾ヶ寺北東風見処調査記録(20)	42
31	曾ヶ寺北東風見処調査記録(21)	43
32	曾ヶ寺北東風見処調査記録(22)	44
33	曾ヶ寺北東風見処調査記録(23)	45
34	曾ヶ寺北東風見処調査記録(24)	46
35	曾ヶ寺北東風見処調査記録(25)	47
36	曾ヶ寺北東風見処調査記録(26)	48
37	曾ヶ寺北東風見処調査記録(27)	49
38	曾ヶ寺北東風見処調査記録(28)	50
39	曾ヶ寺北東風見処調査記録(29)	51
40	曾ヶ寺北東風見処調査記録(30)	52
41	曾ヶ寺北東風見処調査記録(31)	53
42	曾ヶ寺北東風見処調査記録(32)	54
43	曾ヶ寺北東風見処調査記録(33)	55
44	曾ヶ寺北東風見処調査記録(34)	56
45	曾ヶ寺北東風見処調査記録(35)	57
46	曾ヶ寺北東風見処調査記録(36)	58
47	曾ヶ寺北東風見処調査記録(37)	59
48	曾ヶ寺北東風見処調査記録(38)	60
49	曾ヶ寺北東風見処調査記録(39)	61
50	曾ヶ寺北東風見処調査記録(40)	62
51	曾ヶ寺北東風見処調査記録(41)	63
52	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(1)	65
53	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(2)	66
54	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(3)	67
55	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(4)	68
56	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(5)	69
57	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(6)	70
58	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(7)	71
59	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(8)	72
60	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(9)	73
61	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土遺物実照図(10)	74
62	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(1)	91
63	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(2)	92
64	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(3)	93
65	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(4)	94
66	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(5)	95

67	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(6)	96
68	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(7)	97
69	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(8)	98
70	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(9)	99
71	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(10)	100
72	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(11)	101
73	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(12)	102
74	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(13)	103
75	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(14)	104
76	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(15)	105
77	光野石園図分・曾ヶ寺北東城出土瓦実照図(16)	106
78	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(1)	117
79	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(2)	118
80	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(3)	119
81	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(4)	120
82	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(5)	121
83	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(6)	122
84	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(7)	123
85	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(8)	124
86	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(9)	125
87	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(10)	126
88	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(11)	127
89	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(12)	128
90	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(1)	130
91	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(2)	133
92	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(3)	134
93	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(4)	135
94	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(5)	136
95	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(6)	137
96	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(7)	138
97	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(8)	139
98	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(9)	140
99	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(10)	141
100	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(11)	142
101	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(12)	143
102	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(13)	144
103	曾ヶ寺東院跡発掘調査記録(1)	154
104	曾ヶ寺南東院跡発掘調査記録(1)	155
105	曾ヶ寺南大門跡発掘調査記録(1)	156
106	光野石園図分・曾ヶ寺南大門跡出土遺物実照図(1)	157
107	へろ橋文字・出土瓦の考察実照図	164

写真図版目次

1	信濃国分寺南院跡写真	巻頭
2	H4 曾ヶ寺北東風見処(全景)	(真上)
3	H4 曾ヶ寺北東風見処(全景)	(真上)
4	H4 曾ヶ寺北東城跡(石散敷)	(真上)
5	H4 曾ヶ寺北東城跡(石散敷)	(北)
6	H5 曾ヶ寺北東城跡(全景)	(真上)
7	H15 曾ヶ寺北東城跡(全景)	(東)
8	H15 曾ヶ寺北東城跡(全景)	(南)
9	H15曾ヶ寺北東城跡(堀)の全景	(真上)
10	H15曾ヶ寺北東城跡(堀)の石積	(真上)
11	H15曾ヶ寺北東城跡(堀)の石積(東)	(南東)
12	H15曾ヶ寺北東城跡(堀)の石積(西)	(南西)
13	H15曾ヶ寺北東城跡(堀)の石積	(真上)
14	H16曾ヶ寺南大門跡(東)及び曾ヶ寺南院跡	(南)
15	H16曾ヶ寺南大門跡(東)全景	(真上)
16	H16曾ヶ寺南大門跡(東)地及び曾ヶ寺南院跡	(真上)
17	H16曾ヶ寺南大門跡(東)	(南)
18	H16曾ヶ寺南大門跡(東)	(東)

19	H16特命捜査大目録在地方大目録執行 (頁上)	82	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (6)	186
20	H16特命捜査大目録在地方大目録執行(SX01)と知泉排水遺跡SD-01(南東遺り/西一 巻面)	83	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (7)	187
21	H16特命捜査大目録在地方大目録執行(SX06)と知泉排水遺跡SD-01(南東遺り/南東)	84	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (8)	188
22	H16特命捜査大目録在地方大目録執行(SX02)のセクション (北)	85	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (9)	189
23	H16特命捜査大目録在地方大目録執行(SX03)のセクション (北)	86	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (1)	190
24	佛寺北条城及び佛人門調査在地方上杉丸瓦・軒平瓦集合同写 (複製・小田忠博)	87	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (2)	191
25	佛寺北条城城郭在地方上杉丸瓦・軒平瓦 (複製・小田忠博)	88	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (3)	192
26	佛寺北条城城郭在地方上杉丸瓦・軒平瓦 (複製・小田忠博)	89	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (4)	193
27	佛寺南大門調査在地方上杉丸瓦 (複製・小田忠博)	90	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (5)	194
28	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城城郭同写	91	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (6)	195
29	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城同写	92	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (7)	196
30	園分寺本堂 (抄写原写)	93	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (8)	197
31	園分寺本堂 (複製)	94	南大門調査在地方上杉丸瓦・軒平瓦調査・調査跡・城壁と城郭部分	198
32	11/18 文殊佛閣委員会現地調査簿	95	平成16年度調査報告書 (頁上)	199
33	11/21 SRCラジオ取材	96	南大門調査簿 (南)	200
34	作業風景	97	南大門調査簿 (東)	200
35	シート養生	98	南大門調査簿 (北)	201
36	H16遺跡発掘出土作業	99	南大門調査(SX-01)と知泉排水遺跡SD-01のセクション (南)	
37	H16遺跡発掘出土作業	100	南大門調査(SX-06)と知泉排水遺跡SD-01のセクション (南東)	202
38	H16遺跡発掘出土同写 (南)	101	知泉排水遺跡SD-01セクション (排水管内壁で石を敷く 南)	
39	H16遺跡発掘出土同写 (東)	102	知泉排水遺跡SD-01セクション (排水管内壁で石を敷く 南)	203
40	H14調査作業員	103	知泉排水遺跡SD-02セクション (南)	
41	H14調査作業員	104	知泉排水遺跡SD-02セクション (内窓にトンネル状を設ける 南)	204
42	雲人遺跡群下の埋蔵品同写	105	知泉排水遺跡SD-02内窓にトンネル状を設ける 北	
43	生島足島神社本殿	106	知泉排水遺跡SD-02セクション (北)	205
44	中津寺聖徳堂 (国史院文書館蔵)の中心の施設にか	107	知泉排水遺跡SD-03Aセクション (北)	
45	史跡1199発掘物及び復元図	108	知泉排水遺跡SD-04セクション (南)	206
46	明治30年国史院大目録巻	109	知泉排水遺跡SD-06セクション (南)	
47	南大門調査在地方全景 (頁上)	110	知泉排水遺跡SD-07セクション (南)	
48	新石SX-06と知泉排水遺跡SD-01のセクション (南東)	111	知泉排水遺跡SD-08セクション (南)	
49	佛寺南東部築地地盤想定ライン調査在地方全景 (南)	112	知泉排水遺跡SD-09セクション (南)	
50	10ノ上調査在地方全景 (東)	113	知泉排水遺跡SD-10セクション (南)	
51	佛寺南大門調査在地方全景 (頁上)	114	知泉排水遺跡SD-11セクション (南)	
52	平成14年度調査在地方全景 (頁上)	115	知泉排水遺跡SD-12セクション (南)	
53	平成14年度調査 政代築石遺構	116	知泉排水遺跡SD-13セクション (南)	207
54	平成14年度調査 政代築石遺構 (北)	117	知泉排水遺跡SD-15セクション (南)	
55	平成14年度調査 政代築石遺構 (南東)	118	知泉排水遺跡SD-16セクション (南)	
56	平成14年度調査 政代築石遺構 (南東)	119	知泉排水遺跡SD-17セクション (南)	
57	平成14年度調査在地方築地地盤下の発掘 (南東)	120	知泉排水遺跡SD-18セクション (南)	
58	平成14年度調査在地方築地地盤下の発掘セクション (北西)	121	知泉排水遺跡SD-19セクション (南)	
59	平成15年度築地地盤調査在地方全景	122	知泉排水遺跡SD-20セクション (南)	
60	平成15年度築地地盤調査在地方 (頁上・写真右記)	123	築石排水遺跡SD-21セクション (南)	
61	平成15年度築地地盤調査在地方 (頁上)	124	知泉排水遺跡SD-24セクション (南)	208
62	平成15年度築地地盤調査在地方 (頁上)	125	知泉排水遺跡SD-25セクション (南)	
63	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	126	知泉排水遺跡SD-26セクション (南)	
64	平成15年度築地地盤調査在地方遺構 (北東)	127	SX-12 (北)	
65	平成15年度築地地盤調査在地方遺構 (南西)	128	SX-12 (南)	
66	平成15年度築地地盤調査在地方遺構 (北西)	129	瓦類(SX-14 (北東))	209
67	平成15年度築地地盤調査在地方遺構 (南東)	130	瓦類(SX-14 (北東))	
68	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	131	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (1)	210
69	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	132	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (2)	211
70	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	133	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (1)	212
71	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)・写真左上巻面	134	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (2)	213
72	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	135	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (3)	214
73	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	136	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (4)	215
74	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	137	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (5)	216
75	平成15年度築地地盤調査在地方 (南)	138	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (6)	217
76	園分寺北条城城郭セゾク同写	139	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (7)	218
77	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (1)	140	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (8)	219
78	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (2)	141	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (9)	220
79	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (3)	142	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (10)	221
80	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (4)	143	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土瓦 (11)	222
81	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物 (5)	144	文殊仏閣部分・佛僧寺北条城出土遺物	223



第2図-2 平成12(2000)年度～平成16(2004)年度調査位置図
メッシュ図周囲の5桁の数値は、国家座標値を示す。

第一章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 信濃国分寺・国分尼寺の歴史

(1) 創建

天平13年(741)、聖武天皇により国分寺建立の詔が下され、地方ごとに官立寺院を置いた隋や唐の制度に倣ったとみられる僧寺、尼寺の建立が全国に命じられた。仏法の守護による国家安泰を祈願して、各国に金字の金光明最勝王經一部を安置した七重塔1基を造立し、僧寺を「金光明四天王護国寺」、尼寺を「法華滅罪之寺」とすることなどを命じている。国分寺の僧寺には僧侶20人が置かれ、封戸50戸と水田10町が支給された。また、尼寺には10人の尼が置かれ、水田10町を支給された。僧や尼は毎月8日に最勝王經を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていた。

天平19年(747)には郡司の協力を命じ、墾田を追加寄進するなど、国分寺の造営を督励する詔が発されている。このことは逆に、各地の国分寺造営が期待したようにはかどらなかったことを示している。天平勝宝4年(752)に総国分寺である東大寺の大仏開眼供養が執り行われ、総国分尼寺の法華寺も建立されたが、天平勝宝8年(756)に聖武天皇が死去するまでに完成した国分寺はわずかであったとみられる。天平宝字3年(759)になっても国分寺造営を督促する記事が「続日本紀」にみられるが、770年前後に至ってようやく大半の国の国分寺が完成したと考えられている。

信濃国分寺がいつ完成したのかを伝える史料は残されておらず、建立に関わる詳細や、その後の活動についてもほとんどわかっていない。所在についても現国分寺の近くが有力視されていたものの、ながらく明確にはならないままであった。

(2) 衰退と再興

律令制度が崩壊すると諸国の国分寺も次第に衰退に向かう。信濃国分寺でも、尼寺跡近傍で発掘された10世紀後半頃の堅穴住居跡に国分寺の平瓦が用いられており、このころには国分寺の建物の一部が失われていたことを示すものと思われる。一方、「将門記」には、「以二月廿九日追着於信濃国少懸郡国分寺之辺 便帯千阿川彼此合戦 闘無有勝負」という記事があり、承平8年(938)に平将門と平貞盛の軍勢が信濃国分寺周辺で戦ったという。さらに信濃国分寺の寺伝ではその兵火のため伽藍を焼失したというが、この記事は「将門記」などの史料には見えず、発掘調査でも確認されていない。いずれにせよ、当時には寺院の衰退が進んでいたことを物語っているものと考えられる。



PL.29 史跡信濃国分寺跡航空写真

11世紀に関しては、堅穴住居における国分寺瓦の用例や、僧寺回廊跡での墓地としての利用を示すなど、国分寺の衰亡を示す骨壺の出土など、示唆する発見もさらに多くなる。

一方、信濃国分寺の寺伝では建久8年(1197)に源頼朝が善光寺参詣の帰途、衰退した国分寺の再興を命じ、堂塔を修復したと伝える。現在の国分寺境内は、古代の伽藍中心から北に300mほど離れた一段高い段丘上にあり、本堂の業師堂付近からは平安時代の瓦が発見されている。また、現存する室町時代建立の三重塔も寺伝では源頼朝が発願して建立したとされており、平安末から鎌倉時代の初期にかけての時期に信濃国分寺が現在地に移転・再興された可能性が高い。

(3) 国分寺の現在

現在の信濃国分寺は天台宗に属する。業師如来を安置する本堂(PL.30)、あるいは寺全体を八日堂とも呼ばれるが、これは毎月8日の最勝王経転読という天平創建以来の伝統によるもので、このように法灯が受け継がれていることは歴史的文化的にもきわめて価値が高い。

国分寺の檀家は上堀・下堀・国分・山口・岩門地区がほとんどで、戦前は80軒ほどだったが、戦後はかなり増加している。また、他寺の檀家ながら信徒に含まれる人々が50軒ほどある。正月の修正会では元旦から8日まで金光明経や業師経の転読が行われたが、現在は元旦から3日までとなっている。

国分寺で行われる行事としては、施餓鬼会、灌仏会、大般若経会などがあるが、八日堂縁日が何といても有名である。1月7日の宵祭りから8日にかけて蘇民将来符の頒布のほか、福だるま市も開かれ、県内だけでなく関東地方からも多くの参詣者でにぎわう。蘇民将来符の頒布については、寺に加えて伝統を守る蘇民講の存在が大きく、これに関する習俗は国の無形民俗文化財に選択されている。また蘇民将来符そのものは市の有形民俗文化財に指定されている。国分寺ではこのほか大黒堂の縁日もあり、現在では3月8日に行われている。

境内には本堂(長野県宝・万延元年(1860))、三重塔(PL.31)国重要文化財・室町時代)、石造多宝塔(市指定・鎌倉時代)などの指定文化財や、鐘楼、客殿などの堂宇が建ち並んでいる。

2 研究史と保存運動

(1) 信濃国分寺の研究史

史跡信濃国分寺跡の所在地は、上田市大字国分寺仁王堂と字明神前にわたっている。現在の国分寺と同じ北側の段丘上に古代の伽藍地もあったと考えるのがかつては一般的だったが、大正11年(1922)刊行の「小県郡誌」で著者の小山真夫氏が「仁王堂跡」という場所に残る礎石群に着目し、この付近に古代国分寺伽藍があったとの推定をはじめて明らかにした。そこに参考として掲載された重田定一氏の調査記録(大正3年)によれば、多数の礎石が残るこの場所を金堂跡ではないかと考察している。

このような研究調査の成果により、昭和5年(1930)には小字仁王堂の礎石群を中心とする4,178平方メートル



PL.30 国分寺本堂(長野県宝)



PL.31 国分寺三重塔(重文)

が文部省指定史跡となった。

昭和6年(1931)には、藤沢直枝氏による「信濃国分寺之研究」が刊行された。同氏は現地の精密な実測や調査を踏まえて、(1)「仁王門跡」は金堂跡と推定されること、(2)この北方に講堂跡と想定される場所があること、(3)南方の鉄道通過地点に中門跡と考えられる場所があること、(4)金堂跡の南西方100mに塔跡とみられる場所があり、南東方にも同様の場所があつて東西2塔の可能性があること、などを推定している。

なお、小山氏も藤沢氏も尼寺については丸子町内の古瓦出土地に比定していた。しかしその後、昭和19年(1944)に国分地区に保存されていた古文書の調査が行われた結果、江戸時代初期の土地台帳に「にぢ之だう」の地名がみられることなどがわかった。このため地元では僧寺跡の西方に尼寺跡が存在すると推定する見方有力となっていた。

(2) 信濃国分寺跡保存に至る経緯

信濃国分寺跡が所在する大字国分はもと小県郡神川村に属していたが、昭和31年(1956)9月に神川村が上田市に合併したため、上田市の一部となった。昭和30年代も中頃になると、国道18号線に沿ったこの地域にも開発の波が及んで、工場や住宅建設の兆しが現れてきた。貴重な遺構が破壊されるのを防ぐため、早速に本格的な学術調査を実施して、地中の国分寺遺構の実態を解明する必要があるが生じた。上田市では僧寺跡と推定されていた2町四方を中心とする範囲の実測図を作成するとともに、国や県に対して学術調査の働きかけを行った。このような運動の結果、昭和37年(1962)には文化庁補助による調査が予算化されて調査会も発足し、翌38年(1963)3月より信濃国分寺の第1次緊急発掘調査がようやく実施の運びとなった。

その一方で、地権者をはじめとする地元住民からは反発の声が上がり、ついには信濃国分寺跡緊急発掘および史跡指定反対同盟会を設立するに至った。しかし、その後の折衝もさることながら調査が進展して大きな成果を取めるにつれ、文化財の重要性に対する住民の意識も急速に醸成されていった。八日堂復興会等では遺跡の総合的保存を求める声も高まり、金堂跡を国分寺の法人所有地として買取するなどの動きとなって現れてきた。そして、昭和41年度(1966)には市の教育文化都市建設新5ヶ年計画の中で史跡公園の整備を目指すこととなった。

3 史跡指定と発掘調査の経過

(1) 史跡指定と指定区域の拡大

上述のように、信濃国分寺跡の史跡指定は昭和5年(1930)に行われたが、これは土地の高まりや大きな礎石群などが存在する仁王堂の一角を僧寺跡と想定した結果であった。一方、当時は尼寺跡の所在については諸説あつていずれも決め手に欠け、のちの発掘調査を待たねばならなかった。

昭和38年3月からの第1次調査を皮切りに、昭和41、42年と調査が続行され、さらに昭和46年に至るまで数次にわたる史跡整備に伴う発掘調査が並行して行われ、僧寺・尼寺の伽藍の全容と、これに伴う多くの資料を検出することができた。このため、昭和43年(1968)3月には現国分寺を含む寺域のほぼ全域、129,339.7平方メートルに史跡指定区域が拡大された。その範囲は、北は現国分寺、東は国分神社、南は当時の推定東山道、西は下堀の堀川神社までである。なお、この時点で史跡の指定理由も「僧寺跡と尼寺跡の伽藍が近接して発見され、しかも両遺構の保存状態が比較的良好であり、古代の寺院跡研究に欠くことのできない重要な遺跡」とされた。

(2) 史跡公園化までの発掘調査

昭和30～40年代に実施された発掘調査の経過は以下の通りである。

第一次発掘調査：昭和5年の指定時には金堂跡と推定されていた土壇を調査した結果、これは僧寺講堂跡の基礎であることが解明された。その南方には金堂跡の基礎も発見され、いずれも雨落溝に見事な敷石列がある

ことが確認された。軒丸瓦、軒平瓦や全国的にも珍しい素文の鬼瓦を含む大量の瓦をはじめ、鉄釘や須恵器、土師器なども発見された。

第二次発掘調査：僧寺跡の伽藍地が確認された。また、この西方の字明神前において尼寺跡が確認された。これは地元に伝わる古文書の記載を実証するために実施した調査の結果で、尼寺金堂跡の雨落溝も三方で確認された。さらには、多量の瓦類・鉄釘・古銭や円面硯なども発見され、大きな成果をあげた。

第三次発掘調査：中門と講堂跡を結ぶ僧寺の回廊跡が発見された。また、信濃国分寺の補修用の瓦を焼いた瓦窯跡が尼寺跡の北方で2基発見された。一方、尼寺跡では金堂跡の再確認と講堂跡の調査が行われた。さらに尼寺東門跡や四至の調査も行われた。

昭和43年(1968)から46年(1971)までの調査は史跡保存環境整備の事前調査として実施された。範囲確認はほぼ完了していたため、過去3回の発掘調査で確認できなかった各遺構の内部調査と未調査の建物の検出が中心となった。

第四次発掘調査：僧寺講堂の内部と北側雨落溝の確認などが行われ、講堂跡の解明がなされた。

第五次発掘調査：尼寺跡において、金堂跡の内部や講堂跡、中門跡、回廊跡、尼坊跡、北門跡などの詳細調査が実施された。

第六次発掘調査：僧寺金堂跡内部の規模が明らかになったほか、塔跡、僧坊跡が確認された。

第七次発掘調査：僧寺中門跡と回廊跡、金堂南西角の雨落溝のほか、尼寺跡の尼坊、経蔵などの遺構を確認した。

4 環境整備事業

(1) 事業の概要

上田市では、一連の発掘調査で確認した寺域のうち約55000平方メートルを公有化し、昭和43年から47年(1968～72)にかけて整備を行った上で、一帯を史跡公園として公開した。これは全国の国分寺史跡でも初めての事例であった。また、昭和55年(1980)には信濃国分寺資料館を開館し、国分寺跡を中心とする考古資料を収蔵展示している。以下では、この史跡保存環境整備事業の概要を述べる。

対象となる土地が広大な面積にわたることから、史跡指定範囲の全てを文化庁補助事業で買い上げ・整備することは困難であったため、事業地は僧寺と尼寺の寺域にかかる範囲に限定された。そこで、残る周辺の史跡公園予定地については都市計画公園用地として決定し、建設省(当時)の補助事業として実施することとなった。用地買収、整備事業ともに文化庁と建設省とで計画地が線引きされており、各々の国庫補助を得ながら上田市が実施するという形がとられた。

このように事業は史跡整備としての部分と一般都市公園としての部分からなるが、両者を一体の史跡公園として利用公開することがもとより前提であった。都市計画決定に基づく事業認定の性格は史跡保存を中心とする公園整備という趣旨であったため、建設省の補助事業の内容についても文化庁の認定する基本設計に基づいて補助するよう、省庁間の調整が図られた。

設計ではまず、地下遺構の保護を万全にすることを第一に、僧寺と尼寺の両寺域にかかる範囲は他の平地より区分し高くすること、各伽藍地は遺構埋戻しの上で基壇を盛土によって復元整備し、これらの整備遺構を歩きながら回遊見学できるようにすること、これ以外の公園用地には駐車場・便所・広場・休憩所等の便益施設を配置できることなどが基本方針として決定された。

敷地は東南から北西に平行して走る国鉄信越本線(当時)と国道18号線によって分断されている。両者の間は水田、鉄道線路より南は畑と桑園に利用されていた。国鉄に平行して旧上田丸子電鉄の廃線跡と虎駅が残り、この東方には南北に敷地を縦断する市道があったが、後者については整備計画の中で路線変更された。敷地境界の南と西側は村落と新興宅地に取り囲まれ、僧寺・尼寺ともに伽藍の南端はそれらの民地に入り込んでいた。

公園敷地は、埋蔵物保存を第一に考慮しながらその中で歴史的イメージを作り出す区域（僧寺遺構、尼寺遺構、瓦窯跡）と、史跡見学者その他市民の休息利用にあてる区域、の2地区に区分される。僧寺と尼寺の各寺域については全面に盛土を行い、周囲より高くすることで範囲の明示と地下遺構保護が図られた。

5 平成時代の信濃国分寺

信濃国分寺伽藍跡の中心部分 55,275.45 平方メートルは、昭和 45 年(1970)の史跡公園整備事業により公有化と公園整備がはかられ、昭和 55 年(1980)には信濃国分寺資料館が開館し、一定の整備ははかられた。しかし、僧寺南大門想定地から中門跡にかけての僧寺跡エントランス部分が住宅地となっていたほか、国道 18 号線北東の僧寺北東城や尼寺の南東城など、伽藍跡の大きな範囲が民有地であり住宅地となっていた。

その後、経済成長とともに史跡指定地及びその周辺における各種の開発事業や住宅の建て替えなどが盛んとなり、信濃国分寺跡の保存計画について再検討を必要とされてきた。

平成に入ると史跡指定地周辺でも再び開発の波が押し寄せ、史跡の保護に影響する事態が危惧された。このため、平成元年から文化庁・県教委の補助を受けて史跡の計画的公有化を開始し、これまでに 16,368 平方メートルを追加購入、公有化面積は 71,643 平方メートルとなっている。現行の公有化計画総面積は 80,762 平方メートルで、残る 9,118 平方メートルを順次公有化の予定である。公有化計画地のうち、国道 18 号線より北側については平成 5 年度までに公有化が完了しており、残る未買収地の大半はしなの鉄道より南側の僧寺跡および尼寺跡の南辺付近に位置している。

上田市教育委員会事務局では、昭和 60 年代に計画された僧寺北東城約 10,000 平方メートルの自動車展示場建設計画を機に、保存管理と公有化計画の再検討に着手した。平成 3 年(1991)には文化庁、長野県教育委員会事務局と協議のうえ、保存管理の指針となるゾーニングを作成し、住民説明会も実施して、以降の保存管理と公有化の指針としてきた。

史跡公園用地の一定の公有化の進捗と、史跡公園も開園から 30 有余年を数え、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期に来ていることも事実であった。特に課題となる点を列挙すれば、

- ・史跡保存管理に関する全体計画の不在
 - ・公有化進展にともなう計画的調査・整備推進の必要性
 - ・旧整備範囲の老朽化にともなう更新整備の必要性
 - ・最新の調査研究成果、保存整備活用における新しい考え方の反映
 - ・住民参加とまちづくりの視点の導入
- などである。

上田市では、信濃国分寺史跡の保全に万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針＝基本計画を策定した。

今回の発掘調査は、今後の整備に向けて、その基礎的な資料を収集することを目的として実施したものである。

第2節 調査の方法

1. 遺跡名と略記号

今回の調査では、信濃国分寺跡の僧寺跡北東城と南大門周辺を調査している。遺跡の略号として「国分僧寺」と付した。また、過去の調査では、国家座標にもとづく調査区域の設定がなかったため、今回新たに史跡指定

地内を第3図のとおりメッシュによって位置を設定し、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

2. 調査区の設定 (第2図参照)

調査区域は、僧寺の北東域における区画施設(築地塀等)の確認と未知の遺構の確認、及び南大門とそれに連なる区画施設の確認を目的として調査区域を設定した。

3. グリッドの設定 (第3図参照)

今回の調査においては、改めて国家座標に則ったメッシュを切り、1単位の大きさが45×45mの大グリッドを設定し、その中を縦横各15分割した3×3mの小グリッドを設定した。大メッシュ交点には記号を与え、座標値X=43,200.00、Y=-18,651.00をA01a01として、北から南方向にA、B、C、D…、東から西方向に01、02、03、04…という順に進むものとした。また、小メッシュにも北から南方向にa、b、c、d…、東から西方向に01、02、03、04…という記号を与え、大メッシュ・小メッシュの組み合わせでグリッドを設定した。例えば、基準点から南に180m、東に210mの地点はE05Fa11と表される。各種の現地平面測量には、このメッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものである。

5. 遺構の掘り上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘り上げ作業はすべて人力で行った。



第3図 史跡信濃国分寺跡発掘調査メッシュ配置図

第3節 調査日誌

平成14年度

10/11 現地調査着手。国道18号線北の僧寺築地塀
想定ラインをまたいで調査区域を設定して、重機に
より表土を剥ぐ。

10/25 重機による表土剥終了。

10/28 作業員による遺構検出、掘り上げ作業開始。
平成12年度調査で確認した石列の保護砂除去を行
う。

11/5 調査区域を北に3mひろげるため、重機によ
り表土を剥ぐ。

11/6 作業効率を上げるため、さらに1層分をグリ
ッド単位で小型バックホーにより剥ぐ。

11/7 築地塀想定ラインの調査幅が狭かったため、
改めて北に3メートル幅で調査区域を拡げる。測
量業者が拡張区のメッシュ杭打ちにくる。川上市誌
編 纂室長来訪。

11/8 五十嵐幹雄先生・櫻井松夫先生来訪。信州民
報田中記者取材。

11/18 史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会委
員視察。(PL.32)

11/21 SBC ラジオ取材(PL.33)

11/27 未明の凍上により、現場がぬかるむ。グリ
ッド掘りを続ける一方、セクション図や遺構図の実測
を始める。

12/2 グリッド掘り下げ・実測作業を続ける。また、
埋文整理室では、出土遺物の洗浄を始める。

12/12 北端の敷石の基壇状遺構は、中軸が僧寺の中
軸とは45度振れている様子である。また、東側の



PL.32 11/18 史跡整備委員会現地指導



PL.33 11/21 SBC ラジオ取材

石の集中区については、1グリッドライン幅で東西
に石を外して、地山まで確認する。遺構実測も引き
続き行う。

12/18 東端の石の集中区のグリッド掘り下げ完了。
石は地山からすべて浮いた状態で、「敷いた」とい
うよりは「置いた」もしくは「投げ込んだ」状態
であったことが判明した。地山は緩やかに段丘下に向
かって下がっており、そこをフラットに造成するた
めに石を利用したものかと思われる。史跡信濃国分
寺跡保存整備計画策定委員会の桐原健委員来訪。

12/19 お昼の前後にかけて空中写真測量を行う。遺
構の掘り上げ作業は本日で終了する。

12/20 現場撤収作業。実測作業に必要な物資を残し
て機材を国分寺資料館や埋文整理室に引き揚げる。
遺構実測は引き続き行う。

12/24 遺構実測。実測終了した箇所から重機による
埋め戻しを始める。

12/25 遺構実測終了。

1/10 重機による調査区埋め戻し本日午前中で終了。
これにて現地作業はすべて終了する。

平成15年度

10/6 0.4バックホーにより、昨年検出した基壇状
遺構の北側の表土剥ぎに着手する。

10/14 重機による表土剥。南北方向の表土剥ぎが終
了し、東西方向の表土剥ぎを行う。

10/15 重機による表土剥。測量業者によるメッシュ



PL.34 作業風景

張り。

- 10/16 本日から作業員による遺構調査作業を開始する。国分寺資料館から作業道具を搬入した後、昨年の遺構埋め戻しの際に入れた保護砂を除去する。重機による表土剥ぎ引き続き実施する。
- 10/30 重機による表土剥ぎ・グリッド掘り。前上田市文化財保護審議会委員五十嵐幹雄氏ほか2名見学。
- 10/31 重機による表土剥ぎ。グリッド掘り・セクション検出。上田市文化財保護審議会委員櫻井松夫氏、H02～H03 検出の石積について現地指導。カワラケの出土から、中世の国分寺から国分八幡神社へのアプローチではないか、と指摘。
- 11/4 G区、グリッド掘り。H区、石積み遺構周辺のグリッド掘り。I区、重機による表土剥ぎ。
- 11/6 史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会委員現地視察。G区の基壇状遺構・石敷きは、中世的と指摘され、「思いっきりトレンチを入れろ」と指示される。「州浜ではないか」との指摘もあり。
- 11/17 本日からシルバー人材センター作業員参加。作業員全員で、I2～3地区の遺構検出とH2～3地区西半の遺構検出作業を行う。また、G4地区の北半の追加表土剥ぎを重機により行う。
- 11/26 20日から26日まで雨等で作業中断し、久々の現場作業となる。I地区において再び石敷遺構のようなものが検出しはじめる。
- 11/27 グリッド掘り。I区の石敷きがいよいよ広がる。H区の石積みは、土層的上の方で、西端地業の黒色土層の上の溶脱層の上の黒褐色土層上に築か

れており、出土遺物とも考えあわせると、やはり古代以降、中世の遺構と考えられる。

- 12/5 H区の掘り下げを重機で行い、遺構検出を行う。従前の層から2層剥ぐと礫層と黒色のシルト層がほぼ地勢に沿って出ており、ピットが散見される。黒色シルトは石列の下に入り込んでいる。G区は引き続きグリッド掘りを行うとともに、石敷き遺構の断ち割りに着手する。
- 12/8 H区横の排土整理を重機で行う。H区では引き続き遺構検出を行う。黒色シルトは石列の下に入り込んでいる。G区は引き続きグリッド掘りを行い、古墳時代後期の6メートル四方の隅丸方形の住居跡プランが検出される。
- 12/9 G区石敷遺構の断ち割りでは、基壇状に高まっている部分では、0.2m程度の厚みをもって拳大の石が敷かれ、レベルの変換点では、0.4m程度の厚みになり、外側では0.05m程度、うっすらと敷いた程度になることが分かる。H区では、引き続き遺構検出を行う。I区では、石敷遺構をグリッドに沿って約3m幅で石を剥ぐ。こちらの石敷は、敷いたピッチが比較的粗く、地業の石敷かと思われる。
- 12/18 午前中に遺構実測図作成用の空中写真撮影を行う。G区では石敷遺構の断ち割りを継続して行う。H区では溝状遺構の掘り上げ。遺構実測は、H区のセクション実測を行う。
- 12/19 埋め戻しに備え、遺構保護のため、平坦面にPPシートを敷く。また、発掘機材を国分寺資料館に撤収し、後は、少人数で細部の遺構の追及を行うこととする。遺構実測は、H区とI区の土層セクションをとる。



PL.35 シート養生

12/22 20日の大雪で一面白銀の世界となる。空撮の一部が失敗しているという連絡があり、I区の東側の雪掻きと、G区の石敷遺構追求のための雪掻きを行う。I区空撮は、再度業者が来て行い、石敷遺構は掘り上げて下層遺構を追求する。重機による埋め戻しをG区から開始する。実測は、細部セクション実測を行う。

12/25 石敷遺構のグリッド掘りと調査区の埋め戻しを行う。遺構調査は実測を含めて本日にて終了。

1/13 調査区の重機による埋め戻し終了。本日でH15年度の現地調査をすべて終了する。

平成16年度

6/24 僧寺南大門想定地の現地調査着手。0.4バックホーにより表土を剥ぎ、2tダンプで東隣接地に運搬する。

6/28 引き続き表土剥ぎを行う。表土は、GL-30cm程度を剥いでいるが、遺構検出面が不明瞭なため、調査区東端にGL-80cm程度の深堀トレンチを入れる。トレンチ最深部からは、溝状遺構と住居址の貼床が検出された。住居址は、出土遺物から古墳時代後期のもと思われる。

6/30 調査区西寄りに伽藍の主軸方位と一致する幅2mの溝状遺構が検出されていたため、この性格と、南大門・中門の参道硬化面を確認するため、直行するトレンチを入れる。溝状遺構は、深さ約50cmの人頭大〜拳大の川原石を詰めたもので、その性格や時期については不明である。また、参道硬化面については検出されず、地山層に達している。溝状遺構の東脇から布目瓦が多く出土しており、当面現在



PL36 H16 遺構検出作業



PL37 H16 遺構精査作業

の深さ、GL-30cmで表土を剥ぎ、後はグリッドを手掘りで落としながら探ることとする。

7/5 引き続き表土剥ぎ。調査区北側から伽藍の主軸方位と直行する幅1mの溝状遺構と網の目のような畝らしきものが検出される。

7/12 本日から作業員が参加する。8:30 国分寺資料館駐車場に集合。機材を軽トラックに分乗して現場に運ぶ。作業員用駐車場の場所確認と作業の諸注意・連絡を行った後、10:15から遺構検出作業に取りかかる。測量業者がメッシュ測量に来る。

7/15 遺構検出作業と並行して、最近のゴミ穴や便槽、伐根跡の掘削を取り除く。今日も灼熱。

7/16 遺構検出作業。かつての所有者であった金井とし子・袈裟男さんに現地確認に来てもらう。両名の話では、検出されている3条の大きな暗渠は知らなかったといい、礎石の存在もなかったという。

7/21 遺構検出作業。川上元整備委員会委員・生涯学習課長・文化財係長現地指導。今日は曇り空で過ごしやすい1日だった。

7/22 再度検出面の精査を行う。西の暗渠遺構は、栗石の間をきれいに通して作られている。また、一部に土橋状の箇所もあり、そこには敷石もわずかに残っている。

7/29 北半部に検出されている網の目状の遺構を確認するため、調査区東端に入れたトレンチを北に延ばす。東側で約10cmほどグリッドごとに落とし、検出された遺構が、実際には現状のレベルでも検出可能なことが判明する。

7/30 23日に検出した建物址栗石の北隣を追求す

る。栗石は検出されず、現段階で南大門の検出は2×3間であることが想定される。礎石建物址としては、瓦葺きが想定されるが、瓦の出土が少ないのが気になる。

8/9 遺構検出作業。調査区東端に設定したトレンチの溝状遺構を掘りあげると、砂と礫の暗渠排水用の層をなしている。用途は不明だが、出土遺物は布目瓦のみ7, 8点。午後2時頃から雷が近く鳴り出し、3時頃から豪雨。結局2時間ほど作業棟に閉じこめられ、午後4時から道具を片づけ作業終了。デジカメの調子がよくない。川上委員視察。

8/10 昨日の雨で大部涼しくなり、しのぎやすかった。調査区東端に設定したトレンチを延長すると、暗渠排水用の遺構が続けて検出される。用途は不明だが、出土遺物に近現代的なものがなく、南大門造営時の地業の一環か。

8/31 引き続き北側の暗渠遺構にトレンチを入れる。SD-03のトレンチ断ち割り箇所を精査する。暗渠の最下部にトンネル上の石組みが存在する。

9/7 南大門栗石周りの精査を行う。

9/13 SD-02の一部掘り上げを行う。

9/21 調査区東側の精査を改めて行う。水をまいて精査した後、しばらくした瞬間に遺構がぼんやりと浮かび上がる。

10/8 空中写真撮影。

10/12 遺構実測作業と同時に遺構埋め戻しを開始する。

11/19 遺構埋め戻し完了。すべての現地調査を終了する。

平成17年度

埋蔵文化財整理室において、遺構図等の実測図面や遺物の整理作業、報告書編集作業を行い、平成18年2月28日に調査報告書を刊行してすべての調査事業を終了した。



PL.38 H16 調査区航空写真(西から)



PL.39 H16 調査区航空写真(東から)



PL.40 H14 調査作業員



PL.41 H15 調査作業員

第二章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

1 上田の気候（第4図参照）

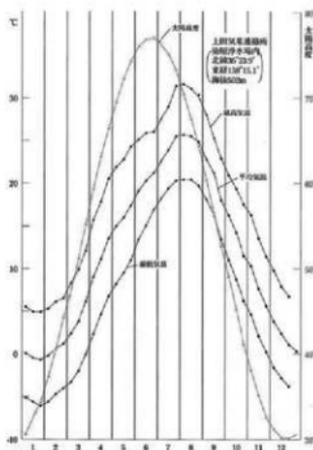
長野県は本州中央部に位置し、周囲を山に囲まれている。このため上田の気候には内陸性の特徴がみられる。夏には日中の気温は東京よりも高温になることが多いが、乾燥しており、夕方から明け方までは気温が下がるためしづやすい。冬期間には長野県内でも県北部に比べて上田・佐久は降水量が少なく、太平洋側気象区の特徴を示している。

上田市の年間平均気温は12.1℃で、県下では飯田地方に次いで暖かい。気温の年較差は25.8℃で札幌の数値に近く、寒暖の差が大きい。市内でも場所による気温の差が大きい。市街地が最低、最高気温ともに最も高い。年平均湿度は66%で、東京などと並んで全国でも最も低い類に入る。

上田では平均年間降水量が878.7mmと1,000mmに達せず、全国的に見ても雨の少ない土地である。これは海からの湿った空気が周囲の高山に遮られて雨や雪を降らせ、上田上空に達するまでに乾燥した空気となってしまうためである。降雨は年間を通じて少ないのが特徴である。市内では山に近い地域ほど雨が多いが、平地では塩田平に比べて千曲川右岸の降水量が少ない傾向がある。

冬季は西北西と東の風が多く、夏には南東の風が卓越風である。年間を通じて北および南からの風が大変に少なく、東や西の風が多い特徴がある。これは地形の影響によるもので、南と北に山が連なり、千曲川に沿った東西方向に風が吹き抜けるためである。

日照時間が長いのも上田の特徴で、年間2000時間以上というのは長野県下のみならず、全国的にも高い数値である。快晴日数の平均は年80日前後に達する。



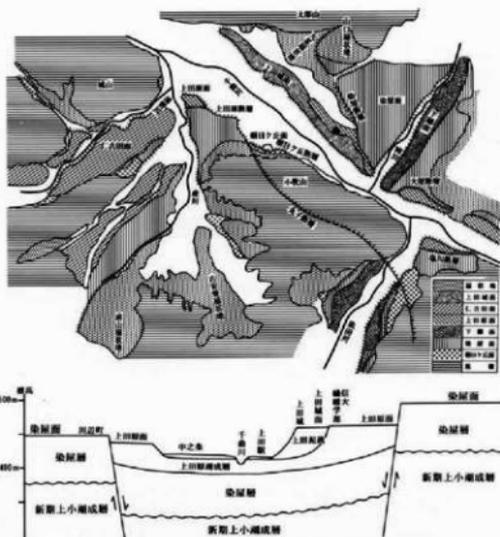
第4図 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ

2 上田の地形と地質（第5図参照）

上田は盆地状の地形で、周囲を独鈞山・大光山・太郎山といった標高1200-1300m級の山々に囲まれている。千曲川は市内で標高465m～417mまで流れ下り、この右岸に中心市街地が広がっている。左岸側では、海拔450-500mほどの塩田平が水田地帯を形成している。塩田平には寡雨に備えた灌漑用の溜池が多く見られる。

上田市を東西に流れる千曲川は奥秩父の甲武信ヶ岳付近を水源とし、長野県土の北半を貫いて新潟県入ると信濃川と名を変え、日本海に注ぐ全長367kmの日本一の大河である。上田市内でこれに注ぐ主な支流としては、右岸から神川・矢出沢川などがあり、左岸からは塩田平を流れる産川水系が浦野川に合流している。千曲川の市内中心部での川原は幅400-600mにわたって広がる。

上田地域の地層は海成層の上に湖成層があって、さらに約1万年前頃からは湿地性や扇状地の堆積物が形成した地層がある。これに火山に由来する貫入層や堆積物が加わり、市内でも地域によって多様な地質が分布している。古い時代の地層は山地に見られ、太郎山などに産する緑色凝灰岩は古くから礎石などの建材として利用されてきた。上田でとりわけ特徴的なのは千曲川流域に発達している階段状の地形で、これには河岸段丘の段丘崖と



第5図 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)

り、主に礫岩層からなる。この堆積物からできている平坦な地形を染屋面(第1段丘面)と呼ぶ。この台地上では地下水が得にくいため、古来集落は台地の周縁に形成され、中央部は灌漑水田として利用されてきた。染屋面周囲の断層崖には樹木が育ち、豊かな緑地を形成している。千曲川右岸ではこの染屋面の下方に上田原面が広がる。これは染屋面の一部が落ち込んで生まれた小規模な湖に堆積した湖成層でできている。

上田原面から国分付近で3-4mの段差をもって低く位置するのが上田城面(第2段丘面)である。これは火山活動による泥流の堆積物で、縄文時代草創期頃に形成されたとみられる。千曲川との比高は15-17mにも及ぶ。現国分寺はこの上田城面に所在し、このほか多くの古代遺跡がこの面上に分布している。

信濃国分寺跡の付近では、上田城面と千曲川との間にさらに第3段丘面があり、古代国分寺伽藍はこの面上に所在している。神川の左岸では狭い幅しかないが、国分寺跡付近では最大300mほどまで拡大し、西は下堀地区の西方で終わる。河床からの比高は2-3mほどである。

これより南は千曲川の氾濫原であるが、治水工事の結果生まれた土地が農地として利用され、堤防沿いの北国街道沿道には集落が点在する。

上田市域は山に囲まれるが、面積的には低地や台地・段丘の占める割合が高く、表層地質では堆積物が大半である。染屋面には灰色台地土と台地褐色森林土が分布する。上田城面の表層も灰色台地土が主だが、これより千曲川沿いには灰色化低地水田土が分布する。

4 上田の植生

植物区系の上では、上田は太平洋区系と日本海区系の境目に当たり、またフォッサマグナ亜区系と中部山岳区系にも重なっている。このように多様な植物分布が見られるのが上田の植生の特徴である。市内の平地は標高500m前後に位置し、垂直分布では丘陵帯から低山帯へと移る付近に相当する。山地にはアカマツが多

断層で形成された断層崖とがある。また、扇状地形は山を下った急流が緩斜面に出る山際に形成され、大小さまざまな見られる。

盆地内の地層や地形は、おもに第四期(170万年前まで)に形成された。厚く堆積した湖成層のほかに、川や谷の底を埋めて堆積した染屋層が広く分布しているが、このうち千曲川に沿った地域が断層によって落ち込み、段丘状の崖地形が形成されている。

3 信濃国分寺跡周辺の地形と地質

(巻頭第1図参照)

信濃国分寺跡は上田市東部の千曲川右岸に位置しており、北から神川が千曲川に合流する点の西方にあたる。地形的には染屋層と千曲川が形成した河岸段丘の段丘面に広がっている。

染屋層全体の厚さは約40-50mあ

いが、里山ではコナラやクヌギ林が多く見られる。千曲川の段丘沿いにはケヤキ林が带状に続いて特徴的な景観を呈している。このケヤキ林は遷移を経て安定した自然林で、ここでは古来から段丘の景観を形作っていたものと考えられている。

上田市内には文化財に指定されているものを含めて名木が少なくないが、信濃国分寺資料館には「カバンのフジ」と呼ばれる木がある。明治期に南佐久郡の農家からカバンに入れて持ち帰られた苗を上田の第十九銀行に植えたもので、昭和51年に現在地に移植された。5月中旬過ぎに見事な花を咲かせることで知られる。

第2節 歴史的環境

1 先史～縄文時代

上田盆地周辺に人の居住が始まったのは、およそ2万年前頃と考えられている。この時代の遺跡は菅平高原や和田峠周辺などの高地に集中して分布するが、塩田平などの平坦地でも人の活動を示唆するような遺物の発見が徐々にみられるようになってきている。

縄文時代になると、山裾の扇状地が主要な生活の場となっており、このほか千曲川をはじめとする河岸段丘の縁辺部も盛んに利用されている。これに対して河岸段丘の内部や氾濫原の沖積地には縄文人の活動痕跡は見られない。千曲川右岸の一带は、染屋面にも上田城面にも縄文遺跡はわずかししか発見されておらず、左岸側やその他の支流域とはやや異なる様相を示している。

2 弥生時代

千曲川流域では、弥生時代の中期後半から長野地方や佐久地方などで大規模な集落が営まれるようになった。上田地方ではこれより遅れ、後期後半から終末期にかけて集落遺跡が出現し、全域に分布する。このような時期差の理由は現時点で必ずしも明らかでないが、降水量の少ない当地でも灌漑技術による稲作が可能になったことなどが想像されている。上田の弥生時代における集落の立地は、河岸段丘上や自然堤防など冠水しにくく、水田に適した低湿地を近くに伴う場所がおもに選ばれている。塩田平の産川流域などが最も利用されており、千曲川右岸でも上田城面に遺跡が分布している。集落は数軒を単位とする小規模なものがほとんどだが、居住域以外を含めた全体像が明らかになった例はまだなく、実態には不明な点も多い。

千曲川右岸の段丘上に位置する弥生遺跡としては、国分寺周辺遺跡群や常入遺跡群などが市街地の東方にある。常入遺跡群に含まれる下町田遺跡(PL42)は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけての集落遺跡で、90軒の密集した竪穴住居と大量の遺物が出土している。また、上田原遺跡における周溝墓のように地域の有力者の存在を窺わせる発見などから、上田小泉



PL42 常入遺跡群下町田遺跡航空写真

地方がこのころ一つの勢力圏を形成しつつあったと想像する見方もある。

国分寺周辺では、史跡の東方に隣接するしなの鉄道信濃国分寺駅の開業に伴う発掘調査で、中期初頭、中期中に属する土器と、中期中葉の住居址が確認されている。

3 古墳時代

4世紀後半の大蔵京古墳に始まる上田地方の古墳は、5世紀後半まで方墳のままで、他の千曲川流域のような前方後円墳への変化が大きく遅れる。このことは当地方が中央政権の支配下に置かれるのが他に比べて遅かったことを物語ると考えられている。古墳時代前期の集落は小規模なものが多いが、後期には建物が集中して建てられ、大規模なムラが出現する。その代表的な例が国分寺周辺遺跡群で、ここでは方形の溝の一部が発見され、居館の濠である可能性があることから注目を集めている。東信地方で唯一の前方後円墳である二子塚古墳は黄金沢川扇状地の扇尖部に位置しており、6世紀前半から中頃の築造と考えられている。



PL.43 生島足島神社本殿

上田にある古墳ではこのほかに、帆立貝式の王子塚、円墳の吉田原、神川流域の新屋古墳群、他田塚古墳や塚穴原一号墳をはじめとする下之郷古墳群などが代表的な例として市の史跡に指定されている。

「科野国造」は古事記の神武天皇が初見であるが、中央集権的支配体制のもとに国系制が整備されたのは7世紀の前半頃とみられる。当時の国造の本拠地には諸説あるが、生島足島神社(PL.43)の存在などから小県郡にそれを求める説もある。国造は大和平野の中心に勢力を持っていた多氏の系統と考えられており、そこから他田氏や金刺氏などに分かれたものとみられる。

4 律令期

大宝律令のもとで信濃国にも国衙が設置され、中央から国司が派遣された。この信濃国府がどこに所在したかは今もって明らかになっていないが、「和名類聚抄」には筑摩郡に在りと記されている。しかし、国府と国分寺は近接して置かれるのが通例であることから、当初小県郡に置かれた国府が9世紀頃に筑摩郡に移ったと考えるのが現在の通説となっている。上田における国府の所在地としては、条里的遺構が今も残る神科台地と、常田の信州大学繊維学部敷地周辺に推定されている。

信濃国分寺跡が立地する千曲川右岸に存在する奈良・平安期の代表的遺跡としては、染屋台上の大規模集落である宮平遺跡や、上田城面の殿田遺跡、国分尼寺跡の西側に隣接する明神前遺跡などがある。国分寺周辺遺跡群も平安時代までの遺構を含んでおり、掘立柱建物跡などが確認されている。また、染屋面の台地上には上記のように条里的水田の跡が広範囲にわたって見られる。

東山道の経路については諸説あつて、発掘調査でも道路遺構そのものは確認されていない。初期の東山道は伊那郡から直線的に佐久方面へと抜けていたようだが、官道として整備されてのちは筑摩郡を経由するようになり、この時点で上田地方を通過するようになった。詳細な位置は不明ながら、信濃国分寺跡に近い千曲川沿いを東に向かって上野国へ抜けていたことは確かで、当時の上田盆地は信濃国の政治・経済・軍事などの重要な中心とし

ての地位を占めていた。

5 中世

律令制度が崩壊に向かうと、上田小県地方でも開発領主の寄進により貴族や寺社が経営する荘園が数多く成立した。「吾妻鏡」には12世紀末の信濃国における荘園の名を記した書付が取められているが、これによれば当地方には八条院領常田庄や最勝光院領塩田庄など6つの荘園と3ヶ所の牧の名が見られる。この時代には地元で所領を持つ地方武士達が勢力の増大を目指して都に向かったが、木曾義仲が敗北して源氏の世となると、武士達は鎌倉御家人を指向するようになった。このような武士としては、

海野氏、祢津氏、泉氏、浦野氏などが代表的である。

一方、それまで有力者だった塩田氏などは義仲に与したために所領を失う結果になったかとみられる。鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政がここに通世してからは塩田北条氏が三代60年間にわたって仏教文化を花開かせた。今日でも安楽寺三重塔をはじめとする数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。なお、国分寺郷は荘園化されることはなく、終始公領であった。

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、当地方も地方領主による争乱の時代に入る。荘園の消滅と並行して守護と国人領主の対立が激化するなか、塩田城を本拠とする村上氏が支配を拡げたが、天文20年に甲斐の武田勢によって攻略された。

地土の真田氏は同じ頃に武田に仕えるようになり、次第に頭角を顕わしていったが、武田滅亡後の戦乱を主家を次々と変えることで巧みに切り抜けたことで知られる。天正11年(1583)には上田城(PL.45)の築城を開始し、間もなく小県郡一円を支配下に取めた。また、現在の市街地の骨格をなす城下町も形成された。真田が上杉

に臣属したために徳川から攻められ、関ヶ原合戦でも昌幸・信繁父子が西軍に加わったために上田城は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。東軍勝利の後は、真田信之が沼田・小県を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領城支配を確固たるものにした。

6 近世

徳川幕府の時代には、城主が真田氏から仙石氏、松平氏と代わる中、城下は物資の集散地と



PL.44 中禅寺薬師堂(最勝光院領塩田庄の中心的施設か)



PL.45 史跡上田城跡櫓門及び南北櫓

して栄えた。現在見る上田城はおもに仙石氏の時代に修築されたもので、城下町の整備もこの時期、寛永頃までには概ね完成したようである。上田は城下町であると同時に北国街道の宿駅を兼ねており、流通の拠点であった。様々な産業が育ち、特に上田紬は養蚕とともに大きな発展をみせた。

国分は城下からはやや離れた村方であるが、北国街道にもほど近く、国分寺は庶民の信仰を集めて賑わった様子が江戸中期頃に描かれた「八日堂縁日図」からも知られる。室町時代に成立したと考えられる蘇民将来信仰も門前の村人がつくる講中によって組織化されるようになった。「信濃国分寺勧進帳」は、現存する本堂を江戸時代末期に再建するにあたって集められた寄進の内容を書き上げたものだが、藩主松平氏をはじめ、城下の有力商人たちの名が見える一方で、信濃一円から上州、江戸までの庶民の名前もあって、信濃国分寺に対する信仰の広がりを知ることができる。ちなみに本堂は文政12年(1829)に発願され、30余年を経た万延元年(1860)に竣工している。長野の善光寺本堂に通じる様式を持ち、東信地方では最大の近世仏堂建築である。

7 近代

上田小県地方は、廃藩置県によって明治4年(1871)には上田県となり、のち長野県に統一された。上田の城下町は、明治22年(1889)に市町村制が施行されて上田町となった。大正8年(1919)には市制を施行、同10年(1921)には城下村を編入し、蚕都として栄えた。昭和期には、29年(1954)の塩尻村、川辺村に始まって周囲の町村をたびたび編入しながら48年(1973)には人口10万を擁する都市となった。

なお、国分は昭和31年(1956)に上田市に合併するまで小県郡神川村の字で、とくに明治末期から大正時代にかけてはここでも養蚕が盛んに行われるようになった。また、上田からは数多くの著名人を輩出しているが、農民美術を興した山本鼎は国分に近い集落に活動の拠点を置いている。

現在のしなの鉄道、旧信越本線は明治18年(1885)に高崎から横川まで、同21年(1888)に直江津から軽井沢までが開通し、同26年(1893)に碓氷峠を越える難工事が完成したことにより全通した。上田駅は明治21年(1888)8月に直江津線の仮終点として開業し、同年12月に軽井沢まで延長された。一方、上田から軽井沢までの間には田中・小諸の2駅しかなかったため、地元の利便と養蚕・製糸業発展のため大屋駅(PL46)開設の請願が出され、明治29年(1896)1月に実現した。さらに大正7年(1918)には大屋と丸子を結ぶ丸子鉄道が開業するが、同14年(1925)にはこれが大屋から上田東まで延伸された。

その後、昭和16年(1941)に上田電鉄と合併して上田丸子電鉄となったが、昭和44年(1969)に廃止された。大屋から国分付近まで丸子線は信越本線と並走し、ちょうど史跡信濃国分寺の場所には八日堂駅があった。この廃線跡を利用して昭和46年(1971)には大屋 - 上田間の信越本線が複線化されている。

信越本線は北陸(長野)新幹線の開業に伴って平成9年(1997)に横川 - 軽井沢間が廃線となり、同時に軽井沢 - 篠ノ井間が第3セクターのしなの鉄道として引き継がれた。平成14年(2002)には上田市が信濃国分寺駅を新設、開業している。

*なお、史跡信濃国分寺跡周辺の発掘調査の履歴等については、「国分寺周辺遺跡群」(2002年3月 上田市教育委員会)に詳細にまとめられている。



PL46 明治29年開業大屋駅舎

第三章 調査の結果

第1節 僧寺北東域の調査

1 調査の概要

平成12(2000)年、上田市教育委員会は、僧寺の北築地塼想定ラインの確認調査を実施した。この調査では、築地塼跡などの寺院伽藍の区画施設は検出されなかったが、石列状の遺構が一部検出され、平成14(2002)年には、追跡調査と、築地塼想定ラインの平面的な再調査を行った。

その結果、石列状遺構から西側には、人頭大の川原石が、均一の高さで多量に出土している。この石群を置く土からは、8世紀末から9世紀にかけての土器とともに、国分寺の建物を葺いた瓦が大量に出土している。国分寺は770年頃には主要伽藍が整備されたと考えられているが、今回の調査で、その後もこの僧寺北東域において、整備が進められていた事が可能性として指摘された。この遺構は、段丘下の湿地帯を地業した跡かとも思われる。

あわせて実施した築地塼想定ラインの平面的な再調査では、やはり築地塼跡などの寺院伽藍の区画施設は検出されなかったが、川原石で表面を葺いた一段高い遺構が検出されている。その規模は、上端で約5メートル四方と想定され、段下の部分にもやはり拳大の川原石をびっしりと敷き詰めた石敷遺構が確認された。

2003年には、この石敷遺構の範囲確定と、改めて築地塼等区画施設の確認調査を実施した。

結論からいうと、この調査においても、僧寺築地塼等、区画施設の確認はできなかった。したがって、従来築地塼が存在すると想定されていたラインは改めて見直さざるを得ず、あるいは寺域の範囲がさらに北に拡大することも予想される。また、寺域の区画施設が果たして本当に築地塼であったかも、改めて再検証する必要もある。区画施設が築地塼でなく、板塼等であった場合、柱穴列がきめてとなるが、今回の調査では、調査範囲の設定上、そうした柱穴列を追求するには適した範囲設定ではなかった。区画施設が何であるにせよ、その外側には排水施設が付随するのが通常であると思われるが、そうした溝跡も検出されていない。

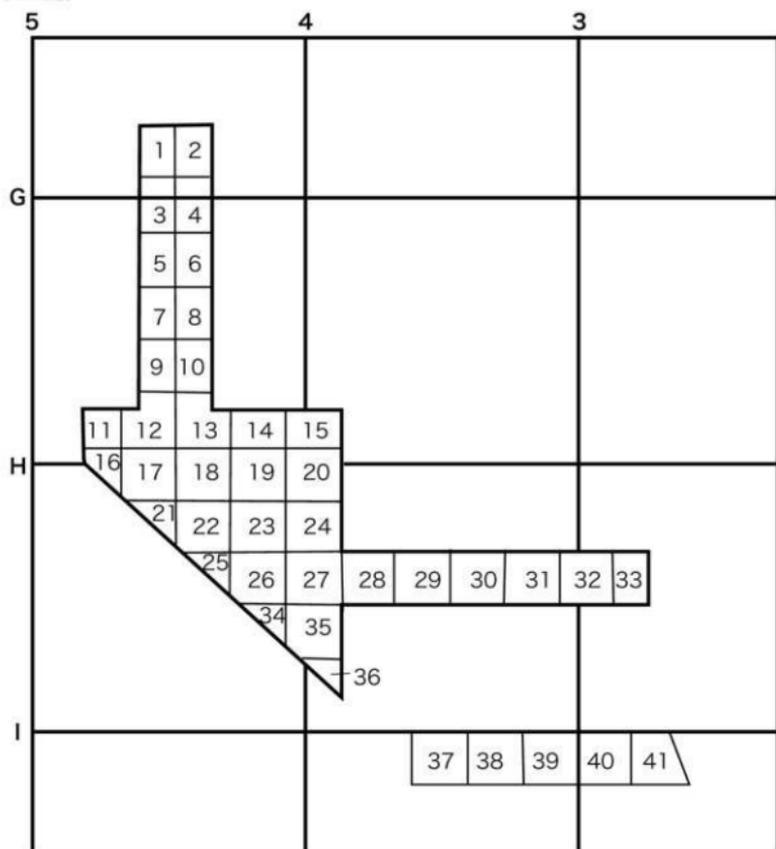
また、石敷遺構は、断ち割り調査の結果、辺部の石を敷く厚さは、他の箇所比して3~4倍あり、顕著であった。石敷遺構の下層からは、国分寺創建前後以前の遺物が出土している。また、石敷遺構直上からは、布目瓦片や9世紀前後の遺物が出土している。結果、石敷遺構は、創建当初の遺構ではないものの、国分寺存続期のものであることが推察される。ただ、性格については判明しなかった。

大グリッドG・H地区の北・東にそれぞれ検出された石積みは、出土遺物からみると、平安末から中世にかけての段丘の地業と思われ、それが現在まで生きている。H地区西端の集石の下部構造を確認したところ、集石の方向と同一方向に自然の落ち込み(溝)が確認され、改めて地業の跡であることが確認できた。この落ち込みは、I地区にまで伸びており、I地区西端の石敷も、低湿地を埋めた地業のものと考えられる。H地区の集石の直下は、道路遺構でみられる硬化面となっていたが、この点の解釈はできていない。H地区中央部は、いくつかのビッドが検出されるものの、大きな空白地帯となっている。

I地区の石敷地行の東側には大きなもので直径60cmのビッドからなる掘立柱建物跡が4件確認された。これが直接僧寺に結びつくかどうかは判然としないが、G地区の掘立柱建物跡とあわせて考えると、中軸線の構成では、ほぼ僧寺と一致するものと、それより45度前後振れるものがある。I地区の掘立柱建物跡は、信濃国分寺駅建設の際の発掘調査において検出された掘立柱建物跡と類似しており、あるいは僧寺伽藍の東側に掘立柱建物群が存在していたことも想定される。

さて、今回の調査ではこうして、当初の目的である僧寺の区画施設はまたもや確認できなかったわけであるが、国の華である国分寺が何の区画もなしに外界とつながっていることはあり得ず、いずれかに北の区画が存在するはずであり、さらなる調査が必要となっている。

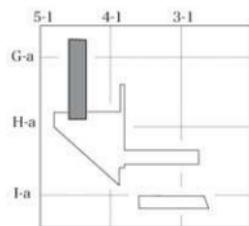
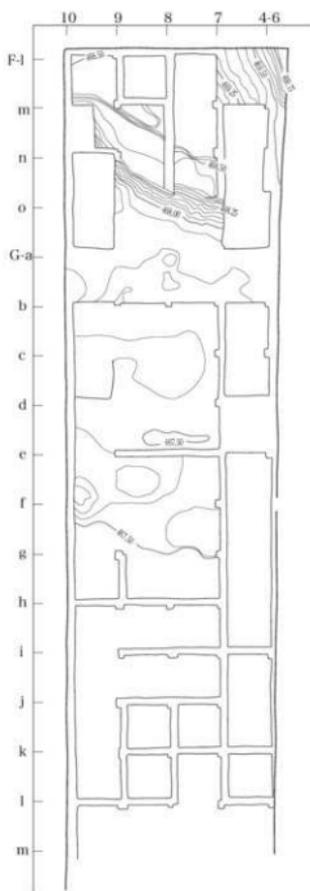
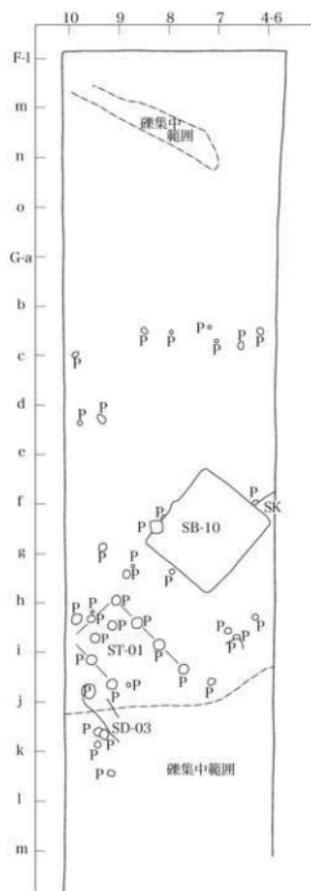
2 検出遺構



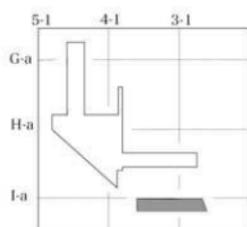
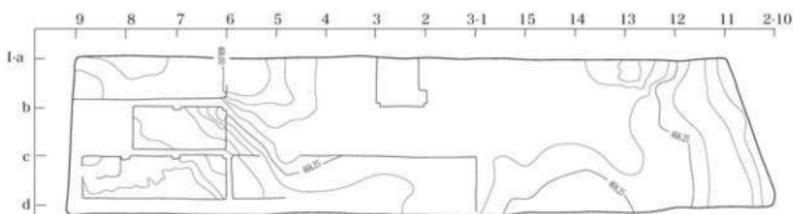
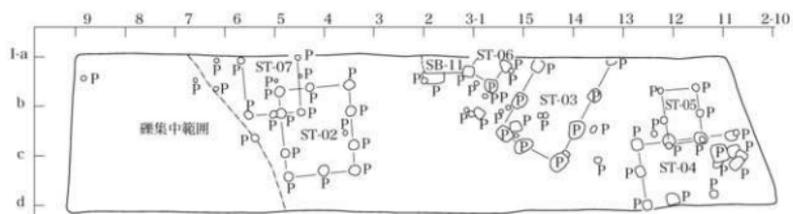
第6図 平成14(2002)～15(2003)年度僧寺北東城発掘調査遺構平面図 図画割

土層の表記

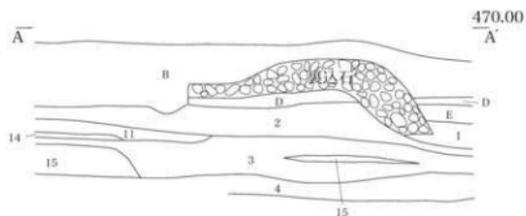
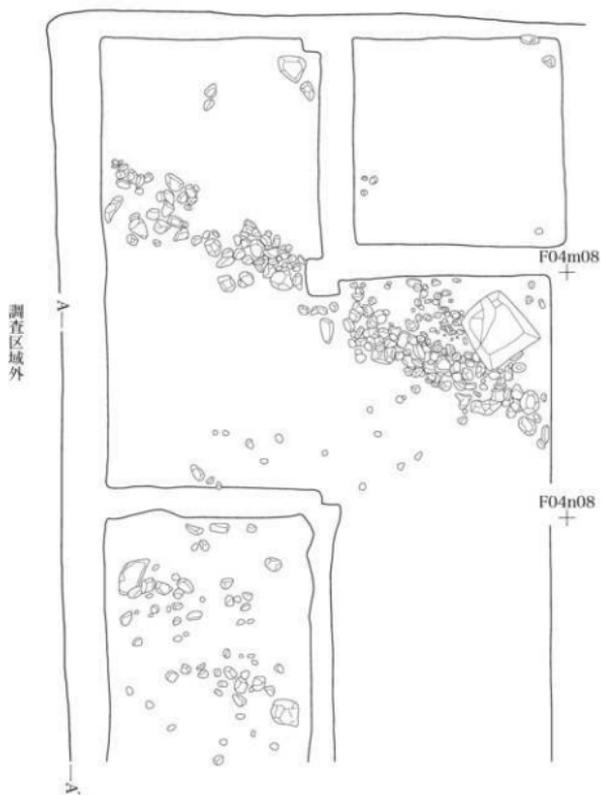
A 7.5YR3/3 暗褐色弱粘質土	3 7.5YR3/2 黒褐色砂質土	12 7.5YR2/1 黒褐色弱粘質土
B 7.5YR4/2 灰褐色砂質土	4 7.5YR4/2 灰褐色弱粘質土	13 7.5YR2/3 極暗褐色弱粘質土
C 7.5YR3/2 黒褐色弱粘質土	5 7.5YR3/1 暗褐色礫混砂質土	14 10YR3/4 暗褐色礫混砂質土
D 7.5YR3/4 暗褐色弱粘質土	6 10YR2/3 黒褐色粘質土	15 5YR4/6 赤褐色砂質土
E 7.5YR2/3 極暗褐色砂質土	7 7.5YR3/2 黒褐色土と4/4褐色土の混 じった弱粘質土	16 7.5YR3/3 暗褐色粘質土
F 7.5YR4/4 褐色砂質土	8 10YR2/2 黒褐色砂質土	17 16に灰褐色土が混じる土
G 10YR5/2 灰褐色弱粘質土	9 7.5YR4/6 褐色弱粘質土	
I 10YR3/2 黒褐色弱粘質土	10 10YR4/1 褐灰色粘質土	
2 7.5YR4/3 褐色弱粘質土	11 7.5YR3/2 黒褐色弱粘質土	



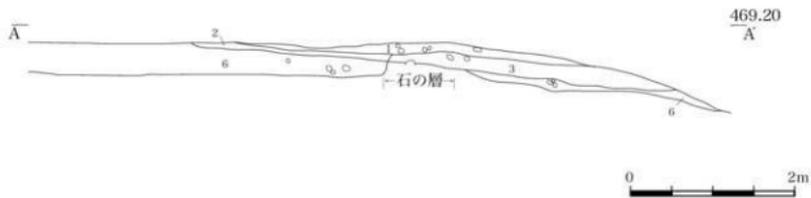
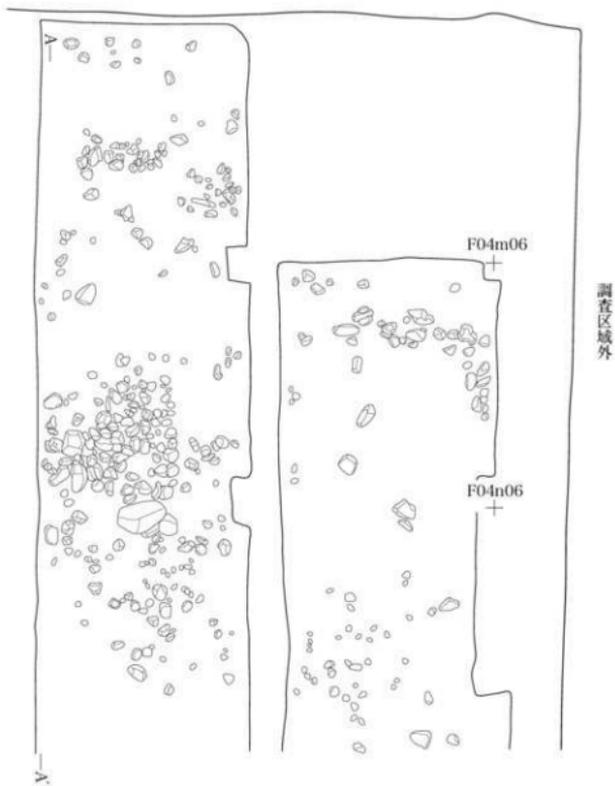
第8図 平成15(2003)年度僧寺北東城発掘調査遺構配置図(1)〔略称G地区〕



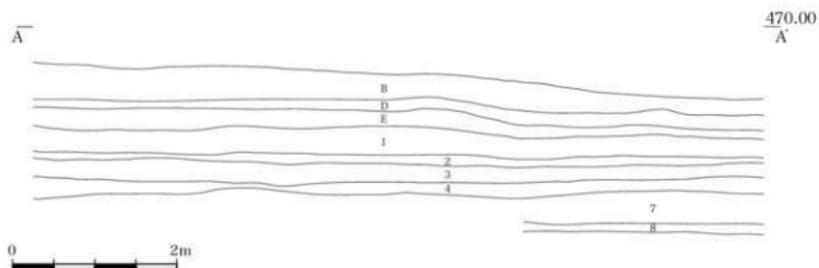
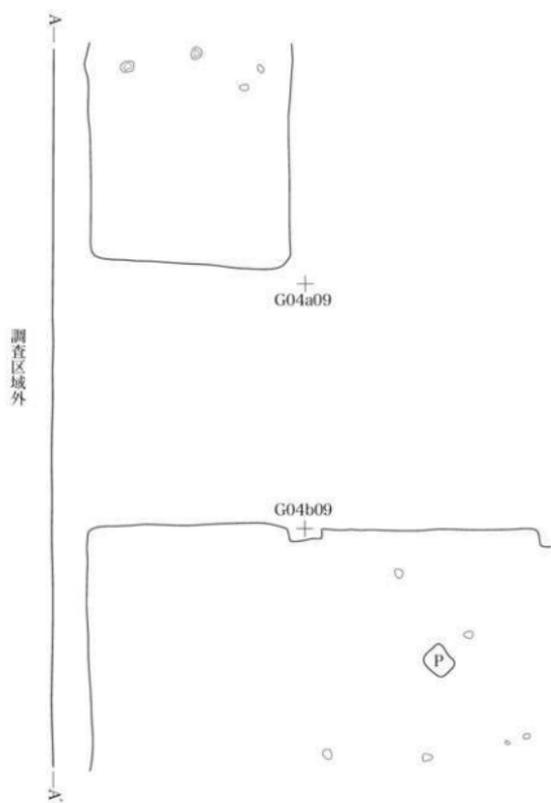
第10図 平成15(2003)年度僧寺北東域発掘調査遺構配置図(3)〔略称I地区〕



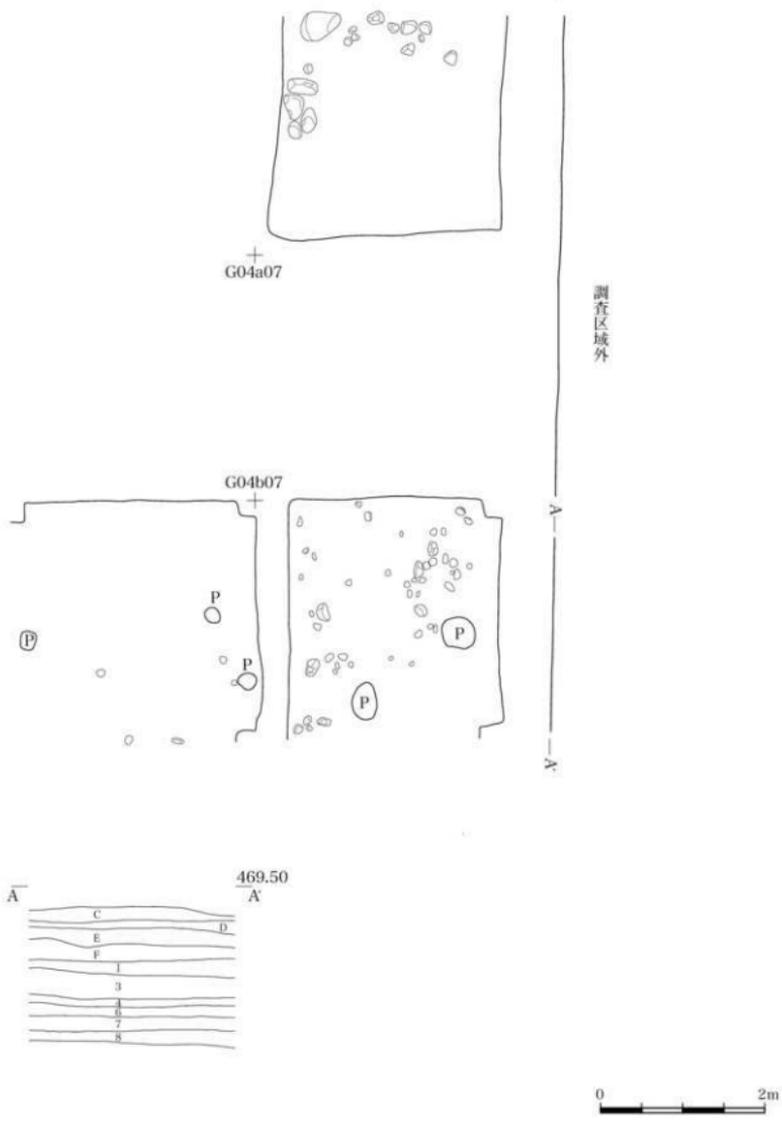
第11図 僧寺北東域発掘調査遺構図(1)



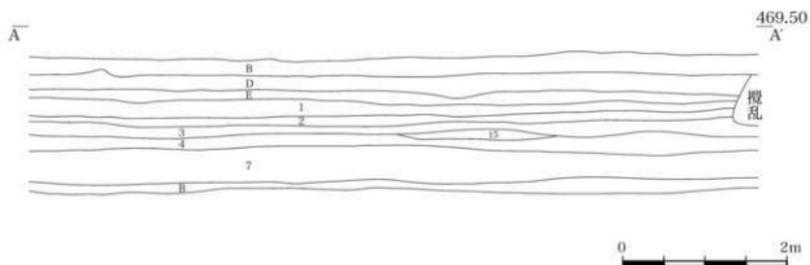
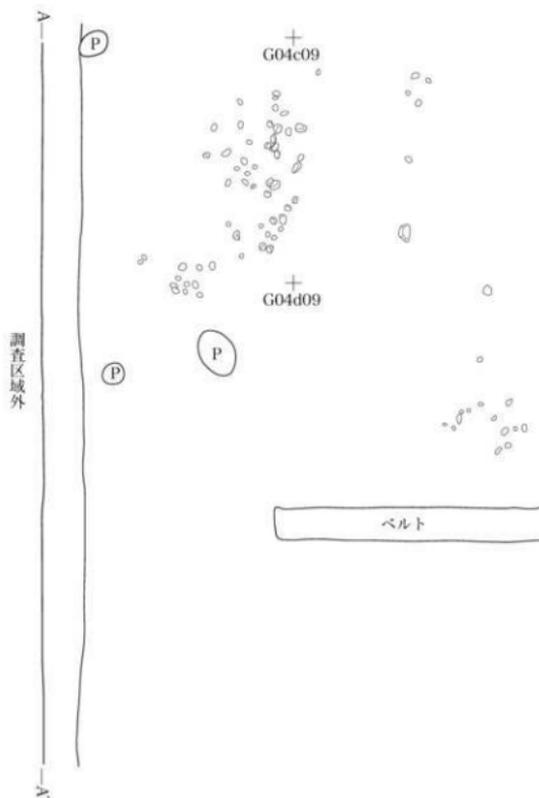
第12図 僧寺北東城発掘調査遺構図(2)



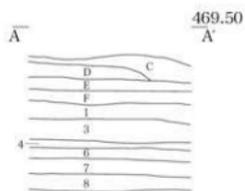
第13図 僧寺北東城発掘調査遺構図(3)



第14図 僧寺北東城発掘調査遺構図(4)



第15図 僧寺北東域発掘調査遺構図(5)



第16図 僧寺北東域発掘調査遺構図(6)

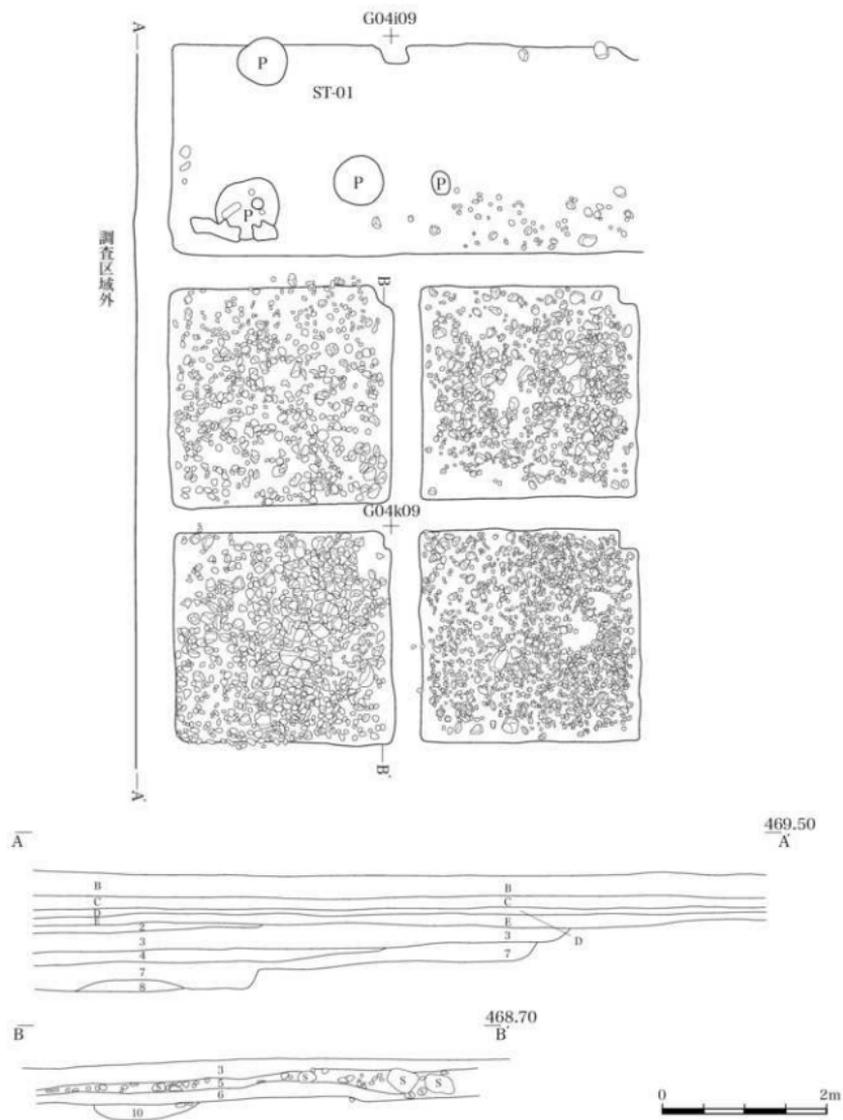


A

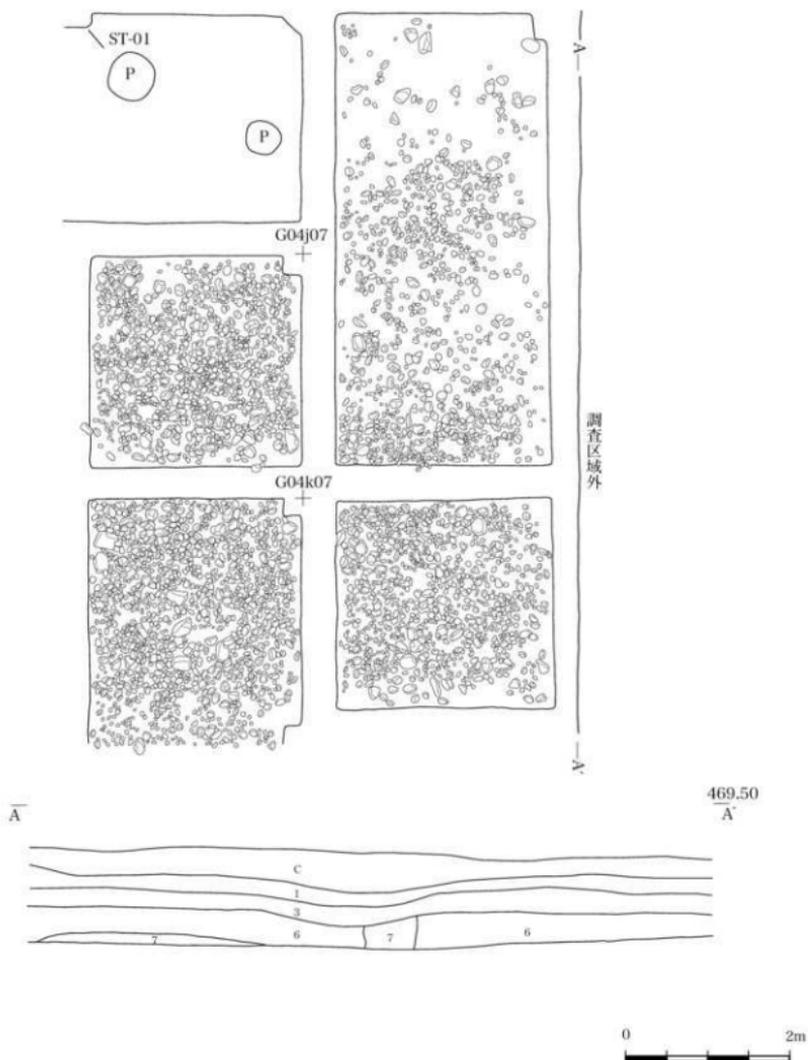
469.50
A



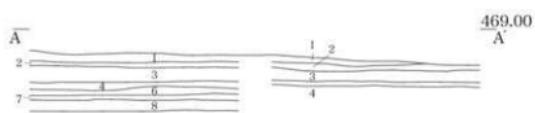
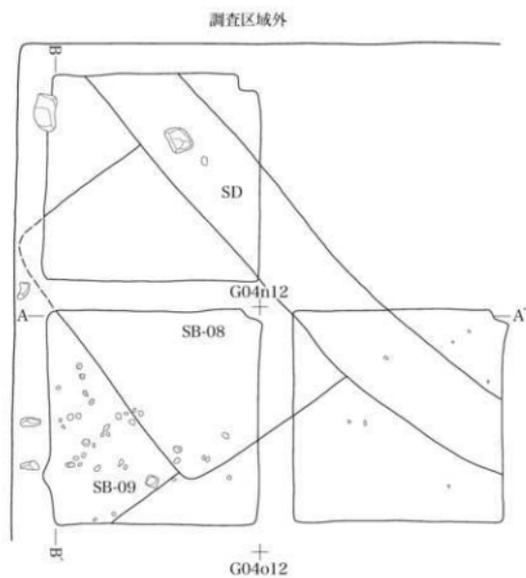
第18図 僧寺北東域発掘調査遺構図(8)



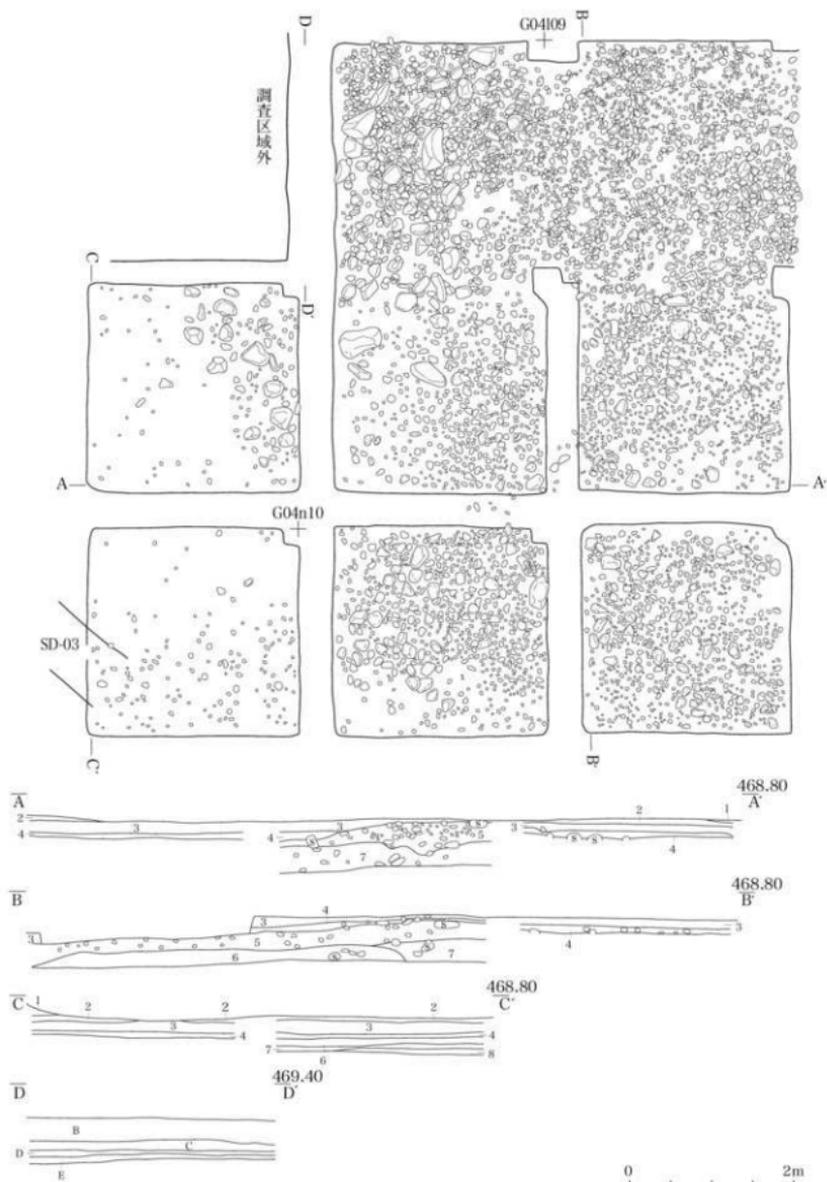
第19図 僧寺北東域発掘調査遺構図(9)



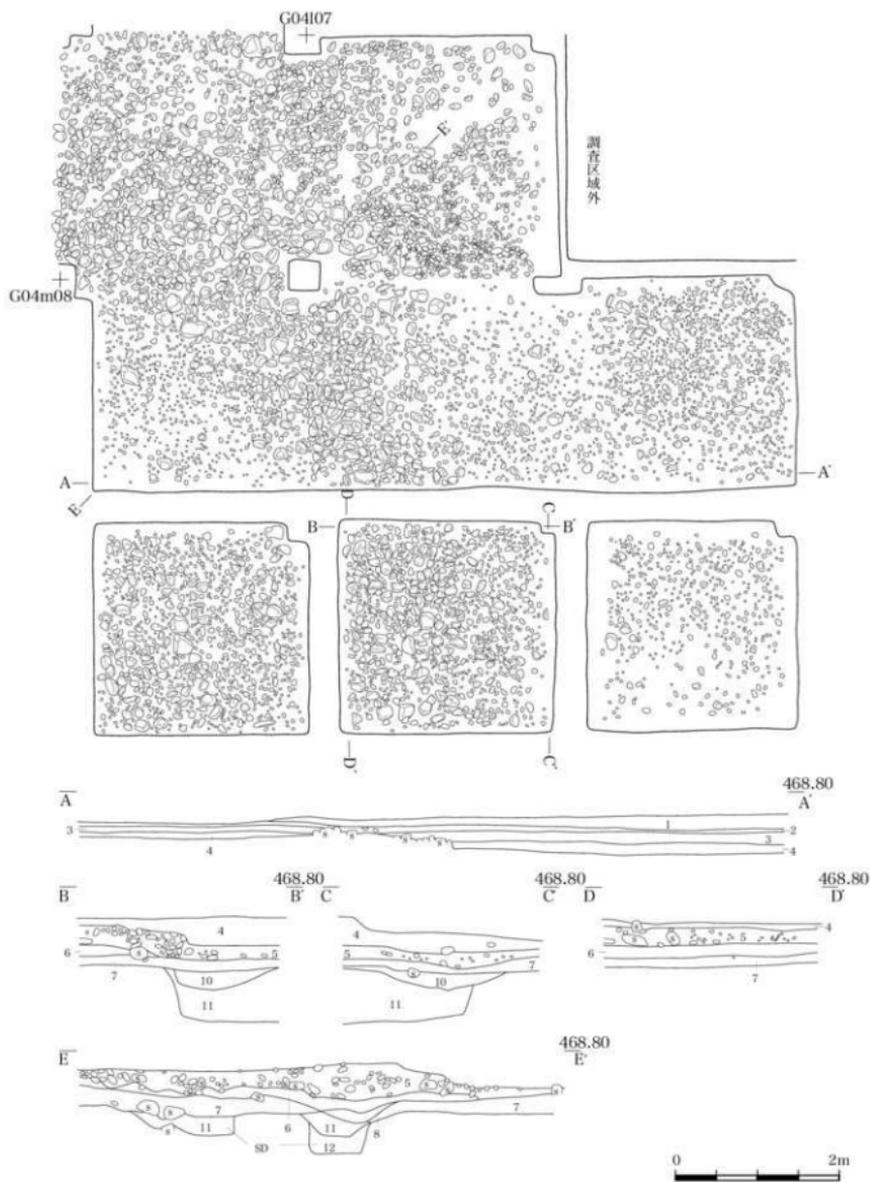
第20図 僧寺北東城発掘調査遺構図(10)



第 2 1 図 僧寺北東城発掘調査遺構図 (1 1)

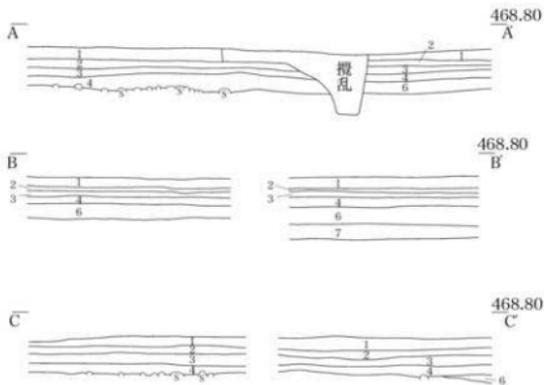
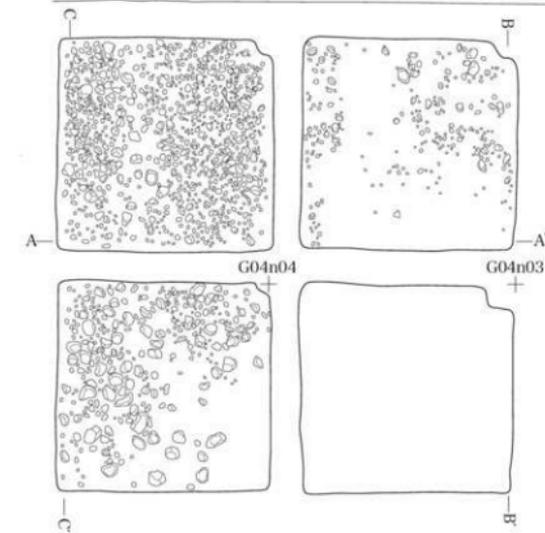


第22図 僧寺北東城発掘調査遺構図(12)



第23図 僧寺北東域発掘調査遺構図(13)

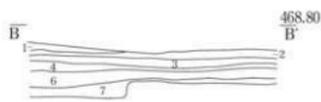
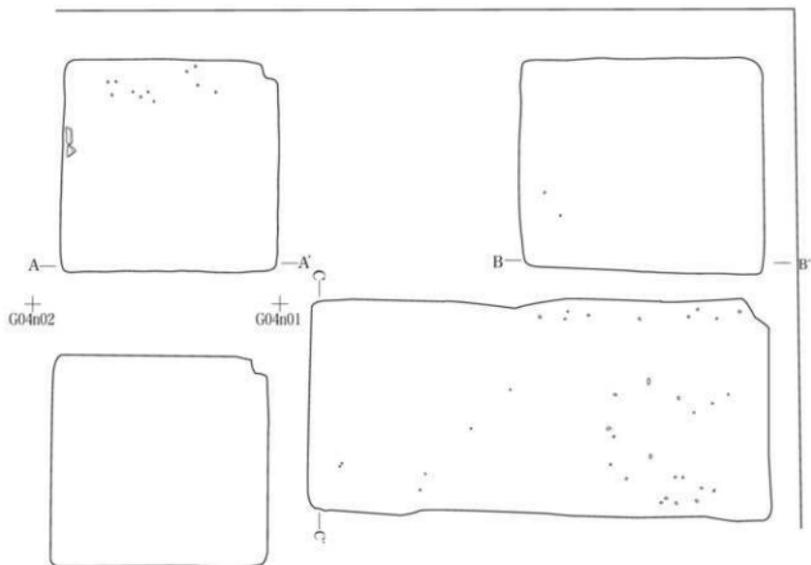
調査区域外



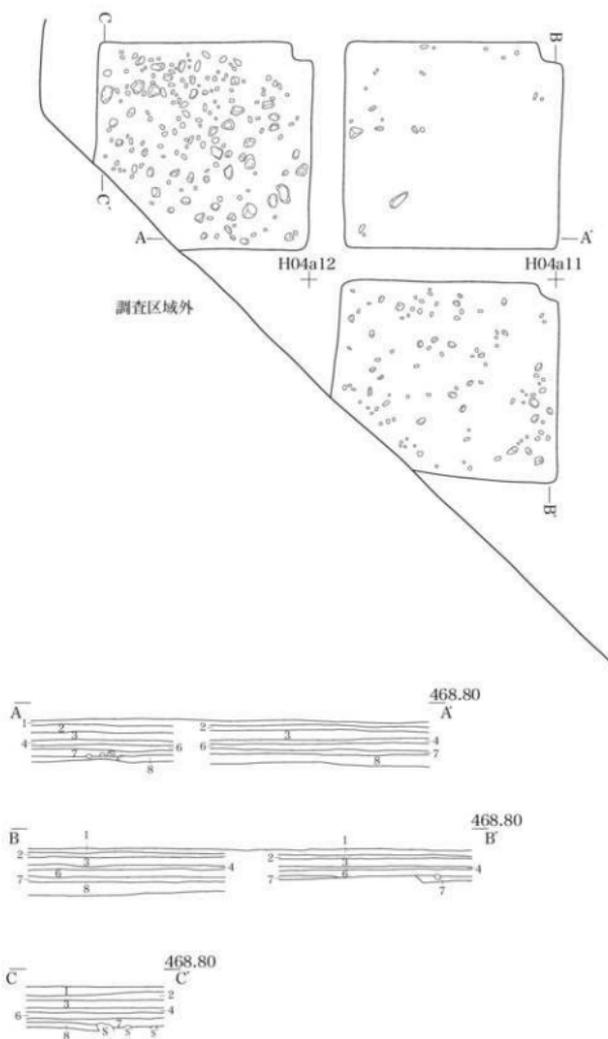
0 2m

第24図 僧寺北東域発掘調査遺構図(14)

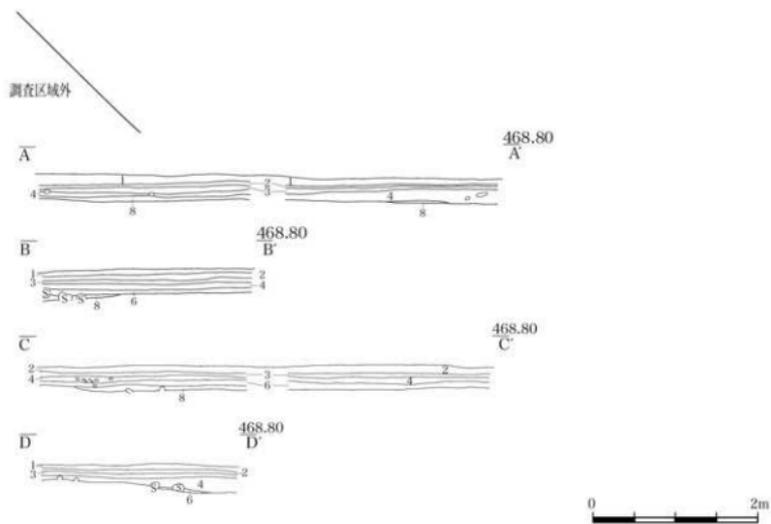
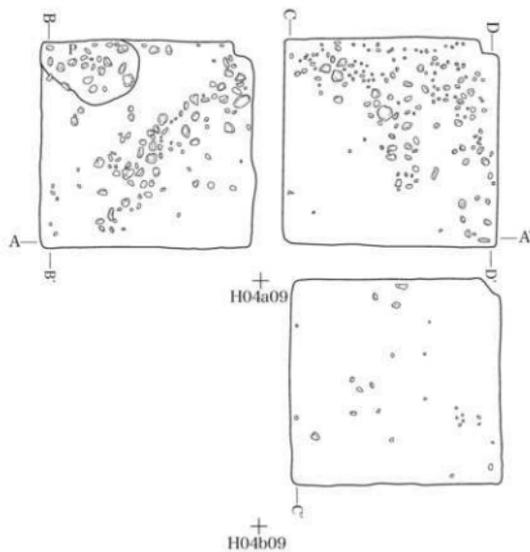
調査区域外



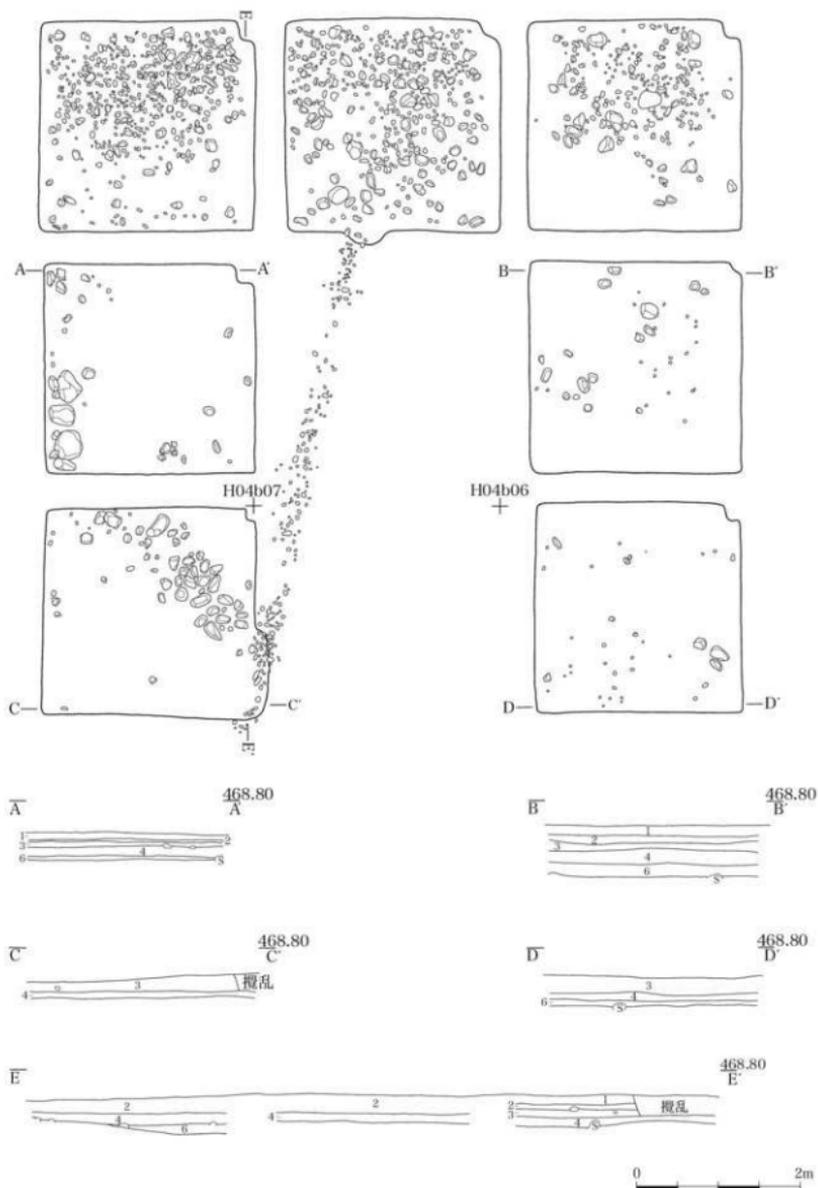
第25図 僧寺北東域発掘調査遺構図(15)



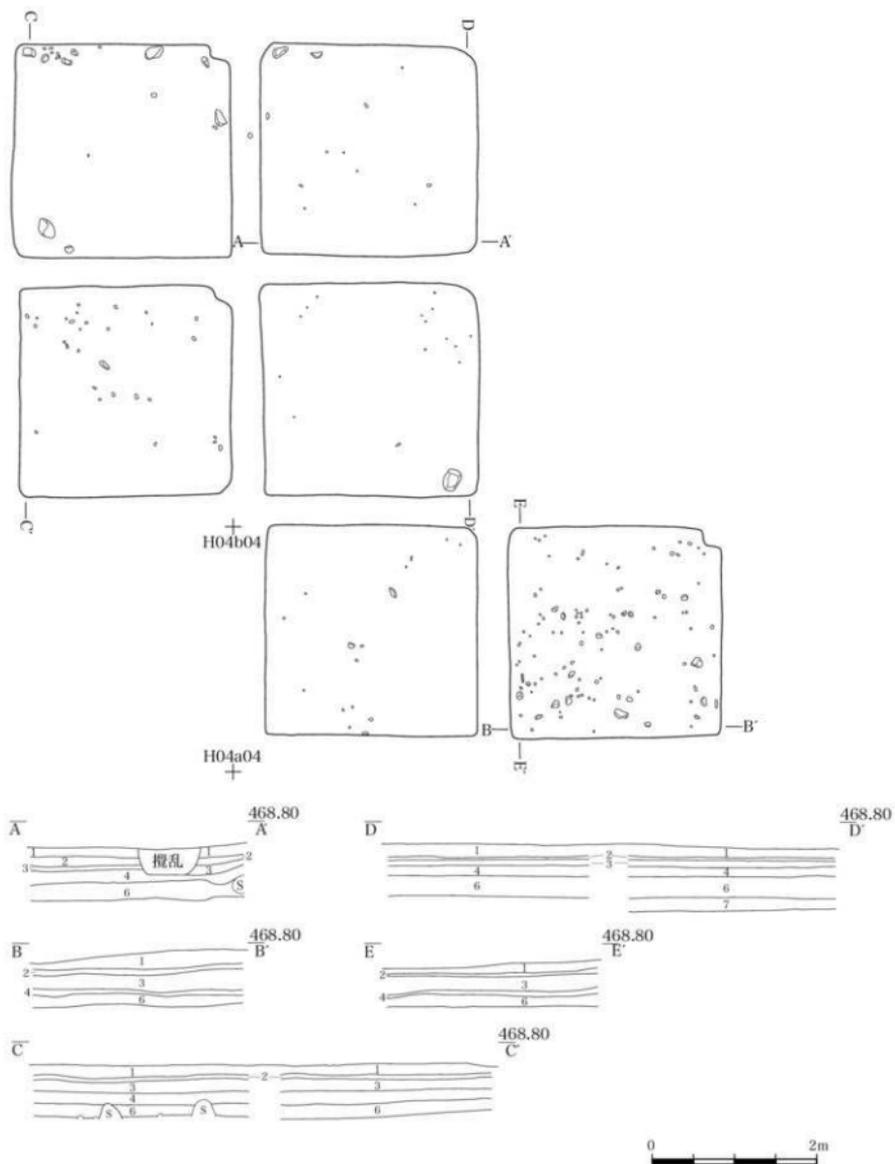
第26図 僧寺北東城発掘調査遺構図(16)



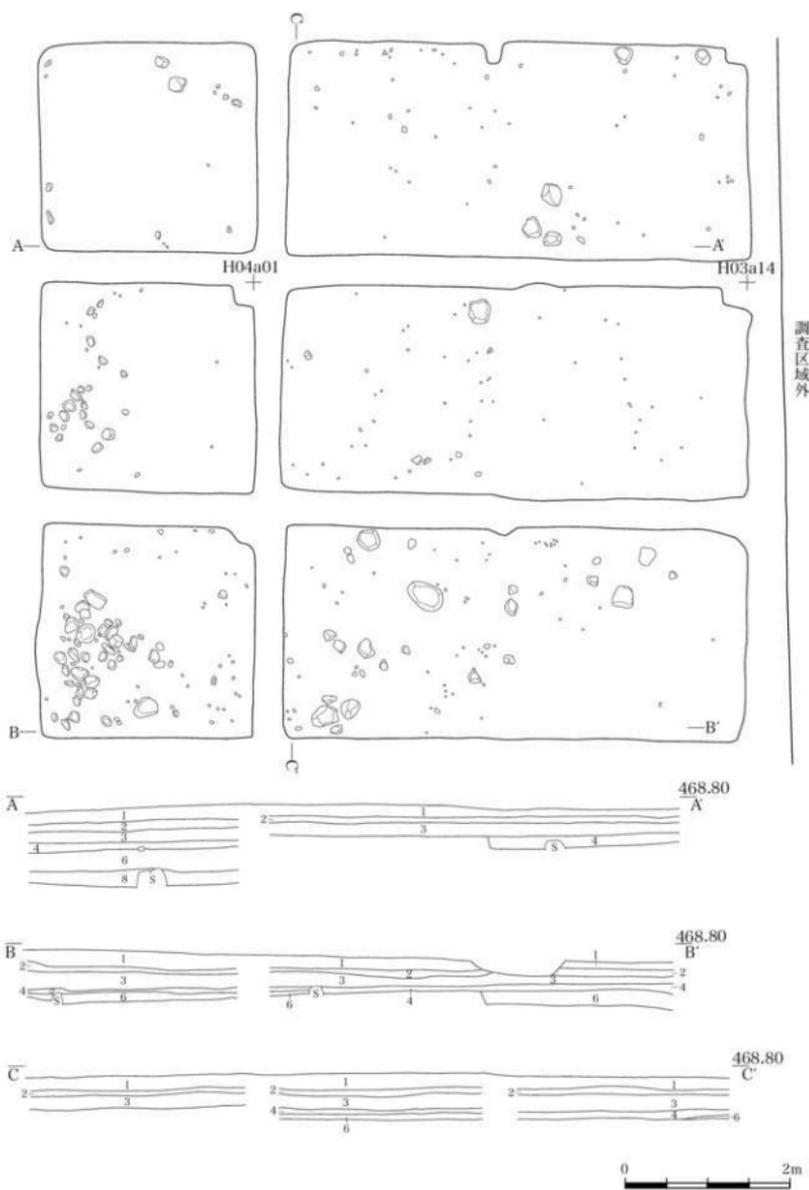
第27図 僧寺北東域発掘調査遺構図(17)



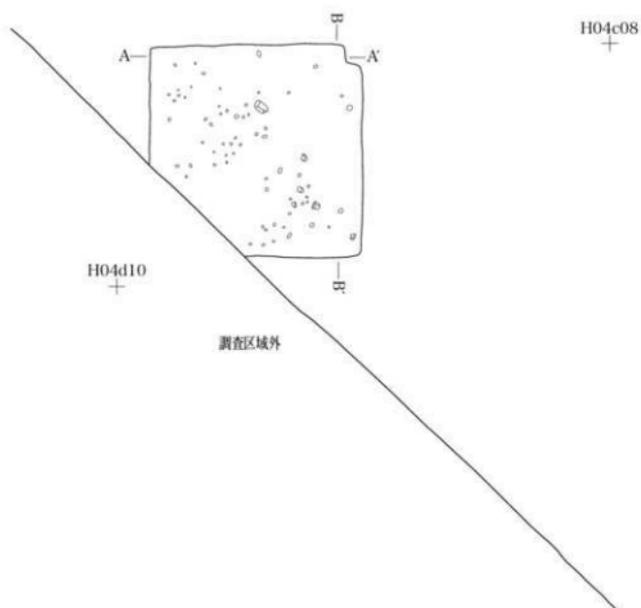
第28図 僧寺北東城発掘調査遺構図(18)



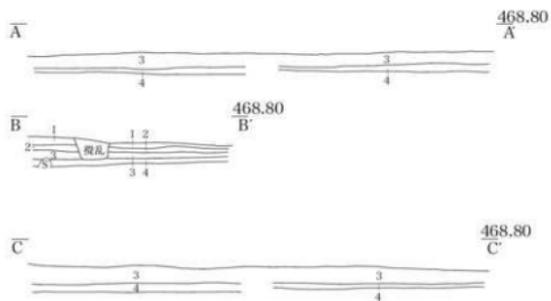
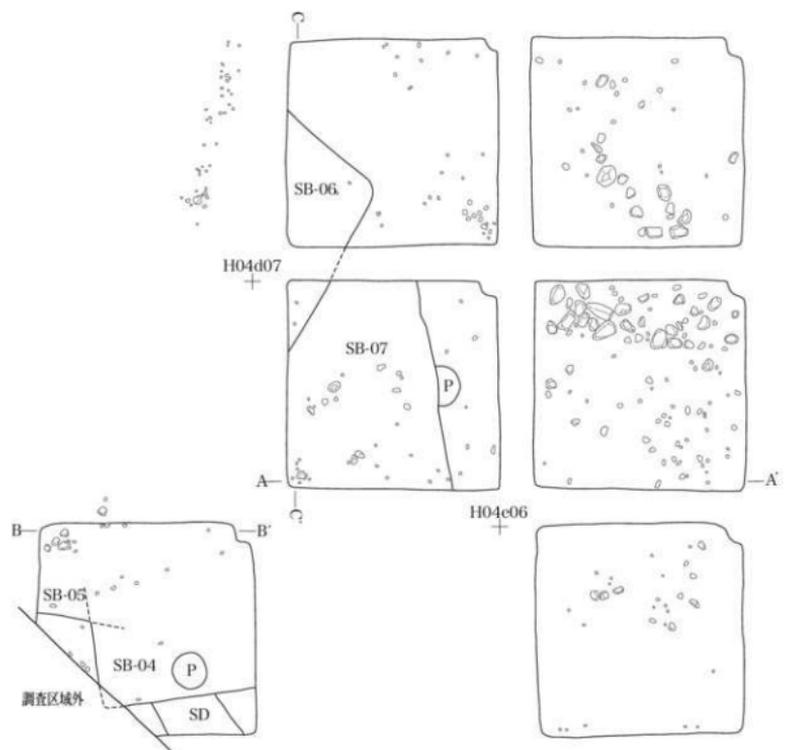
第29図 僧寺北東城発掘調査遺構図(19)



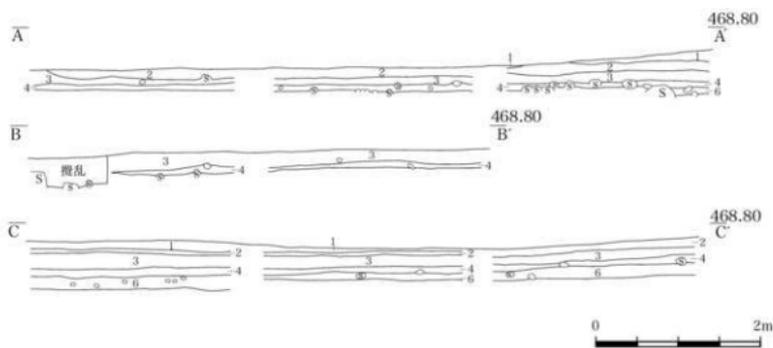
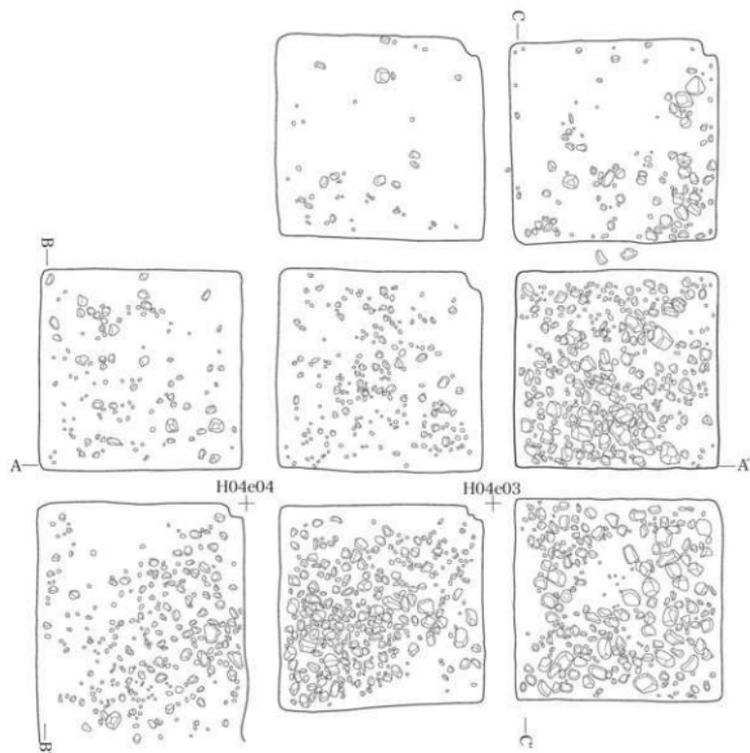
第30図 僧寺北東城発掘調査遺構図(20)



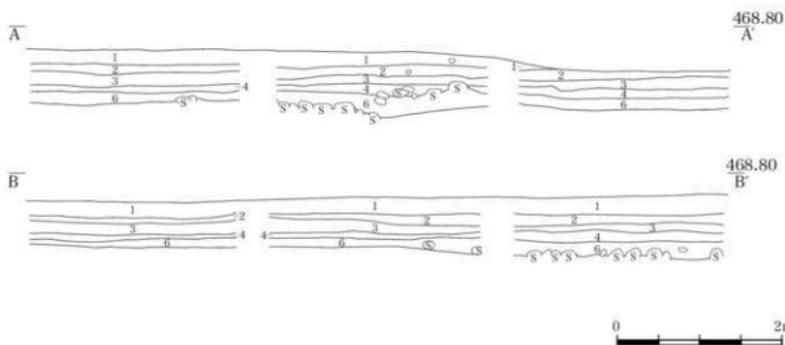
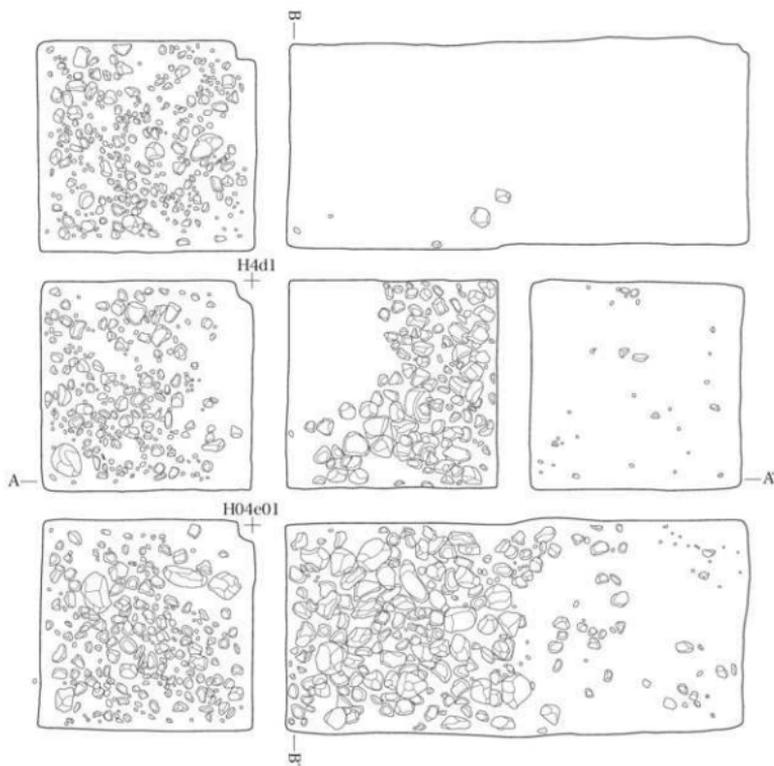
第31図 僧寺北東城発掘調査遺構図(21)



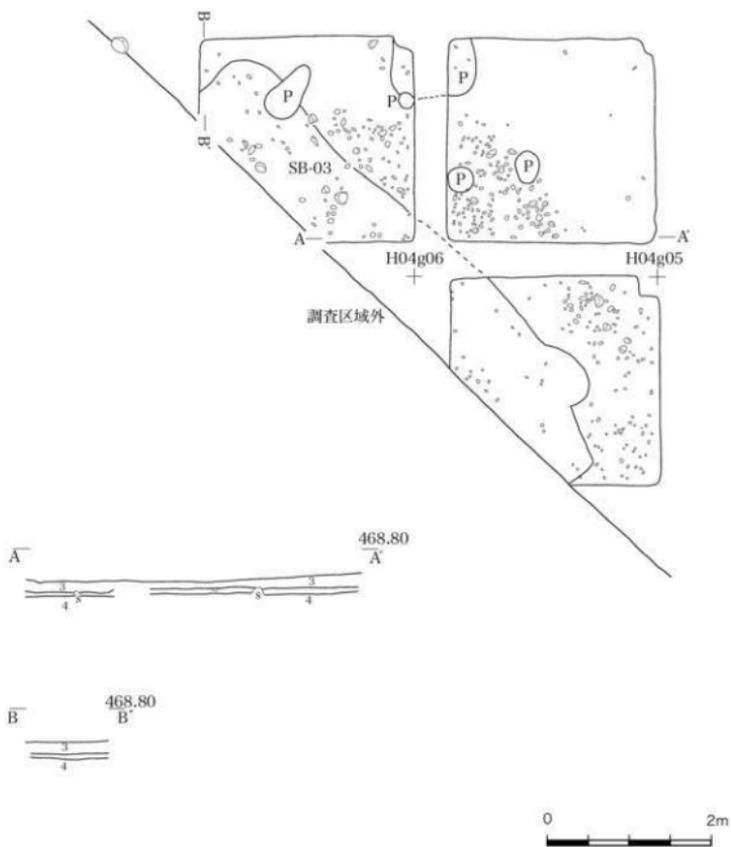
第32図 僧寺北東城発掘調査遺構図(22)



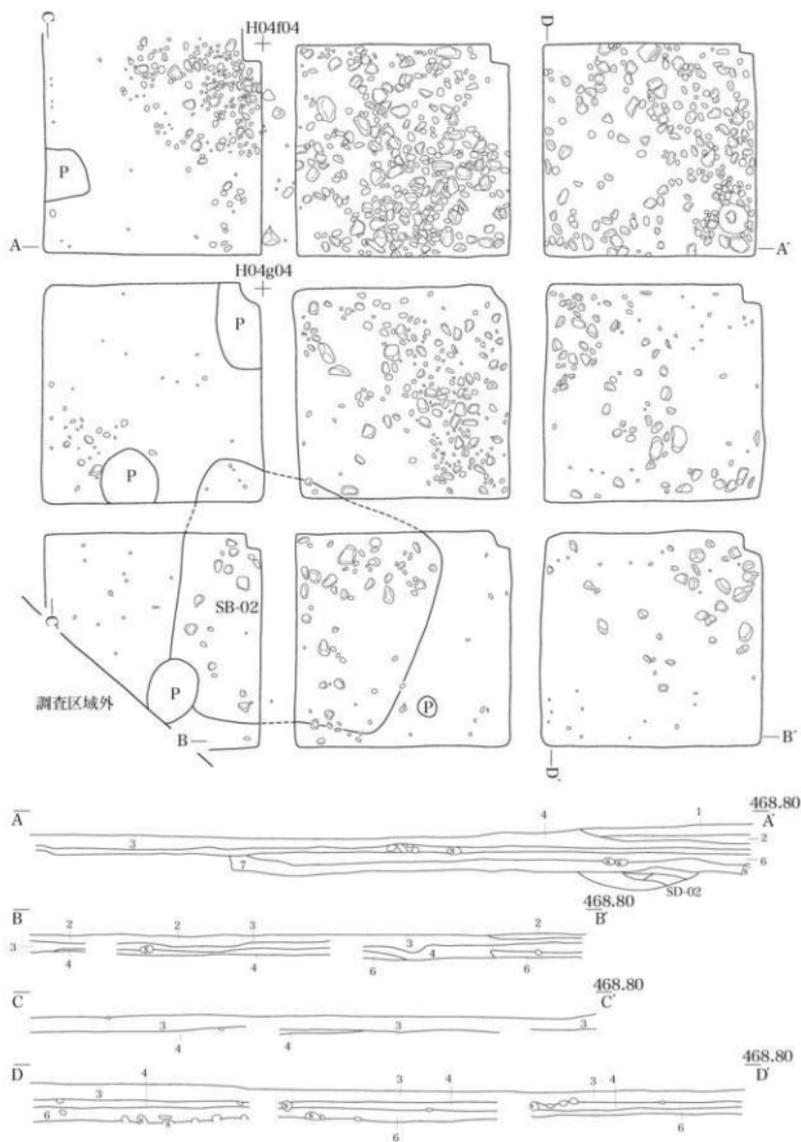
第 33 3 圖 僧寺北東域発掘調査遺構図 (23)



第34図 僧寺北東城発掘調査遺構図(24)

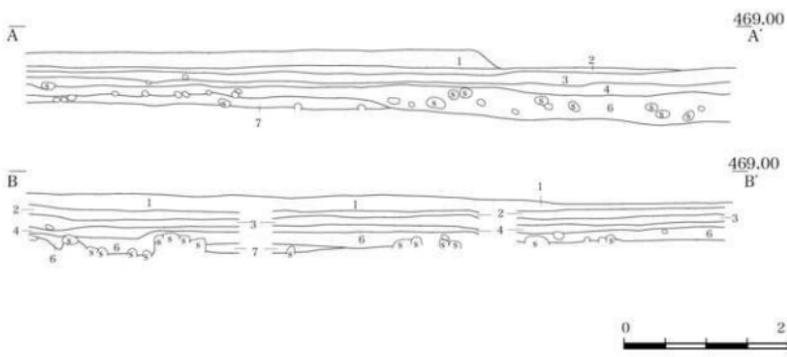
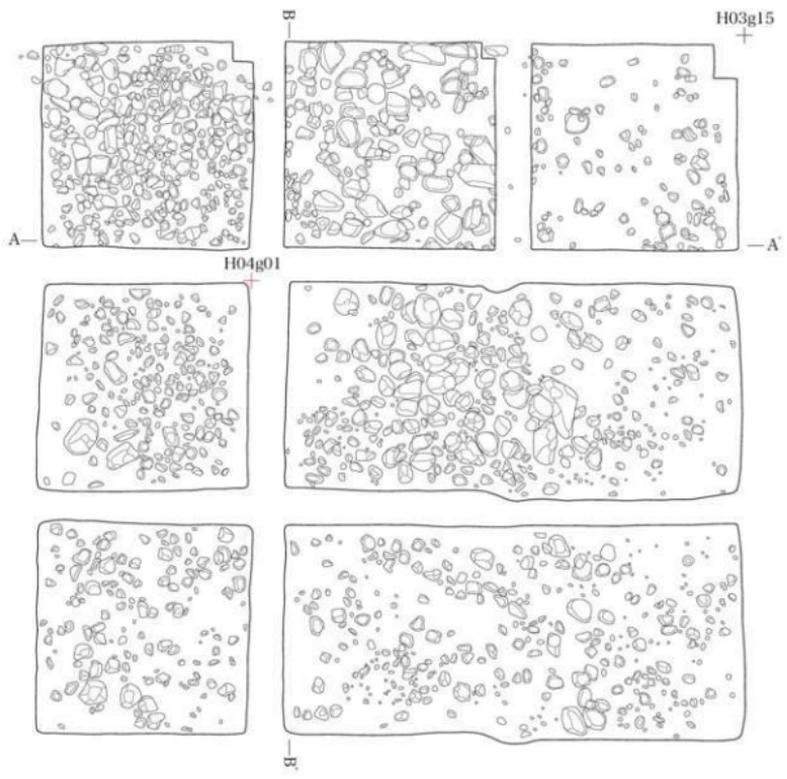


第35図 僧寺北東域発掘調査遺構図(25)

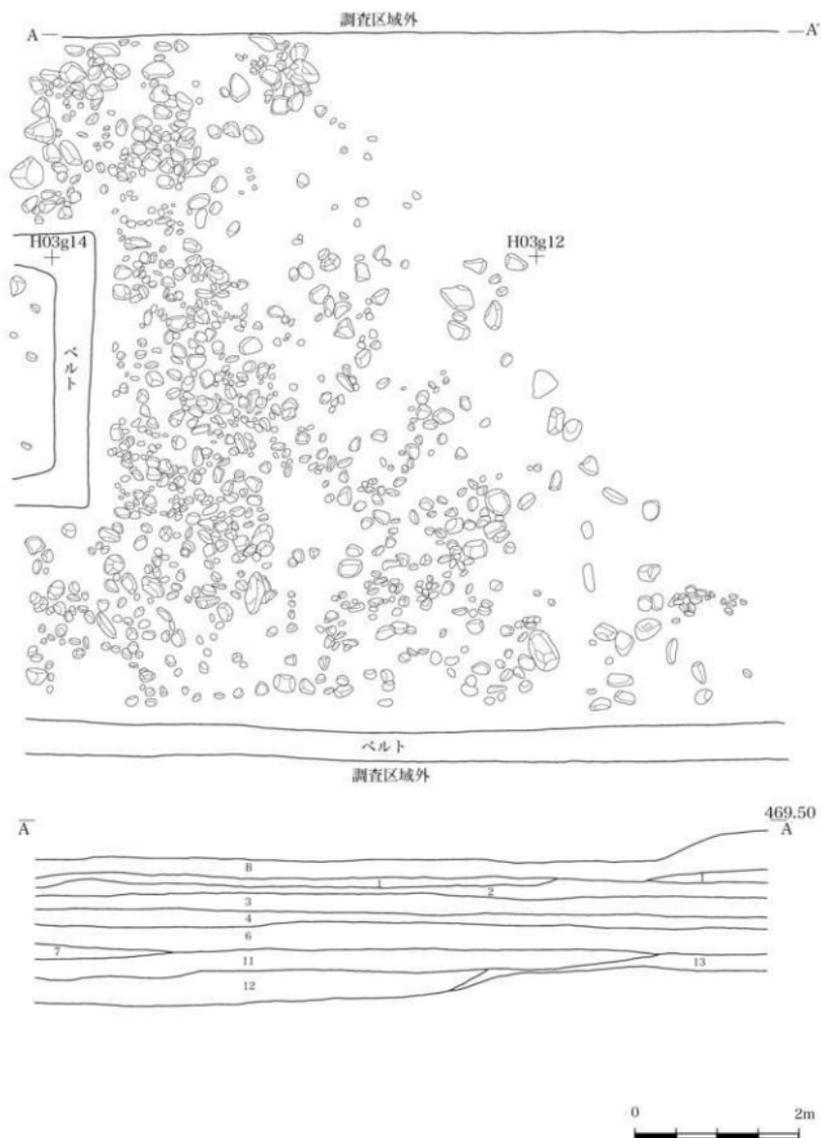


第36図 僧寺北東城発掘調査遺構図(26)

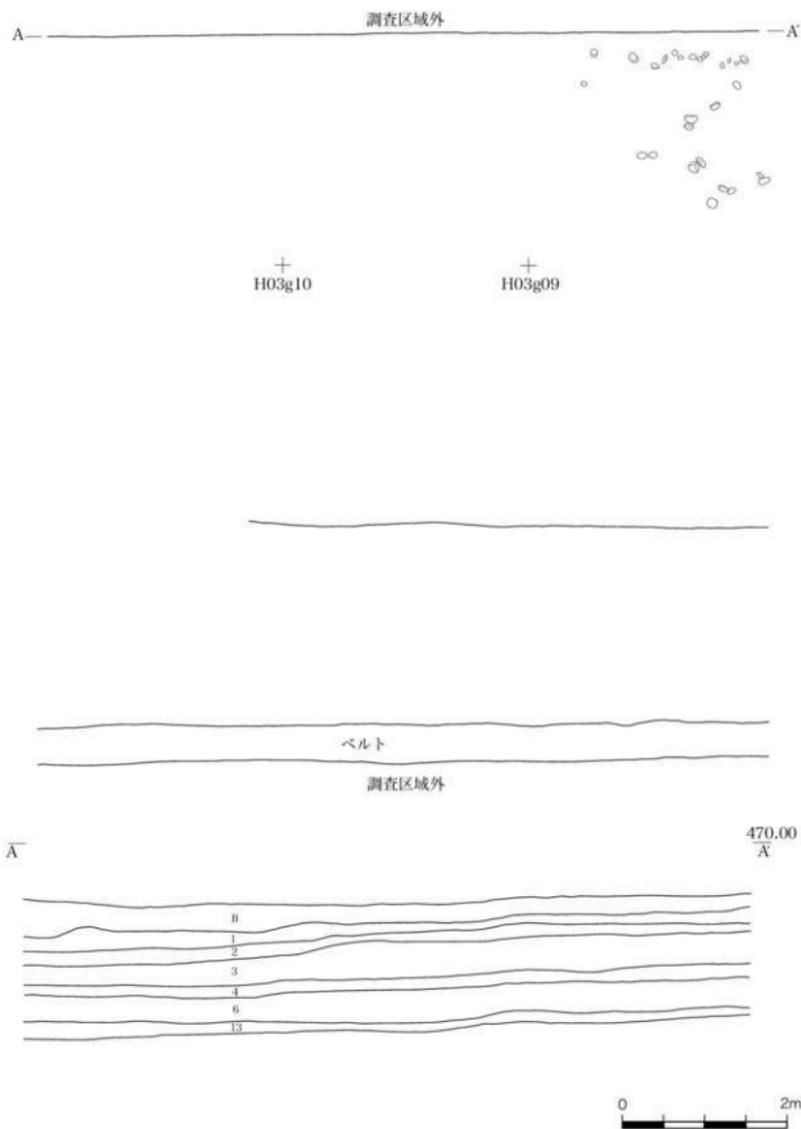
0 2m



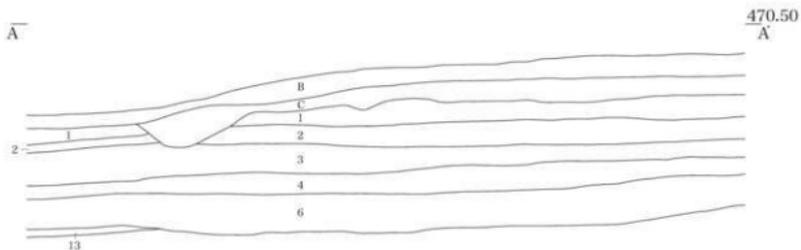
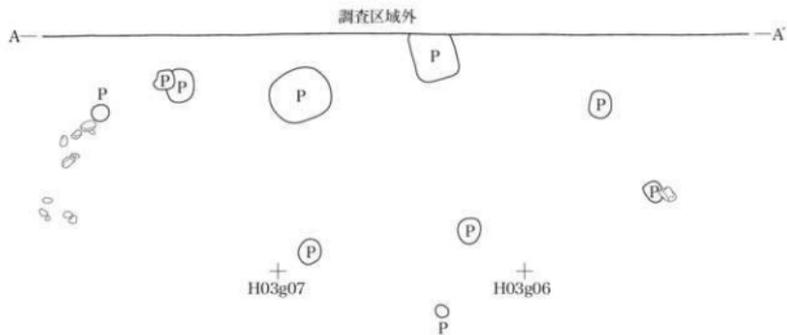
第 37 図 僧寺北東城発掘調査遺構図 (27)



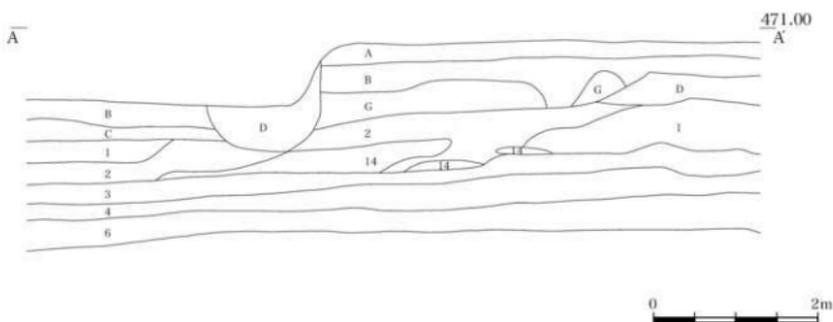
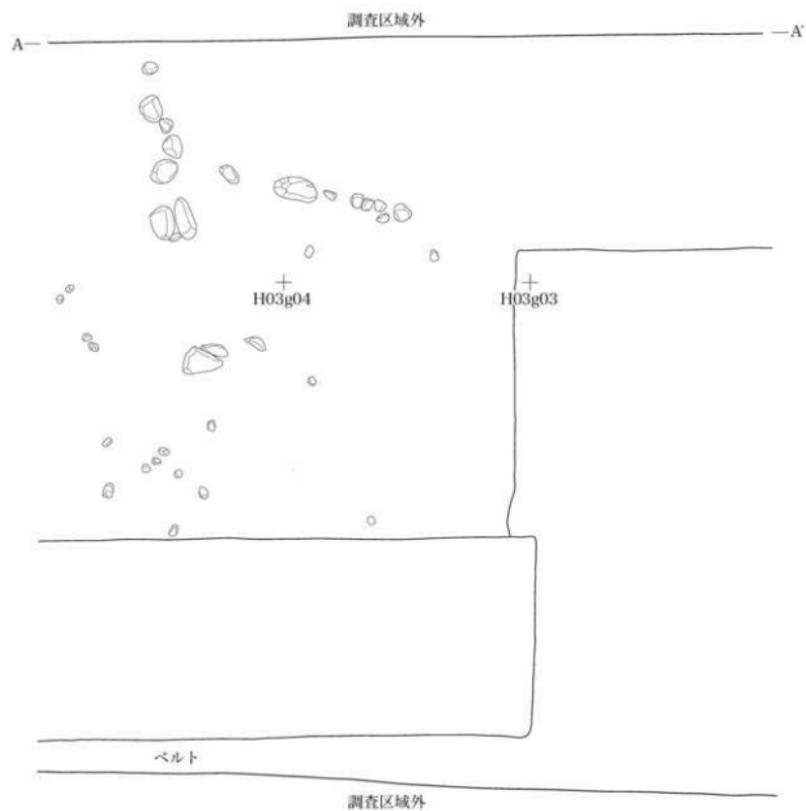
第38図 僧寺北東城発掘調査遺構図(28)



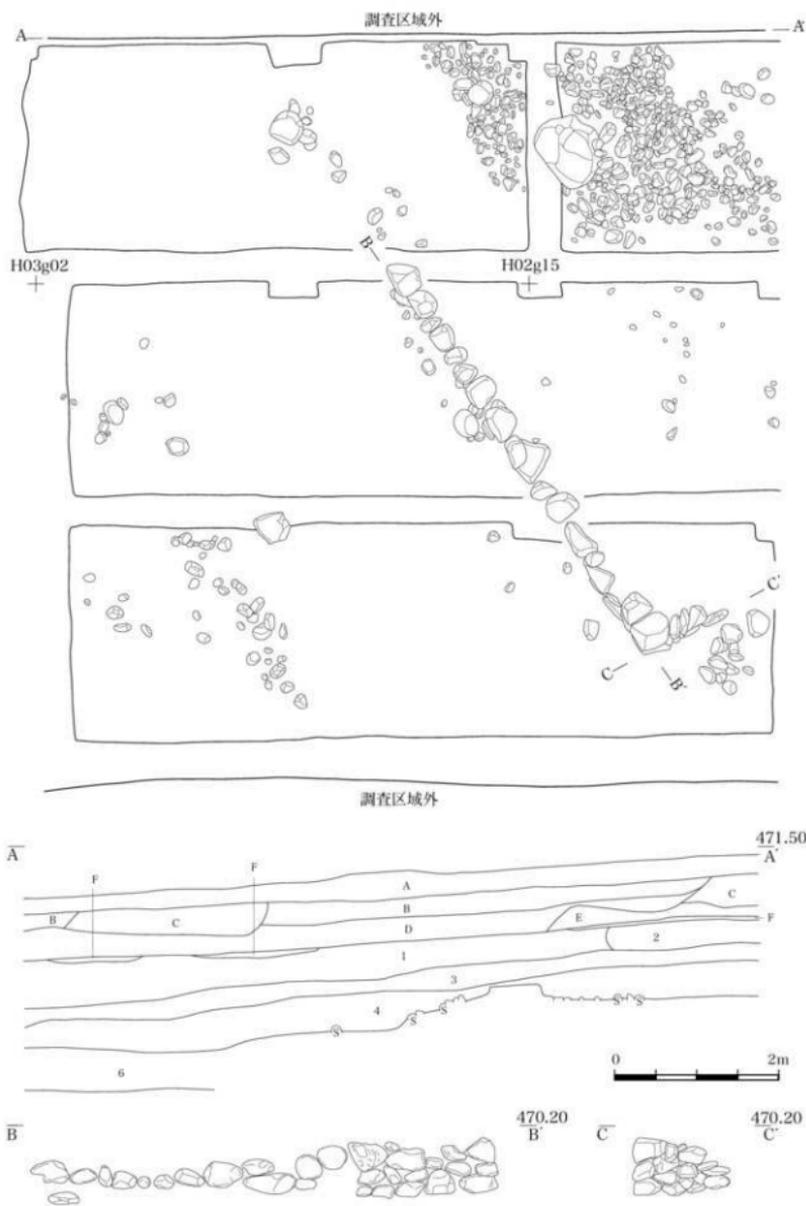
第39図 僧寺北東域発掘調査遺構図(29)



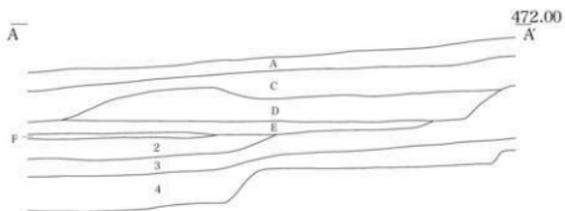
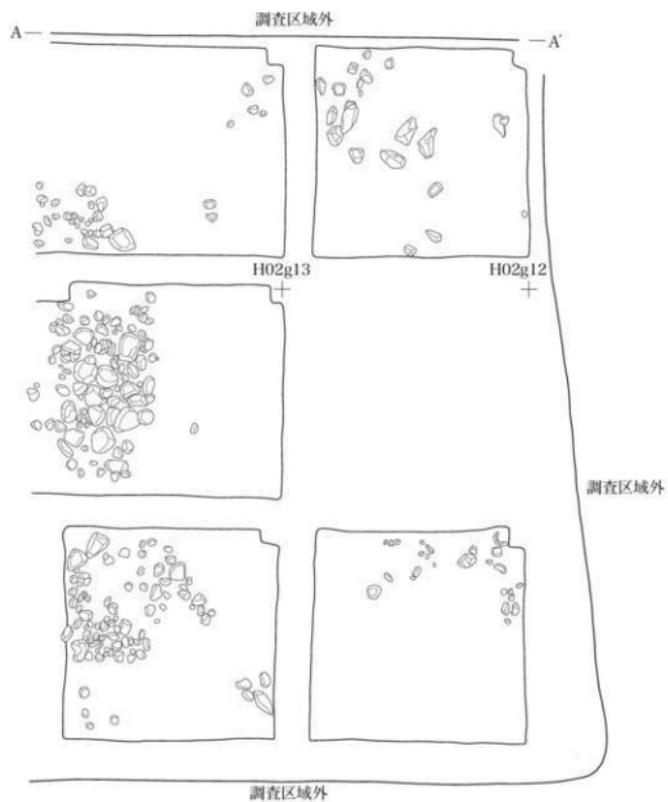
第40図 僧寺北東城発掘調査遺構図(30)



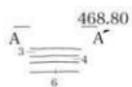
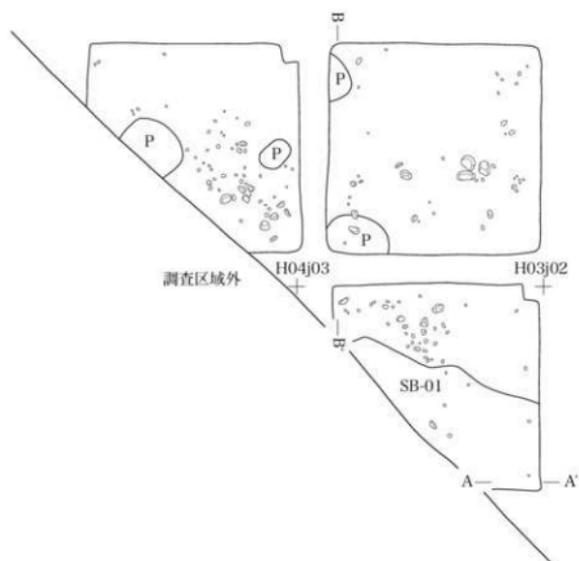
第41図 僧寺北東域発掘調査遺構図(31)



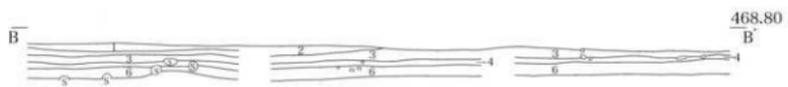
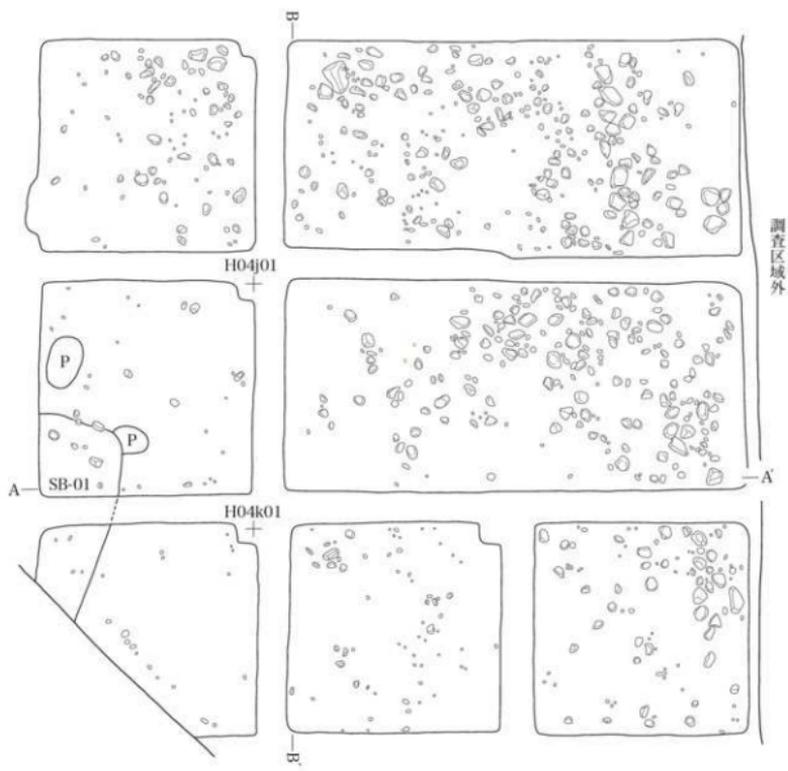
第42図 僧寺北東城発掘調査遺構図(32)



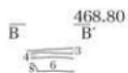
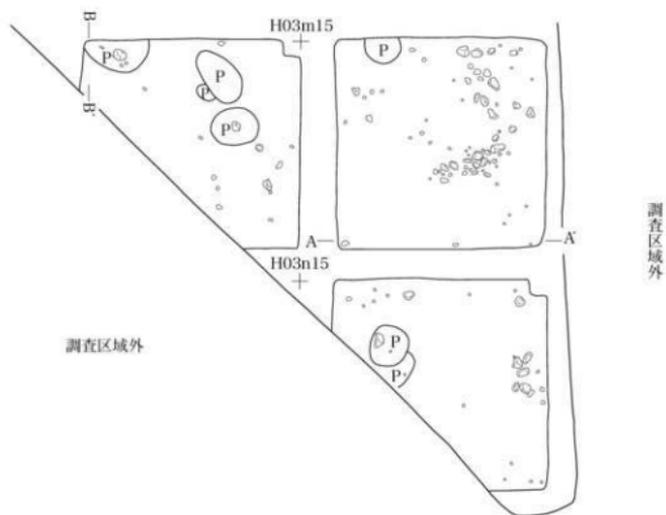
第43図 僧寺北東城発掘調査遺構図(33)



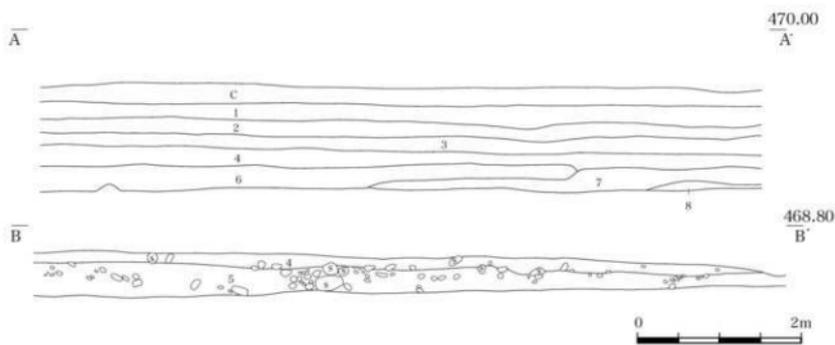
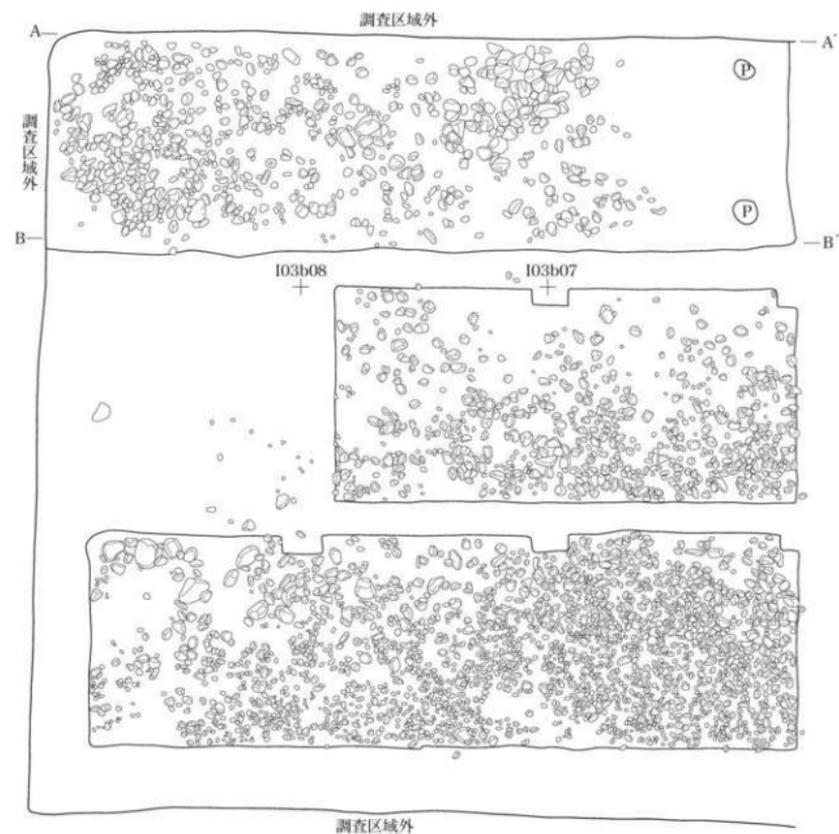
第44図 僧寺北東域発掘調査遺構図(34)



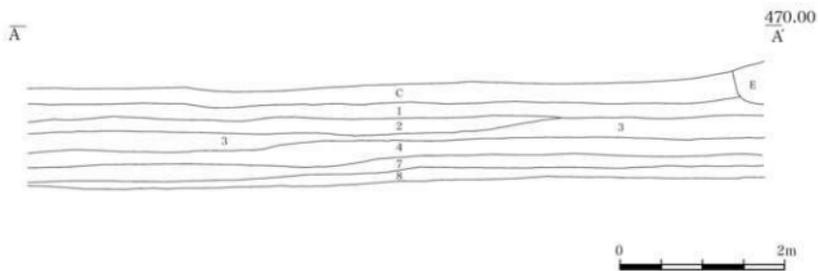
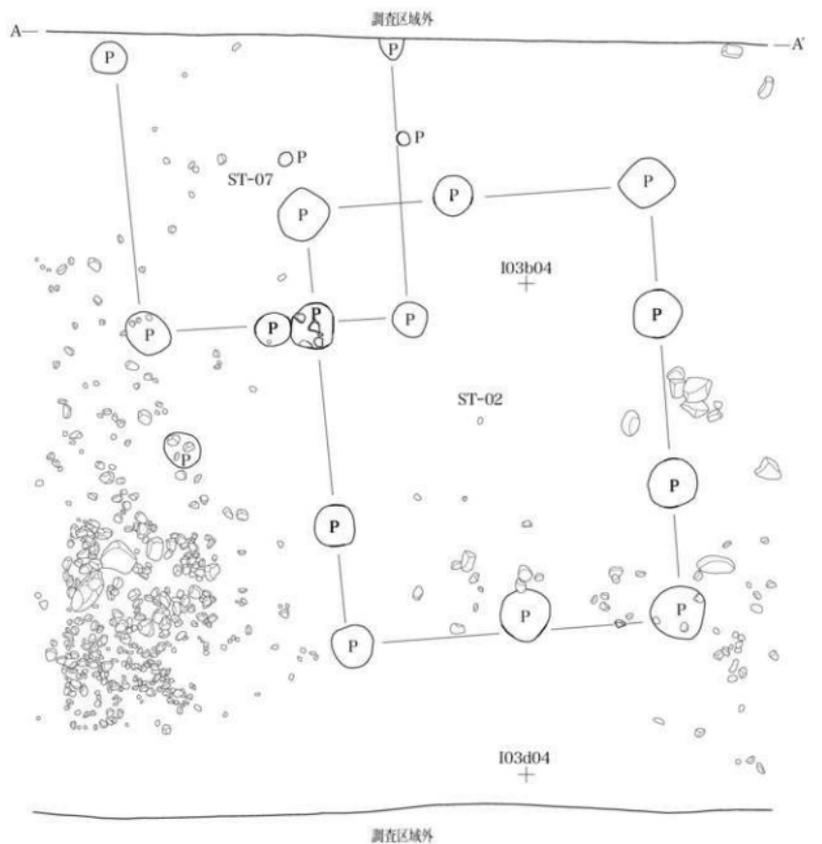
第45図 僧寺北東域発掘調査遺構図(35)



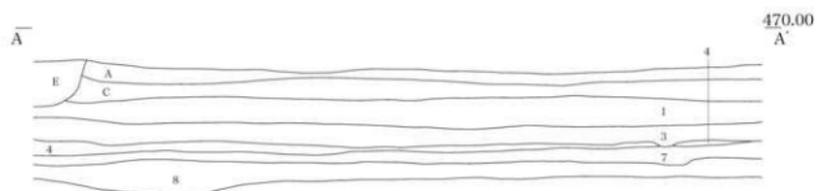
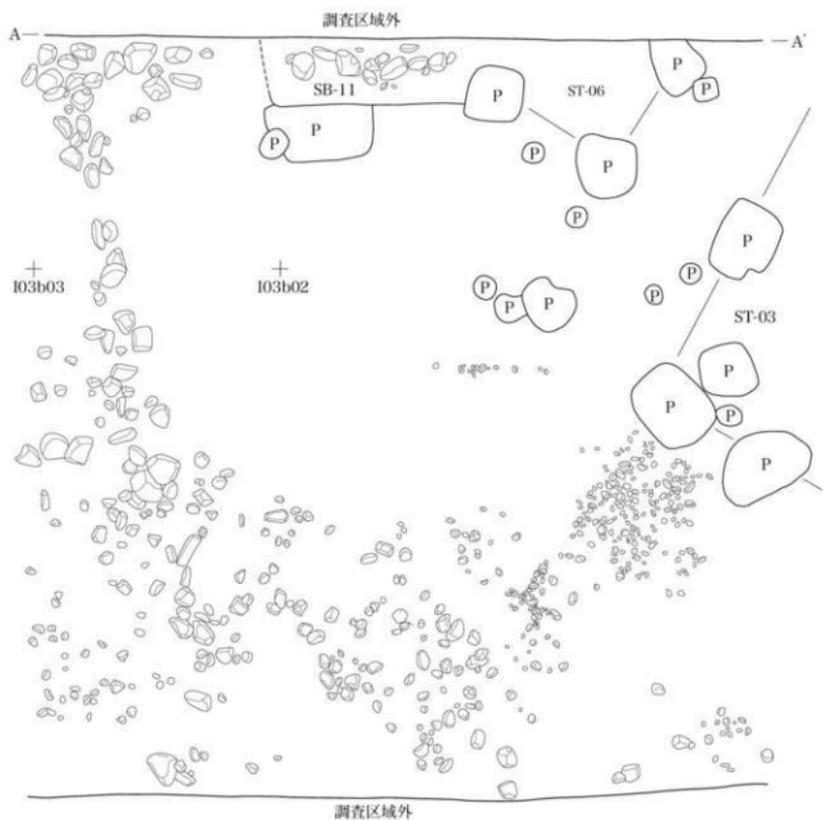
第46図 僧寺北東域発掘調査遺構図(36)



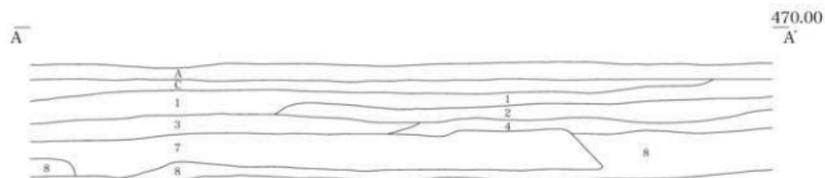
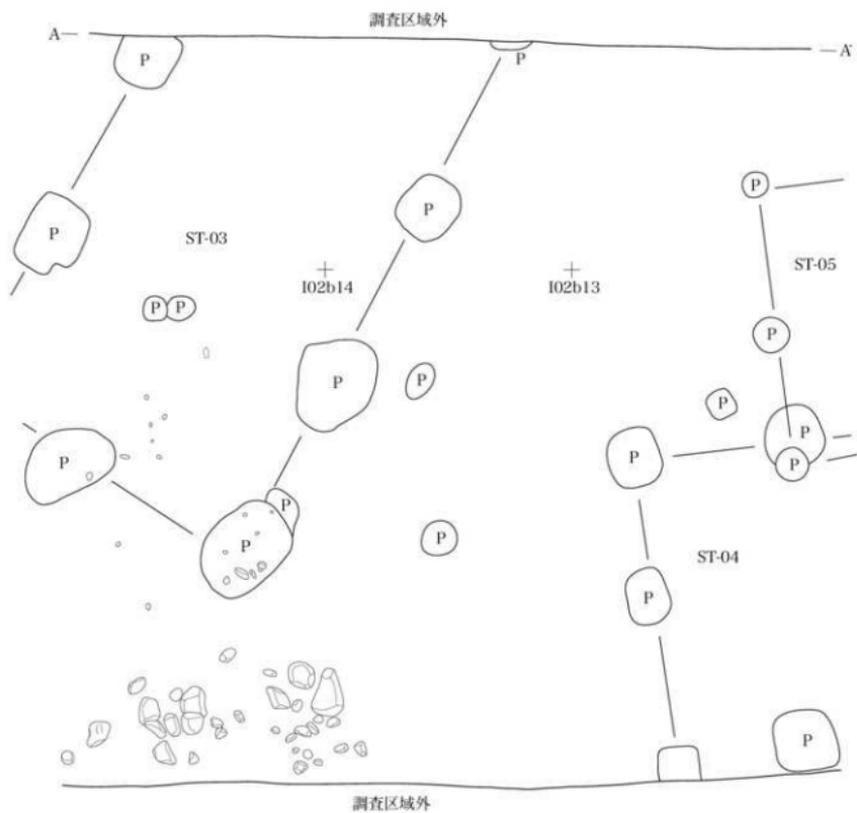
第47図 僧寺北東域発掘調査遺構図(37)



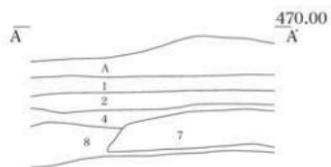
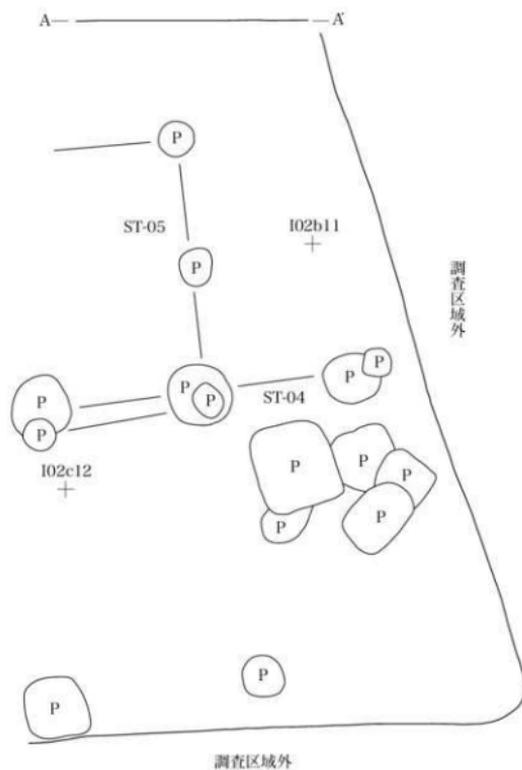
第48図 僧寺北東城発掘調査遺構図(38)



第49図 僧寺北東域発掘調査遺構図(39)



第50図 僧寺北東城発掘調査遺構図(40)

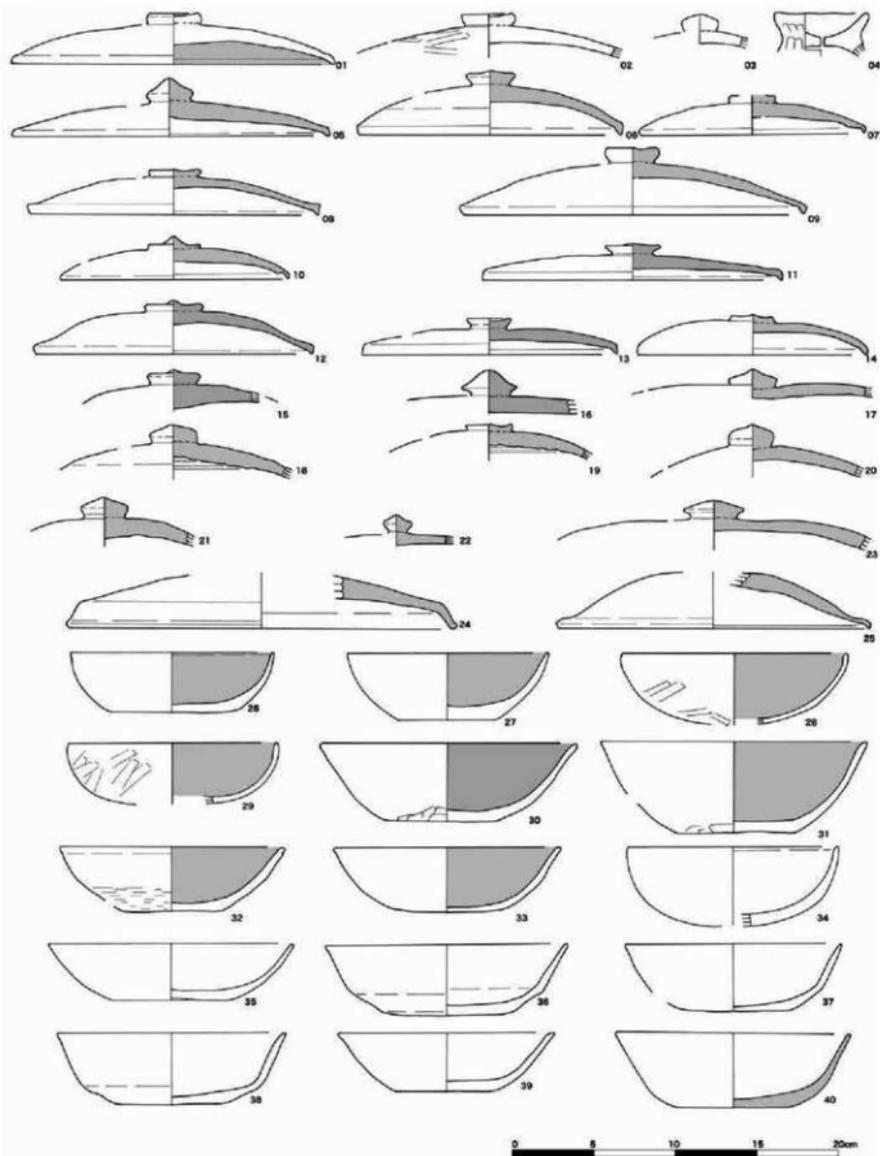


第51図 僧寺北東城発掘調査遺構図(41)

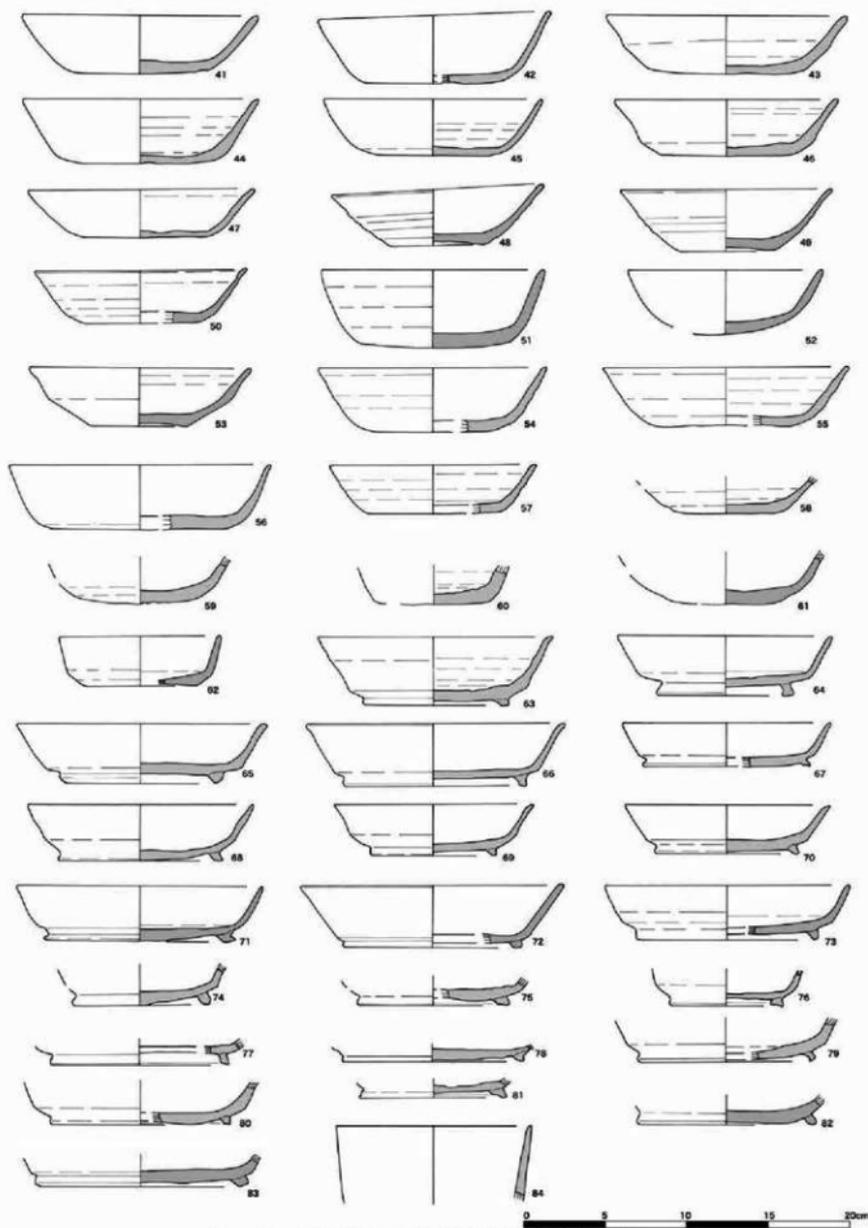
遺構	遺構No	長軸(長さ)	短軸(幅)	深さ	平面形態	主軸方位
SB	01	不明	3.86	未調査	隅丸長方形?	N-18° -E
SB	02	3.16	3.00	未調査	隅丸方形	N-16° -E
SB	03	不明	6.65	未調査	隅丸長方形?	N-45° -E
SB	04	不明	不明	未調査	不明	不明
SB	05	不明	不明	未調査	不明	不明
SB	06	不明	不明	未調査	不明	不明
SB	07	不明	不明	未調査	不明	不明
SB	08	3.78	不明	未調査	隅丸長方形?	N-54° -E?
SB	09	不明	不明	未調査	不明	不明
SB	10	5.79	5.16	未調査	隅丸長方形	N-40° -E
SB	11	不明	不明	不明	不明	
ST	01	5.70	3.55	未調査	4×2間	N-43° -W
ST	02	5.33	4.13	未調査	3×2間	N-10° -W
ST	03	7.40	3.89	未調査	3×2間	N-27° -E
ST	04	5.78	3.51	未調査	3×2間	N-82° -E
ST	05	3.36	2.10	未調査	2×1間	N-7° -W
ST	06	不明	1.56	未調査		N-30° -E
ST	07	不明	3.32	未調査		N-3° -W
SD	01	7.00	0.90	未調査		
SD	02	3.50	1.05			
SD	03	3.40	1.06	0.23		

第1表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城発掘調査遺構観察表

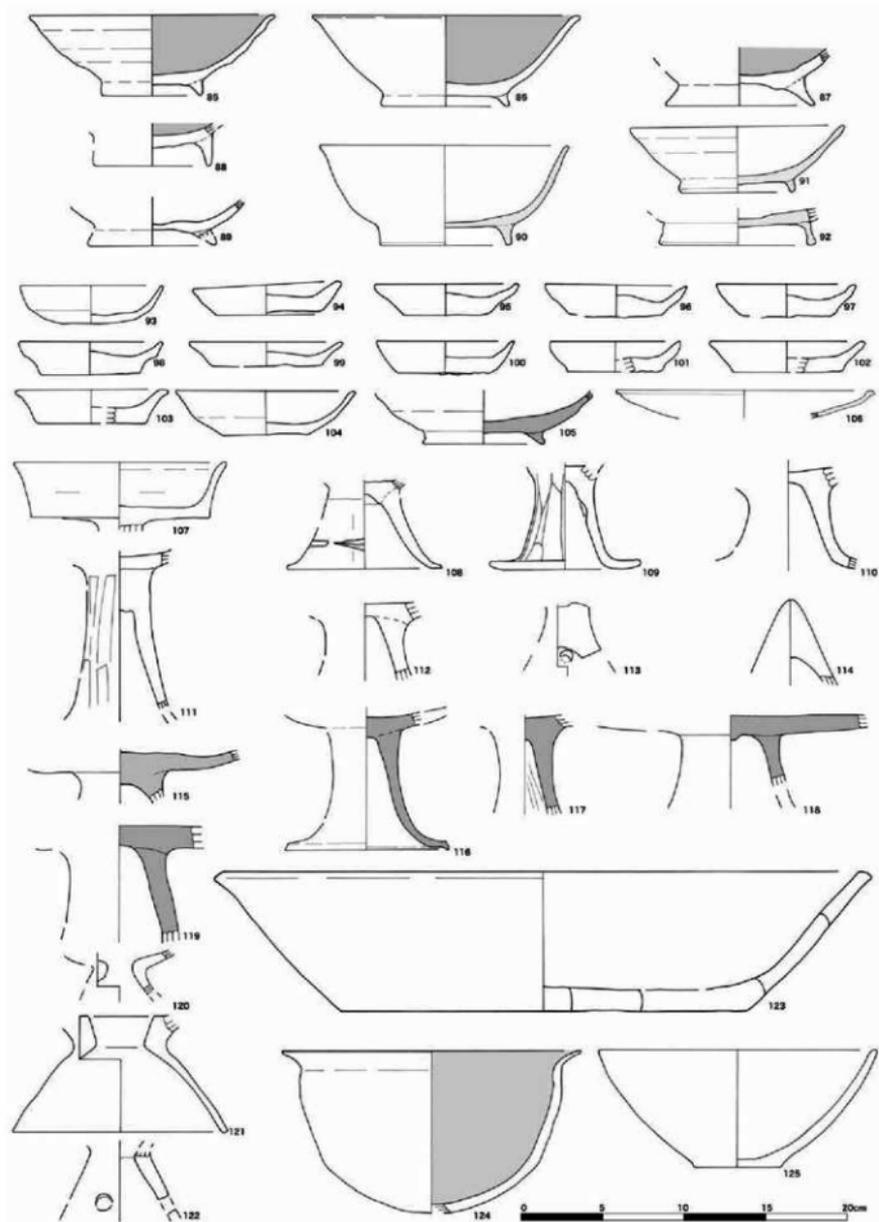
3 出土遺物



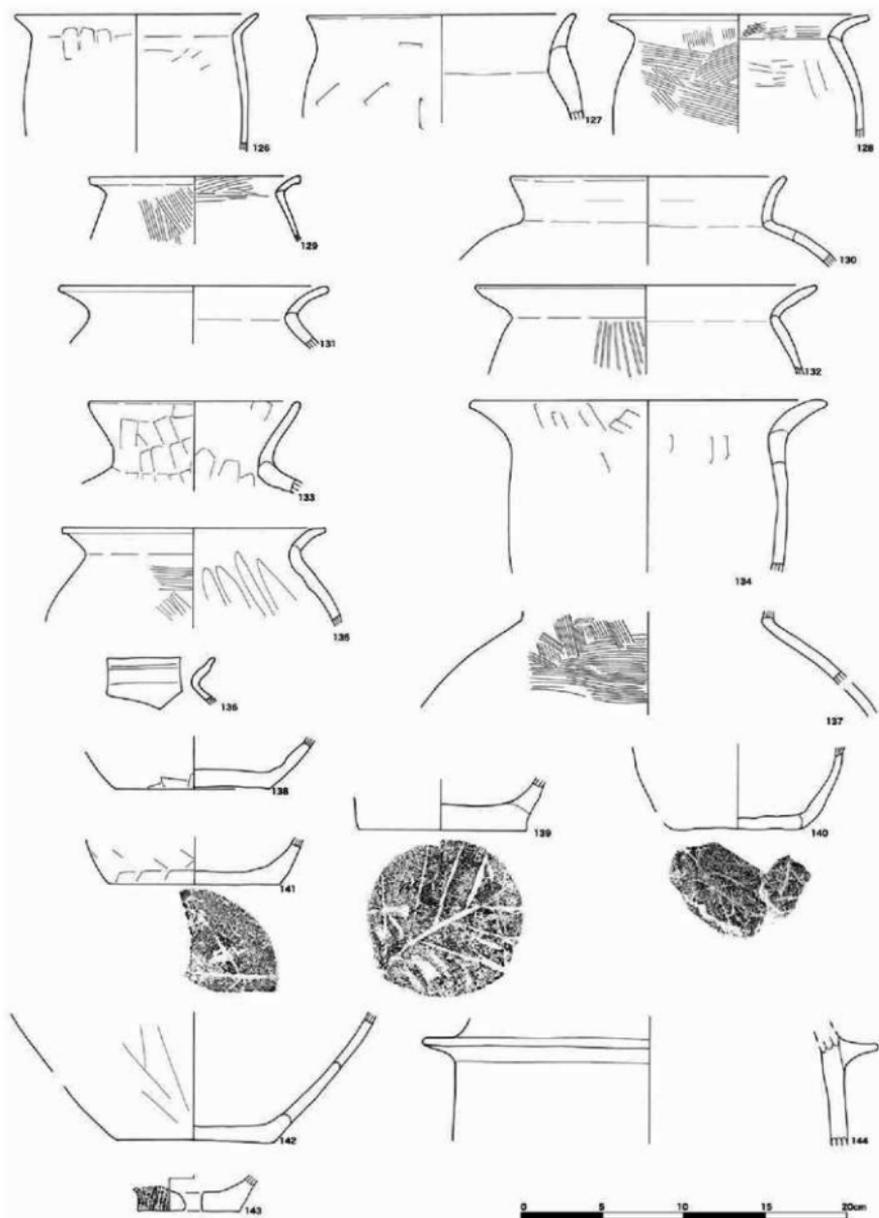
第52図 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物実測図(1)



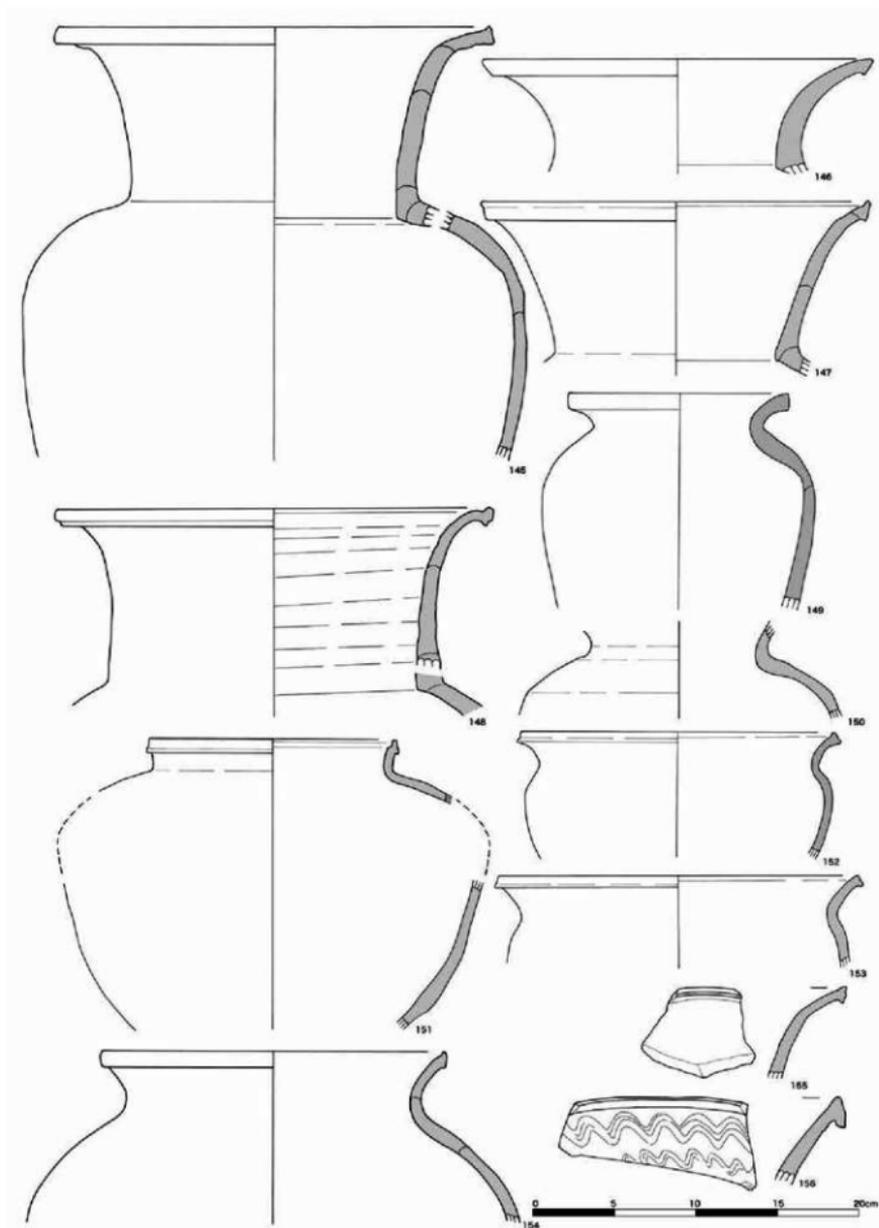
第 5 3 图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物実測図(2)



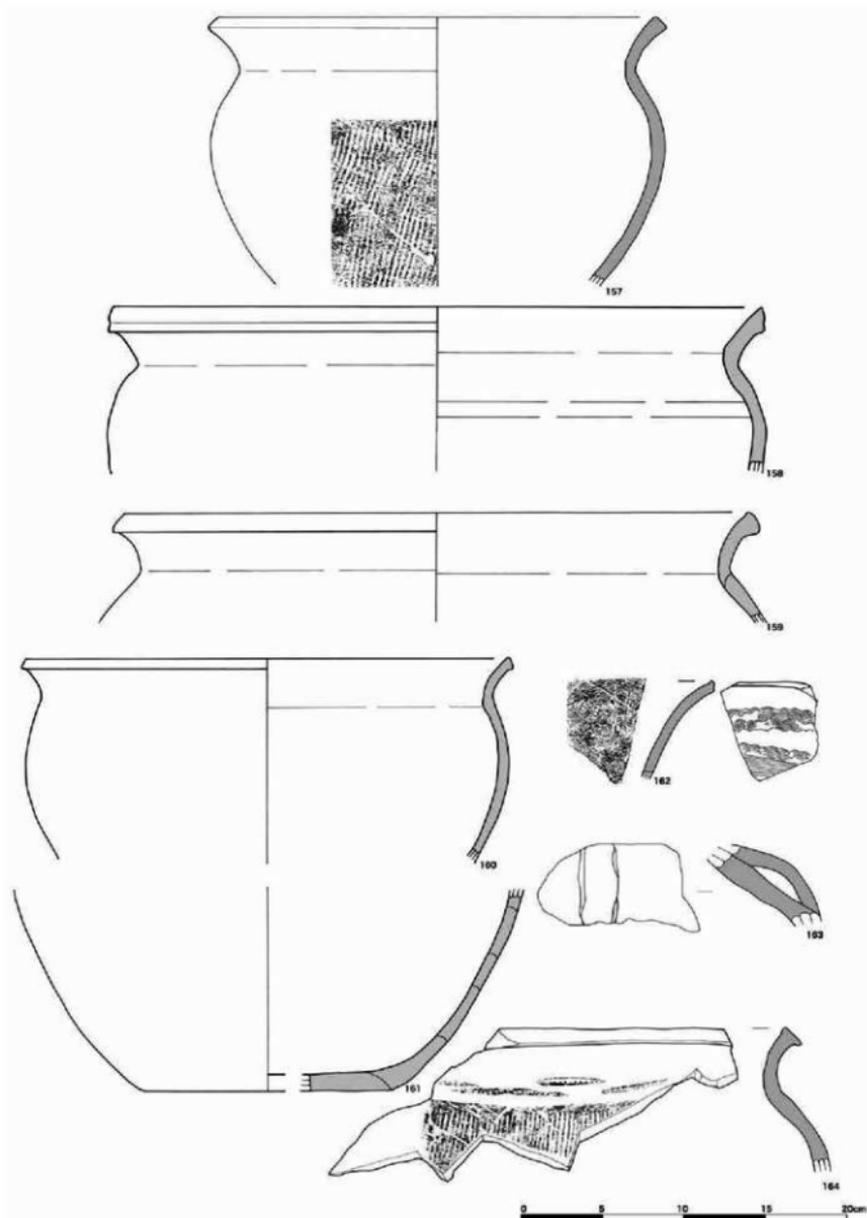
第54图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土遺物実測图(3)



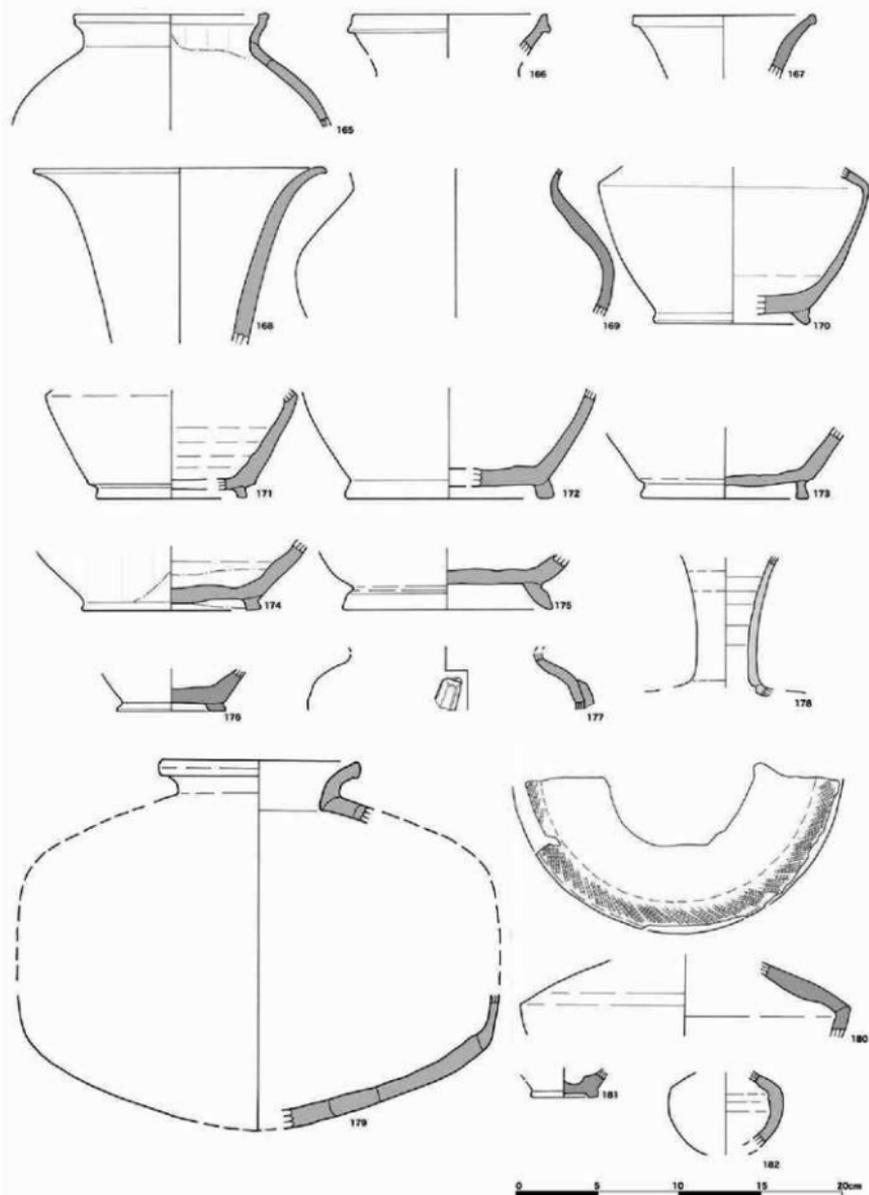
第55圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土遺物実測圖(4)



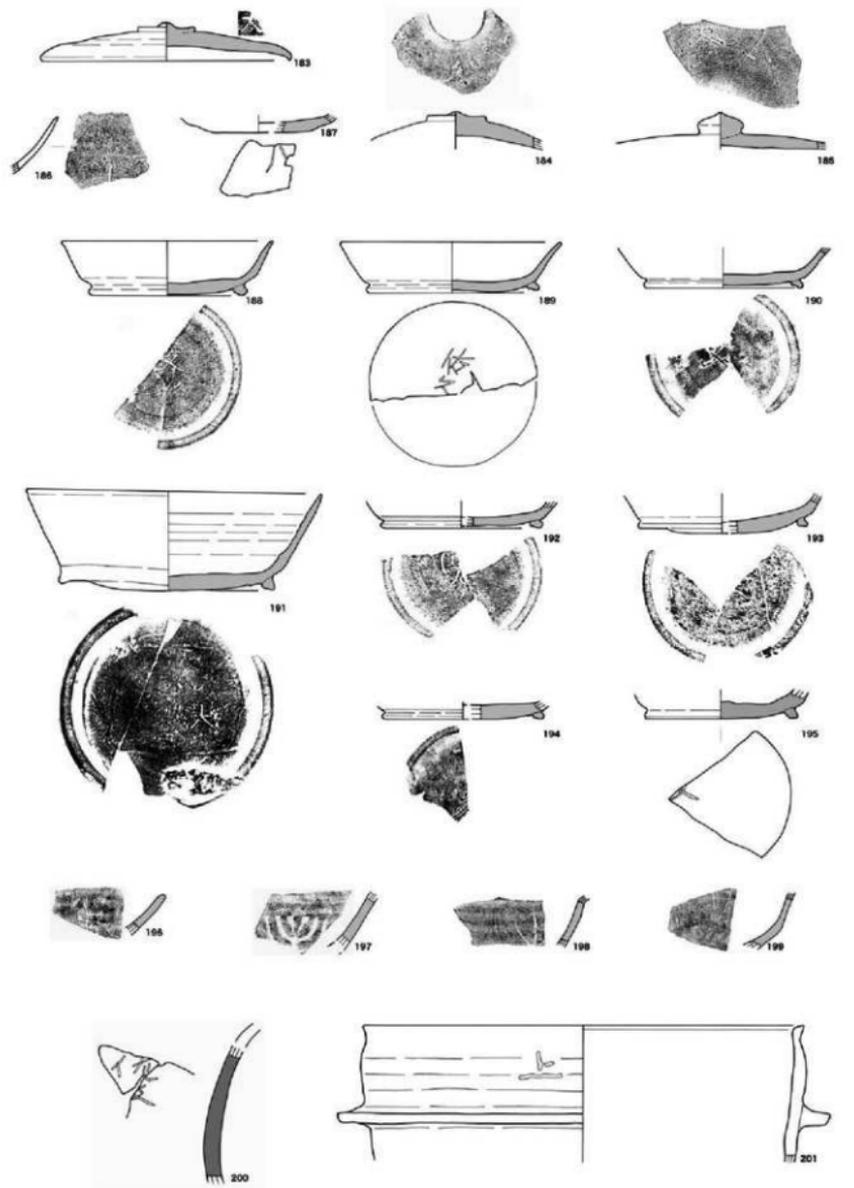
第56图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物実測図(5)



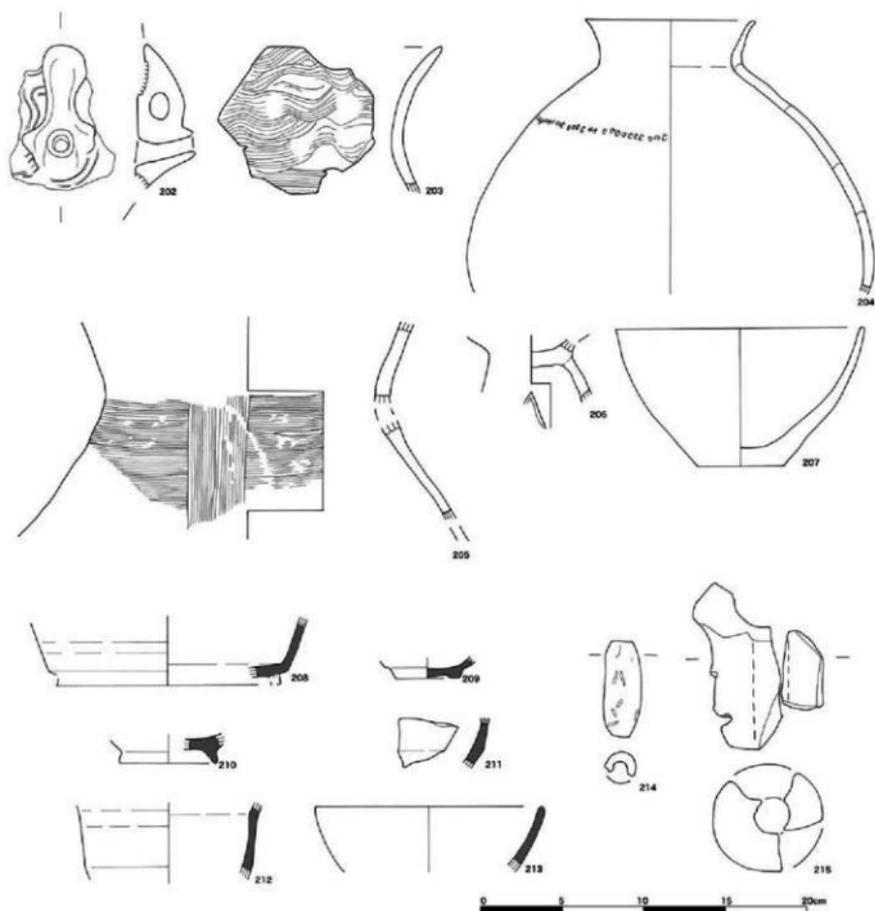
第57圖 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物実測圖(6)



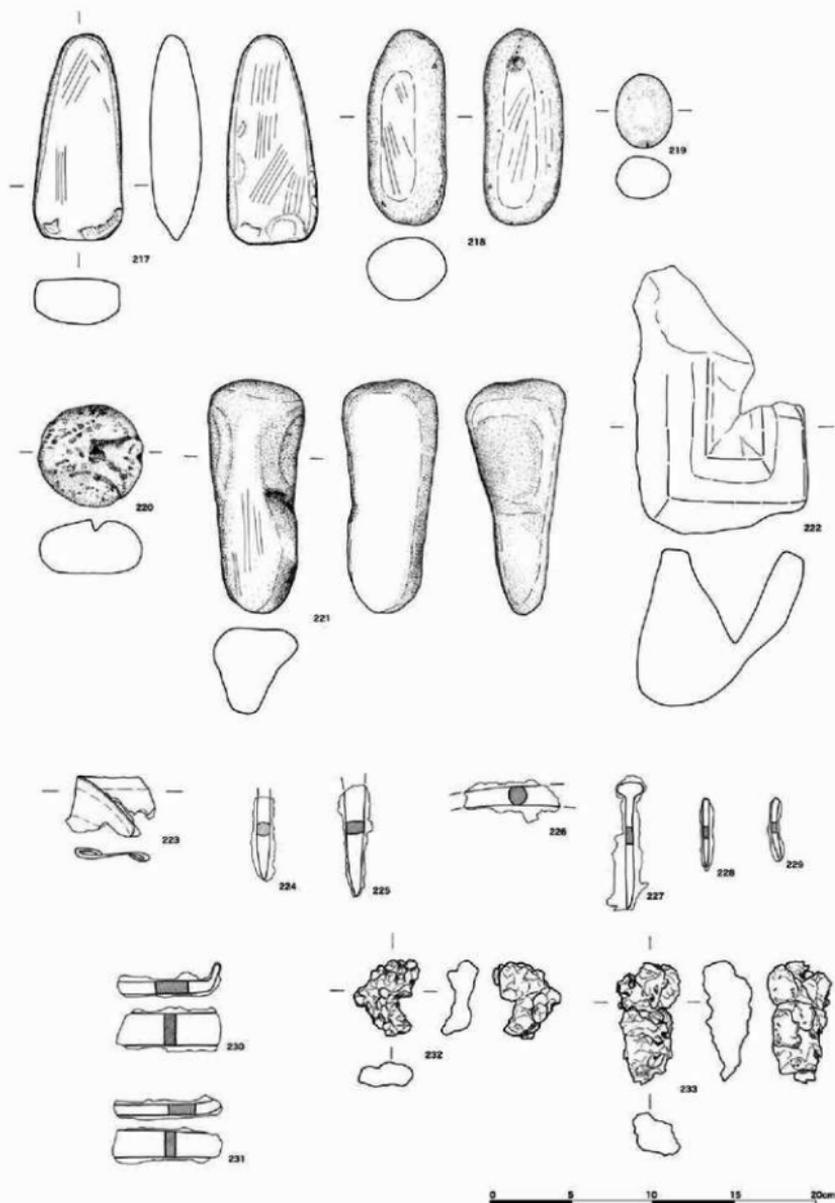
第58圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土遺物実測圖(7)



第59圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土遺物実測圖(S)



第60图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物実測図(9)



第61圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土遺物実測圖(10)

図番	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	用途	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
52-01	G	H04F02-II	土師	蓋	3.4	3.1	20.0	抓み部完存、天井部1/6	粗砂粒を多く含む	良好	10YR7/3にぶい橙	黒	ボタン状の抓み部から張りのある天井部を経てごく浅い段を有する裾部に開く	(抓み部)撫で(天井部)轆轤による撫で?(裾部)横位の撫で	出磨き 黒色処理	
52-02	G	H04F02-II	土師	蓋	3.3	2.8	-	抓み部、天井部上段完存	石莖・雲母粒の粗砂粒を含む	良好	7.5YR6/3にぶい橙	7.5YR6/3にぶい橙	ボタン状の抓み部から張りのある天井部が開く	(抓み部)撫で(天井部)磨削り	精緻な出磨き	
52-03	G	H04101-II	土師	蓋	2.2	1.9	-	抓み部完存	粗砂粒を多く含む	良好	10YR4/6褐	10YR4/6褐	扁平な擬宝珠状の抓み部	?	?	器面が著しく荒れる
52-04	G	H03F02	土師	蓋	5.8	2.7	-	抓み部ほぼ完存	石莖ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	中心部は大きく窪み、ごく小さな口を穿つ	撫で	撫で	
52-05	G	H04F02-II	須恵	蓋	2.8	3.5	19.5	抓み部完存、天井部1/3	白色の礫・粗砂粒を含む	良好	2.5Y6/1黄灰	5Y6/1灰	擬宝珠状の抓み部から張りのない天井部を経て緩やかに直立する裾部に至る	(抓み部・天井部下段)轆轤による撫で(天井部上段)轆轤による段削りの後轆轤による段削り	轆轤による撫で	
52-06	G	H0402-II	須恵	蓋	3.0	4.0	16.2	抓み部完存、天井部1/4	白色粗砂粒を含む	良好	N4/ 灰	N5/ 灰	ボタン状の抓み部から張りのある天井部を経て、僅かに内積する裾部に至る	(抓み部・天井部下段)轆轤による撫で(天井部上段)轆轤による段削り	轆轤による撫で	
52-07	G	G0408-II	須恵	蓋	2.8	2.4	13.8	抓み部僅か、天井部1/3	粗砂粒を含む	良好	5Y5/1灰～4/1灰	5Y5/1灰～4/1灰	張りのある天井部から短く直立する裾部に至る	(天井部上段)轆轤による段削り(天井部下段)轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-08	G	H0404-SB陶土	須恵	蓋	3.2	2.8	17.8	抓み部完存、天井部上段、天井部下段1/2	0.3の白色礫、粗砂粒を含む	良好	10YR5/1灰～4/1灰	10YR5/1灰	ボタン状の抓み部から張りのある天井部を経て、短く直立する裾部に至る	(抓み部・天井部下段)轆轤による撫で(天井部上段)轆轤による段削り	轆轤による撫で	
52-09	G	G0408-II	須恵	蓋	3.5	4.1	21.4	抓み部完存、天井部上段1/4、天井部下段1/20	粗砂粒を多く含む	酸化変褐色	7.5YR5/2灰褐	5YR5/4にぶい赤褐～7.5YR5/2灰褐	ボタン状の抓み部から張りのある天井部を経て、短く直立する裾部に至る	(抓み部・天井部下段)轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-10	G	G0408-I	須恵	蓋	3.2	2.6	14.0	抓み部完存、天井部上段1/4、天井部下段僅か	細砂粒を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	中心部の突った抓み部から張りのある天井部を経て、短く直立する裾部に至る	(抓み部・天井部下段)轆轤による撫で(天井部上段)轆轤による段削り	轆轤による撫で	
52-11	G	G0408	須恵	蓋	3.5	2.2	18.6	抓み～天井部上段完存、天井部下段2/3	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/2灰褐	5YR5/3にぶい灰褐	扁平な抓み部から張りのない天井部が広がりを、裾部は短く直曲する	(抓み部、裾部)横位の撫で(天井部上段)轆轤による段削り(天井部下段)轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-12	G	G0A09	須恵	蓋	3.6	3.3	17.2	抓み部完存、天井部上段1/3、天井部下段1/8	粗砂粒を含む	酸化変褐色	10YR7/2にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	扁平な擬宝珠状を呈する抓み部から張りのある天井部が広がりを、裾部を短く直曲させる裾部に至る	(抓み部、裾部)横位の撫で(天井部上段)轆轤による段削り(天井部下段)轆轤による撫で	轆轤による撫で	石莖下磨
52-13	G	H03G14	須恵	蓋	2.7	2.3	15.6	抓み部ほぼ完存、天井部上段1/2、天井部下段1/3	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	N5/ 灰	7.5YR5/1褐灰	扁平な抓み部から張りのない天井部が広がりを、裾部を短く折る	(抓み部、裾部)横位の撫で(天井部上段)轆轤による段削り(天井部下段)轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-14	G	H03115	須恵	蓋	2.5	2.5	14.2	抓み部から天井部上段完存、天井部下段3/4	石莖粗砂粒を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	ボタン状の抓み部から張りのある天井部を経て、緩やかに直立する裾部に至る	(抓み部)轆轤による撫で(天井部)轆轤による段削り、緩やかに直立する裾部に至る	轆轤による撫での後、本口状工具による調整	
52-15	G	H03G14職下	須恵	蓋	3.2	2.3	-	抓み～天井部上段完存	粗砂粒を含む	良好	N6/ 灰	7.5YR4/1褐灰	抓み部は扁平な擬宝珠状を呈する	(抓み部)撫で(天井部上段)轆轤による段削り	轆轤による撫で	

第2表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土土物観察表(1)

図番	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
52-16	G	B02g13	須恵	蓋	3.4	2.7	-	抓み部完存、天井部下位1/2	粗砂粒を含む	良好	5/16/2灰オリーブ～3/1オリーブ黒	10/4/1灰	擬宝珠形の抓み	不明	轆轤による撫で	外面に灰オリーブ色のがらがる
52-17	G	G04-09-II	須恵	蓋	3.0	1.8	-	抓み部完存、天井部下位1/2	粗砂粒を多く含む	良好	10/15/1灰	N5/ 灰	扁平な擬宝珠状の抓みの付く天井部中央は窪む	(抓み部・天井部下位) 轆轤による撫で(天井部上位) 轆轤による磨削り	轆轤による撫で	
52-18	G	G04-09-II	須恵	蓋	2.8	3.3	-	抓み部完存、天井部1/2	白色粗砂粒を含む	良好	7.5/15/1灰	7.5/16/1灰	丸味のある抓み部と張りのある天井部	(抓み部) 撫で(天井部上位) 轆轤による磨削り(天井部下位) 轆轤による撫で	轆轤による撫で	20と類似
52-19	G	B04F02	須恵	蓋	2.8	2.2	-	抓み部完存、天井部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	ボタン状の抓み部から張りのない天井部に至る	(抓み部・天井部下位) 轆轤による撫で(天井部上位) 轆轤による磨削りの板蓋撫で	轆轤による撫で	
52-20	G	B04a08	須恵	蓋	2.8	3.3	-	抓み部完存、天井部上位1/2	白色粗砂粒を含む	酸化変焼成	10/15/2灰黄褐色	10/15/3にぶい黄褐色	丸みのある抓み部と張りのある天井部	(抓み部) 撫で(天井部上位) 轆轤による磨削り(天井部下位) 轆轤による撫で	轆轤による撫で	18と類似
52-21	G	B03F14器込み	須恵	蓋	2.8	3.0	-	抓み部ほぼ完存、天井部上位1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	7.5/14/2灰褐色	7.5/14/1灰	丸味がかった擬宝珠状の抓み部	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-22	G	G04b11-I	須恵	蓋	1.8	1.8	-	抓み部完存、天井部一部	細砂粒を含む	良好	10/14/2オリーブ灰	N7/ 灰白	抓み部は擬宝珠形を呈する	(抓み部) 撫で(天井部) 不明	轆轤による撫で	外面に緑を施す。
52-23	G	B03b14-II	須恵	蓋	3.7	3.1	-	抓み部ほぼ完存、天井部1/10	白色粗砂粒と細砂粒を含む	良好	7.5/15/2オリーブ灰～2.5/17/1灰白	2.5/17/1灰白	抓み部はボタン状を呈する	(抓み部) 撫で(天井部) 轆轤による磨削り	轆轤による撫で	外面に緑を施す。
52-24	G	B04b03-SB陶土	須恵	蓋	-	3.3	23.8	天井部1/5	粗砂粒を多く含む	良好	10/15/ 灰	10/15/ 灰	張りのある天井部から裾向外縁して幅広い裾部を作る	(天井部上位) 轆轤による磨削り(天井部下位) 轆轤による撫で	轆轤による撫で	
52-25	G	G04-09-II	須恵	蓋	-	3.4	19.4	天井部1/5	粗砂粒を多く含む	酸化変焼成	2.5/15/3黄褐色	2.5/16/2灰黄	器身の厚い天井部上位から下位に向かって器曲しながら器厚が著しく薄くなり、短く直立する裾部に至る			
52-26	G	B04b01-II	土師	坏	12.4	3.7	7.4	口縁4/3、体～底部完存	粗砂粒を含む	良好	5/17/6褐色	黒	平底から体部は内湾して立ち上がる	(口縁～体部) 横位の撫で(底部) 手持ち磨調整	不定方向の磨削き 黒色処理	
52-27	G	B04g02-I	土師	坏	12.2	4.2	6.0	3/4	石英粗砂粒を含む	良好	5/17/4にぶい褐色	7.5/17/4にぶい褐色～黒	小瓶りの平底から体部は緩く内湾して開く	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 磨調整	撫でか? 一部吸灰	器面が荒れる
52-28	G	B04b03-II	土師	坏	14.0	4.6	丸底	1/3	0.3の糠と粗砂粒を多く含む	良好	5/18/6褐色	黒	丸底から体部は内湾して直立気味の口縁に立ち上がる	(口縁～体部) 横位の撫で(底部) 磨削り	撫で 黒色処理	
52-29	G	B04112-II	土師	坏	12.8	3.8	-	口縁1/3、体部1/4	粗砂粒を多く含む	良好	7.5/18/6褐色	黒	体部は大きく内湾して直立する口縁に立ち上がる	(口縁) 横位の撫で(体部) 磨削り	磨削き 黒色処理	
52-30	G	F04a06	土師	坏	15.7	4.8	7.0	口縁～体部1/2、底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	7.5/17/6褐色	黒	轆轤成形 小瓶りの平底から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部中心) 轆轤による撫で(体部下位) 横位の磨削り(底部) 磨調整	轆轤による撫でか 黒色処理	器面が荒れる

第3表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(2)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	高さ	底径	残存	胎土	硬度	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
B2-31	G	F04n07	土師	杯	16.2	5.6	7.2	口縁～体部中位1/4,体部下位～底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4にぶい	黒	轆轤成形 小振りな平底から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部中心)轆轤による撫で(体部下位)横絞の彫削り(底部)量調整	量磨き? 黒色処理	器内面が見れる
B2-32	G	F04107	土師	杯	13.5	3.9	6.0	口縁～体部1/3,底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4にぶい	黒	轆轤成形 平底から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部上位)轆轤による撫で(体部下位)轆轤による彫削り(底部)回転糸切りの後量調整	量磨き 黒色処理	
B2-33	G	F04108	土師	杯	14.0	4.0	4.6	口縁～体部1/4,底部1/2	石英ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4にぶい	黒	轆轤成形 小振りの平底から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切り	(口縁部)横位の量磨き(体部)斜位の同間隔の量磨き(底部)不足方向の量磨き 黒色処理	
B2-34	G	H03K14-II	土師	杯	12.8	4.9	丸底	口縁部1/6,体～底部1/8	粗砂粒を含む	良好	10YR7/3にぶい,黄緑	黒	丸底から体部は内湾して直立する口縁部に至る	(口縁部)横位の撫で(体～底部)量撫で	精緻な量磨き 黒色処理	
B2-35	G	H04103-I	土師	杯	15.0	3.5	7.4	口縁1/10,体部1/6,底部1/2	雲母・粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4にぶい	7.5YR6/4にぶい	僅かな上7底から、体部は緩く内湾して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後量調整	轆轤による撫で	
B2-36	G	G04n08	土師	杯	14.8	4.4	7.0	口縁部1/3,体部1/2,底部ほぼ完存	粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい	7.5YR7/4にぶい	轆轤成形 丸底気味の底部から体部は外傾屈曲して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)量調整	轆轤による撫で	
B2-37	G	G04n08	土師	杯	13.2	4.2	7.0	1/2	粗砂粒を多く含む	良好	10YR7/3にぶい,黄緑	10YR7/3にぶい,黄緑	轆轤成形 丸底気味の底部から体部は外傾屈曲して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)量調整	轆轤による撫で	
B2-38	G	G04N07集石	土師	杯	14.0	4.4	7.0	口縁～体部1/3,底部1/2	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR7/3にぶい	10YR7/3にぶい,黄緑	轆轤成形 丸底気味の底部から体部は外傾屈曲して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)量調整	轆轤による撫で	
B2-39	G	F04n06	土師	杯	13.4	3.6	6.2	口縁～体部1/2,底部3/4	白色粗砂粒を含む	良好	5YR6/9撫で,7.5YR7/2にぶい,黄緑	7.5YR6/4にぶい	轆轤成形 平底から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切り	轆轤による撫で	内面に僅が付着する。
B2-40	G	H04101-II	須恵	杯	14.4	4.6	6.6	口縁部5/6,体部7/8,底部完存	0.2の礫,粗砂粒を含む	良好	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	轆轤成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)量調整	轆轤による撫で	
B3-41	G	H04102-II	須恵	杯	14.5	3.6	8.5	口縁～体部1/2,底部完存	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5Y6/1灰	2.5Y6/1黄灰	轆轤成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)量調整	轆轤による撫で	
B3-42	G	H03115-II	須恵	杯	14.3	4.5	7.6	2/3	粗砂粒を含む	良好	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	轆轤成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後量調整	轆轤による撫で	
B3-43	G	H04g01-II	須恵	杯	14.8	3.6	8.0	1/2	0.2の礫,粗砂粒を僅かに含む	良好	7.5Y6/1灰	10Y6/1灰	轆轤成形 平底から体部は横を有して外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後量調整	轆轤による撫で	
B3-44	G	H04n07-I	須恵	杯	14.4	4.0	7.0	口縁～体部1/3,底部1/2	0.2の礫,粗砂粒を僅かに含む	良好	10Y6/1灰	10Y6/1灰	轆轤成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後量調整	轆轤による撫で	
B3-45	G	H04n01-II	須恵	杯	13.4	3.5	7.0	1/2	白色粗砂粒を多く含む	良好	10YR5/1黄灰	2.5YR5/1黄灰	轆轤成形 平底から体部は内面に浅い横を有して外傾して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後量調整	轆轤による撫で	

第4表 史跡信濃園分寺跡僧寺北東城出土遺物観察表(3)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
53-46	G	B04f01-II	瓶息	杯	13.6	3.5	7.0	口縁部1/4, 底部1/2, 底部3/4	粗砂粒を含む	良好	10/6/1灰	10/6/1灰	輪轆成形 平底から体部は僅かに外反して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)木口状工具による撫で	
53-47	G	B04f01-II	瓶息	杯	13.9	3.1	6.6	口縁へ体部1/4, 底部完存	白色粗砂粒を含む	良好	7.5/6/1灰	7.5/6/1灰	輪轆成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	
53-48	G	F04a06	瓶息	杯	13.5	3.7	5.8	口縁へ体部1/4, 底部3/4	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5/7/1灰白	2.5/7/1灰白	輪轆成形 上げ底から体部は外面に大きな稜を有して立ち上がる	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切り	輪轆による撫で	内面面に火傷
53-49	G	F04a06	瓶息	杯	13.0	3.8	5.9	口縁部1/5, 体部1/4, 底部完存	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5/7/1灰白	2.5/7/1灰白	輪轆成形 上げ底から体部は外面に大きな稜を有して立ち上がる	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切り	輪轆による撫で	内面面に火傷
53-50	G	B03f01	瓶息	杯	13.0	3.3	7.0	1/3	石灰ほかの粗砂粒を含む	良好	10/5/1灰	10/5/1灰	輪轆成形 平底から体部外面面に稜を有して立ち上がる	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切り	輪轆による撫で	内面面に火傷
53-51	Z		瓶息	杯	13.8	4.9	9.0	口江完存(外面一部剥離)	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	5/6/2灰オリーブ	2.5/6/2灰黄	輪轆成形 丸底気味の底部から体部は直立気味に立ち上がる	(口縁部)輪轆による撫で(体部)輪轆による木口状工具による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	
53-52	G	103c03	瓶息	杯	12.0	4.0	丸底	口縁へ体部1/4, 底部2/3	粗砂粒を含む	良好	N4/ 灰	N5/ 灰	輪轆成形 丸底から体部は外傾して立ち上がる	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	
53-53	G	F04a06	瓶息	杯	13.8	3.6	5.6	口縁部1/12, 体部1/8, 底部完存	0.3の礫, 粗砂粒を含む	良好	5/6/1灰	5/6/1灰～10/8/4/1焼灰	輪轆成形 上げ底から体部は僅かに内湾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切り	輪轆による撫で	
53-54	G	B04a08-II	瓶息	杯	14.0	4.0	6.4	口縁へ体部1/5, 底部1/3	0.3の礫, 粗砂粒を僅かに含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	輪轆成形 平底から浅い稜を外面に有する体部は外傾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	
53-55	G	B04c01-II	瓶息	杯	15.0	3.7	8.0	口縁へ体部1/6, 底部1/4	0.3の礫, 粗砂粒を僅かに含む	良好	5/6/1灰～7/1灰	5/6/1灰～7/1灰	輪轆成形 平底から浅い稜を有する体部は外傾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)段調整	輪轆による撫で	
53-56	G	B04g02-I	瓶息	杯	16.0	4.0	10.8	口縁へ体部1/8, 底部2/3	白色粗砂粒を含む	良好	7.5/6/1灰	7.5/6/1灰	輪轆成形 平底から体部は外傾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)段調整	輪轆による撫で	
53-57	G	B04f02-II	瓶息	杯	12.6	3.0	8.0	口縁へ体部1/4, 底部僅か	粗砂粒を僅かに含む	良好	5/8/5/1灰	5/8/5/1灰	輪轆成形 平底から体部は内外面に浅い稜を有して外傾して開く	(口縁へ体部)輪轆による撫で(底部)段調整	輪轆による撫で	
53-58	G	B03f14-II	瓶息	杯	-	2.3	6.8	底部3/4	0.2～0.3の礫, 粗砂粒を含む	良好	5/8/4/1焼灰～6/4に5%程度	5/8/4/1焼灰	輪轆成形 丸底気味の底部から内外面に稜を有して体部が立ち上がる	(体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	外面一部酸化変焼成となる
53-59	G	B03h15-II	瓶息	杯	-	2.8	丸底	底部完存	粗砂粒を含む	良好	10/8/4/1焼灰	10/8/4/1焼灰	輪轆成形 丸底から外面に稜を有して体部が立ち上がる	(体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	
53-60	G	G04g06-I	瓶息	杯	-	2.3	7.5	底部2/3	0.3の礫, 粗砂粒を僅かに含む	やや不良	5/6/1灰	5/6/1灰	輪轆成形 平底から内面に稜を有する体部が直立気味に立ち上がる	(体部)輪轆による撫で(底部)回転削切りの後段調整	輪轆による撫で	焼き過ぎの少ない器質となっている。

第5表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(4)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
53-61	G	G04a06	須恵	平	-	3.3	7.0	体部底下位へ 底部完存	粗砂粒を含む	良好	5/6/1灰	N5/1灰	轆轤成形	(口縁)轆轤による撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-62	G	F04108	須恵	平	9.8	3.1	6.8	1/3	0.2の縦、粗砂粒を含む	良好	N4/1灰	N5/1灰	轆轤成形 平底から体部は屈折した後直立的に立ち上がる	(口縁へ体部)轆轤による撫で(底部)回転削切り	轆轤による撫で	
53-63	G	G04b03-II	須恵	平	14.3	4.2	8.8	口縁部3/4、体部 ～底部完存	粗砂粒を僅かに含む	酸化変焼成	5/84/3に赤い赤褐色	5/86/4に赤い橙	轆轤成形 付け高台の底部から内面に稜を有する体部が屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で	轆轤による撫で	
53-64	G	H04f02-II	須恵	平	13.2	3.8	8.5	口縁～体部 5/6、底部完存	粗砂粒を含む	酸化変焼成	5/84/3に赤い赤褐色	2.5/85/6明赤褐色	轆轤成形 付け高台の底部から体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～底部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で	轆轤による撫で	
53-65	G	H04f01-落込	須恵	平	15.4	3.7	9.0	口縁～体部 1/5、底部完存	粗砂粒を僅かに含む	良好	N6/1灰	N4/1灰	轆轤成形 付け高台は断面台形状を呈して内側で接地する 底部から体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-66	G	H04f03-II	須恵	平	15.4	3.9	11.3	口縁部1/20、体部 1/10、底部 1/2	白色粗砂粒を含む	良好	N5/1灰	N6/1灰	轆轤成形 付け高台から体部は屈曲外縁して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-67	G	H04f03-p01	須恵	平	12.7	2.7	10.3	1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	N5/1灰	N5/1灰	轆轤成形 低い付け高台は爪先立ちで接地し、底部も接地する 体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-68	G	H03f15-II	須恵	平	13.8	3.5	10.1	口縁～体部 1/5、底部1/2	粗砂粒を含む	良好	N6/1灰	N6/1灰	轆轤成形 低い付け高台は外側さし、底部も接地する 体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-69	G	H03f15-II	須恵	平	12.2	3.2	7.8	口縁～体部 1/6、底部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	N6/1灰	N6/1灰	轆轤成形 付け高台から体部は屈曲外反して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-70	G	H04f02-II	須恵	平	12.6	3.0	8.8	口縁～体部 1/9、底部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	N6/1～5/1灰	7.5/86/1灰	轆轤成形 付け高台から体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-71	G	I03c02	須恵	平	14.8	3.4	11.8	口縁～体部 1/9、底部2/3	0.3の縦、白色ほのかの粗砂粒を含む	良好	5/5/1灰	5/6/1灰	轆轤成形 付け高台 高台はフーズ状を呈し、体部は外縁する	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切り	轆轤による撫で	
53-72	G	G04f07	須恵	平	16.0	4.0	11.0	口縁～体部 1/4、底部1/3	白色ほのかの粗砂粒を含む	良好	5/5/1灰	5/5/1灰	轆轤成形 付け高台 内側で接地する高台付き底部から体部は僅かに外反して開く	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切り	轆轤による撫で	
53-73	G	G04a07	須恵	平	14.8	3.4	11.2	1/3	0.2の縦、粗砂粒を含む	良好	7.5/7/1灰白～6/1灰	7.5/7/1灰白	轆轤成形 付け高台 体部は僅かに内寄する	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切り	轆轤による撫で	
53-74	G	H03h15-II	須恵	平	-	2.6	8.4	体部底下位1/6、 底部3/4	粗砂粒を多く含む	良好	5/8/1灰	5/8/1灰	轆轤成形 付け高台から体部は屈曲外縁して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	
53-75	G	H04a01-II	須恵	平	-	1.7	9.4	底部ほぼ完存	粗砂粒を含む	良好	10/8/1灰	10/8/1灰	轆轤成形 付け高台	(高台部)横段の撫で(底部)回転削切りの後段調整	轆轤による撫で	

第6表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(5)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	直径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
53-76	G	H03g15-II	須恵	杯	-	2.3	7.0	体部下位～底部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	轆轤成形 付け高台は外側で接合し、体部は屈曲外縁して立ち上がる	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
53-77	G	H03g14-II	須恵	杯	-	1.6	11.0	底部外周1/2	粗砂粒を含む	良好	7.5Y5/1灰	7.5Y6/1灰	轆轤成形 付け高台は外側で接合する	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)良調整	轆轤による撫で	
53-78	G	H04g04-II	須恵	杯	-	0.9	11.0	底部9/10	0.2の白色礫、白色粗砂粒を含む	良好	10Y5/4に、赤い黄褐色～5/1粘灰	7.5Y5/1灰	轆轤成形 付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
53-79	G	H04a01-II	須恵	杯	-	2.7	11.0	底部1/4	白色粗砂粒を含む	良好	2.5Y5/2暗灰黄	10Y5/1灰	轆轤成形 低い付け高台は内段の爪立ちで接合し、底部も接合する。体部は屈曲外縁して立ち上がる	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
53-80	G	H04f03-I	須恵	杯	-	2.6	11.0	体部僅か、底部1/5	白色粗砂粒を含む	良好	10Y6/1灰	10Y6/1灰	轆轤成形 低い付け高台で底部も接合する。体部は屈曲外縁して立ち上がる	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
53-81	G	H04f02-II	須恵	杯	-	1.1	9.0	底部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	10Y6/1灰	10Y6/1灰	轆轤成形 外周きの付け高台から体部は屈曲外縁して立ち上がる	(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫での後木口状工具による撫で	
53-82	G	H03f03	須恵	杯	-	1.8	11.0	底部完存	0.3の礫、粗砂粒を含む	良好	7.5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	付け高台	(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
53-83	G	H03f01	須恵	杯	-	2.3	12.0	底部1/4	白色ほのかの粗砂粒を含む	良好	N4/ 灰	N4/ 灰	轆轤成形 付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	底部外面に放射線状の痕跡
53-84	G	G04g03-II	須恵	杯	11.8	4.7	-	口縁部1/4	白色粗砂粒を含む	良好	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	轆轤成形	轆轤による撫で	轆轤による撫で	内外面に僅かに自然に凹凸がある
54-85	G	H02b12	土師	碗	14.7	5.1	6.0	口縁～体部3/5、底部完存	石英・雲母ほのかの粗砂粒を含む	良好	5Y8/6橙	黒	轆轤成形 付け高台 体部は外面に接合して僅かに内湾して、短く外反する口縁に至る	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫での後横位の磨きか、黒色処理	
54-86	G	F04a08	土師	碗	16.4	5.6	7.6	口縁～体部1/3、底部完存	石英ほのかの粗砂粒を含む	良好	7.5Y8/6橙	黒	轆轤成形 付け高台 体部は僅かに内湾して、短く外反する口縁に至る	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	磨きか 黒色処理	
54-87	G	F04a08	土師	碗	-	3.5	9.0	体部最下位1/2、高台部3/4、底部完存	雲母ほのかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい	黒	高く外反して張り出す付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)不明	不明	器面が見れる
54-88	G	F04a06	土師	碗	-	2.6	7.3	高台部1/2、底部完存	石英・雲母ほのかの粗砂粒を含む	良好	2.5Y8/6明赤	黒	直立する付け高台	(高台部)轆轤による撫で(底部)回転糸切りの後良調整	磨きか 黒色処理	
54-89	G	H02f12	土師	碗	-	2.6	-	体部1/3、底部完存	粗砂粒を含む	良好	7.5Y8/6橙	5Y8/6橙	轆轤成形 付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転糸切りの後良調整	轆轤による撫で	
54-90	G	H02f13	民陶器	碗	15.2	6.2	7.7	口縁部3/4、体部7/8、底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	2.5Y7/1灰白	2.5Y6/1黄灰	轆轤成形 付け高台 身の長い高台から、体部はごく僅かに内湾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する	(口縁～体部・底部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で	轆轤による撫で	器形は僅かに異なる

第7表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土遺物観察表(6)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
54-91	G	H03F01	灰陶器	甕	13.0	4.1	6.8	口縁～体部1/8, 底部1/4	精良	良好	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	轆轤成形 付け高台。0部の高台から体部は僅かに内湾して立ち上がる	(口縁～体部) 轆轤による撫での撫で(体～底部) 横位の撫で(底部) 撫で	(口縁部) 胎状工具による横位の撫で(体～底部) 轆轤による撫で	内面口縁部は、胎着きに似た調整をしている。
54-92	G	103-Z	灰陶器	甕	-	2.3	3.0	底部1/2	精良	良好	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	轆轤成形 付け高台	(体～高台部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切りの後撫で	轆轤による撫で	
54-93	G	H0404-SB陶土	土師	皿	8.6	2.4	丸底	ほぼ完全	石灰・雲母の粗砂粒を含む	良好	5YR7/4にぶい赤褐	5YR7/4にぶい赤褐	丸底から体部外面に浅い稜を有して外傾して開く	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
54-94	G	H02h15	土師	皿	9.3	1.9	6.6	口縁部7/8, 体部～底部完全	雲母ほかの粗砂粒を多く含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	撫で	炭化物が付着する。底部に粘土塊が残っている。
54-95	G	H02h15	土師	皿	8.8	1.9	5.2	口縁～体部2/3, 底部完全	粗砂粒を含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	撫で	
54-96	G	H02h15	土師	皿	8.6	2.0	5.7	口縁～体部2/3, 底部完全	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 撫で	
54-97	G	H02h15	土師	皿	8.6	2.0	5.8	口縁～体部1/2, 底部2/3	雲母・白色粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	轆轤による撫で	
54-98	G	H02h15	土師	皿	8.6	2.0	6.2	1/2	雲母・白色粗砂粒を含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 撫で	
54-99	G	H02h14	土師	皿	9.4	1.5	6.8	口縁～体部1/6, 底部1/4	石灰ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	撫で	
54-100	G	H02h15	土師	皿	8.5	2.0	4.6	1/3	雲母・白色粗砂粒ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	轆轤による撫で	底部凹凸があり不安定
54-101	G	H02h14	土師	皿	8.1	1.9	5.9	1/3	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐～N3/1暗灰	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り 中心部で切り離しを行う	轆轤による撫で	内面が窪ける
54-102	G	H02h14	土師	皿	9.4	1.9	6.8	1/3	雲母・白色粗砂粒ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR3/4暗褐	5YR4/3にぶい赤褐	轆轤成形	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り	撫で	
54-103	G	H02h14	土師	皿	9.4	2.1	6.8	口縁部1/4, 体部～底部1/6	雲母・白色粗砂粒ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/3にぶい赤褐	轆轤成形 体部は外反する	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り	轆轤による撫で	
54-104	G	H02f12	土師	皿	11.0	3.8	5.0	口縁部3/4, 体部～底部完全	0.3の礫、粗砂粒を含む	良好	5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/3にぶい赤褐	轆轤成形 体部は僅かに内湾する	(口縁～体部) 轆轤による撫で(底部) 回転赤切り	轆轤による撫で	
54-105	G	103c01	灰土器	皿	-	3.3	7.4	体～底部完全	白色粗砂粒を多く含む	良好	10YR4/1明灰	10YR4/1明灰	轆轤成形 付け高台 体部に比べて小振りの高台から体部は内湾して開く	(体部) 轆轤による撫で(高台部) 横位の撫で(底部) 回転赤切り	轆轤による撫で	

第8表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土遺物観察表(7)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
54-106	G	H02F14	瓦 陶器	皿	15.9	1.7	-	口縁部1/6	精良	良好	7.5Y7/1灰白	2.5Y6/1黄灰	輪轆成形	輪轆による撫で	輪轆による撫で	
54-107	G	G04a09	土師	高坏	13.0	4.3	-	坏口縁～体部 1/10, 坏底部 1/3	灰白ほかの粗砂 粒を多く含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	坏底部から体部にL字状に屈曲す る	磨磨き	磨磨き	
54-108	G	G04I09	土師	高坏	-	5.4	9.6	脚部2/3	粗砂粒を僅かに 含む	良好	7.5YR6/4にぶ い橙	7.5YR6/4にぶ い橙		縦位の磨磨きの長横位の沈削	(坏部)磨磨き(脚部)木口加工 具による横位の撫で	
54-109	G	H03F02	土師	高坏	-	6.5	9.2	脚部1/2, 脚部 1/10	粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶ い橙	黒	縦部は大きく折れて開く	(脚部)縦位の長削り(脚部)横 位の撫で	(坏部)磨磨き黒色処理(脚部) 縦位の長削り(脚部)横位の撫 で	
54-110	G	H04F03-I	土師	高坏	-	6.4	-	坏部下位～脚 部中位	0.2の礫、石英 粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶ い橙	(坏部)7.5YRお 4にぶい橙(脚 部)7.5YR7/4に ぶい橙	短めの脚部の縦は大きく開い て、坏底部は大きく広がる	横位の撫で	(坏部)横位の撫で(脚部)横位 の磨磨き	
54-111	G	H04F02-II	土師	高坏	-	10.5	-	脚部上位	0.3の礫、粗砂 粒を含む	良好	7.5YR8/3黄褐 橙	(坏部)黒色(脚 部)黒色		縦位の長削り	(坏部)黒色処理(脚部上位)縦 位の長削り(脚部下位)横位の 磨磨き	
54-112	G	H04a01-II	土師	高坏	-	4.8	-	坏底部～脚上 位	石英ほかの粗砂 粒を含む	良好	5YR6/6橙～ 5YR3/1黄褐	(坏部)黒(脚 部)5YR6/4にぶ い黄橙		横位の撫で	(坏部)輪轆による撫で、黒色処 理(脚部)横位の撫で	
54-113	G	G04a09	土師	高坏	-	3.2	-	脚上位	粗砂粒を多く含 む	良好	7.5YR6/6橙	7.5YR4/3褐	脚部に4つの円形透かし穴を穿つ	縦位の磨磨き	撫で	
54-114	G	H04F01-II	土師	高坏	-	5.3	-	坏部と脚部の 接合部脚側	細砂粒を多く含 む	良好	5YR6/6橙	5YR4/1褐灰	端正な円錐形に仕上げる	撫で	撫で	
54-115	G	H04c06-II	須恵	高坏	-	3.2	-	坏底部～脚部 上位	粗砂粒を多く含 む	良好	NR/ 灰白	NR/ 灰白		(坏部)輪轆による撫で(脚 部)横位の撫で	(坏部)輪轆による撫で(脚 部)撫で	
54-116	G	G04-Z	須恵	高坏	-	8.8	10.9	坏底部～脚上 部中位, 脚側部 1/6	石英ほかの粗砂 粒を僅かに含む	良好	10Y5/1灰	10Y5/1灰	輪轆成形 脚部はラッパ状に開 き、底部は爪先立ちのようによし て接地する	輪轆による撫で	輪轆による撫で	
54-117	G	I03a06	須恵	高坏	-	6.2	-	脚部上位	粗砂粒を含む	良好	10Y5/1灰	10Y5/1灰		輪轆による撫で	(坏部)輪轆による撫で(脚部) 棒状工具による捻り撫で	
54-118	G	G04a06	須恵	盤	-	5.8	-	底部下位～脚 部上位	0.3の礫、赤褐 色ほかの粗砂粒 を含む	酸化 変焼 成	10YR7/1灰白	体部7.5YR7/4 にぶい橙 脚 部10YR4/1褐灰	底部はほぼフラットに開く	撫で	撫で	
54-119	G	G04I09	須恵	盤	-	7.2	-	底部下位～脚 部上位	白色ほかの粗砂 粒を含む	酸化 変焼 成	10YR5/2灰黄褐	体部10YR6/4に ぶい黄橙 脚 部10YR5/2灰黄 褐	底部はほぼフラットに開く	輪轆による撫で	(体部)磨磨き(脚部)輪轆によ る撫で	
54-120	G	H04a09-II	土師	器台	-	2.8	-	体部下位～脚 部上位	粗砂粒を多く含 む	良好	5YR5/6明赤褐	10YR6/2灰黄褐		磨磨き?	磨磨き?	

第9表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土土物観察表(8)

部名	品類	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
54-121	G	H03h14	土師	器台	-	7.2	13.2	脚部1/6	白色ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5Y5/4にぶい橙	7.5Y6/6橙	脚部に面取りを施す	撫で?	撫で?	
54-122	G	G04m07覆下	土師	器台	-	4.0	-	脚部上位完存	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR4/6赤褐	5YR5/6明赤褐	脚部に3ヶの丸窓を穿つ	縦位の磨磨き	磨状工具による横位の削り	
54-123	G	H04e04	土師	鉢	40.8	8.7	25.0	口縁～体部1/6, 底部3/4	0.2の礫、粗砂粒を含む	良好	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	粘土帯積み上げ 口縁端部に面取りを施し、表面形状を整える	(口縁部)横位の撫で(体部上位)磨撫で(体部下位)横位の磨削り(底部)撫で	(口縁部)横位の撫で(体部)磨削り(底部)撫で	内面に黒色の漆状のものが付着する
54-124	G	I03e01	土師	鉢	18.2	10.0	丸底	口縁部僅か、体～底部1/3	0.4～0.2の礫、粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4にぶい橙	黒	丸底から体部は内湾して立ち上がり、外反して開く口縁部に至る	(口縁部)横位の撫で(体～底部)不定方向の磨削りの後撫で	ラフな磨磨き 黒色処理	
54-125	G	I03a08	土師	鉢	16.8	7.3	5.2	口縁～体部1/12, 底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	小振りの平底から体部は内湾して立ち上がる	(口縁部)横位の撫で(底部)磨削りの後撫で	不定方向の磨磨き	
55-126	G	H04f03-II	土師	甕	14.8	8.5	-	口縁～胴部上位1/3	粗砂粒を多く含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/4にぶい橙	部は「くの字」状に外反し、最大径を有する口縁に至る	(口縁部)横位の撫で(部)横位の磨削り(胴部)横位の磨削りの後撫で	(口縁部)横位の撫で(胴部)横位の磨撫で	
55-127	G	H04f04-薄込	土師	甕	16.5	6.5	-	口縁～胴部上位1/5	0.2～0.6の礫、粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	粘土帯積み上げ 部は緩く外反して短く開く口縁部に至る	(口縁部)横位の撫で(胴部)横位の磨削り	撫で	
55-128	G	H04f02-薄込	土師	甕	15.8	7.5	-	口縁～胴部上位1/6	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR3/1黒褐	5YR4/4にぶい赤褐	粘土帯積み上げ 部は強く外反し、最大径を有して面取りを施す口縁に至る	(口縁部)横位の撫で(胴部)斜位の網毛目	(口縁部)横位の撫で(胴部)斜位の網毛目による撫で付け	
55-129	G	H04f02-II	土師	甕	12.8	4.0	-	口縁～胴部上位1/4	粗砂粒を含む	良好	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄緑	粘土帯積み上げ 部は強く外反し、面取りを施す口縁に至る	(口縁部)横位の撫で(胴部)斜位の網毛目	(口縁部)網毛目(胴部)撫で	
55-130	G	I03a08	土師	甕	16.8	5.6	-	口縁～胴部上位1/6	石英ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR3/2黒褐	7.5YR4/3褐	粘土帯積み上げ 屏の屈る胴部から、部は「くの字」状に急曲し、外反する口縁部に立ち上がる	横位の撫で	横位の撫で	
55-131	G	G04e09	土師	甕	16.4	3.5	-	口縁部1/4, 胴部上位1/8	白色ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR4/3褐	7.5YR5/4にぶい橙	粘土帯積み上げ 部は「くの字」状に外反し、口唇部に面取りを施す	横位の撫で	磨状工具による横位の撫で	
55-132	G	G04j09覆下	土師	甕	20.8	5.6	-	口縁部1/4, 胴部上位1/8	粗砂粒を多く含む	良好	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	粘土帯積み上げ 部は「くの字」状に外反する	(口縁部)木口状工具による横位の撫で(胴部)磨状工具による縦位の撫で	磨状工具による横位の撫で	
55-133	G	I03a08	土師	甕	12.8	5.6	-	口縁～胴部上位1/2	0.5の礫、粗砂粒を多く含む	良好	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/3にぶい赤褐	粘土帯積み上げ 部は大きなRで外反し、口縁部は内湾気味に立ち上がる	(口唇部)横位の撫で(口縁～胴部)縦位の磨削り(胴部上位)縦位の磨撫で	(口縁部)横位の撫で(縦位の磨削り(部)縦位の磨削り(胴部上位)撫で	
55-134	G	I03a08	土師	甕	21.6	11.6	-	口縁～胴部上位1/5	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	粘土帯積み上げ、歪りのない胴部から外反して大きく開く口縁部に立ち上がる	(口唇部)横位の撫で(口縁～胴部上位)磨撫で	(口唇部)横位の撫で(口縁～胴部上位)磨撫で	
55-135	G	G04i09	土師	甕	15.8	5.9	-	口縁～胴部上位1/4	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR4/4褐	粘土帯積み上げ 部は「くの字」状に外反し、口唇部は面取りを施す口唇に至る	(口縁部)横位の撫で(胴部)網毛目状工具による横位の撫で	(口縁部)横位の撫で(胴部)指爪による斜位の撫で付け	

第10表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(9)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
55-136	G	B04f02-3D	土師	壺	-	2.9	-	口縁の一部	雲母粗砂粒を含む	良好	7.5YR5/4(ふいぬ)	10YR5/3(ふいぬ黄)	口縁は二段S字状に外反する	横位の撫で	横位の撫で	
55-137	G	G04a09残下	土師	壺	-	6.1	-	胴部上位1/5	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR4/3(楊)	7.5YR4/3(楊)		7本の刷毛目工具による撫で	撫で	
55-138	G	B04f02-II	土師	壺	-	3.2	9.4	底部完存	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/3(ふいぬ)	7.5YR7/3(ふいぬ)	僅かな上げ底から胴部に向かつて大きく開く	横位の造削りの後撫で	指頭による撫で付け	
55-139	G	B04g02-I	土師	壺	-	3.2	10.3	底部完存	0.2の礫、石英ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR5/4(ふいぬ)	7.5YR5/4(ふいぬ)	粘土帯積み上げ	(胴部)横位の撫で(底部)木葉痕	指頭による撫で付け	
55-140	G	B04g02-II	土師	壺	-	5.3	8.0	胴部下位1/3、底部1/2	0.2~0.4の黄鉄鉱粒、雲母ほかの粗砂粒を多く含む	良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	2.5Y5/2(暗灰黄)	粘土帯積み上げ	(胴部)横位の造削りの後撫で(底部)木葉痕	撫で	
55-141	G	B02g13	土師	壺	-	2.9	10.6	底部1/4	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR6/6(橙)	5YR6/6(橙)		(胴部)横・斜位の造削り(底部)木葉痕	匙状工具による撫で	
55-142	G	F04a07	土師	壺	-	8.0	9.7	胴部下位1/4、底部完存	雲母ほかの粗砂粒を多く含む	良好	5YR5/6(明赤褐)	7.5YR6/4(ふいぬ)	粘土帯積み上げ	(胴部)斜位の造削り(底部)匙状工具による撫で	横位の撫で	
55-143	G	B04g01-II	土師	瓶	-	2.2	6.2	底部完存	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR7/4(ふいぬ)	7.5YR7/3(ふいぬ)	平底に1孔を穿つ	縦位の刷毛目	撫で	
55-144	G	B02b14	土師	羽釜	-	7.1	-	踵部1/8	粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR4/2(灰褐)~3/2(黒褐)	7.5YR4/2(灰褐)		横位の撫で	横位の撫で	
56-145	G	B03b15-II	須恵	壺	26.8	26.8	-	口縁~部1/8、胴部上位1/8	粗砂粒を含む	良好	5YR4/1(焼灰)	5YR4/1(焼灰)	粘土帯積み上げ 張りの強い別から 部は外縁、口縁部で大きく外反して口縁帯を作る	(口縁~部)横位の撫で(胴部)平行文工具による叩き	(口縁~部)横位の撫で(胴部)匙状工具による撫で付け	
56-146	G	B04e03-II	須恵	壺	24.0	7.0	-	口縁部1/10	0.2の礫、粗砂粒を含む	良好	7.5Y4/1(灰)	5Y6/1(灰)	部から口縁部にかけて大きく外反して開き、端部は折り返して口縁帯を作る	(口縁部)横位の撫で(部)匙状工具による横位の撫で	横位の撫で	
56-147	G	B03b15-II	須恵	壺	23.6	10.8	-	口縁~部1/5	白色粗砂粒を含む	良好	N4/ 灰	N5/ 灰	粘土帯積み上げ 部は外縁して開き、口縁端部を上を持ち上げるように積み上げて口縁帯を作る	横位の撫で(部)上位に平行文工具による叩き痕が僅かに残る	横位の撫で	
56-148	G	B04g01-II	須恵	壺	27.8	12.6	-	口縁部1/4	0.3の礫、粗砂粒を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	粘土帯積み上げ 部は内面に斜行する線を有して立ち上がり、口縁部で外反し、段のある口縁帯を作る	(口縁から 部)上位)横位の撫で(部~胴部)平行文工具による叩きの後横位の撫で	横位の撫で	
56-149	G	G04a09残下	須恵	壺	13.4	13.3	-	口縁部1/8、胴部上位1/4	石英・白色ほかの粗砂粒を多く含む	良好	2.5Y5/1(黄灰)	2.5Y5/1(黄灰)	粘土帯積み上げ~輪軸成形 部は強く外反して、口縁部に面取りを施して口縁帯を作る	(口縁部)横位の撫で(胴部)輪軸による撫で	(口縁部)横位の撫で(胴部)輪軸による撫で	
56-150	G	G04011-I	須恵	壺	-	6.0	-	部から胴部上位1/5	粗砂粒を含む	良好	2.5Y7/2(灰黄)	7.5Y7/1(灰白)	輪軸成形	輪軸による撫で	輪軸による撫で	外面に自然が程かにかか

第11表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(10)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
96-151	G	B04b07-II	須恵	甕	15.2	18.0	-	口縁～胴部の一部	粗砂粒を僅かに含む	酸化変焼成	10YR5/1黄灰	10YR5/1黄灰	口縁を複雑なT字状とする	(口縁部)横位の撫で(胴部上位)棒子目工具による叩き	横位の撫で	
96-152	G	103	須恵	甕	19.2	7.7	-	口縁～胴部上位1/4	黒色粗砂粒を含む	良好	N5/ 灰	N6/ 灰	最大径を有する口縁部は、口縁帯をS字状に作る	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
96-153	G	B04f02-II	須恵	甕	22.0	5.6	-	口縁1/8	粗砂粒を含む	良好	2.5Y6/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	張りのない胴部から短くU字状を呈する口縁帯に向かって開く	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
96-154	G	B04g03-I	須恵	甕	21.4	10.6	-	口縁～胴部上位1/6	0.2～0.4の礫・粗砂粒を多く含む	良好	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	粘土帯積み上げ 丸味のある胴部上位から 部は縁く外反し、端部に口縁帯を作る	(口縁部)横位の撫で(部)平行文工具による叩きの後横位の撫で(胴部)平行文工具による叩き	(口縁～ 部上位)横位の撫で(部下位～胴部)蹄状工具による撫で	
96-155	G	B04f02-II	須恵	甕	-	5.6	-	口縁の一部	白色粗砂粒を含む	良好	5Y6/1灰	5Y5/1灰	口縁帯に2条の凹帯をめらせる	轆轤による撫で	撫で	
96-156	G	B04b01-II	須恵	甕	-	5.4	-	口縁～ 部の一部	粗砂粒を多く含む	良好	N4/ 灰	N4/ 灰	口縁端部は折り返して口縁帯を作り、さらに二重の浅い凹帯を施す	(口縁部)横位の撫で(部)木口状工具による横位の撫でその後三条の蹄状工具による敲状文を施す	轆轤による撫で	
97-157	G	G04b02罐下	須恵	甕	26.8	16.5	-	口縁部1/10, 胴部1/8	0.3の礫、粗砂粒を含む	良好	5Y7/1灰白～5/1灰	5Y6/1灰		(口縁～肩部)横位の撫で(胴部)棒子目工具による叩き	(口縁～肩部)横位の撫で(胴部)蹄状工具による撫で	
97-158	G	B04f03-II	須恵	甕	35.0	9.0	-	口縁部1/6, 胴部上位僅か	白色粗砂粒を含む	良好	5Y6/ 灰	2.5Y6/1黄灰	口縁部は外反して端部に段を附けた口縁帯を作る	(口縁部)横位の撫で(部)縦位の急撫での後横位の撫で(胴部)平行文工具による叩き	横位の撫で	
97-159	G	B03a15-II	須恵	甕	38.6	6.8	-	口縁部1/8	白色粗砂粒、細砂粒を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	粘土帯積み上げ 口縁部は縁やか外反し、端部に口縁帯を作る	(口縁～ 部)横位の撫で(胴部上位)平行文工具による叩き	横位の撫で	
97-160	G	B04b04-SB	須恵	甕	29.6	12.7	-	口縁～胴部上位1/6	赤帯・白色粗砂粒を多く含む	不良	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	最大径を縁く外反する口縁部に有し、端部に面取りを施す	(口縁部)横位の撫で(胴部上位)平行文工具による叩き	撫で	
97-161	G	B04e05-II	須恵	甕	-	12.4	15.2	胴部1/6, 底部1/4	0.2～0.4の礫、白色粗砂粒を含む	良好	10YR7/3にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	粘土帯積み上げ	(胴部)平行文工具による叩き(胴部兼下位)横位の箇所(底部)敲調	横位の急撫で	
97-162	G	103a08	須恵	甕	-	6.1	-	口縁部の一部	粗砂粒を含む	酸化変焼成	5YR5/3にぶい赤褐色	5YR5/2S赤褐色	口縁帯をS字状に作る	(口縁部)横位の撫で(口縁部)轆轤による撫での後蹄状工具による敲状文	轆轤による撫で	口縁内面に2(3)条の線刻
97-163	G	G04b08	須恵	甕	-	6.7	-	把手部	0.2の白色礫・粗砂粒を多く含む	良好	10Y5/1灰	10Y5/1灰	粘土帯積み上げ	平行文工具による叩き	撫で	
97-164	G	B04g02-II	須恵	甕	-	8.9	-	口縁～胴部上位の一部	粗砂粒を含む	良好	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	縁く外反する口縁は、端部を短く折り返し口縁帯を作る	(口縁部)轆轤による撫で(胴部)平行文工具による叩き	(口縁部)蹄状工具による撫で(胴部)蹄状工具による撫でつけ	
98-165	G	B03115-II	須恵	甕	12.0	7.1	-	口縁部1/4, 体部上位1/8	礫・粗砂粒を含む	良好	2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/1灰白～10Y5/2オリーブ灰	外反する 部から、口縁部は短く直立し帯状をなす 端部は面取りを施す	横位の撫で	横位の撫で	外面全体及び口縁内面に自然 からの

第12表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(11)

調査	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	用途	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
58-166	G	G04-09-II	須恵	蓋	12.1	2.7	-	口縁部1/5	白色粗砂粒を含む	良好	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	口縁部を短く折り返し唇状とする	轆轤の撫で	轆轤の撫で	内外面に緑が付着する。
58-167	G	H02h3	須恵	蓋	11.2	4.0	-	口縁部1/6	粗砂粒を僅かに含む	良好	黄金	2.5Y8/2灰白		轆轤による撫で	轆轤による撫で	外面は黄金色の葉が掛かる
58-168	G	H04f04-薄込	須恵	蓋	17.8	10.9	-	口縁～ 部1/5	0.3の白色礫、粗砂粒を含む	良好	10Y4/1灰	10Y5/1灰	口縁はラッパ状に大きく開く	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
58-169	G	G04f09	須恵	蓋	-	9.5	-	体部1/4	粗砂粒を僅かに含む	良好	2.5Y8/5/1黄灰	10Y8/5/1褐灰	轆轤成形 下腹に気味の体部から短い 部が外反して立ち上がる	轆轤による撫で	轆轤による撫で	外面肩部に白色の自然がかかる
58-170	G	H03g14-II	須恵	蓋	-	9.7	9.6	体部1/5、底部1/3	白色粗砂粒を含む	良好	N4/ 灰	7.5Y8/5/1褐灰	轆轤成形 付け高台の底部から体部は内湾しながら立ち上がり、肩部は屈曲する	(体部)轆轤による撫で(高台部)轆轤の撫で(底部)回転糸切りの後撫で	轆轤による撫で	
58-171	G	H04c01-II	須恵	蓋	-	6.7	9.6	体部1/6、底部1/10	白色粗砂粒をごく僅かに含む 精良	良好	2.5Y7/1灰白	10Y8/7/1灰白	轆轤成形 付け高台 体部は内面に稜を有して立ち上がる	轆轤による撫で	轆轤による撫で	体部外面下に自然がかかる
58-172	G	H03g15-II	須恵	蓋	-	6.8	12.6	体部最下位1/6、底部1/2	細砂粒を多く含む	良好	N3/0暗灰	5Y6/1灰		轆轤による撫で	(体部)轆轤による撫で(底部)撫で	底部外面に一面の刻み 捺印か。
58-173	G	H04f01-II	須恵	蓋	-	4.4	10.3	底部1/2	細砂粒を多く含む	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	付け高台	(体部)轆轤による撫での後照例り(高台部)轆轤の撫で(底部)捻調整	(体部)轆轤による撫で(底部)撫で	
58-174	G	H03b14	須恵	蓋	-	4.3	11.0	底部2/3	石英粗砂粒を含む	良好	5Y7/1灰白～6/25灰オリーブ	5Y7/1灰白～6/3オリーブ黄	歪みの著しい底部に高台を施す	(体部)下部 轆轤の撫で(高台部)轆轤の撫で(底部)回転糸切りの後撫で	(体部)轆轤による撫で(底部)捻調整	外面の一部に自然がかかる
58-175	G	H04a08-II	須恵	蓋	-	3.9	12.8	底部はほぼ完全、高台部1/6、体部一部	0.2の礫、粗砂粒を含む	良好	10Y5/1灰～3/1オリーブ黒	10Y5/1灰～3/1オリーブ黒	大きく外に開く付け高台を施す	(体部)不明(高台部)撫での後照例り(底部)回転糸切りの後撫で	不明	内外面ともに施しているが表面を赤褐色の砂の付着が著しい。
58-176	G	G04h09	須恵	蓋	-	2.2	6.7	底部完全	0.2の白色礫、粗砂粒を僅かに含む	良好	N5/ 灰	N6/ 灰	付け高台	轆轤による撫で	轆轤による撫で	
58-177	G	H04a02-II	須恵	蓋	-	3.6	-	体部上位一部	白色粗砂粒を僅かに含む	良好	50Y4/ 暗黄灰	5P1.7/1紫黒	耳状突起が斜めに付く	不明	轆轤による撫で	
58-178	G	H04h01-II	灰陶器	蓋(長意)	-	8.5	-	部	精良	良好	7.5Y6/1灰	7.5Y7/1灰白	轆轤成形	轆轤による撫で	轆轤による撫で	体部上位に施す。
58-179	G	H04e02-II	須恵	瓶(横置)	12.0	22.3	-	口縁部2/3、体部1/8	白色粗砂粒を含む	良好	2.5Y8/5/2灰赤	N4/ 灰	粘土帯積み上げ	(口縁～ 部)轆轤の撫で(体部)平行文工具による叩き	(口縁～ 部)轆轤の撫で(体部)木口状工具による撫で	
58-180	G	H03f03	須恵	瓶	-	4.5	-	肩部1/2	1.0の礫1と粗砂粒を多く含む	良好	2.5G4/1暗オリーブ灰	10Y4/1灰	粘土帯積み上げ 轆轤成形	轆轤による撫での後、肩屈曲部に糊歯状工具による斜位の衝突を施し、横位の沈線二条で区画を作る	轆轤による撫で	

第13表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(12)

図番	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
58-181	G	H0461-II	須恵	鉢	-	5.0	-	体部1/5	細砂粒を僅かに含む	良好	7.5Y5/1灰	10Y5/1地灰	轆轤成形	肩～体部の屈曲部に横位の凹線を施し、その下部に薄の刷毛状工具による刻突を横位に施す	轆轤による撫で	外面に自然がらみ
58-182	G	F04607	須恵	瓶	-	1.8	4.2	底部1/3は残存	粗砂粒を含む	良好	N3/ 暗灰	N4/ 灰	轆轤成形	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転鋸切りの後撫で	轆轤による撫で	
59-183	G	H04702-II	須恵	蓋	3.5	2.4	15.2	抓み部完全、天井部上位1/3、天井部下位1/20	細砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰	扁平な擬宝珠形の抓み部から、接を有してわずかに出る天井部を経て屈曲する側面に至る轆轤成形	(抓み部)撫で(天井部上位)轆轤による磨削(天井部下位)轆轤による撫で(底部)横位の轆轤成形	(天井部上位)轆轤による磨削(天井部下位)轆轤による撫で	天井部上位外面に「大」の刻書
59-184	G	H0315-II	須恵	蓋	3.6	2.3	-	抓み部5/6、天井部上位1/3	細砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰	扁平な擬宝珠形の抓み	(抓み部)撫で(天井部)轆轤による磨削	轆轤による撫で	天井部外面に「女」の刻書
59-185	G	H0315-I	須恵	蓋	2.8	2.2	-	抓み部完全、天井部上位1/6	細砂粒を含む	良好	N5/0灰	N6/0灰	扁平な擬宝珠形の抓み 轆轤成形	(抓み部)轆轤による撫で (天井部)轆轤による磨削	轆轤による撫で	天井部外面に「大」の刻書
59-186	G	F04606	土師	杯	-	4.5	-	口縁～体部の一部	雲白江土の粗砂粒を含む	良好	5Y8/4に濃い赤褐色	黒	横位の撫で		磨削し黒色処理	体部外面に刻書
59-187	G	H03F15-II	須恵	杯	-	1.1	5.3	底部の一部	粗砂粒を含む	良好	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	轆轤成形小	(体部)横位の撫で (底部)掘削	轆轤による撫で	底部外面に刻書。文字不明
59-188	G	H04702-II	須恵	杯	12.8	3.4	9.4	口縁～体部1/5、底部1/2	細砂粒を含む	良好	N4/0灰	N5/0灰	付け高台の底部から体部は口縁に向かって外反して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)磨削(高台部)横位の撫で	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)刷毛状工具による不定方向の撫で	底部外面に「女」の刻書
59-189	G	G04608-I	須恵	杯	13.4	3.2	10.4	口縁～体部1/5、底部1/2	細砂粒を含む	良好	10Y5/1灰	10Y6/1灰	浮き気味の付け高台の底部から体部は口縁に向かって外反して立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)磨削(高台部)横位の撫で	(口縁～体部)轆轤による撫で(底部)刷毛状工具による不定方向の撫で	底部外面に「女」もしくは「佐」の刻書
59-190	G	H03F03-II	須恵	杯	-	2.5	9.6	体部最下位～底部1/2	細砂粒を含む	良好	N5/0灰	N5/0灰	轆轤成形 付け高台	(体部)轆轤による撫で(底部)回転鋸切り(高台部)撫で	轆轤による撫で	底部外面に「佐」もしくは「又」の刻書
59-191	G	H04602-II	須恵	鉢	18.1	6.3	13.2	口縁～体部1/3、底部3/4	粗砂粒・細砂粒を多く含む	良好	N4/0灰	N6/0灰	付け高台の底部から、体部は口縁に向かって直線的に立て立ち上がる	(口縁～体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)刷毛状工具による不定方向の撫で	轆轤区による撫での後、底部に刷毛状工具による押さえ	底部外面に「大」の刻書
59-192	G	G04608-I	須恵	杯	-	1.7	9.6	底部1/2	細砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰	付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)撫で(底部)回転鋸切りの後調整	(体部)轆轤による撫で(底部)刷毛状工具による不定方向の撫で	底部外面に刻書「大」か
59-193	G	H04701-II	須恵	杯	-	2.5	10.2	体部最下位1/5、底部1/2	細砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰	付け高台よりも底部が張り出す	(体部)轆轤による撫で(高台部)撫で(底部)轆轤による磨削	(体部)轆轤による撫で(底部)刷毛状工具による不定方向の撫で	底部外面に「女」の刻書
59-194	G	H03114-II	須恵	杯	-	1.1	9.6	底部わずかに	粗砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰	付け高台	(高台部)撫で (底部)轆轤による磨削の後の調整	刷毛状工具による不定方向の撫で	底部外面に刻書「女」か
59-195	G	H03F11	須恵	杯	-	1.7	9.4	底部1/6	粗砂粒を含む	良好	2.5Y4/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	付け高台	(体部)轆轤による撫で(高台部)横位の撫で(底部)回転鋸切りの後の調整	轆轤による撫で	底部外面に刻書「女」か

第14表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土遺物観察表(1-3)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	高さ	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
59-196	G	B04a08-I	瓦思	坏	-	2.4	-	口縁1/10	粗砂粒を含む	良好	5/6/1灰	5/6/1灰	轆轤成形か	轆轤による撫で	轆轤による撫で	外面に「井」もしくは「ヨ」の刻書
59-197	G	G04a03-II	瓦思	坏か	-	3.7	-	破片	粗砂粒を含む	良好	N5/0灰	N6/0灰		轆轤による撫で	轆轤による撫で	外面に花文状のデザインの凸条による押圧
59-198	G	F04109	土師	坏	-	3.1	-	体部の一部	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR7/4C-ふいぬ	黒		横位の撫で	横位の磨磨き 黒色処理	体部外面に意味不明の刻書
59-199	G	F04a06	土師	坏	-	3.5	-	体部の一部	石英・雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR4/3褐	黒		轆轤による撫で・横位の磨り	精緻な磨磨き 黒色処理	外面に意味不明の刻書
59-200	G	B03J15-II	瓦思	甕	-	9.9	-	部の一部	粗砂粒を含む	良好	N6/0灰	N6/0灰		刷毛状工具による横位の撫で	刷毛状工具による横位の撫で	外面に刻書「佐文」か
59-201	G	B02F12	土師	羽釜	27	8.5	-	口縁～胴部上位1/6	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	口縁部は僅かに窄まり、端部に面取りを施す	横位の撫で	横位の撫で	外面口縁部に「上」の刻書
60-202	G	G04a06	縄文土器	注口土器	-	9	-	注口部完存	雲母ほかの粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR5/6明褐	7.5YR4/4褐				
60-203	G	G04a09破下	弥生土器	甕	-	9.1	-	口縁部の一部	石英・赤・白色の粗砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/4C-ふいぬ	7.5YR4/1褐灰		鋸歯状工具による波状文	横位の撫で	
60-204	G	G04a09	弥生土器	甕	10.2	16.7	-	口縁上位僅か、口縁下位完存、体部1/2	雲母・石英ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/4C-ふいぬ赤褐	粘土磨み上げ 球形の体部から一部は隆起して外反する口縁部に至る	磨磨き 体部上位に連続する刺突文を施らせる	磨磨きによる撫で	
60-205	G	103a08	弥生土器	甕	-	13.6	-	胴1/6、胴部上位1/3	白色・雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR4/6赤褐～10R3/6暗赤	5YR4/6赤褐～10R3/6暗赤	粘土磨み上げ	(口) 横位の磨磨き 赤色塗彩(胴部上位)1本の鋸歯状工具による横位の擦磨の後、面の擦磨	(口) 横位の磨磨き 赤色塗彩(胴部上位)不明	
60-206	G	B03J01	弥生土器	高坏	-	5.7	-	坏底部から脚部上位	雲母ほかの粗砂粒を僅かに含む	良好	2.5YR4/4C-ふいぬ赤褐	5YR4/6赤褐	脚部に三角形の透かし(2箇所確定・推定4箇所)を持つ	(坏部)横位の磨磨き(脚部)縦位の磨磨き 赤色塗彩	(坏底部)磨磨き 赤色塗彩(底部～脚部)撫で付(脚部)木口状工具による撫で	
60-207	G	B04F02	弥生土器	鉢	15.2	8.5	3.0	口縁～体部1/2、底部完存	粗砂粒を僅かに含む	良好	5YR6/7褐	7.5YR3/6暗赤	平底から体部は内湾して立ち上がる	磨磨き	磨磨き	
60-208	G	B04a01-II	磁器	碗	-	3.8	-	底部一部		良好						
60-209	G	B04a04-II	陶器	碗	-	1.2	3.8			良好						
60-210	G	G03a14	磁器	碗	-	1.8	-	底部～高台部1/6		良好	7.5Y7/2灰白	7.5Y7/2灰白				

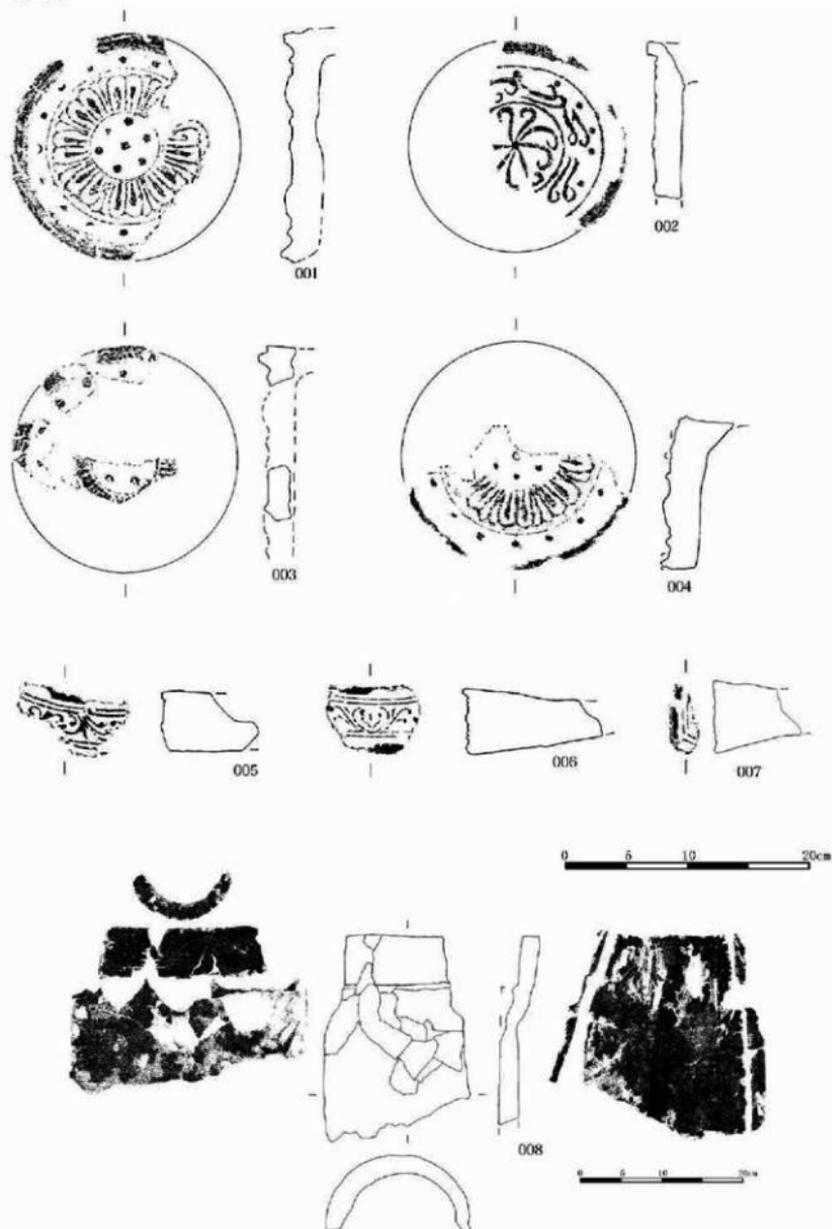
第15表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(1-4)

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
60-211	G	G04n12-1	陶器	?	-	2.9	-	体部の一部		良好	5YR3/3暗赤褐	7.5YR2/2黒褐				
60-212	G	H04G2-1	陶器	碗	-	4.8	-	体部1/6		良好						
60-213	G	G04n11-1	磁器 (青磁)	碗	13.9	4.1	-	口縁部1/8		良好						

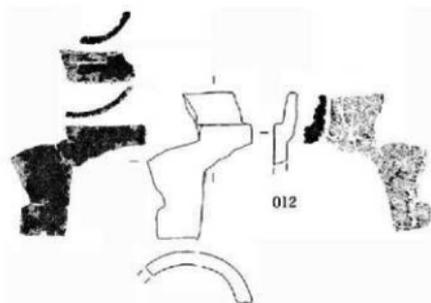
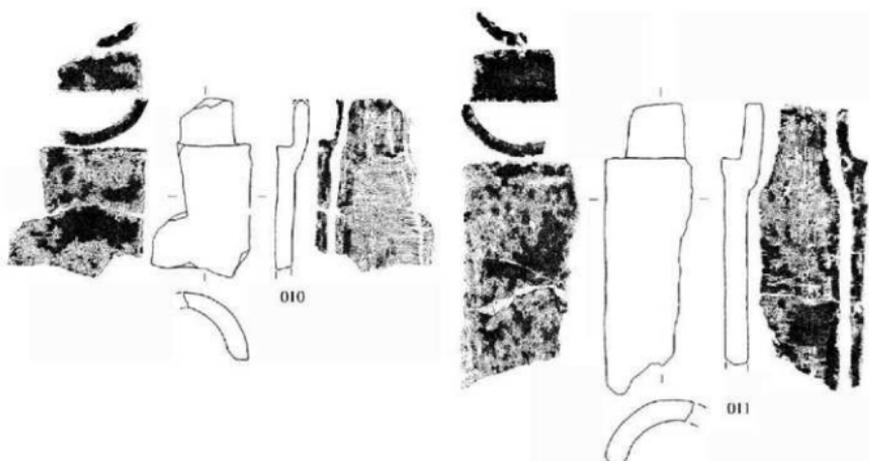
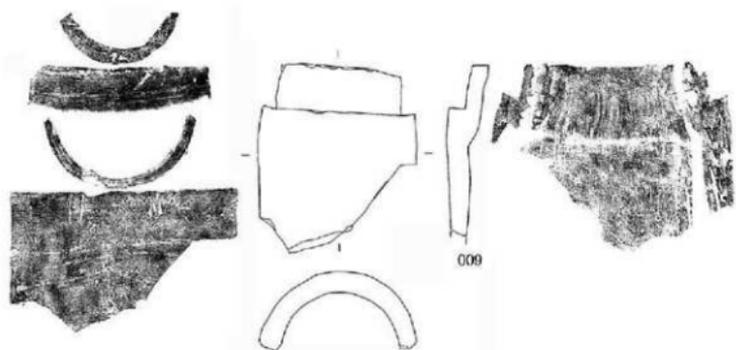
第16表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(15)

図版	写真	造構	造構番号	種類	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
214		G	G04m07礎下	土製品	土鍾	4.8	2.3		19.3	
215		G	G04106	土製品	羽口	10.3	6.7		210.0	溶解ガラスが付着
216		SB	02	土製品(緑 陶器)	蓋等の抓みか	7.4	2.6	2.0	41.3	
217		G	G04J09	石製品	磨製石斧	12.7	5.6	3.0	332.0	安山岩
218		G	H02h13	石製品	磨石	12.1	4.8	3.8	344.0	安山岩
219		G	H02f15	石製品	磨石	4.6	3.4	2.6	51.3	安山岩
220		G	H02f15	石製品	凹石	6.3	6.3	3.2	178.0	安山岩
221		G	G04m07	石製品	敲石	14.3	5.9	6.0	597.0	安山岩
222		G	F04-Z	石製品	石塔の一部か	16.4	10.5	9.5	1,397.0	
223		G	H03e15	金属製品	銅碗	5.5	3.8	1.2	30.0	
224		G	H04f03-II	金属製品	刀子	5.2	2.5	0.9	10.3	
225		G	H04f02-II	金属製品	刀子	6.8	2.0	1.5	11.6	
226		G	H04h02-II	金属製品	不明	6.0	2.0	1.4	17.5	
227		G	H02h14	金属製品	釘	8.4	2.0	1.6	28.7	
228		G	G04J06	金属製品	釘	4.4	0.8	0.8	4.6	
229		G	H03h14	金属製品	釘	3.9	0.8	0.8	2.1	
230		G	F04-Z	金属製品	不明	6.4	2.0	0.8	22.7	
231		G	G04109	金属製品	不明	7.6	1.6	0.6	21.5	
232		G	H03f14	金属製品	鉄滓	4.8	3.4	1.8	40.1	
233		G	H02h13	金属製品	鉄滓	7.5	3.8	2.9	66.8	

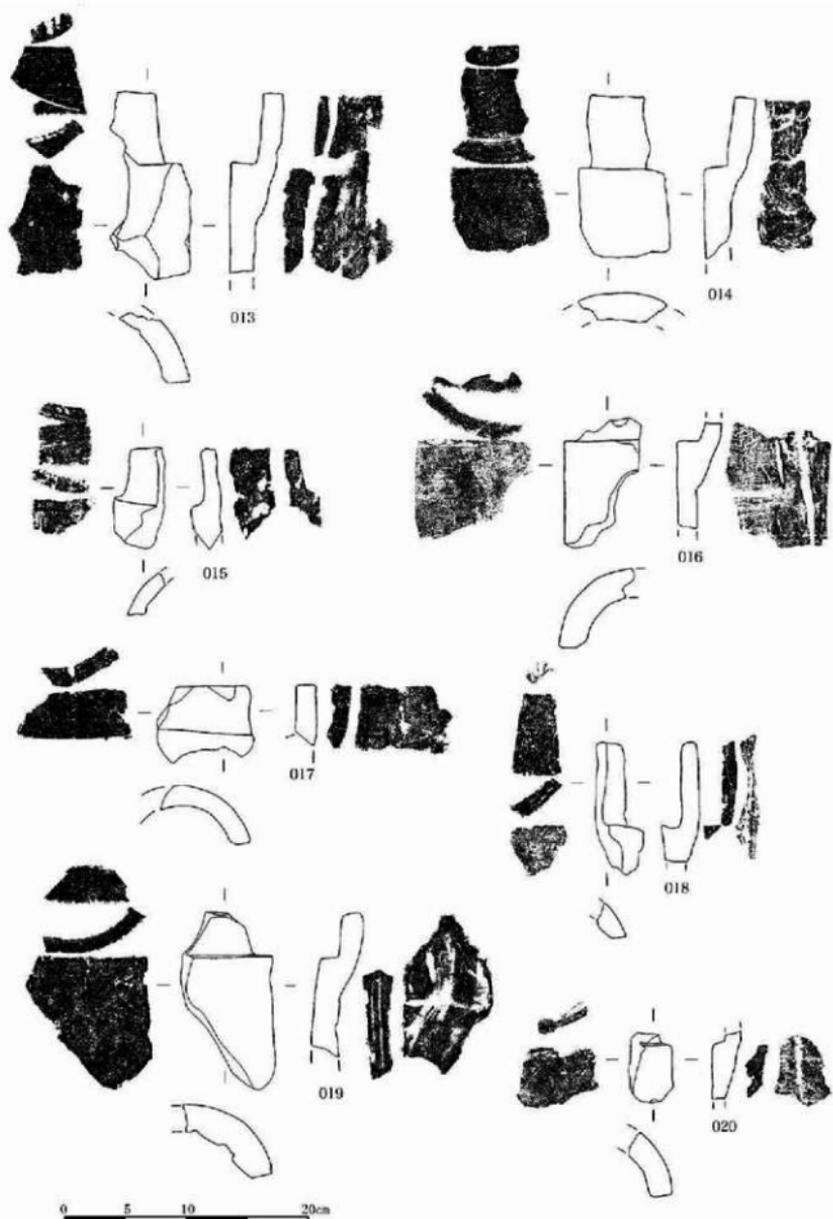
第17表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土遺物観察表(16)



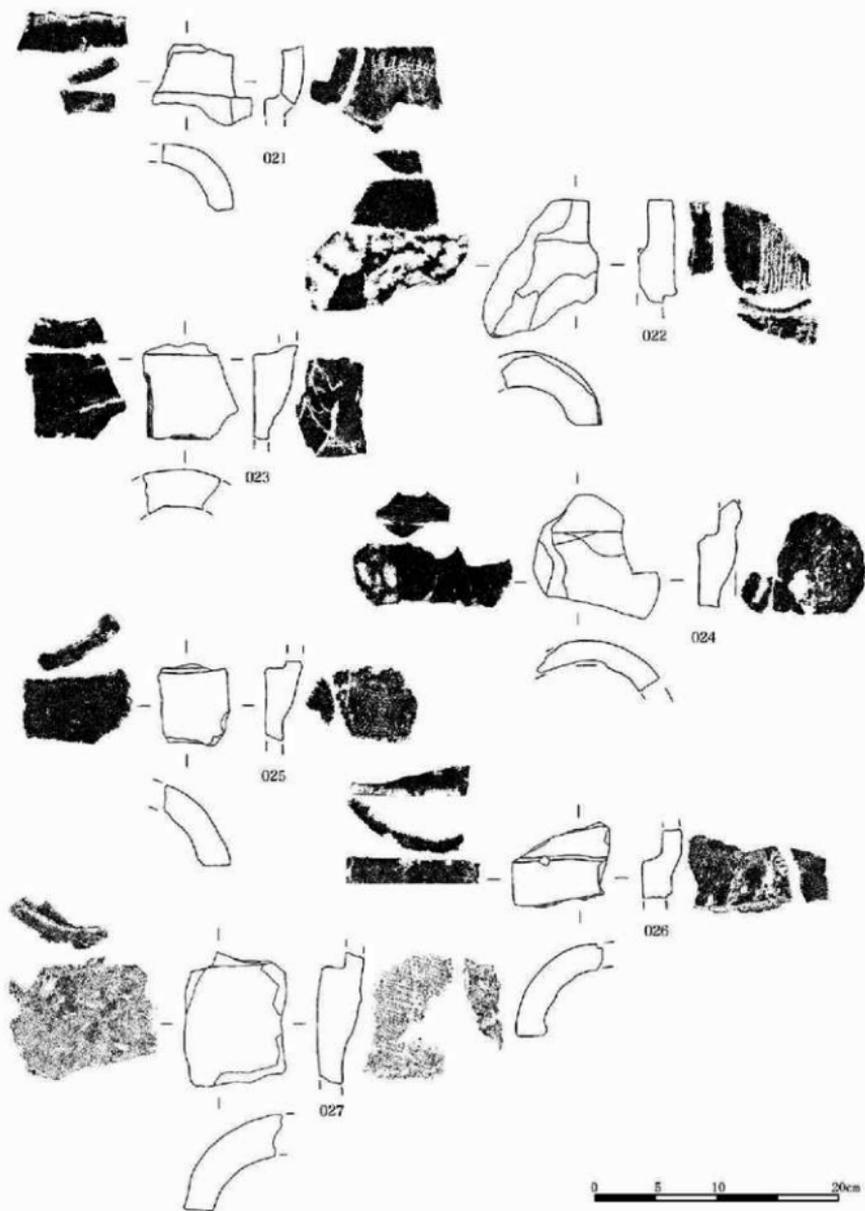
第62图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦実測図(1)



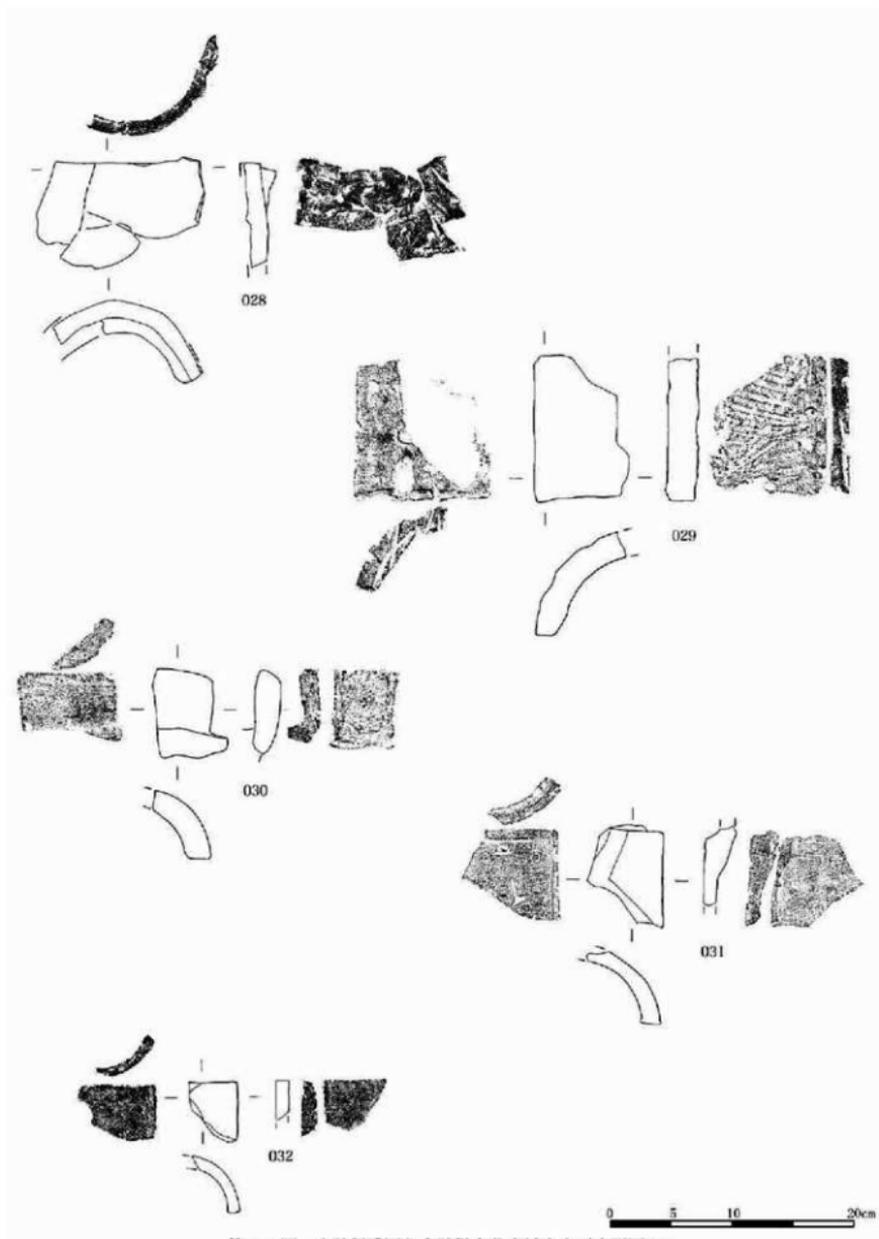
第63图 史跡信濃園分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図(2)



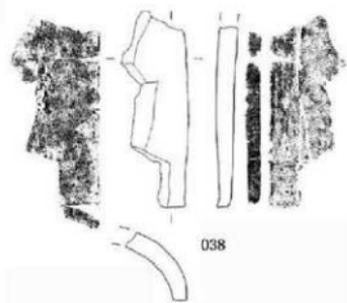
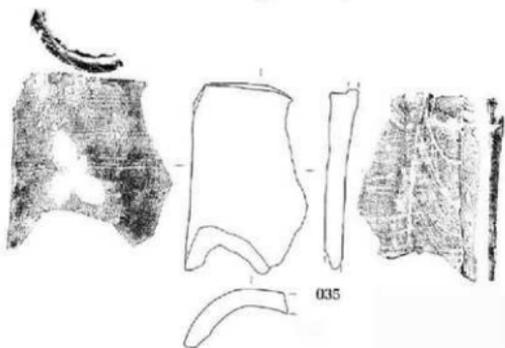
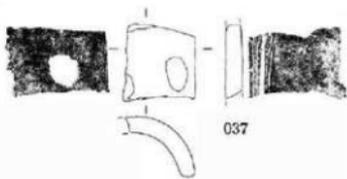
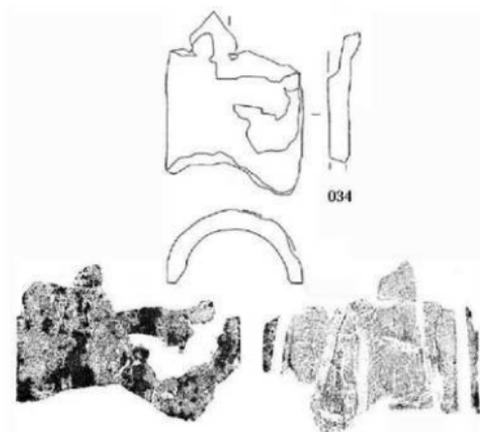
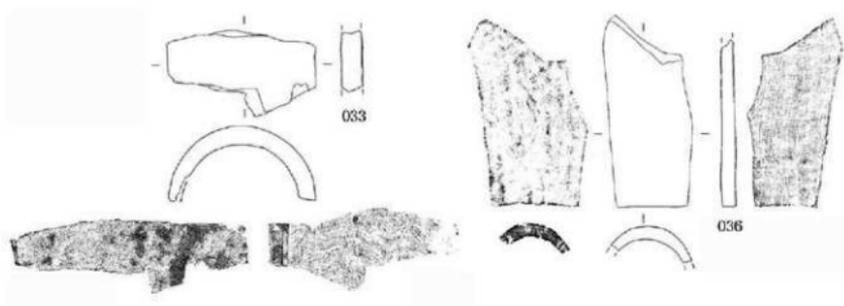
第64圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測圖(3)



第65圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土瓦実測圖(4)

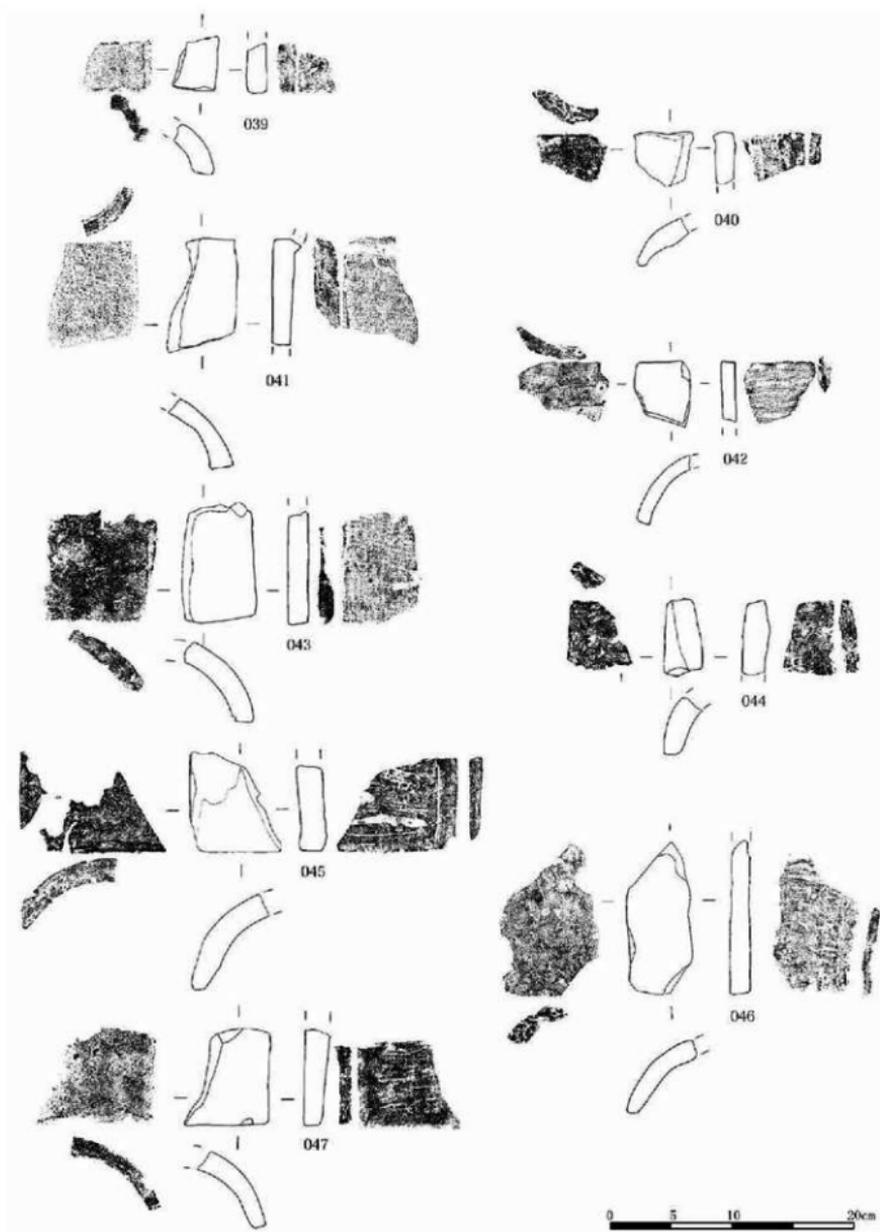


第 6 6 圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土瓦実測圖 (5)

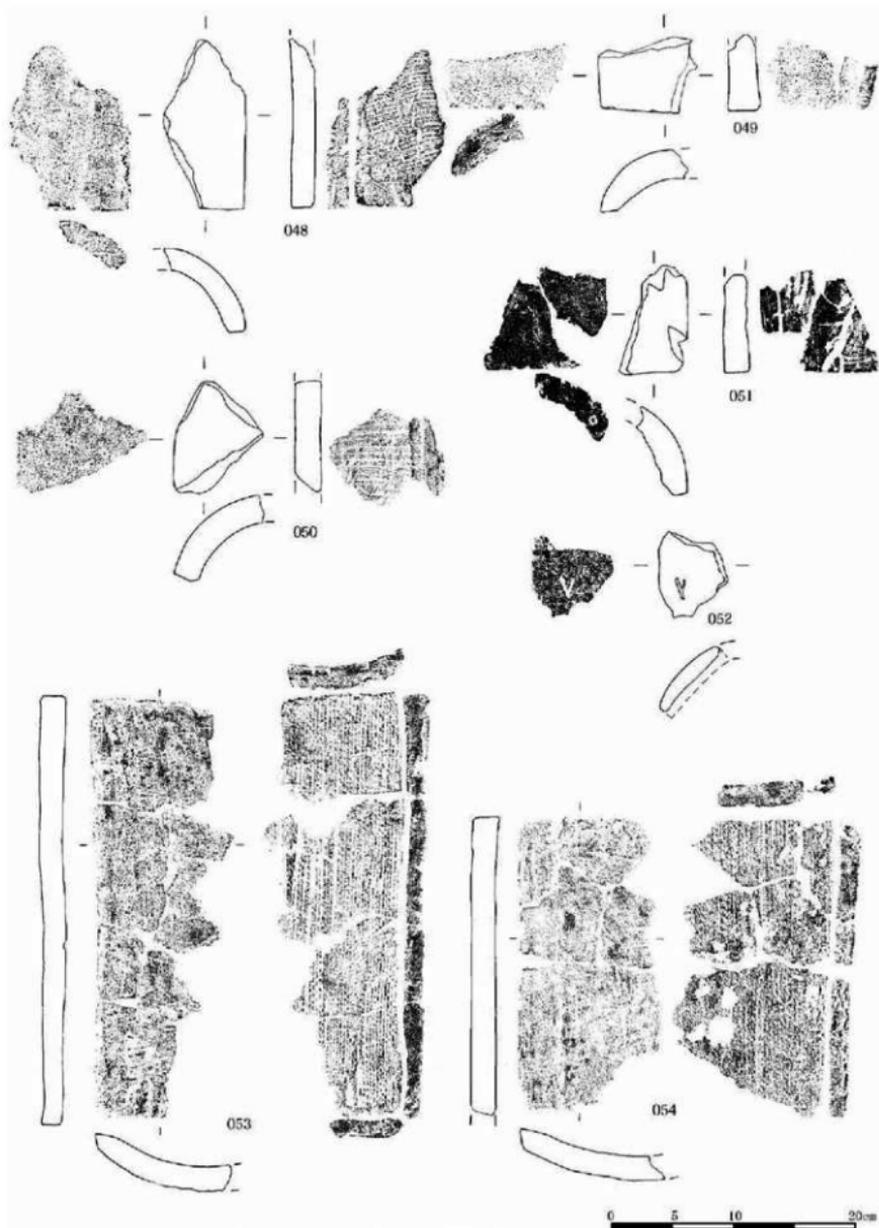


第67圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図(6)

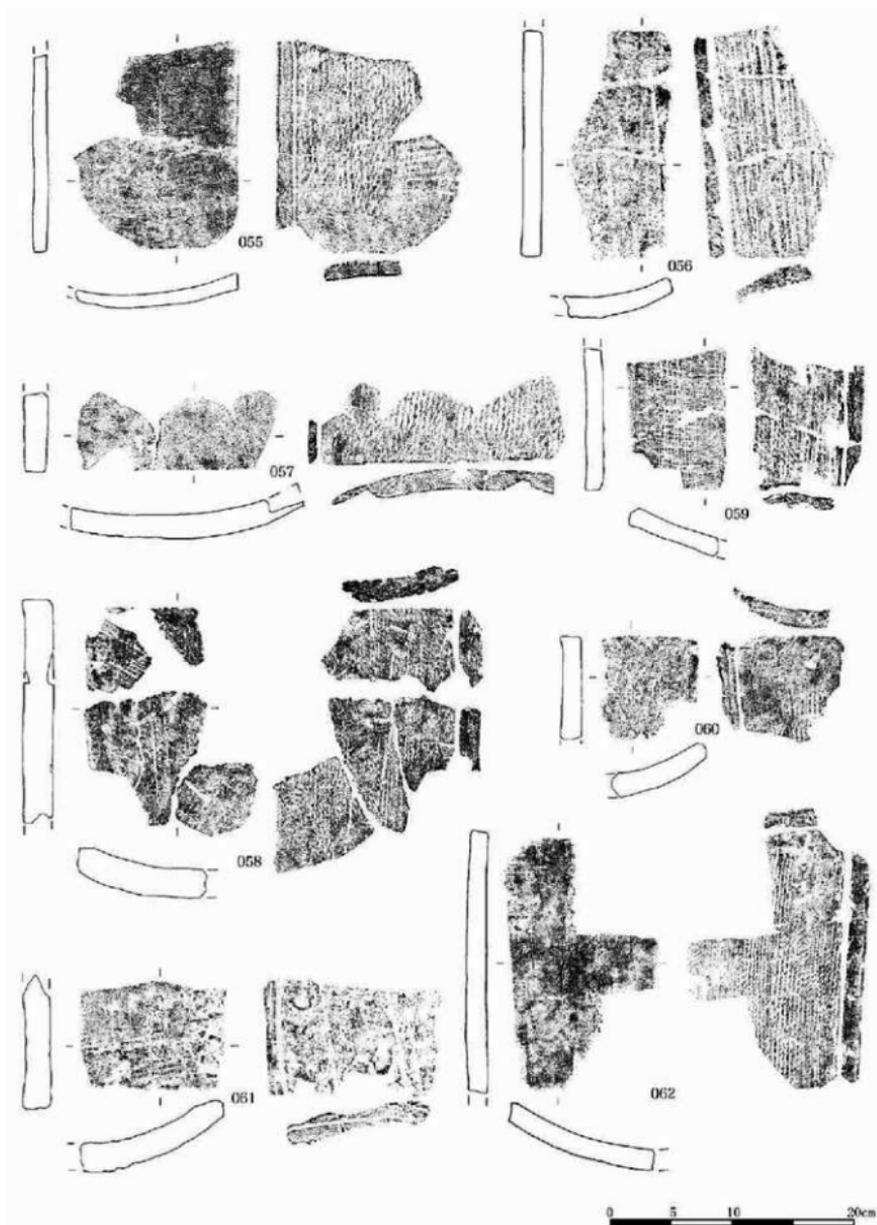




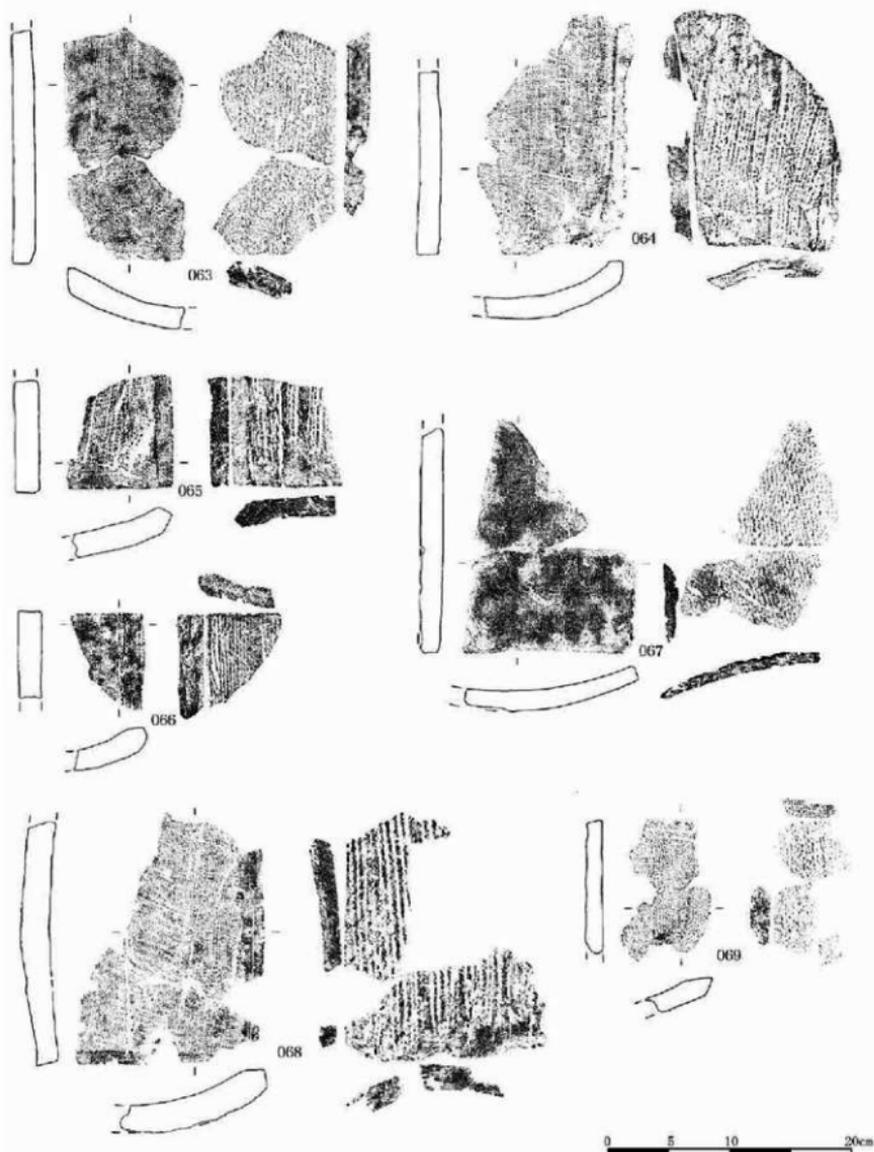
第68圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土瓦実測圖(7)



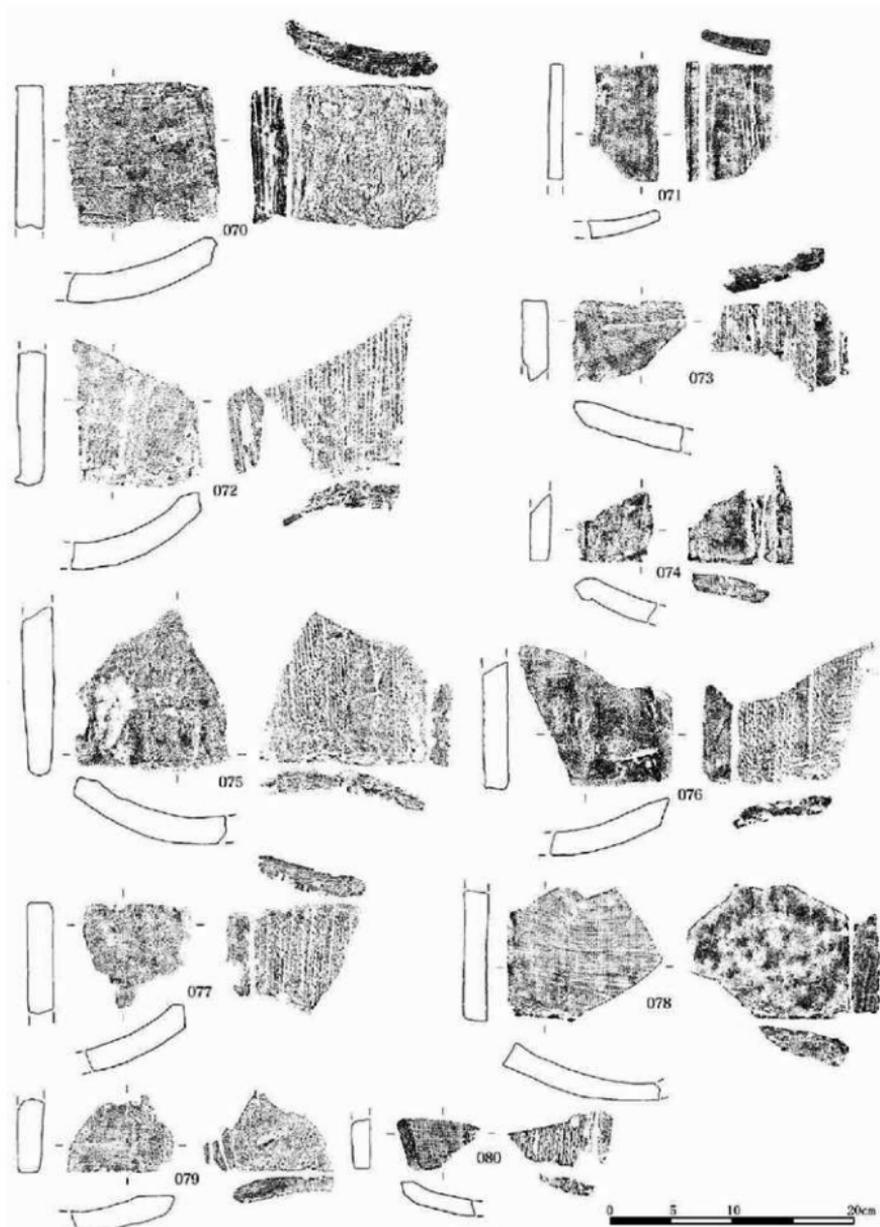
第69圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測圖(8)



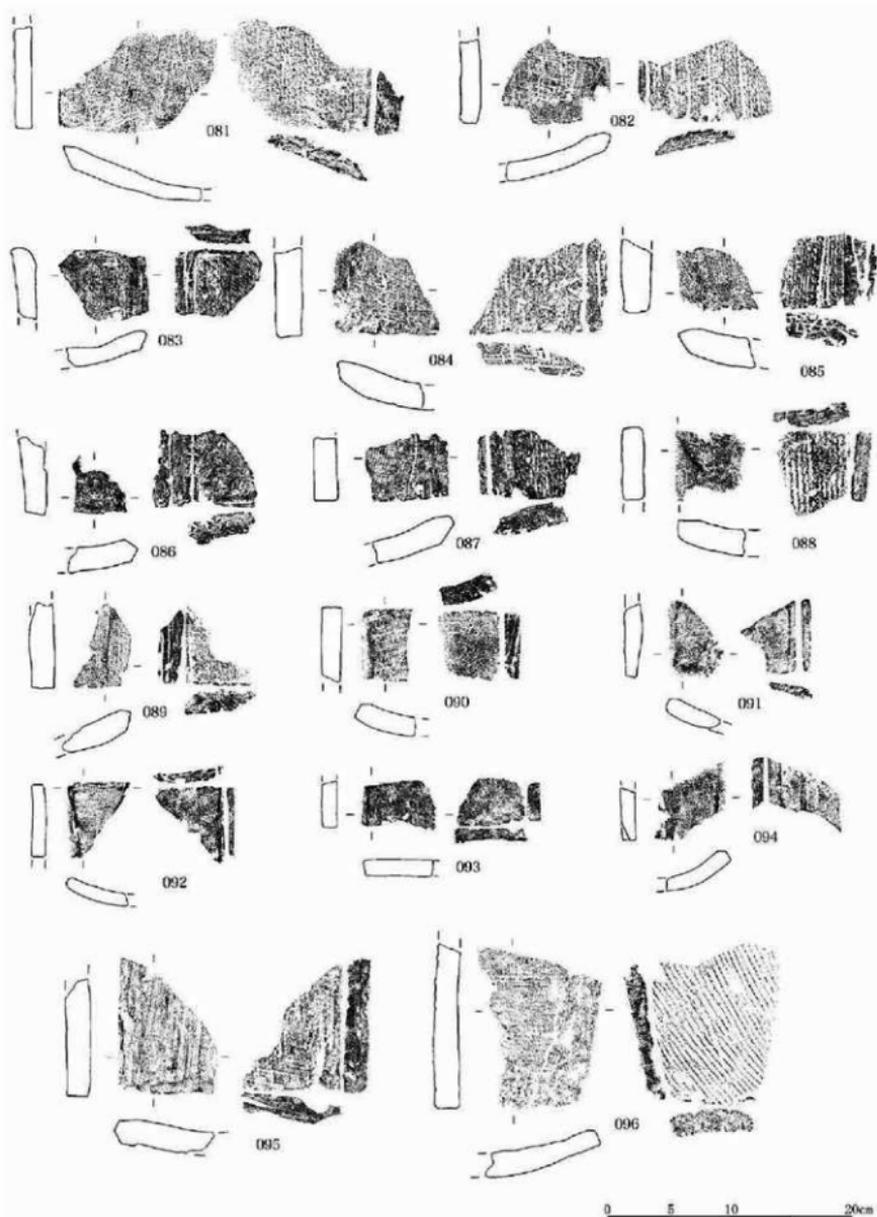
第70圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東域出土瓦実測圖(9)



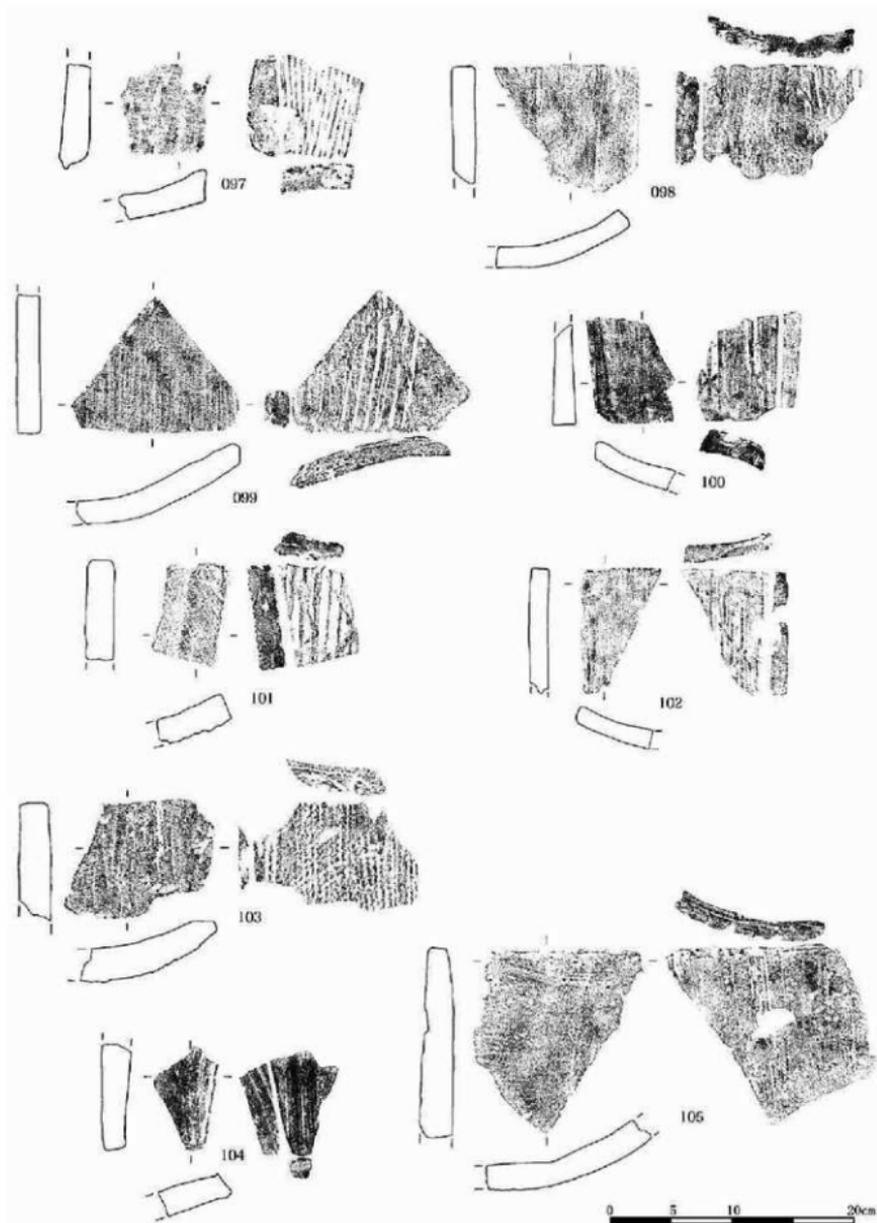
第 7 1 图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図 (10)



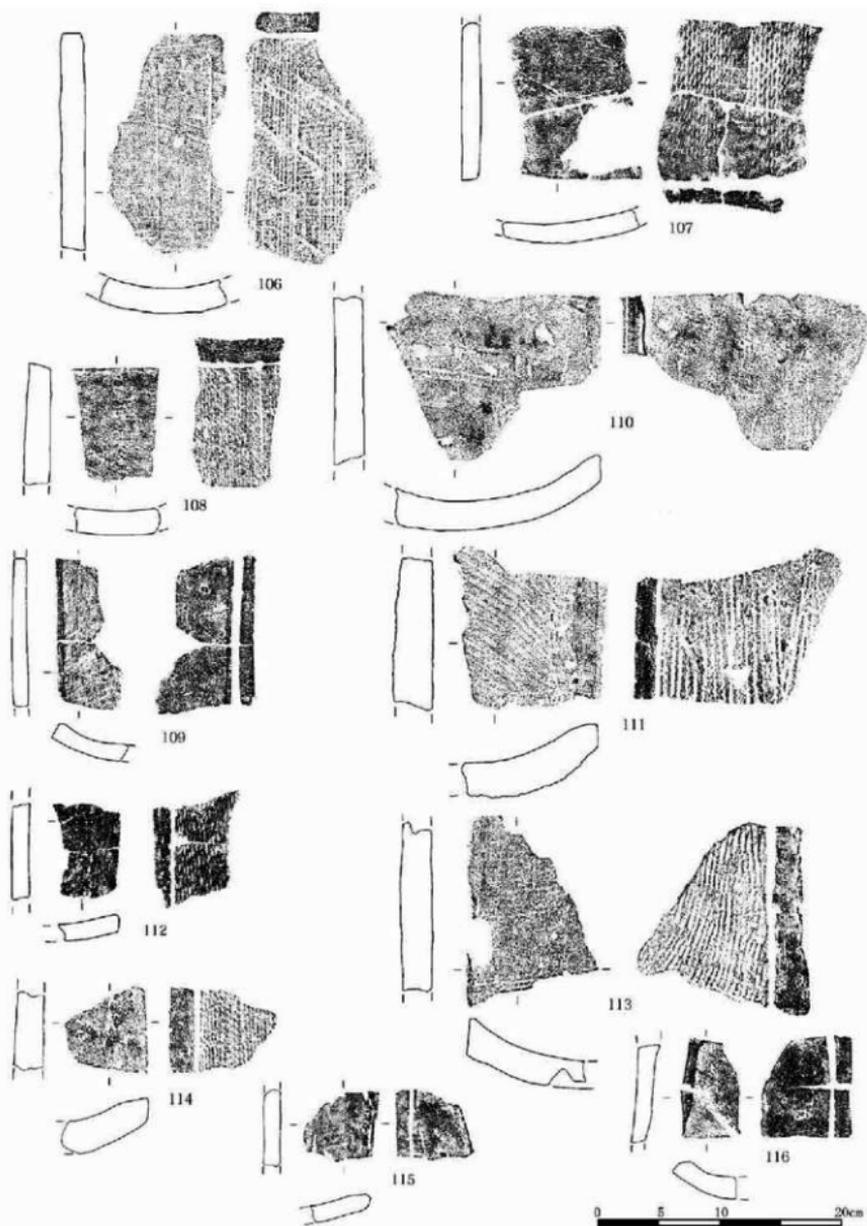
第72圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測圖(11)



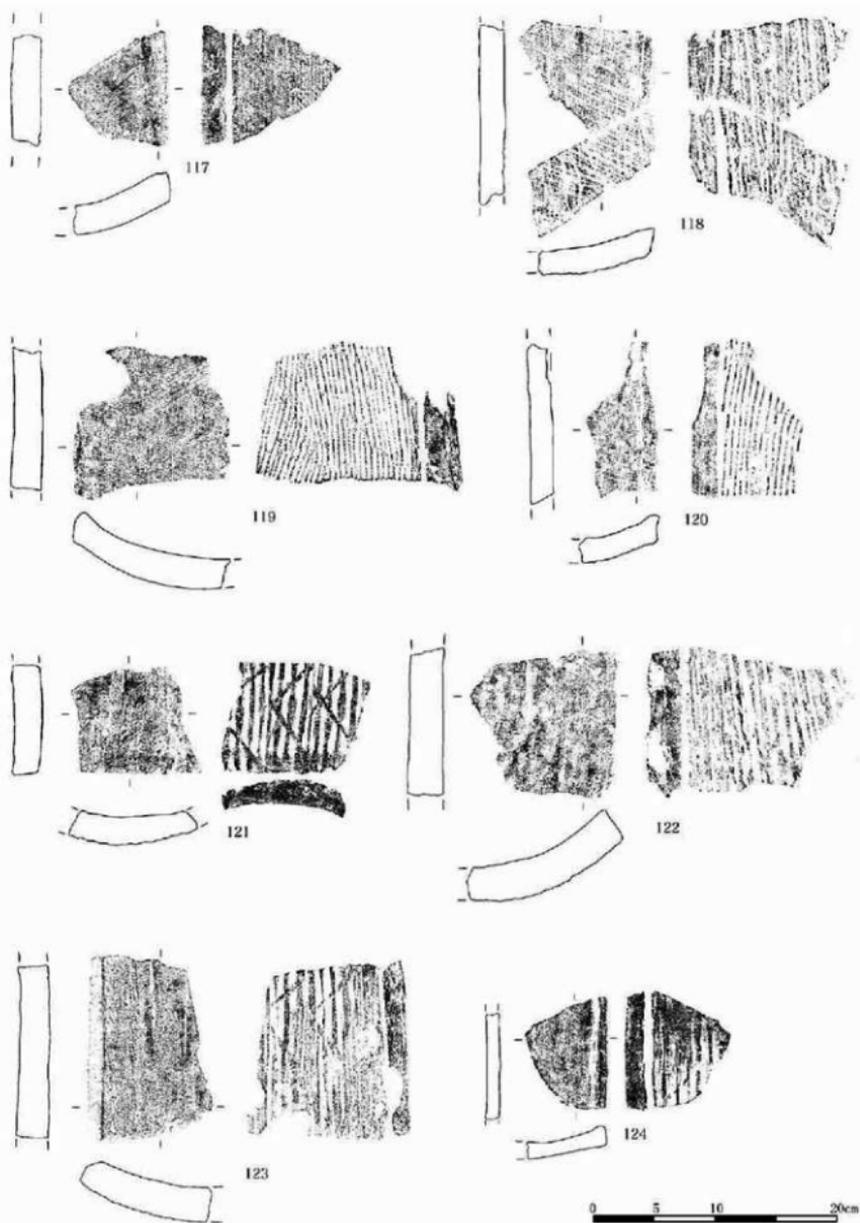
第73图 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図(12)



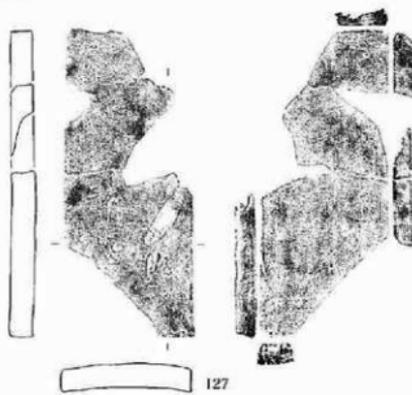
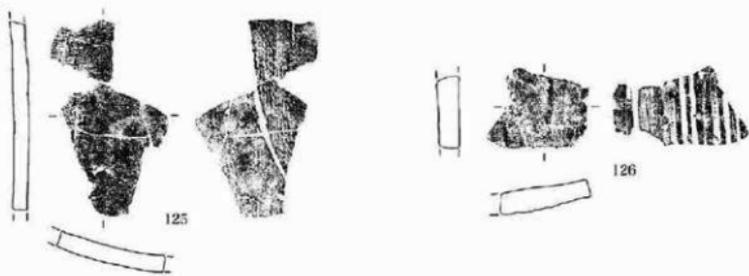
第74圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測圖(13)



第75圖 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図(14)



第76圖 史跡信濃國分寺跡僧寺北東城出土瓦実測圖(15)



0 5 10 20cm

第77図 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土瓦実測図(16)

図版	造構	造構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
62-001	G	H04c01	軒丸瓦	19.0		2.0	酸化炭素焼成	瓦当面3/4のみ	粗砂粒を含む	7.5YR5/4にぶい褐	中房蓮子下、木口状工具による撫で			八葉複弁蓮花文
62-002	G	H03f10	軒丸瓦	17.0		2.0	還元炭素焼成	瓦当面2/5	礫・粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰				戴手文
62-003	G	H04c01	軒丸瓦	18.2			酸化炭素焼成		粗砂粒を僅かに含む	7.5YR7/3にぶい褐				八葉複弁蓮花文か
62-004	G	H03g14	軒丸瓦	19.5			還元炭素焼成	瓦当面1/2	礫・粗砂粒を含む	N4/ 灰				八葉複弁蓮花文
62-005	G	G04109石敷下層	軒平瓦	8.0	9.1	5.0	酸化炭素焼成		石英粗砂粒を含む	2.5GY6/1オリーブ灰	鍛撫で	鍛削り		均整唐草文
62-006	G	N04e02	軒平瓦	11.5	6.9	5.0	還元炭素焼成		礫・粗砂粒を含む	5Y6/1灰	鍛削り	鍛撫で		均整唐草文
62-007	G	H04f05	軒平瓦	7.5	2.5	5.0	還元炭素焼成		粗砂粒を含む	5Y6/1灰	鍛削り			軒平瓦の左端部
62-008	G	H02h12	丸瓦	25.6	18.0	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部	0.5～0.2の褐色礫と粗砂粒を含む	7.5Y4/3褐	鍛撫で に布目	胴部右端	布目+鍛削り+撫で	
63-009	G	H02h12石列	丸瓦	23.3	19.5	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部	1.1～0.2の礫、粗砂粒を含む	7.5YR5/4にぶい褐	鍛削りの後鍛撫で		布目 玉縁部は布目を撫り消す鍛撫で	胴部凸面側から面取る
63-010	G	H02g13	丸瓦	22.0	14.0	2.0	還元炭素焼成	玉縁部～胴部	1.1～0.2の白色礫と白・黒・褐色の粗砂粒を含む	7.5Y4/1灰	鍛撫で		布目	凹面側から面取る
63-011	G	H02h12	丸瓦	35.5	10.8	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部	0.7～0.2の赤褐色礫と白・灰色粗砂粒を含む	5YR6/6にぶい黄褐	鍛撫で		布目 側面側と玉縁部頭部を鍛削り	凸面側から面取る
63-012	G	H04b02	丸瓦	18.2	13.0	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR5/3にぶい褐	鍛撫で		布目	
64-013	G	H04f02	丸瓦	15.4	6.6	3.0	還元炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.3の褐色礫と白・褐色粗砂粒を含む	5Y7/1灰白	鍛撫で		布目	凹面側から面取る
64-014	G	H04c01	丸瓦	13.2	7.1	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.2～0.3の礫と粗砂粒を含む	10YR6/2灰黄褐	撫で		布目	
64-015	G	H04e02	丸瓦	8.3	4.2	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y8/1灰白	撫で		布目の後撫で	
64-016	G	H03g03	丸瓦	10.7	6.3	2.0	還元炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.5～0.2の灰色礫と白・褐色粗砂粒を含む	10Y6/1灰	鍛撫で		布目	凹面側から面取る
64-017	G	H04f01	丸瓦	6.2	7.6	1.0	酸化炭素焼成	玉縁部	0.8の灰褐色・褐色礫と粗砂粒を含む	7.5YR7/6橙	撫で		布目	凹面側から浅く面取る
64-018	G	H04f02	丸瓦	9.8	3.9	1.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.2の白色礫と白・黒・褐色粗砂粒を多く含む		撫で		布目	凹面側から面取る
64-019	G	H04f02	丸瓦	14.1	7.5	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	1.0の白色礫、0.3～0.2の白・灰・褐色礫を多く含む	7.5YR7/6橙	鍛撫で		布目	
64-020	G	H04c04	丸瓦	5.8	3.5	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.3の礫、白色粗砂粒を含む	10YR2/1黒	鍛撫で		布目 横骨筋あり	凹面側から面取る 全体に保けた様子

第18表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東城出土瓦観察表(1)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長(径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
65-021	G	H03b15	丸瓦	6.6	8.3	1.7	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	白色粗砂粒を含む	7.5YR5/2灰褐	笠撫で	布目 玉縁端部を撫で	凹面側から面取る	
65-022	G	H04e01	丸瓦	11.2	9.5	3.0	還元炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y7/1灰白	撫で	布目	凹面側から浅く面取る	
65-023	G	H04c01	丸瓦	7.7	7.5	3.0	酸化炭素焼成	胴部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	10Y4/1灰	笠撫で	布目 胴部撫で		全体に保けた様子
65-024	G	G04c03	丸瓦	9.0	10.0	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.8の白色の礫と粗砂粒を含む	5YR6/6橙	笠撫で	布目		
65-025	G	G04c06	丸瓦	6.5	5.7	2.5	還元炭素焼成	胴部狭端	1.2の白色礫と白・黒色粗砂粒を含む	7.5Y6/1灰	撫で	布目	凹面側から浅く面取る	
65-026	G	H04c07	丸瓦	6.9	8.0	2.0	還元炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	0.4～0.2の白色礫と粗砂粒を含む	10Y6/1灰	撫で	布目 胴部尻撫で		
65-027	G	H03h01	丸瓦	11.0	8.0	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部	0.4～0.2の礫と粗砂粒を多く含む	5YR4/4にぶい赤褐	撫で	布目		
66-028	G	H04c01	丸瓦	8.8	14.0	1.4	酸化炭素焼成	胴部狭端	白・灰・暗褐色粗砂粒を含む	7.5YR6/3にぶい褐	笠撫で	布目+撫で付け		
66-029	G	H02g14	丸瓦	5.7	8.5	2.1	酸化炭素焼成	広端部	褐色粗砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄褐	笠撫で	布目	凹面側から浅く面取る	
66-030	G	H04c01	丸瓦	12.2	7.8	2.0	酸化炭素焼成	玉縁部	0.7～0.2の灰色礫と灰・白色粗砂粒を含む		笠撫で	布目	凹面側から浅く面取る	
66-031	G	F04108	丸瓦	7.8	7.2	1.4	酸化炭素焼成	玉縁部～胴部狭端	白色粗砂粒を含む	5YR5/6明赤褐	撫で	布目	凹面側を面取り	
66-032	G	H04d01	丸瓦	4.9	4.0	1.1	還元炭素焼成	玉縁部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐	撫で	布目		
67-033	G	H02h12石列	丸瓦	9.4	18.1	2.0	酸化炭素焼成	胴部	0.5～0.2の礫と粗砂粒を含む	7.5YR5/2灰褐	笠撫で	布目	凹面側から面取る	
67-034	G	H02g12石列	丸瓦	23.5	16.8	2.0	酸化炭素焼成	胴部	0.5～0.2の礫と粗砂粒を含む	5YR5/4にぶい赤褐	撫で	布目 一部撫で付け	凹面側から面取る	
67-035	G	H02g13石列	丸瓦	22.3	12.5	3.0	酸化炭素焼成	胴部	0.5～0.2の赤褐・灰色礫と白色粗砂粒を含む	10Y6/4にぶい黄橙	灰衝を木口状工具による横位の撫で、頭側を笠撫で	布目 横骨痕あり 側面側を笠削り	凸面側から面取る	
67-036	G	H04f02	丸瓦	23.8	10.2	1.7	還元炭素焼成	胴部広端	0.2の褐色礫・粗砂粒を含む	7.5Y6/1灰	笠削りの後撫で	布目		
67-037	G	H03a15	丸瓦	9.5	8.6	2.0	酸化炭素焼成	胴部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR6/4にぶい橙	撫で	布目		
67-038	G	H04c01	丸瓦	24.3	8.1	2.0	還元炭素焼成	胴部広端	1.0～0.2の白色礫と粗砂粒を含む	N6/ 灰	撫で	布目 横骨痕あり	凹面側から面取る	
68-039	G	H04e03	丸瓦	4.4	2.6	2.0	還元炭素焼成	胴部広端	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙	笠撫で	布目	凸面側から面取る	
68-040	G	H04c01	丸瓦	4.5	4.8	1.6	酸化炭素焼成	玉縁部	褐色粗砂粒を含む	10YR6/1褐灰	撫で	布目 側面側を笠削り	凸面側から狭く面取る	

第19表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(2)

図版	造構	造構番号	瓦種	長(径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考	
68-041	G	H02F15	丸瓦	9.3	5.4	1.8	還元炎焼成	胴部	粗砂粒を含む	10Y4/1灰	撫で	布目	凹面側から浅く面取る		
68-042	G	H04c01	丸瓦	5.5	4.5	1.9	酸化炎焼成	玉縁部	石英・白色粗砂粒を含む	10YR4/2灰黄褐	撫で	布目	凹・凸両面側から狭く面取る		
68-043	G	H04a08	丸瓦	9.5	5.8	1.9	酸化炎焼成	胴部広端	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい褐	撫で	布目	凹・凸両面側から浅く面取る		
68-044	G	H04g01	丸瓦	5.9	4.3	2.1	還元炎焼成	玉縁部	0.3の褐色礫と灰・褐色粗砂粒を含む	7.5Y7/1灰白	撫で	布目	周縁部撫で		
68-045	G	H04F01	丸瓦	8.3	7.0	2.1	還元炎焼成	胴部広端	0.8~0.2の礫と褐色粗砂粒を含む	N3/暗灰	撫で	布目	凹側と側面側を差削り	凸面側から面取る	
68-046	G	G04b08	丸瓦	12.5	6.6	1.9	酸化炎焼成	胴部広端	白色粗砂粒を含む	5YR6/6褐	撫で	布目	凸面側を面取り		
68-047	G	H04F02	丸瓦	7.7	6.8	1.9	酸化炎焼成	胴部広端	0.6灰褐色礫と白・褐色粗砂粒を含む	N4/灰	撫で	布目	凸面側から僅かに面取る	全体に採けた様子	
69-048	G	G03g01	丸瓦	13.7	6.7	1.9	還元炎焼成	胴部広端	0.3~0.2の礫と粗砂粒を含む	10YR5/3にぶい黄橙	撫で	布目	凹側と側面側を差削り	凹面側から浅く面取る	
69-049	G	G04b08	丸瓦	5.0	7.2	2.1	酸化炎焼成	胴部広端	褐色の0.3の礫・粗砂粒を含む	2.5YR6/4にぶい褐	造状工具による横位の撫で	布目	側面側を差削り		
69-050	G	G04106	丸瓦	9.1	7.4	2.1	酸化炎焼成	胴部	0.3の礫・白色・褐色粗砂粒を多く含む	7.5YR4/4褐	撫で	布目	凹面側を面取り		
69-051	G	H03g15	丸瓦	8.9	4.0	2.1	酸化炎焼成	胴部広端	0.3~0.2の褐色礫と粗砂粒を含む	N3/暗灰	撫で	布目	凹面側から浅く面取る	全体に採けた様子	
69-052	G	H03a15	丸瓦	7.8	5.5	1.9	酸化炎焼成	胴部背の一部	褐色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい褐	撫で	「y」の水平反転の刻み	欠損	—	
69-053	G	H04F01	平瓦	35.5	12.0	2.0	還元炎焼成	体部左側	0.7~0.2の灰色礫と灰・白色の粗砂粒を含む	N5/灰	調叩き目	布目	広端側と側面側撫で	凸面側から面取る	
69-054	G	H04F02	平瓦	24.5	12.0	2.1	酸化炎焼成	広端部	灰・白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR5/4にぶい褐 ~10YR3/1黒褐	調叩き目	布目	広端・側面側寄りは差撫で	凸面側から面取る	
70-055	G	H04c03	平瓦	16.2	13.5	1.9	酸化炎焼成	狭端部	石英・褐・白色の粗砂粒を含む	10YR5/25灰黄褐	調叩き目	差撫で	—		
70-056	G	H04F02	平瓦	18.6	8.8	1.9	酸化炎焼成	狭端部	0.9~0.2の白色礫と粗砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄	平行文の叩き	布目			
70-057	G	G04108	平瓦	6.1	19.0	2.0	酸化炎焼成	狭端部	石英・白色・褐色粗砂粒を含む	10YR5/3にぶい黄橙	調叩き目	布目の後撫で			
70-058	G	H04c03	平瓦	21.5	14.5	2.1	酸化炎焼成	広端部	褐・灰・白色の粗砂粒を多く含む	2.5Y2/1黒	調叩き目	差撫で	凹面側から浅く、凸面側から深く面取る	側面中位に半円形の切り込みを焼成後に穿つ	
70-059	G	H04F02	平瓦	11.7	7.3	1.9	酸化炎焼成	狭端部	0.7の褐色礫と褐・白色の粗砂粒を含む	7.5YR4/4褐	調叩き目	布目	凹面側から面取る		
70-060	G	H04b05	平瓦	8.5	8.6	1.9	酸化炎焼成	広端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙	調叩き目	広端・側面側寄りには差撫で	布目	凸面側から面取りした後凹面側から面取る	

第20表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(3)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長(径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
70-061	G	C04109	平瓦	11.1	12.0	2.2	還元炎焼成	狭端部	粗砂粒を含む	5YR3/1オリーブ灰	縄叩き目	布目・側面削削り	凹面・凸面両側から面取る	端部に一条の捺刻
70-062	G	H03J14	平瓦	21.6	12.5	1.7	還元炎焼成	広端部	0.2の白色礫と石英・白色粗砂粒を含む	N3/暗灰	縄叩き目	布目・広端・側面部寄りは鍛撫で		
71-063	G	H04J02	平瓦	19.0	9.5	1.8	酸化炎焼成	狭端部	0.5~0.2の褐色礫と白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR2/1黒	縄叩き目	布目+撫で	凸面側から面取る	
71-064	G	H02g15	平瓦	20.0	11.1	1.8	還元炎焼成	狭端部	粗砂粒を僅かに含む	5YR7/6褐~5/6明赤褐	縄叩き目	布目	凹面側から浅く、凸面側から深く面取る	
71-065	G	G0-Im09石敷下層	平瓦	9.3	7.8	2.0	還元炎焼成	狭端部	粗砂粒・礫を含む	5Y6/2灰オリーブ	縄叩き目	布目	凹面・凸面両側から面取る	
71-066	G	H04e01	平瓦	8.4	5.9	1.8	還元炎焼成	広端部	白・灰色の粗砂粒を含む	N5/灰	縄叩き目+木口状工具による撫で	布目・狭端・側面部寄りは鍛撫で	凹面側から浅く、凸面側から広く面取る	
71-067	G	H03F15	平瓦	19.9	14.0	1.9	酸化炎焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	10YR6/1褐灰	縄叩き目	鍛撫で	—	
71-068	G	G04I08	平瓦	19.8	14.8	2.5	酸化炎焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	5YR4/1褐灰	縄叩き目	布目・側面削削り	凹面側から面取る	端部に半円の窪みを付ける
71-069	G	G04J06	平瓦	10.9	6.3	1.7	酸化炎焼成	広端部	白色外の粗砂粒を多く含む	7.5YR5/4にぶい褐	縄叩き目	布目・側面削削り	凸面側面取り	
72-070	G	F04I09	平瓦	11.8	12.2	2.3	酸化炎焼成	広端部	石英・白色外の粗砂粒を多く含む	7.5YR5/3にぶい褐	縄叩き目	布目の後撫で	凸面側から面取り後凸面側から狭く面取る	
72-071	G	H04f12	平瓦	9.5	5.9	1.8	還元炎焼成	広端部	0.5~0.2の白色礫と白色粗砂粒を含む	7.5Y6/1灰	叩き(工具形状不明)	布目	凸面側から面取り後凸面側から面取る	
72-072	G	H02g13	平瓦	10.8	10.5	2.2	酸化炎焼成	狭端部か	褐色粗砂粒を含む	5YR5/6明赤褐	縄叩き目	布目	凹面側から浅く、凸面側から深く面取る	
72-073	G	H04e01	平瓦	7.5	9.0	1.9	酸化炎焼成	広端部	白・褐色の粗砂粒を含む	5Y6/1灰	縄叩き目	布目+撫で	凹面側から浅く、凸面側から広く面取る	
72-074	G	G04m03	平瓦	8.5	6.8	1.7	還元炎焼成	狭端部	0.7の灰褐色礫と灰・褐色粗砂粒を含む	10Y4/1灰	縄叩き目・狭端・側面部寄りは鍛撫で	布目・狭端・側面部寄りは鍛撫で	凸面側から面取りした後凹面側から面取る	
72-075	G	H03g01	平瓦	13.8	12.6	2.3	酸化炎焼成	狭端部	0.4~0.2の白色礫・粗砂粒を含む	10YR4/4褐	縄叩き目	鍛撫で		
72-076	G	H04g02	平瓦	11.5	10.5	2.0	還元炎焼成	狭端部	灰・白色粗砂粒を含む	N4/灰	縄叩き目	布目・広端・側面部寄りは鍛撫で	凸面側から面取る	
72-077	G	H04f06	平瓦	9.1	8.6	2.2	酸化炎焼成	広端部	0.8~0.2礫と粗砂粒を含む	10YR5/4にぶい黄褐	縄叩き目	布目	凹面側から面取り後、凸面側から面取る	
72-078	G	H03F15	平瓦	11.1	12.8	1.9	還元炎焼成	狭端部	0.7の礫と白色粗砂粒を含む	N5/灰	鍛撫で	布目		端面に布目
72-079	G	H02h15	平瓦	5.7	8.5	2.2	酸化炎焼成	狭端部	灰・褐色粗砂粒を僅かに含む	2.5Y5/3黄褐	縄叩き目の後撫で	布目	凹面側から浅く広く、凸面側から深く面取る	
72-080	G	H04c01	平瓦	4.2	6.0	1.6	還元炎焼成	狭端部	白・石英の粗砂粒を含む	10YR2/1黒	縄叩き目	布目	凸面側から面取りした後凹面側から面取る	

第21表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(4)

図版	造構	造構番号	瓦種類	長(径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
73-081	G	H04c02	平瓦	8.3	11.4	1.4	酸化炭焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	7.5YR3/1黒褐	縄叩き目	布目	凸面側から面取る	
73-082	G	G04109	平瓦	6.9	8.7	1.6	還元炭焼成	狭端部	褐色粗砂粒を含む	7.5Y6/1灰	縄叩き目	布目・側面側、端部側並削り	凸面側から面取り後凸面側から狭く面取る。	
73-083	G	H04c03	平瓦	5.7	6.7	1.4	還元炭焼成	広端部	0.5の白色礫を含む	N6/ 灰	縄叩き目	布目の後撫で	凸面側から面取る	
73-084	G	H04j03	平瓦	7.7	8.0	2.1	酸化炭焼成	狭端部	0.2の白色礫、褐色粗砂粒を多く含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	布目 側面側を並削り	凸面側から面取る	
73-085	G	H04f02	平瓦	6.1	6.5	2.1	酸化炭焼成	狭端部	1.1の褐色礫と灰、白色の粗砂粒を含む	5Y5/1灰	縄叩き目	布目	凹面側から浅く、凸面側から広く面取る	
73-086	G	H04f01	平瓦	6.0	5.6	1.9	還元炭焼成	狭端部	0.4の白色礫と粗砂粒を含む	N6/ 灰	撫で	撫で	凹面・凸面両側から面取る	
73-087	G	H04c02	平瓦	5.4	6.7	1.4	酸化炭焼成	狭端部	白・褐色・石英の粗砂粒を含む	10YR3/2黒褐	縄叩き目	布目 側面部寄りは撫で	凸面側から狭く、凹面側から広く面取る	
73-088	G	H03g15	平瓦	7.7	5.8	2.1	酸化炭焼成	広端部	1.1の褐色礫と褐・白色の粗砂粒を含む	10YR8/2灰白	縄叩き目	布目+撫で	—	
73-089	G	H04j02	平瓦	6.7	5.5	1.8	還元炭焼成	狭端部	灰褐色粗砂粒を僅かに含む	N5/ 灰	縄叩き目 側面部寄りは撫で	布目 狭端・側面部寄りは撫で	凸面側から面取る	
73-090	G	G04m10	平瓦	5.8	4.6	1.4	還元炭焼成	広端部	粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	撫で	布目	凹面側から面取る	
73-091	G	H04c02	平瓦	6.2	4.5	1.3	還元炭焼成	狭端部	0.3の褐色礫と粗砂粒を含む	10YR6/1褐灰	撫で	布目	凹面・凸面両側から面取る	
73-092	G	G04m04	平瓦	6.2	4.5	1.1	端部酸化炭焼成	広端部	0.2の白色礫と白・褐色粗砂粒を含む	5YR6/4にぶい橙～5/1褐灰	撫で	布目	凹面側は深く凸面側は浅く面取る	
73-093	G	G04m12	平瓦	4.2	5.7	1.4	還元炭焼成	狭端部	白色粗砂粒をごく僅かに含む	N2/ 黒	撫で	撫で	撫で	端面も撫でており、あるいは装飾瓦か
73-094	G	H04g03	平瓦	6.0	5.3	1.4	還元炭焼成	体部	0.4～0.2の褐色礫と粗砂粒を含む	10Y6/1灰	撫で	布目	凹面から浅く面取る	焼き締めが甘い
73-095	G	H03f03	平瓦	9.7	8.9	2.0	酸化炭焼成	狭端部	白・赤褐色の粗砂粒を含む	10Y5/3にぶい黄橙	縄叩き目の後並削り	布目の後並撫で	凹凸両面から面取る	
73-096	G	F04109	平瓦	14.4	9.6	2.0	還元炭焼成	狭端部	雲母・白色粗砂粒を含む	2.5Y3/1黒褐	縄叩き目	布目		
74-097	G	F04m06	平瓦	8.5	7.3	2.6	酸化炭焼成	狭端部	石英外の粗砂粒を含む	7.5YR5/4にぶい褐	平行文工具による叩き	布目	凸面側から面取り	
74-098	G	H03z	平瓦	10.7	12.0	1.8	還元炭焼成	広端部	白色粗砂粒を含む	N5/ 灰	押型文	布目 広端・側面側並撫で	凹面側から面取る	
74-099	G	H02b14	平瓦	11.6	13.3	1.9	還元炭焼成	狭端部	白・灰褐色粗砂粒を含む	7.5Y2/1黒	押型文	並撫で	凹面側から短く面取る	
74-100	G	H04c02	平瓦	8.5	6.6	1.8	還元炭焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	7.5YR4/1褐灰	押型文	布目 側面側を並削り	凹面側から面取る	

第22表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(5)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長(径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
74-101	G	F04r08	平瓦	8.7	6.5	2.2	酸化炭素焼成	広端部	白色粗砂粒を含む	7.5YR6/1褐灰	押し型文	布目		
74-102	G	H04r03	平瓦	10.3	6.5	1.9	還元炭素焼成	広端部	白・黒・褐色の礫と粗砂粒を含む	10Y5/1灰	押し型文	布目 削り	側面側を擦	凸面側から面取る
74-103	G	H03h13	平瓦	9.8	10.5	2.2	酸化炭素焼成	広端部	橙・灰・白色粗砂粒を含む	7.5YR7/3にぶい橙	縄叩き目	擦撫で	凹面側から浅く面取る	
74-104	G	H04r01	平瓦	8.7	5.0	2.2	還元炭素焼成	広端部	0.3の白色礫と白色粗砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰	木口状工具による撫で	擦撫で	凸面側から面取る	
74-105	G	H02h15	平瓦	15.5	13.5	2.8	酸化炭素焼成	広端部	1.0の褐色礫と白色粗砂粒を含む	5Y5/1灰	縄目叩き 広端側 削り	布目 広端側擦及び木口状工具による撫で		凹面側から面取る
75-106	G	H03e14	平瓦	18.5	10.5	1.9	酸化炭素焼成	端部	0.7~0.3の褐色礫と白・褐色の粗砂粒を多く含む	10YR5/2灰黄褐	削り剤の後縄叩き目	布目+端部側擦撫で 掃帚痕 (W=1.5)を残す。		
75-107	G	H04d01	平瓦	12.8	11.1	1.9	酸化炭素焼成	狭端部	0.3の礫と褐色粗砂粒を多く含む	10YR7/4にぶい黄橙	縄叩き目+撫で	布目の後撫で		
75-108	G	H03d14	平瓦	10.0	7.0	2.2	酸化炭素焼成	端部	石英・白・褐色粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	布目+撫で		
75-109	G	H04d01	平瓦	12.2	6.3	1.9	還元炭素焼成	体部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR2/1黒	撫で	布目		凹面・凸面両側から浅く面取る
75-110	G	H02h12	平瓦	13.5	16.5	2.8	酸化炭素焼成	体部	白色粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	布目の後撫で		凹面側から浅く、凸面側から深く面取る
75-111	G	G04106	平瓦	11.7	15.5	3.2	還元炭素焼成	体部	白色粗砂粒を含む	2.5YR6/6橙	縄叩き目	布目・側面側削り		造状工具による凹面側の面取り
75-112	G	H04c12	平瓦	7.8	5.0	1.9	酸化炭素焼成	体部	白色粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	擦撫で		凹面側から面取り後凸面側から面取る
75-113	G	F04109	平瓦	15.5	10.0	2.2	酸化炭素焼成	体部	粗砂粒を多く含む	5YR5/4にぶい赤褐	縄叩き目	布目		凸面側から面取り
75-114	G	H04g02	平瓦	7.1	6.7	2.2	酸化炭素焼成	体部	白・褐色の粗砂粒を多く含む	2.5Y7/3浅黄	縄叩き目	布目の後擦撫で		造状工具による凹面側の面取り
75-115	G	H04r01	平瓦	5.6	5.7	1.9	還元炭素焼成	体部	白色粗砂粒を多く含む	N3/ 暗灰	削り	布目 側面側撫で		凸面側から面取る
75-116	G	H04c02	平瓦	8.3	5.5	1.9	還元炭素焼成	体部	白色粗砂粒を僅かに含む	5Y4/1灰	撫で	布目+撫で		凹面側から面取る
76-117	G	H04g02	平瓦	9.7	9.0	2.2	酸化炭素焼成	体部	0.3の白色礫・粗砂粒を含む	10YR6/1	縄叩き目	擦撫で		造状工具による凹面側の面取り
76-118	G	H03h14	平瓦	17.6	11.0	2.1	酸化炭素焼成	体部	0.2の白色礫と白・褐色粗砂粒を含む	2.5Y4/1黄灰~4/4 オリーブ褐	縄叩き目	布目		凸面側から面取る
76-119	G	F04109	平瓦	12.5	12.7	2.2	酸化炭素焼成	体部	粗砂粒を多く含む	7.5YR5/2灰褐	網目状工具による叩き	布目		凸面側から面取り後凸面側から狭く面取る
76-120	G	E04109	平瓦	13.3	7.0	2.2	酸化炭素焼成	体部	石英外の粗砂粒を含む	7.5YR5/6明褐	平行文工具による叩き	布目		凸面側から面取り

第23表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(6)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長(㎝)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
76-121	G	H02g14	平瓦	8.5	8.5	2.3	還元炭焼成	狹端部	白・灰褐色粗砂粒を含む	2.5Y4/1灰	押型文	布目+蹴撫で	—	自然釉がかかり光沢を帯びる
76-122	G	H02h14	平瓦	12.0	13.5	3.0	酸化炭焼成	体部	0.2の灰色礫と灰・白色粗砂粒を含む	2.5YR6/8橙	押型文	蹴撫で	—	
76-123	G	H02g14	平瓦	15.2	11.0	2.6	酸化炭焼成	体部	1.5, 0.6の礫と灰褐色粗砂粒を含む	10YR4/2灰黄橙	押型文	蹴撫で	凹面側から面取る	
76-124	G	H04f01	平瓦	9.1	6.2	1.9	還元炭焼成	体部	白色の0.3の礫と粗砂粒を含む	10YR4/1褐灰	押型文	布目	凹面側から面取り後凸面側から面取る	
77-125	G	H04c02	平瓦	15.6	8.4	1.3	還元炭焼成	体部	白色の0.2の礫・粗砂粒を含む	10Y6/1灰	襷叩き目の後、区画沈澱を無し区画外(内)を磨り消す	布目+蹴撫で		
77-126	G	H04c01	平瓦	6.5	7.7	1.9	還元炭焼成	体部	0.7, 0.2の礫と白色粗砂粒を含む	N2/黒	押型文	布目+撫で		
77-127	G	G04c06	掬斗瓦	25.3	10.6	1.9	酸化炭焼成	2/3	白・褐色粗砂粒を含む	5YR6/5赤褐～黒	撫で	撫で	—	
77-128	G	H04e01	掬斗瓦	33.3	13.8	1.9	酸化炭焼成	広端部	白色粗砂粒を含む	N2/黒	襷叩き目	布目	(右)凹面側から短く面取る(左)直に面取る	平瓦を平裁して焼成。全体に保けた様子

第24表 史跡信濃国分寺跡僧寺北東域出土瓦観察表(7)

第2節 僧寺南大門の調査

1 調査の概要

H14～15に国分僧寺北東域で確認できなかった国分僧寺の築地塀もしくは区画施設を、南大門の確認とともにを行うため、平成16年6月下旬から調査に着手した。国分寺の正面玄関ともいべき南大門が確認できれば、これにつながる築地塀や区画施設が確実に存在するはずで、ここから改めて僧寺全体の築地塀や区画施設を追い出すように確認していくことを目的にした。

南大門については、その基壇や雨落溝、礎石は残存せず、その根石と考えられる集石が10箇所確認された。建物規模としては、間口3間(10.5m)、奥行き2間(6.6mもしくは6.9m)の八脚門である。

この南大門はおそらく瓦葺の建物であったはずだが、この調査区から相当量のまとまった瓦の出土はない。こうした条件から考えられることは、(1)この南門が未完成であった、(2)礎石や瓦を含めた主要材を他の施設のために移築した、(3)屋根材の主が楡皮や楠板葺きで、棟の一部を瓦葺とした、という三つの選択肢である。現段階では、礎石が皆無であることから、(2)の可能性が大きいと思われる。

この南大門と接続する築地塀、あるいは他の区画施設については、残念ながらまたもや確認できなかった。表土を除去していく途中や、調査区東壁の土層観察でも、築地塀の痕跡は認められなかった。ただ、南大門の東側で築地塀が想定されるライン上、SD-02の上土が、他に比してかなり堅緻な叩き状を呈しており、あるいは築地塀下部の名残かとも思われるが、その延長線上に痕跡はない。

この南大門の東側にのびるべき築地塀想定ライン上に、SB-01が検出されている。この住居址は、その出土遺物から12世紀後期の遺構と考えられる。したがって、この頃には築地塀はおろか、僧寺の区画施設が存在せず、「国の華」としての国分寺の偉容の面影を追うことは困難である。このことは、第一章でも述べた創建信濃国分寺の廃絶時期を裏打ちする資料となっている。また、南大門につながる道路遺構についても、明確な遺構・プランの確認はできなかった。

南大門の根石間を縦方向に貫くように幅約2.4m、深さ0.7mの暗渠排水遺構SD-01がある。根石との時間的な前後関係では、暗渠の溝を掘った後に根石の下端レベルまで人頭大～拳大の川原石を詰め、根石を据え、暗渠溝の上を砂や土で埋める、といった工法であり、明かに根石据え付け以前に暗渠排水を設けている。特に、SD-01の構築は、ただ単に川原石を放り込んだというわけではなく、暗渠全体を八つのブロックに分けて作り上げている様子が、遺構検出時から見て取れた。

本調査では、このブロックを北から



PL47 南大門跡調査区全景(真上)

A,B,C,D,E,F,G,Hに分割して、裁ち割りをを行った。その結果、Aブロックの南端では、石垣のように面を丁寧につくりあげているほか、南大門の礎石根石であるSX-06と切り合うEブロック南端でも同様の処理をした後、川原石を詰める量を他よりも少なくして、上面に厚く土を盛っている。このSD-01については、南大門の直下を通るという事情のせいから、1ブロックごとに溝を掘り上げ、中に石を積める、という作業を北から徐々に、しかも丁寧に進めている様子が、各ブロックの境の様相の変化から見て取れる。このほか、



PL.48 根石SX-06と暗渠排水SD-01のセクション(南東)

Cブロック南端西側には、SD-01に流れ込むような水路状遺構SX-12がある。

また、SD-02の試掘トレンチ際では、暗渠底部に川原石でトンネル状の石組みを造り、水捌けの効率化を図っている。また、これと平行する同規模の暗渠排水遺構SD-03の排水溝内の石も、下部に人頭大の石を丁寧に詰め、その上から拳大の石を詰めるといった作業工程によっており、通常の暗渠排水溝よりも丁寧に作られている。

さらに、調査区北半部を東西方向の暗渠排水遺構が埋め尽くしている。こちらは、前述の南北方向のものとは比べると、やや雑な仕事に見えるが、その配置からは、地形のうねりに合わせたプランをもち、また、隣り合わせる溝との距離からは、2~3本間隔で掘り上げては石を詰めて埋め戻し、続けてその隣の溝を掘る、という作業が必要であったことが伺える。

これらの暗渠排水遺構からの出土遺物は、創建期の瓦や少量の土師・須恵器片を含んでおり、あるいは、金堂や講堂などの主要伽藍で破損した瓦や、基壇・雨落ち溝に用いるべく準備した川原石の不要なものを廃棄しながら造ったものかとも思われる。

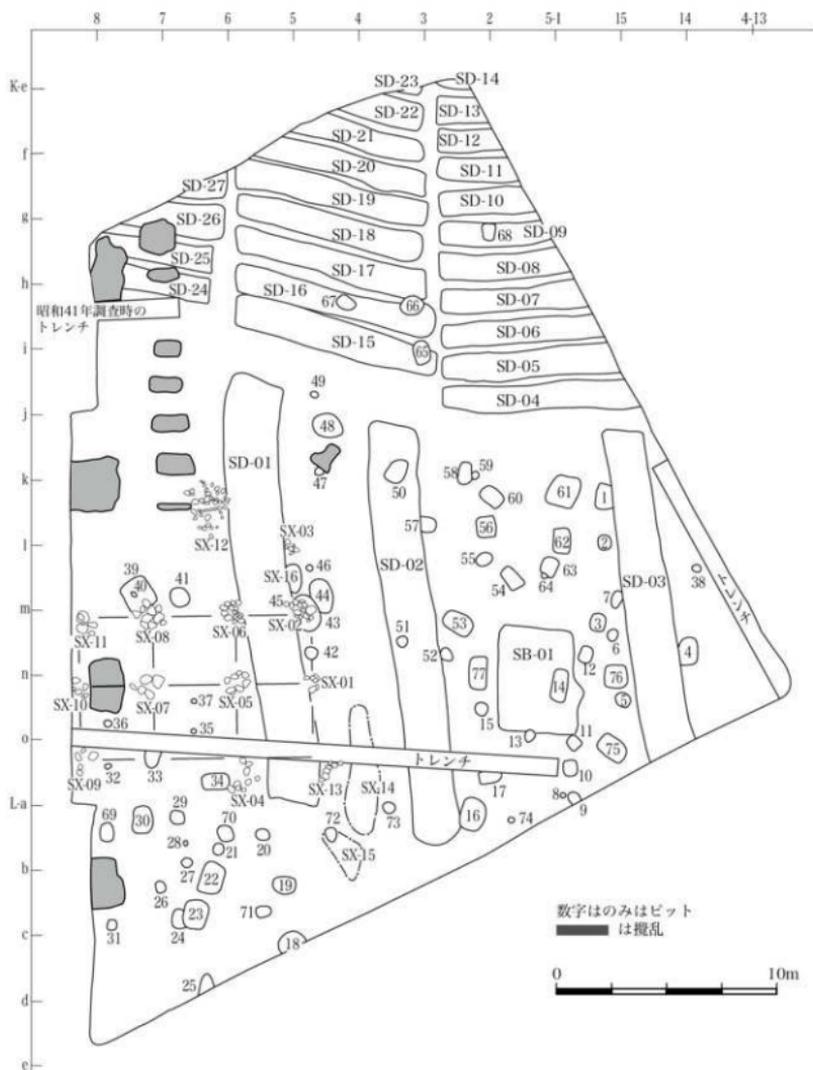
地形的に見ると、南大門の建っていた箇所が段丘南端の微高地となり、南大門から中門の間は低地となり、北の金堂に向かって再び高さを増していく。したがって、この東西方向につくられた暗渠排水は、低湿地化する箇所の排水を意図して造成されたものと考えられる。また、南北方向の暗渠排水は、南大門の雨落水や、北側の低地の水を寺域外に吐き出す機能を有していたと思われる。

また、国分寺の造営にあたっては、金堂や講堂などの中心建物が第一義として急がれたはずであり、建物の造営工程でも、国分寺の南側を流れる千曲川からの資材の搬入ルートを確認すれば、南大門の造営は、国分寺造営工程の中でも、終盤期に実施されたものと思われ、そのことがこの暗渠排水遺構から出土する瓦に反映されているものと思われる。

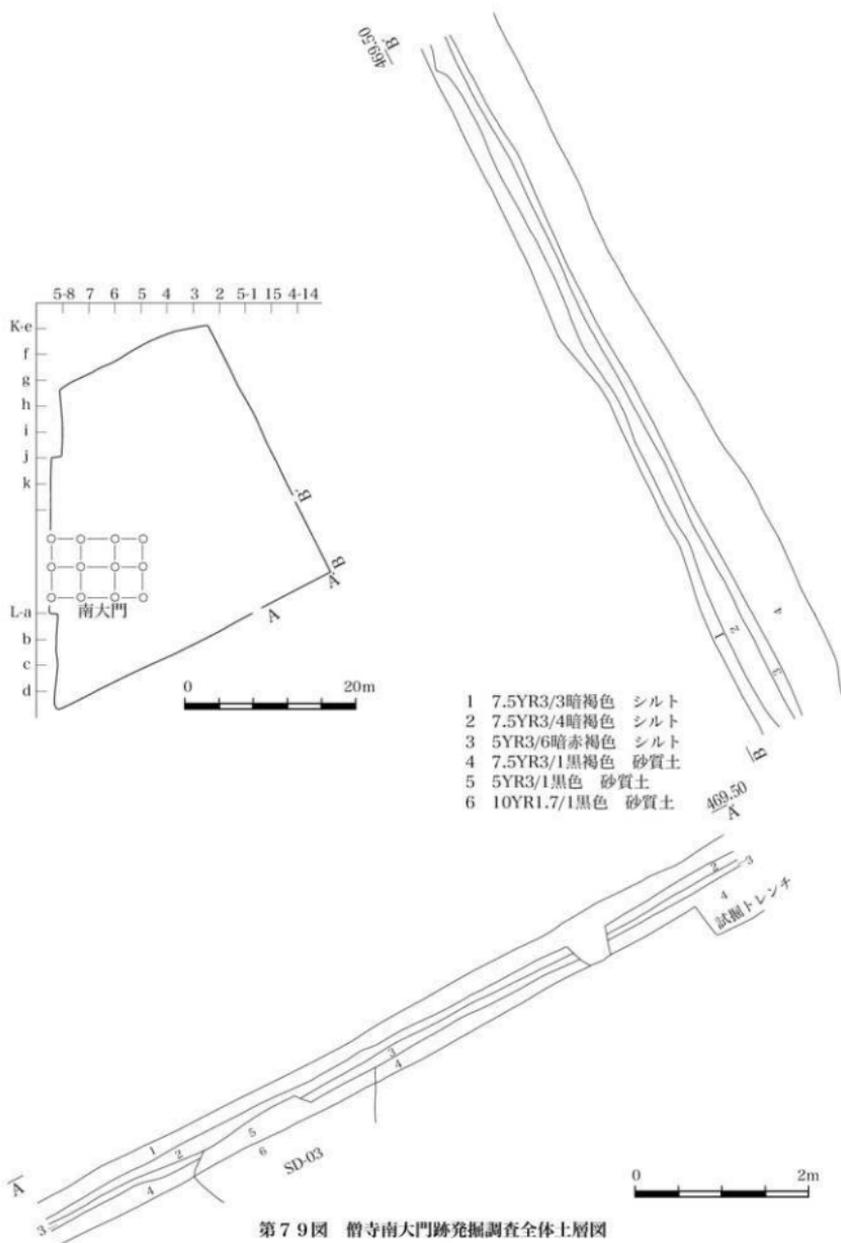
以上のことから、本調査で検出された暗渠排水遺構は、僧寺の金堂や講堂などの造営に係る資材搬入ルートや、僧寺完成後の寺域内の泥滞防止のための装置と推定され、その造作時期は、金堂・講堂等の造営とほぼ並行して始められ、南大門造営着手時までの間と思われる。

今回の調査により、信濃国分寺跡の調査開始(1963)から40年間にわたり、想定はされていたものの不明確であった僧寺南大門の姿がようやく明らかとなった。また、南の区画施設も不明確なものの、寺域の南限についても、かなり確実な線を引き始める状態にまで漕ぎ着けることができた。

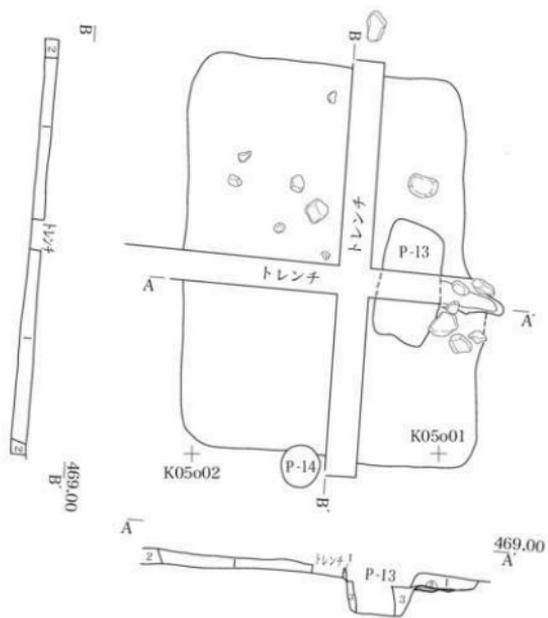
2 検出遺構



第78図 僧寺南大門跡発掘調査遺構配置図



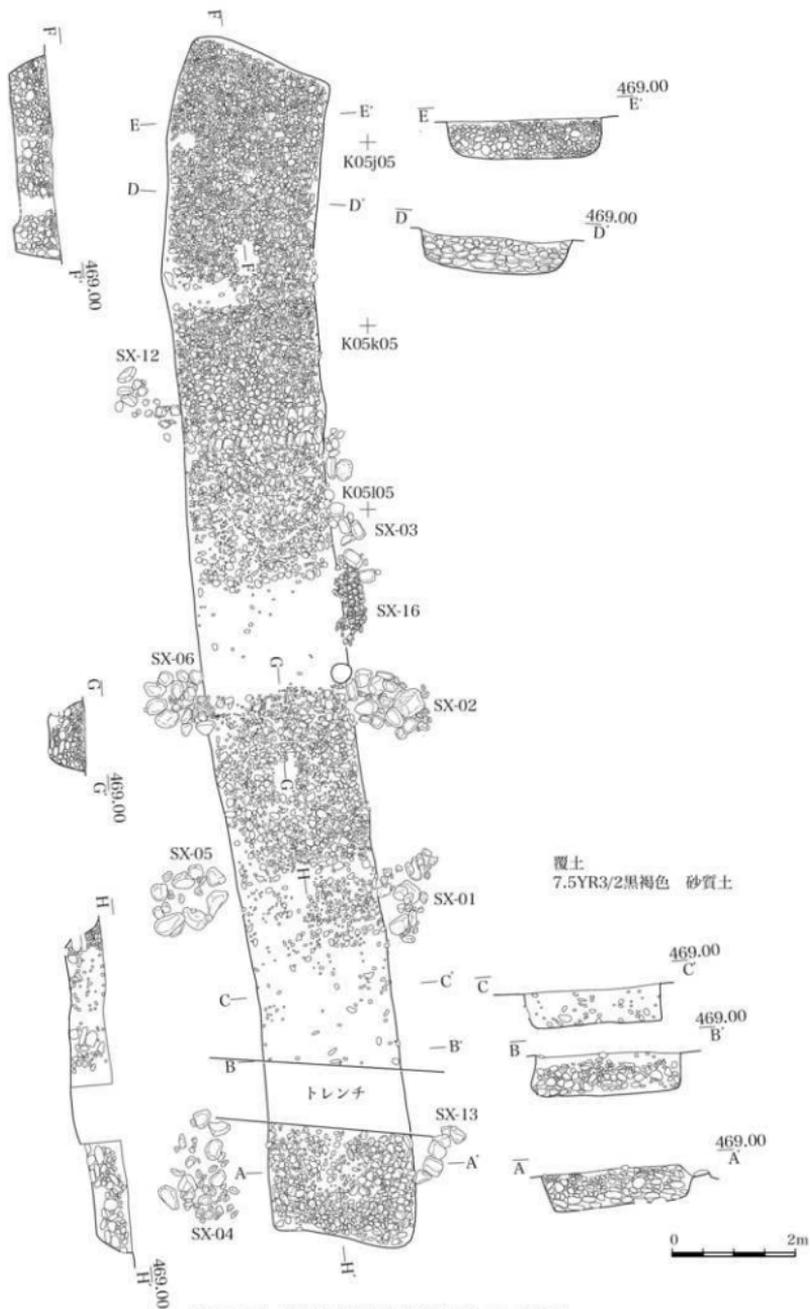
第79図 僧寺南大門跡発掘調査全体上層図



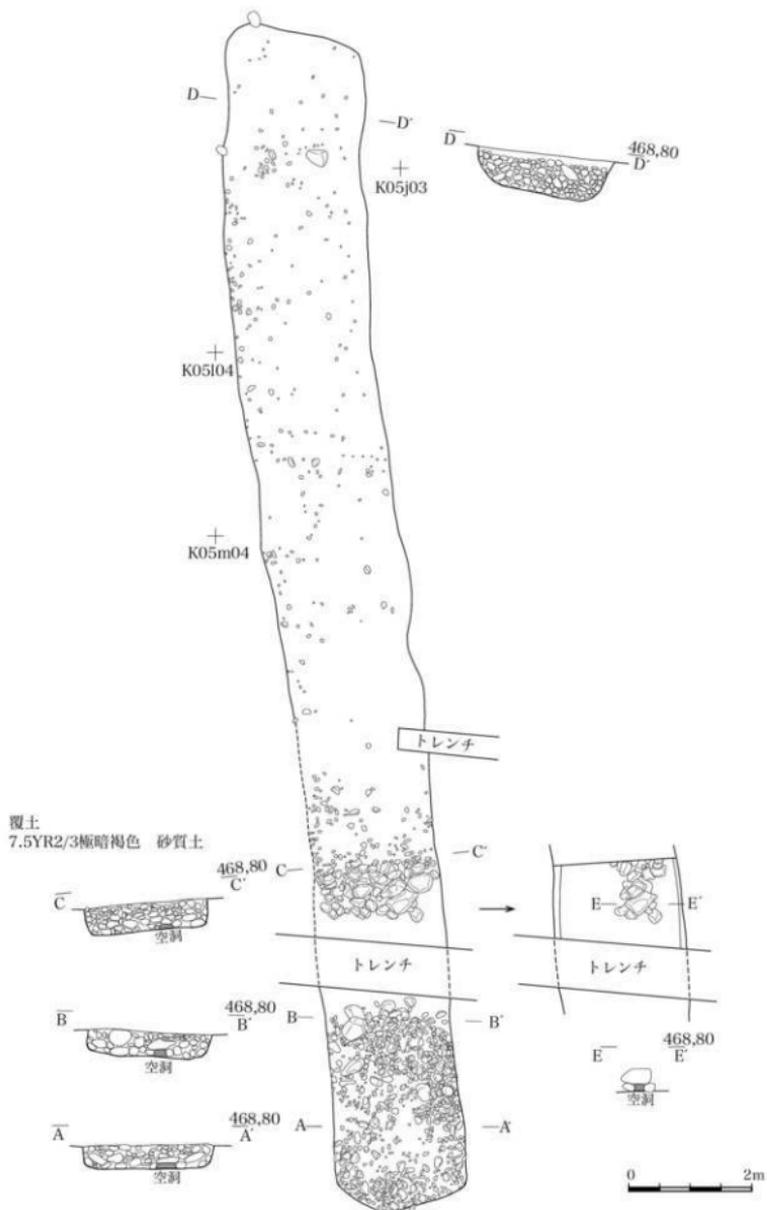
- 1 7.5YR2/3極暗褐色 砂質土
- 2 7.5YR3/3黒褐色 砂質土 (やや硬い)
- 3 7.5YR2/2黒褐色 砂質土



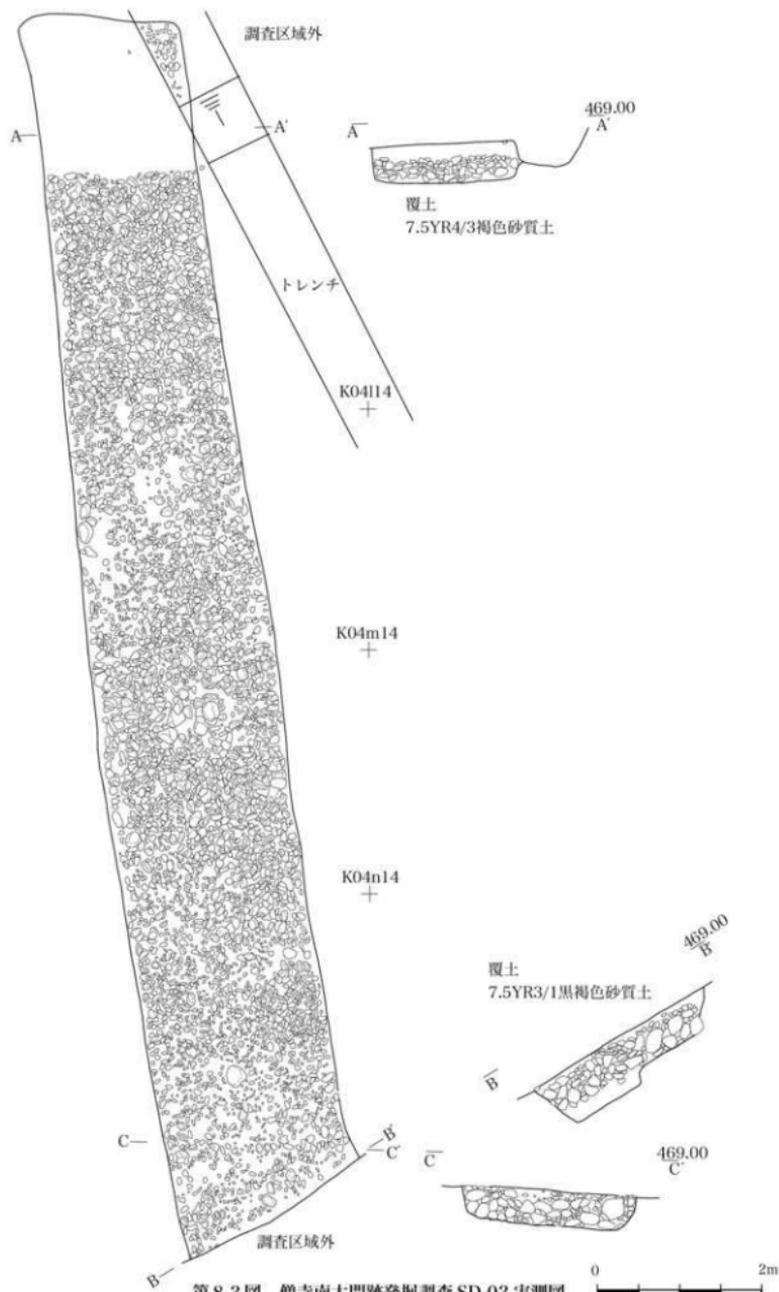
第 8 0 図 僧寺南大門跡発掘調査 SB-01 実測図



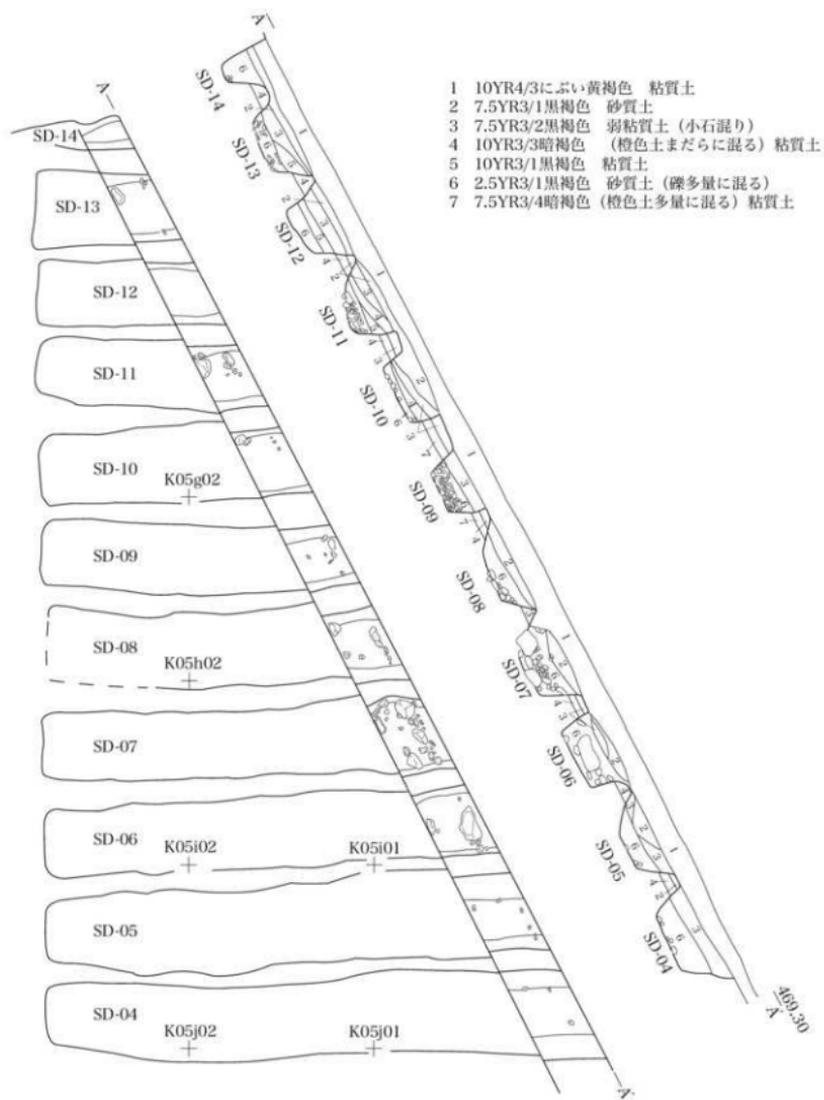
第81図 僧寺南大門跡発掘調査SD-01実測図



第82図 僧寺南大門跡発掘調査SD-02実測図



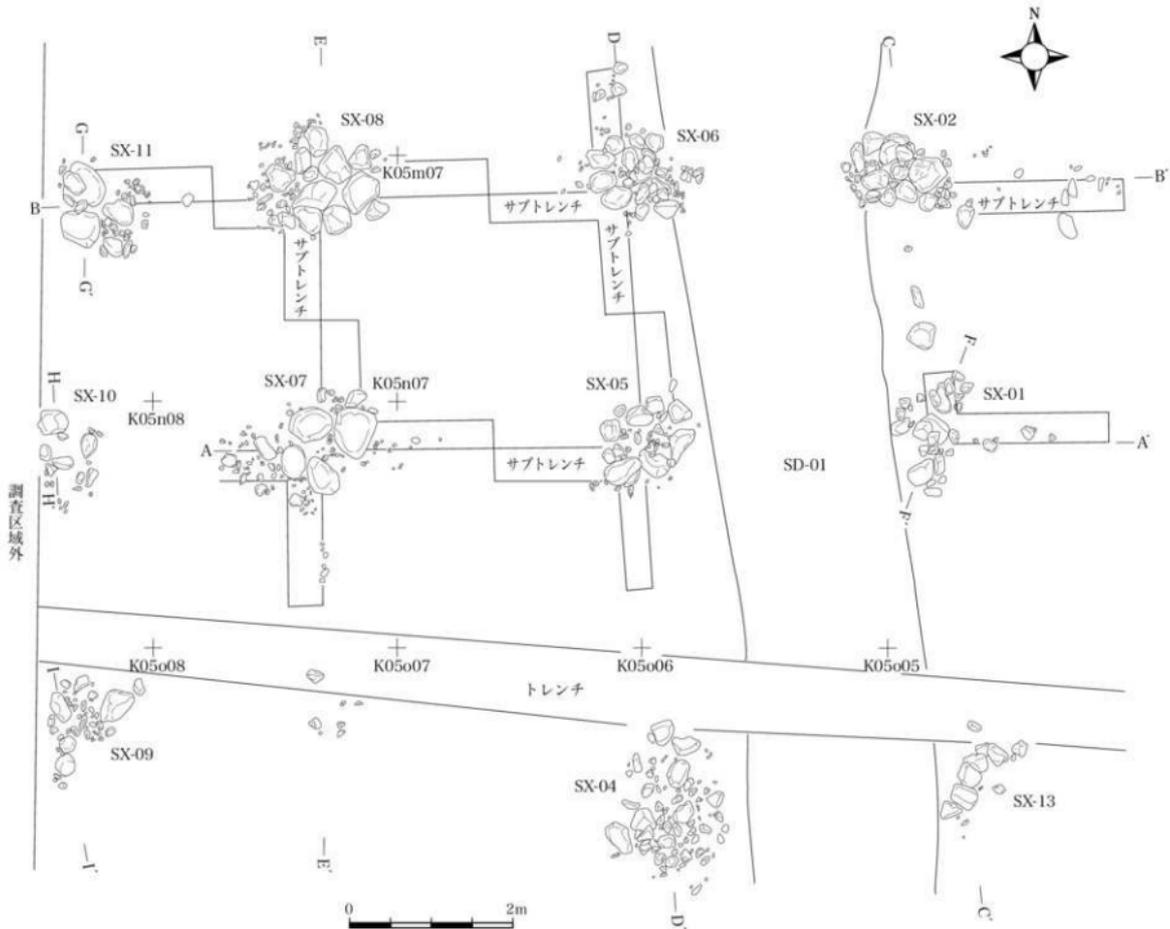
第83図 僧寺南大門跡発掘調査SD-03実測図

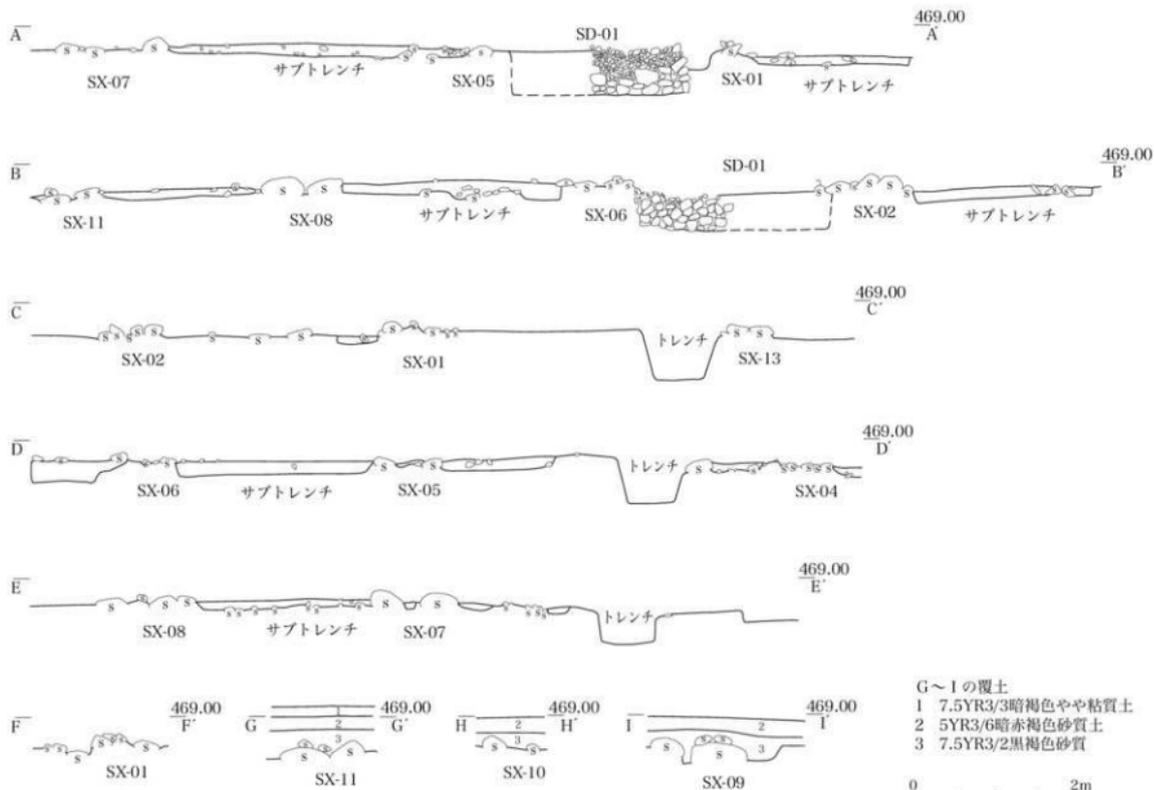


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質土
- 2 7.5YR3/1黒褐色 砂質土
- 3 7.5YR3/2黒褐色 弱粘質土 (小石混り)
- 4 10YR3/3暗褐色 (橙色土まだらに混る) 粘質土
- 5 10YR3/1黒褐色 粘質土
- 6 2.5YR3/1黒褐色 砂質土 (礫多量に混る)
- 7 7.5YR3/4暗褐色 (橙色土多量に混る) 粘質土

第84図 僧寺南大門跡発掘調査SD-04～SD-14実測図

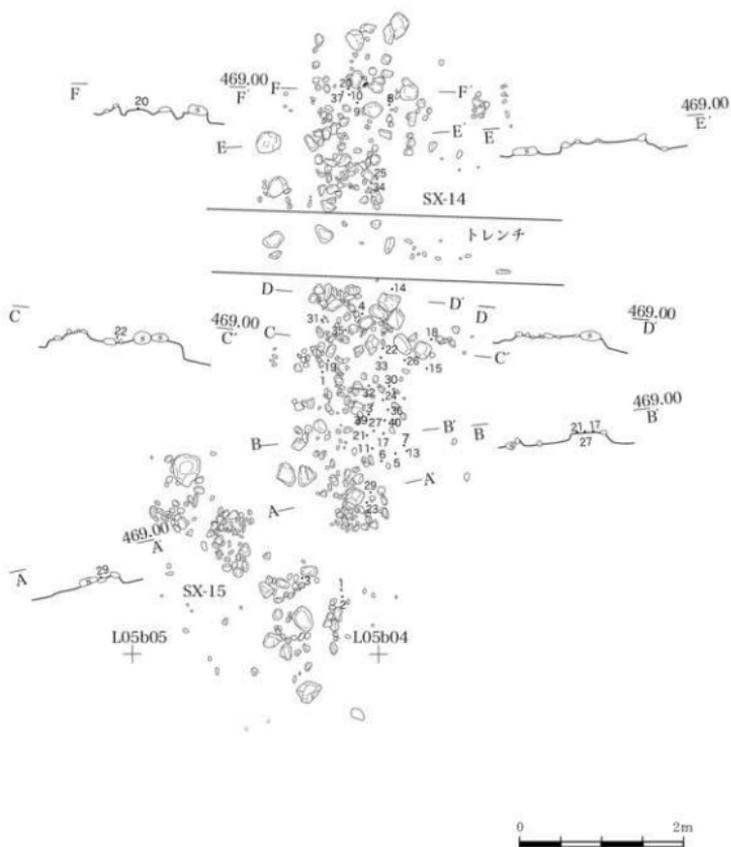
第86図 龍寺南大門跡発掘調査SX-01,02,04~11,13(南大門基石)実測図







第 8 8 図 僧寺南大門跡発掘調査 SX-03,12,16 尖測図

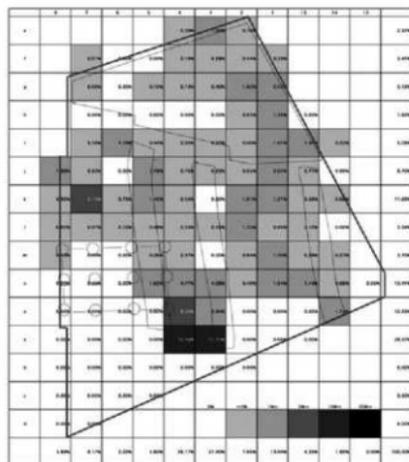


第89図 僧寺南大門跡発掘調査SX-14,15実測図

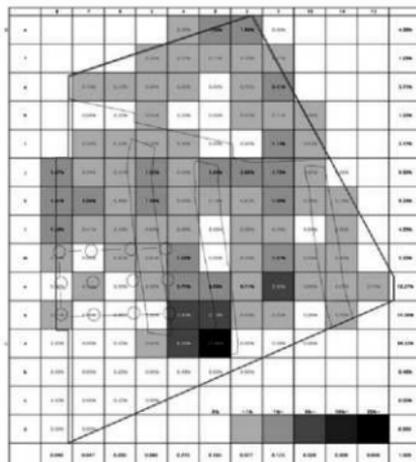
(Fと数字は瓦片の出土位置を示す)

遺構	遺構No	長軸(長さ)	短軸(幅)	深さ	平面形態	主軸方位	備考	遺構	遺構No	長軸(長さ)	短軸(幅)	深さ	平面形態	主軸方位	備考
SD	01	4.85	3.60	0.20	圓丸長方形	N-4°-E		SD	22	3.80	1.33	0.53			
SD	01	19.70	2.40	0.70				SD	23	1.00	不明	未調査			
SD	02	19.00	2.20	0.65				SD	24	4.00	1.12	0.67			
SD	03	15.40	2.20	0.50				SD	25	5.20	1.20	0.72			
SD	04	19.05	1.33	0.70				SD	26	4.80	1.60	0.53			
SD	05	18.10	1.47	0.51				SD	27	2.20	不明	未調査			
SD	06	7.40	1.21	0.67				SX	01	1.46	1.00	0.36			南大門根石
SD	07	6.65	1.19	0.70				SX	02	1.45	0.90				南大門根石
SD	08	5.80	1.20	0.43				SX	03	1.10	0.75				
SD	09	5.10	1.15	0.53				SX	04	1.80	1.76				南大門根石?
SD	10	4.60	1.20	0.56				SX	05	1.32	1.02				南大門根石
SD	11	3.75	1.08	0.70				SX	06	1.42	1.20	0.46			南大門根石
SD	12	2.80	1.08	0.70				SX	07	1.40	1.20				南大門根石
SD	13	2.35	1.30	0.60				SX	08	1.60	1.35				南大門根石
SD	14	1.60	不明	0.60				SX	09	1.30	1.16				南大門根石
SD	15	9.60	1.60	0.67				SX	10	1.00	0.75				南大門根石
SD	16	9.30	1.40	0.61				SX	11	1.10	1.10				南大門根石
SD	17	9.10	1.47	0.51				SX	12	1.90	0.70				水路道橋か
SD	18	8.60	1.35	0.51				SX	13	1.40	0.65				南大門根石?
SD	19	9.00	1.30	0.56				SX	14	6.50	1.80				瓦が多量に出土
SD	20	8.10	1.30	0.56				SX	15	3.10	1.10				
SD	21	6.20	1.12	0.53				SX	16	1.20	1.10				敷石状を呈する

第25表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門跡発掘調査遺構観察表



南大門跡丸瓦出土分布図



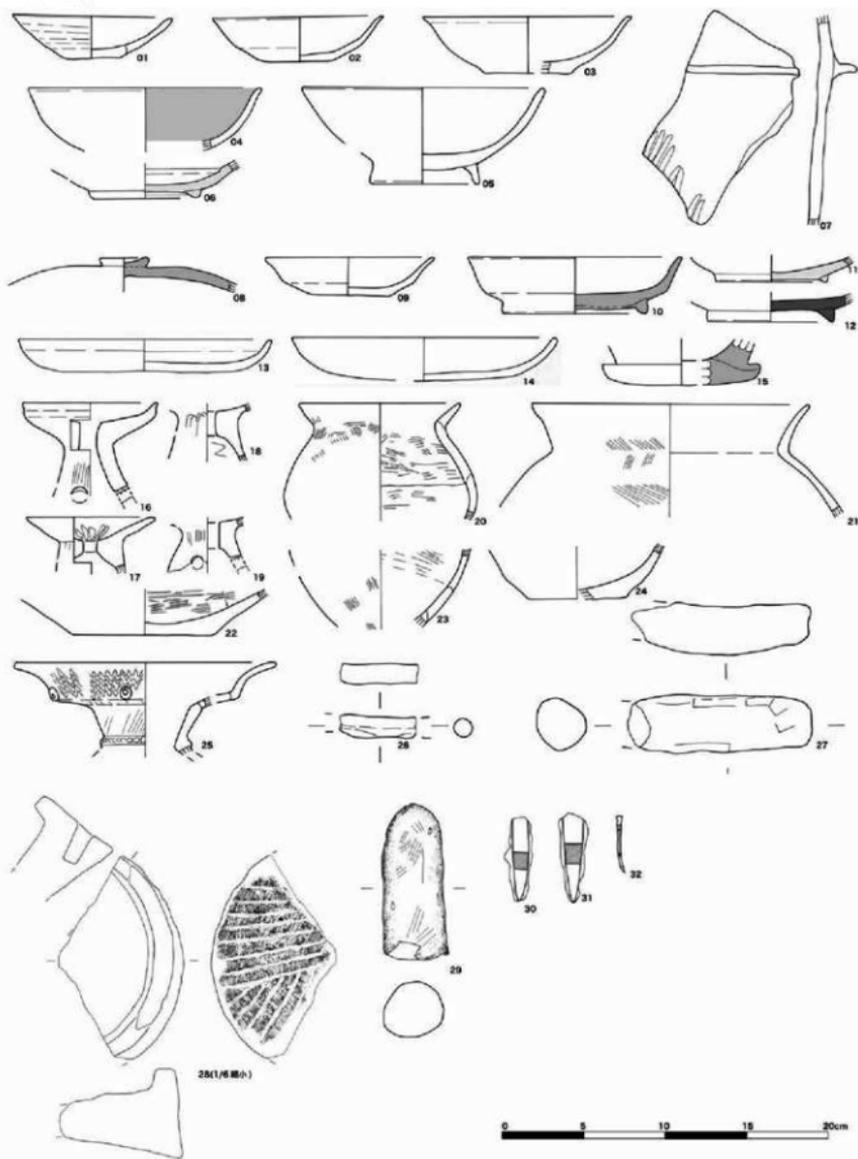
南大門跡平瓦出土分布図

上の図は、南大門跡の調査における丸瓦と平瓦の分布比率（グリッド出土量/総量）を濃淡で表したものである。いずれも、南大門の南東側に集中して出土していることが見て取れる。なお、出土総量は、丸瓦が58.545kg、平瓦が126.107kg、計186.652kgである。便宜上、最大率は20%以上としているが、もっとも半の高いL05a03グリッドにおいて、丸瓦は10.368kg=17.71%、平瓦は31.479kg=24.96%である。

南大門建物の構造や処分について、この分布状態からみると、総瓦葺きの建物が現地で倒壊してそのまま放置された、という様子は見取れない。植物性の屋根の棟の部分にだけ瓦を葺いた建物であったか、もしくは総瓦葺きの建物を瓦・礎石を含めて他の施設に転用した、と考えるのが適当と思われる。L05a03グリッドに集中したのは、建物の処分の際に、南東隅に瓦材を集めたことが遺ったものと思われる。

この南東隅は、いうまでもなく寺域の外である。単なる建物材の廃棄処分であるとなれば、当然の作業箇所といえる。一方、転用の際の作業箇所となれば、転用先が僧寺内部ではないことを示すように思われる。

3 出土遺物



第90図 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土遺物実測図

図章	遺構	遺構番号	遺物種別	遺物群種	口径	器高	直径	残存	胎土	構成	外面色調	内面色調	成形・形態	外面調整	内面調整	備考
90-01	SB	01B	土師器	坏	9.7	2.8	3.4	完存	0.7の緑と粗砂粒を僅かに含む	良好	10R7/2にぶい黄緑	10R7/2にぶい黄緑	粘土層を積み上げた後輪轆成形 体部外面に成形時の稜線が深く残る。	(口縁～体部)輪轆による狭で (底部)回転糸切り	輪轆による狭で	
90-02	SB	01B	土師器	坏	10.5	2.9	4.0	口縁部1/2,体 ～底部完存	石英・赤色ほかの粗砂粒を含む	良好	10R7/2にぶい黄緑	10R7/2にぶい黄緑	輪轆成形 体部は中位で僅かに 屈折する	(口縁～体部)輪轆による狭で (底部)回転糸切り	輪轆による狭で	
90-03	SB	01B	土師器	坏	12.8	3.5	8.2	1/3	0.3の緑、赤色ほかの粗砂粒を含む	良好	10R7/4にぶい黄緑	10R7/4にぶい黄緑	輪轆成形 平底から体部は内湾 して立ち上がる	(口縁～体部)輪轆による狭で (底部)回転糸切り	輪轆による狭で	
90-04	SB	01B	土師器	坏	14.2	4.0	-	口縁～体部1/4	0.2の緑、粗砂粒を含む	良好	10R6/6埋	黒	体部は内湾して立ち上がり、口 縁は僅かに外反する。	輪轆による狭で	横位の筋書き 黒色処理	
90-05	SB	01B	土師器	碗	15.0	5.9	6.5	口縁～体部 1/5,底部完存	石英ほかの粗砂粒を多く含む	良好	2.SY4/1灰	黒	輪轆成形 付け高台	(口縁～体部)輪轆による狭で (高台部)横位の狭で(底部)回 転糸切り	輪轆による狭での後横位の筋 書き 黒色処理	
90-06	SB	01B	灰輪陶器	皿	-	2.2	6.5	体部下位～底 部1/4	精良	良好	2.SY7/1灰白	2.SY7/1灰白	輪轆成形 付け高台 内面底部 から体部への変換点で段を成す	(体部)輪轆による狭で(高台 部)横位の狭で(底部)回転糸切 り	輪轆による狭で	
90-07	SB	01B	土師器	羽釜	-	13.0	-	胴部上位と胴 部の一部	0.3の緑、石英ほかの粗砂粒を多く含む	良好	5R5.6明赤褐	7.SY6/4にぶい埋		(胴部上位・胴部)横位の狭で (胴部下位)平行文工具による 叩き	(胴部上位・胴部)横位の狭で (胴部下位)叩き跡	
90-08	G	SA-03	須恵器	蓋	3.0	1.8	-	掴み部完存,天 井部上位1/6	白色ほかの粗砂粒を含む	良好	5R6/1灰	5R6/1灰	凹形のボタン状を呈する掴み部	(掴み部)横位の狭で(天井部最 上位・下位)輪轆による狭で (天井部上位)輪轆による範囲	輪轆による狭で	
90-09	G	K04t05	土師器	坏	10.4	2.4	4.7	口縁～体部 2/3,底部完存	雲石ほかの粗砂粒を含む	良好	10R7/3にぶい黄緑	7.SY7/3にぶい埋	輪轆整形 平底から体部は中位 に僅かな段を有して開く	(口縁～体部)輪轆による狭で (底部)回転糸切り	輪轆による狭で	
90-10	G	K05102	須恵器	坏	13.0	3.5	8.7	3/4	粗砂粒を含む	良好	10R4/1糊灰	10R4/1糊灰	輪轆整形・付け高台 高台部か ら底部器厚の1/3を付ける	(口縁～体部)輪轆による狭で (高台部)横位の狭で(底部)輪 轆による屈折りの後外調部を 狭で	輪轆による狭で	
90-11	G	K05402	灰輪陶器	碗	-	1.5	6.8	体部最下位～ 底部3/4	精良	良好	2.SY7/1灰白	2.SY7/1灰白	輪轆成形 付け高台	(体部)輪轆による狭で(高台 部)横位の狭で(底部)回転糸切 り	輪轆による狭で	
90-12	G	K05t01	緑輪陶器	碗	-	1.7	7.8	体部最下位～ 底部3/4	精良	良好	2.SY8/4淡黄-緑輪	緑輪	輪轆成形 付け高台	(体部～高台部)輪轆による狭 で(底部)狭で	輪轆による狭で 底部に幅0.3 の円形凹線を施す	
90-13	G	K05t02-tr	土師器	皿	15.4	2.0	11.0	7/8	0.2の黒色緑、粗砂粒を含む	良好	5R5.6明赤褐	5R5.6明赤褐		(口縁～体部)横位の狭で(底 部)狭で	(口縁～体部)横位の狭で(底 部)長筋りの後置狭で	2004-02と同一規格か
90-14	G	K05t02-tr	土師器	皿	16.4	2.7	10.2	1/3	0.2の黒色緑、粗砂粒を含む	良好	7.SY6/6埋	7.SY6/6埋		(口縁～体部)横位の狭で(底 部)狭で	(口縁～体部)横位の狭で(底 部)長筋りの後置狭で	2004-01と同一規格か
90-15	G	K05.t05	須恵器	鉢	-	2.8	9.0	体部最下位 1/4,底部1/2	粗砂粒を僅かに含む	良好	M/ 灰	10Y5/1灰	厚い凹盤状の底部	(体部)輪轆による狭で(底部) 筋狭で	狭で	

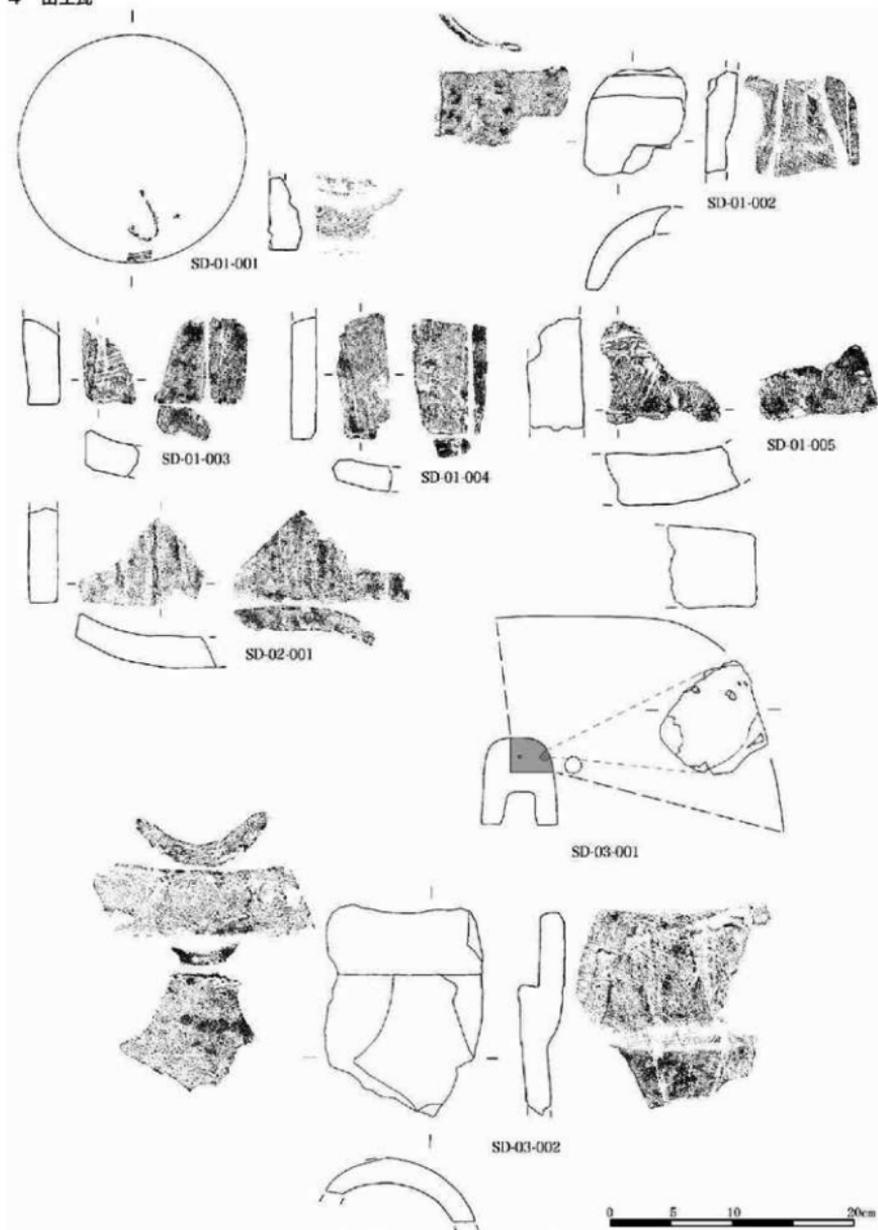
第2表 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土遺物観察表(1)

図版	遺構	遺構番号	遺物種類	遺物群種	口径	長さ	厚さ	構造	胎土	構成	外側色調	内側色調	成形・形状	外周調整	内周調整	備考
90-16	G	K05e01	土師器	器台	8.4	5.9	-	器受部へ脚柱部上位完存	粗砂粒を多く含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	器受部は赤く、外面に浅い段を巡らす。脚柱部には円形の孔を3ヶ穿つ。	(器受部上位) 胎土工具による横位の狭で付け(器受部下位へ脚柱部) 横位の差磨き	(器受部上位) 横位の狭で(器受部下位) 放射状の差磨き(脚柱部) 横位の差磨き	
90-17	G	K04e15	土師器	器台	7.8	3.9	-	器受部口縁1/6、器受部主体へ底部3/4、脚柱部最上位	粗砂粒を多く含む	良好	5YR5/6明赤褐～3.5暗赤褐	5YR5/6明赤褐	小振りな器受部の体部は外形して大きく開く	(器受部) 横位の差磨き?(脚柱部) 横位の差磨き	(器受部) 放射状の差磨き(脚柱部) 横位の差磨き	
90-18	G	K04114	土師器	器台	-	3.9	-	器受部底部へ脚柱部上位完存	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐		(脚柱部) 横位の差磨き	(器受部) 放射状の差磨き(脚柱部) 横位の差磨き	
90-19	G	K05e05	土師器	器台	-	3.4	-	脚柱部上位3/4	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	脚柱部に円形の孔を3ヶ穿つ	(脚柱部) 横位の差磨き?	(器受部) 差磨き?(脚柱部) 横位の差磨き	器面が荒れる
90-20	G	K04e13	土師器	甕	9.8	7.2	-	口縁部3/4、胴部上位1/2	石英・雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR5/6明褐	7.5YR6/6暗	粘土層積み上げ、最大径を有する胴部から頸部は「くの子」状に外反して立ち上がる	(口縁部・胴部中間) 横位の狭で(胴部上位) 刷毛状工具による狭で	(口縁部) 横位の狭で(胴部) 刷毛状工具による狭で	
90-21	G	K05e07	土師器	甕	16.8	7.0	-	口縁へ胴部上位1/8	石英ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR4/2(こぶい)赤褐～3/1黒褐	5YR5/3(こぶい)赤褐	頸部は「くの子」状に外反する	(口縁部) 横位の狭で(胴部) 刷毛状工具による狭で	横位の狭で	
90-22	G	Z	土師器	甕	-	2.7	8.9	胴部最下位へ底部完存	石英・雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR5/2灰褐	7.5YR4/1褐灰	底部外面の器厚が厚く、上げ感気味となる	狭で	刷毛状工具による狭で	
90-23	G	K04e03	土師器	甕	-	5.0	-	胴部下位	石英・雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	5YR6/6暗	7.5YR6/4(こぶい)暗	粘土層積み上げ	縦・斜位の狭で	刷毛状工具による狭で	
90-24	G	K05e08	土師器	甕	-	3.3	6.2	胴部下位へ底部1/2	0.2の縦、雲母ほかの粗砂粒を多く含む	良好	10YR4/2灰黄褐	2.5YR6/3(こぶい)黄		(胴部下位) 横位の狭で(底部) 差調整	横位の狭で	
90-25	G	K05e07	土師器	甕	15.8	5.7	-	口縁部3/4	雲母ほかの粗砂粒を含む	良好	2.5YR6/6暗	5YR6/6暗	二重口縁の下段下位には縁を横にした凸部、上段下位にはホックの凸状の筋付文を6ヶ(4ヶ残存)巡らす。	(口唇部) 横位の狭で(口縁上段) 刷毛状工具による放射状(口縁下段) 刷毛状工具による斜位の狭で	(口縁上段) 横位の狭で(口縁下段) 差磨き	
90-26	G	K04114	土製品		(長さ)4.6	(厚さ)1.4			石英ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR5/4(こぶい)褐			狭で		瓶底部の一部か?
90-27	G	K05e05	土製品		(長さ)11.3	(厚さ)1.2			白色ほかの粗砂粒を含む	良好	7.5YR6/4(こぶい)暗			狭で差磨き		瓶の把手か?

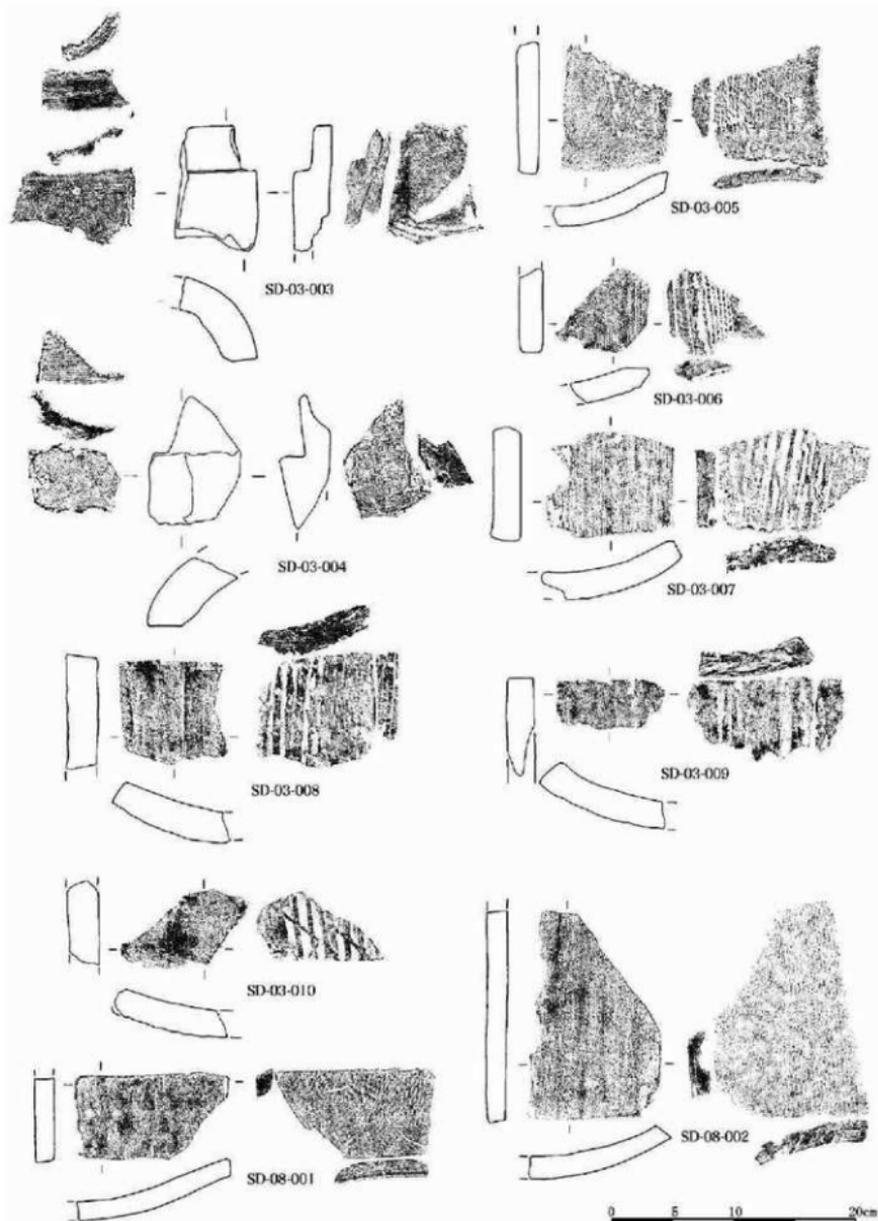
図版	遺構	遺構番号	種類	器種	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
90-28	SD	01	石製品	石臼	31.5		11.0	3580.0	
90-29	G	K05k05	石製品	磨石	11.6	4.7	4.0	298.0	
90-30	G	K05e03	金属製品	刀子	6.3	2.0	1.4	28.3	
90-31	G	K05j02	金属製品	刀子	6.7	2.0	1.8	28.5	
90-32	G	K05105	金属製品	釘	4.3	0.4	-	0.9	

第27表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土遺物観察表(2)

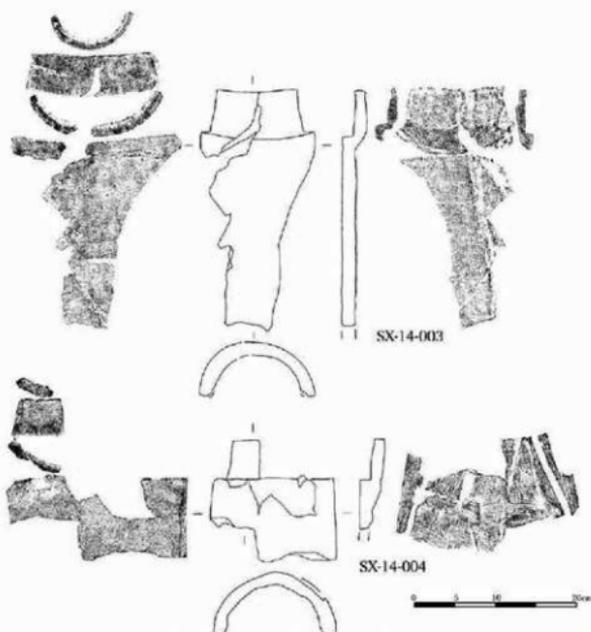
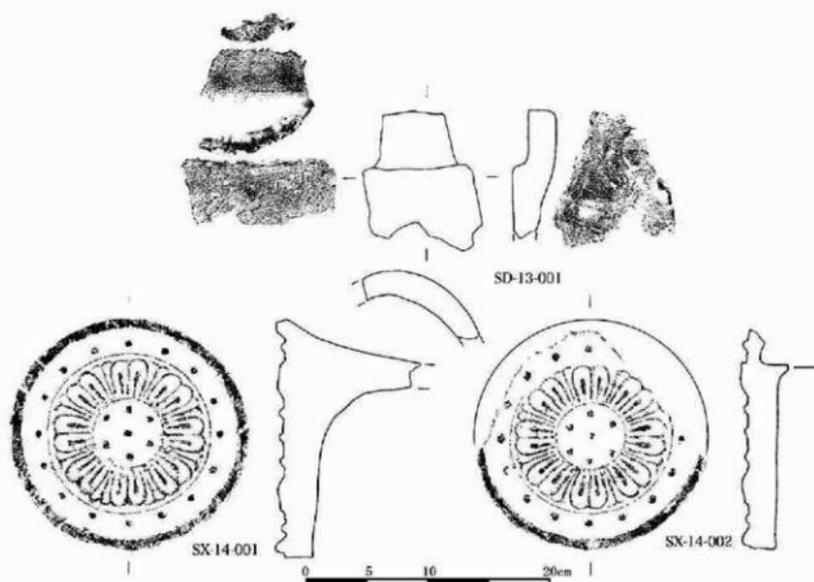
4 出土瓦



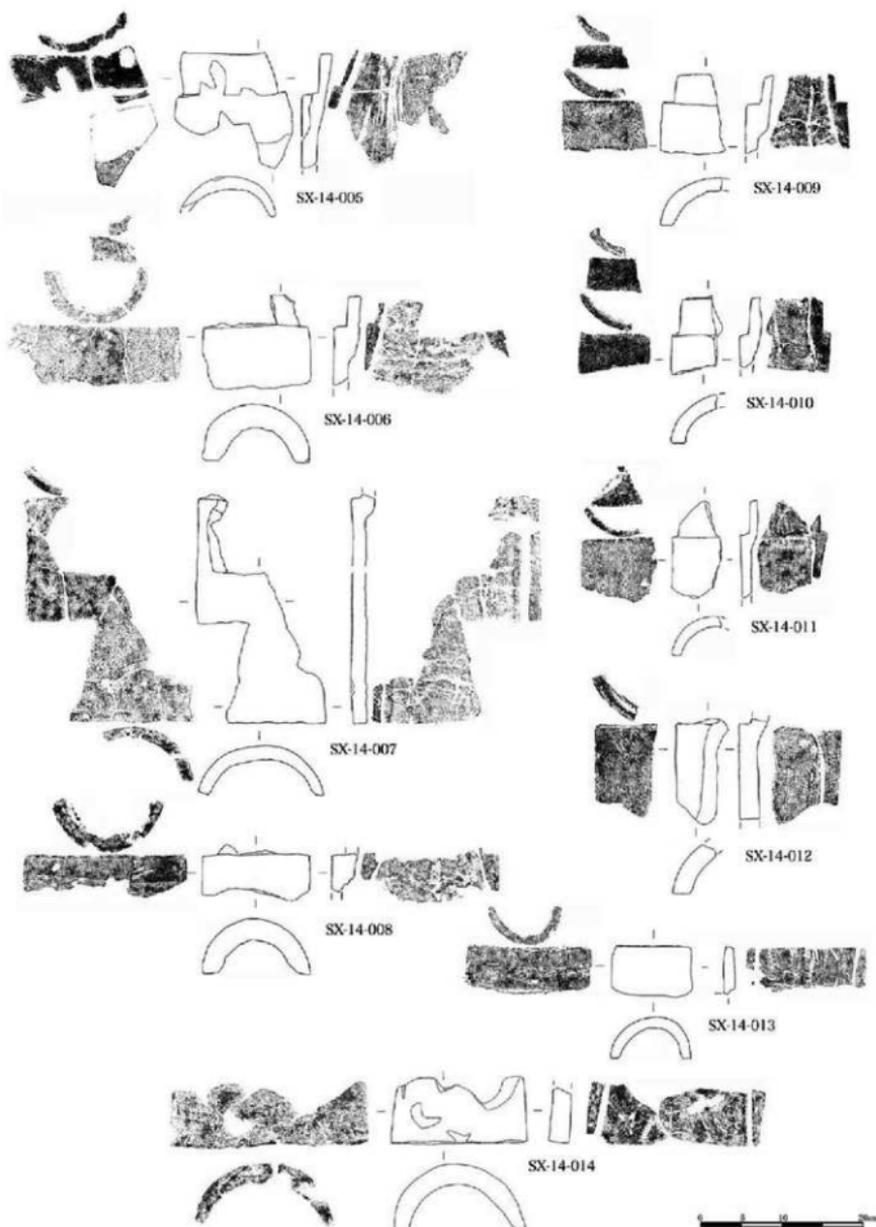
第91圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(1)



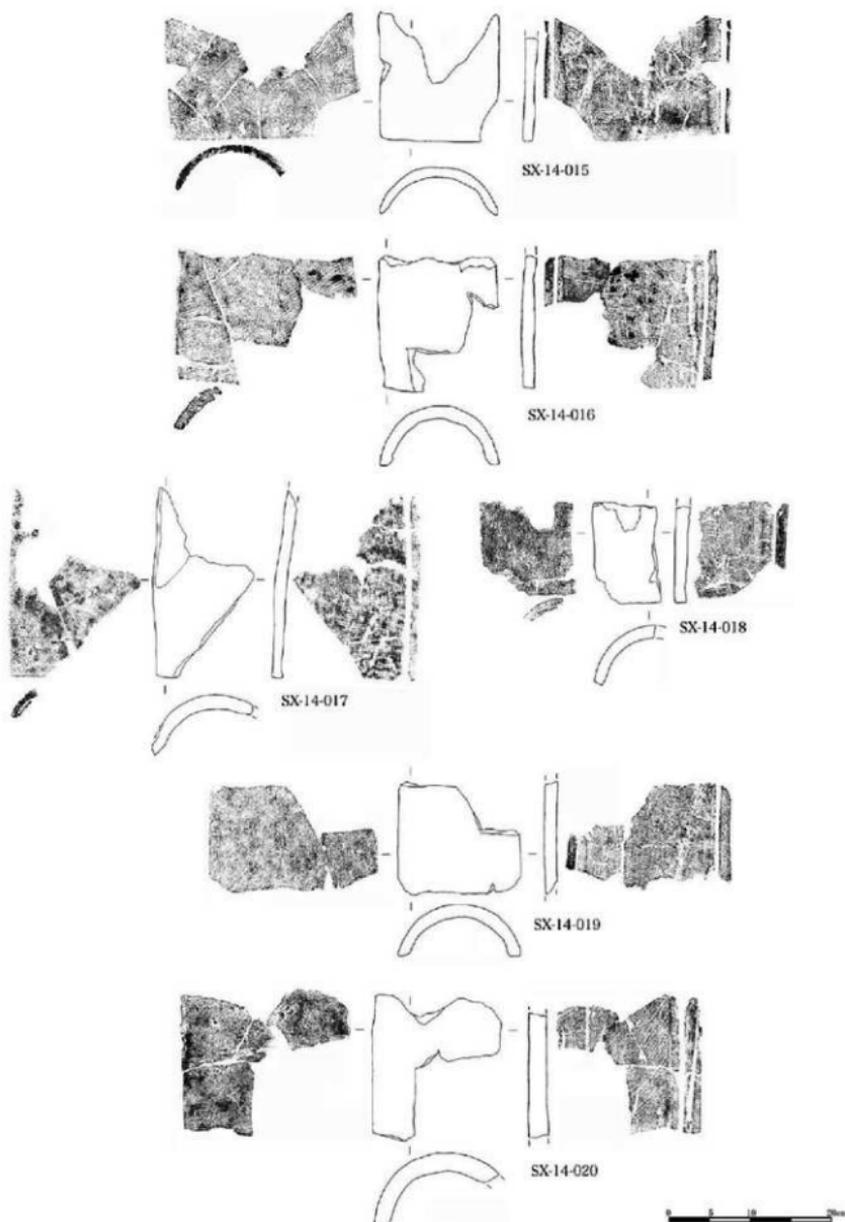
第92圖 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(2)



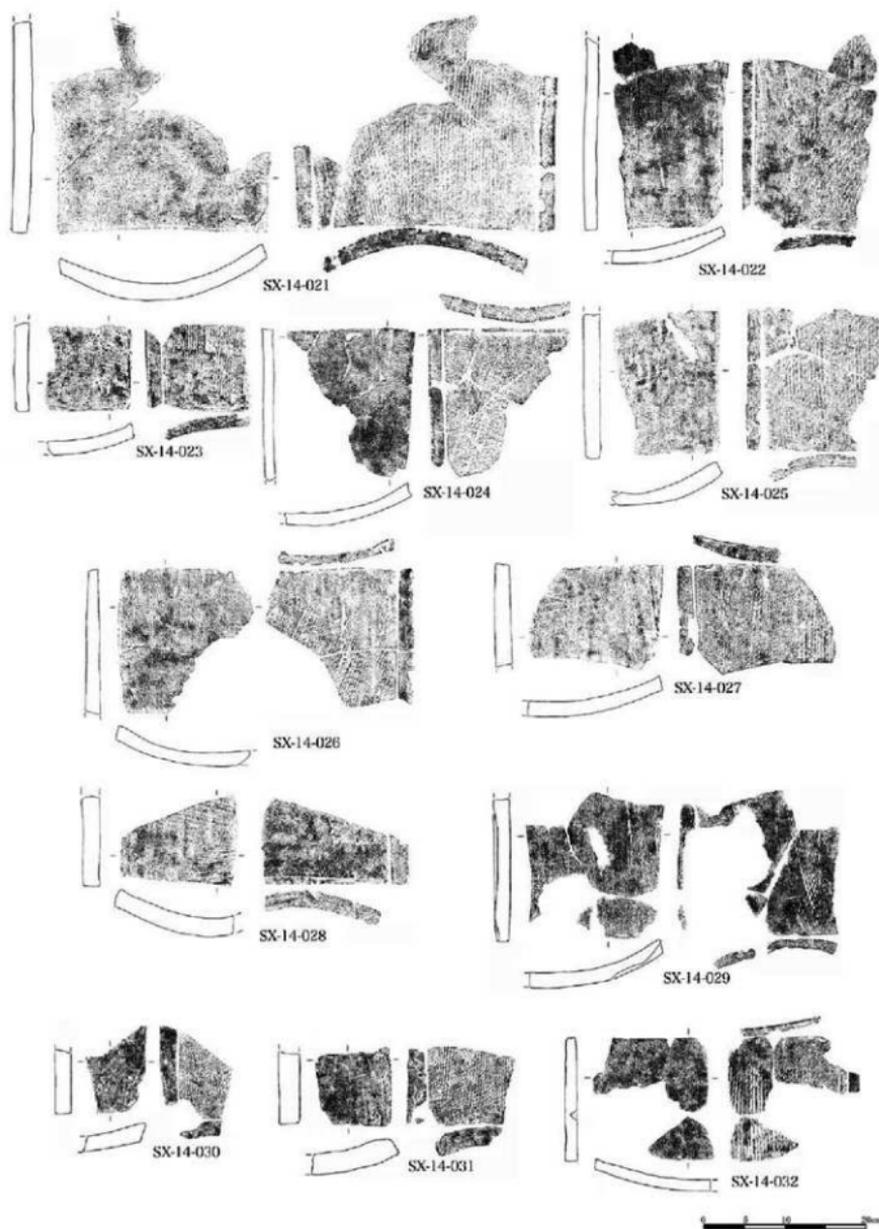
第93圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(3)



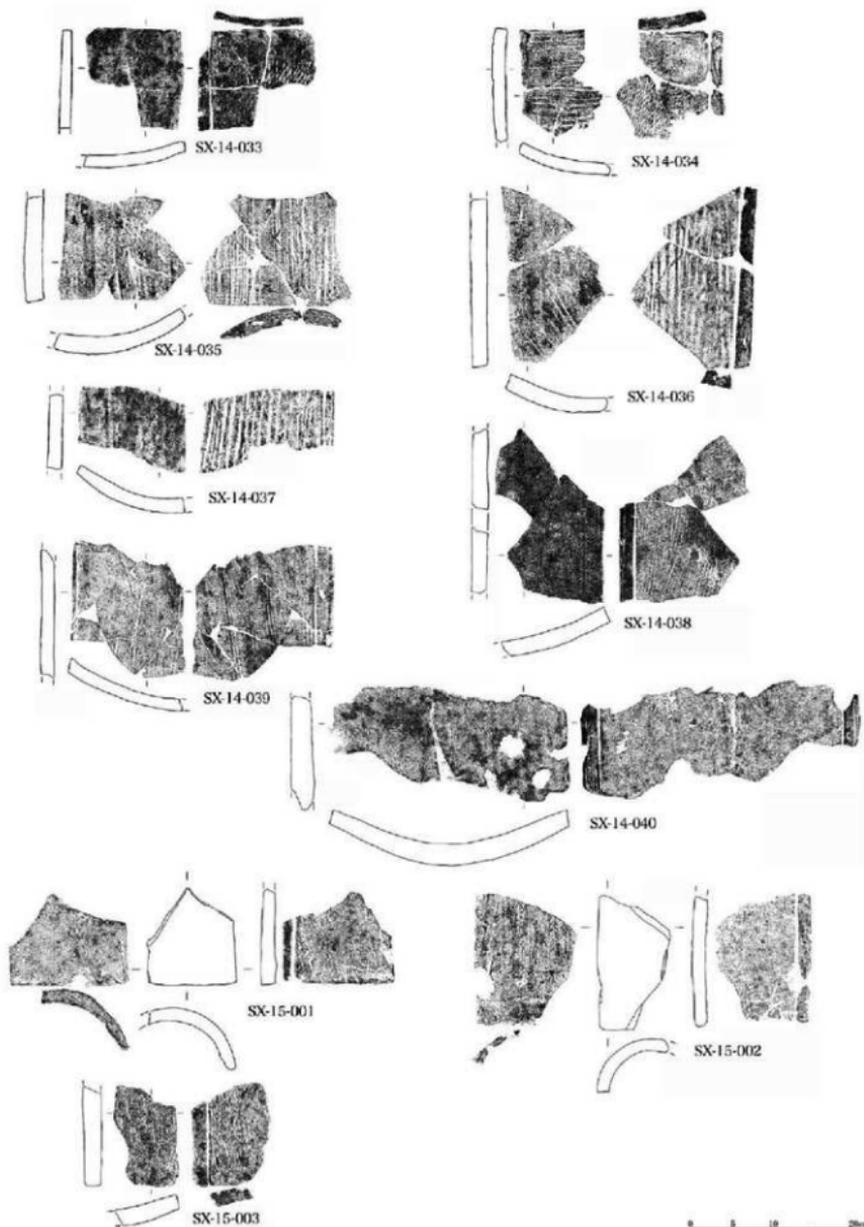
第94圖 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(4)



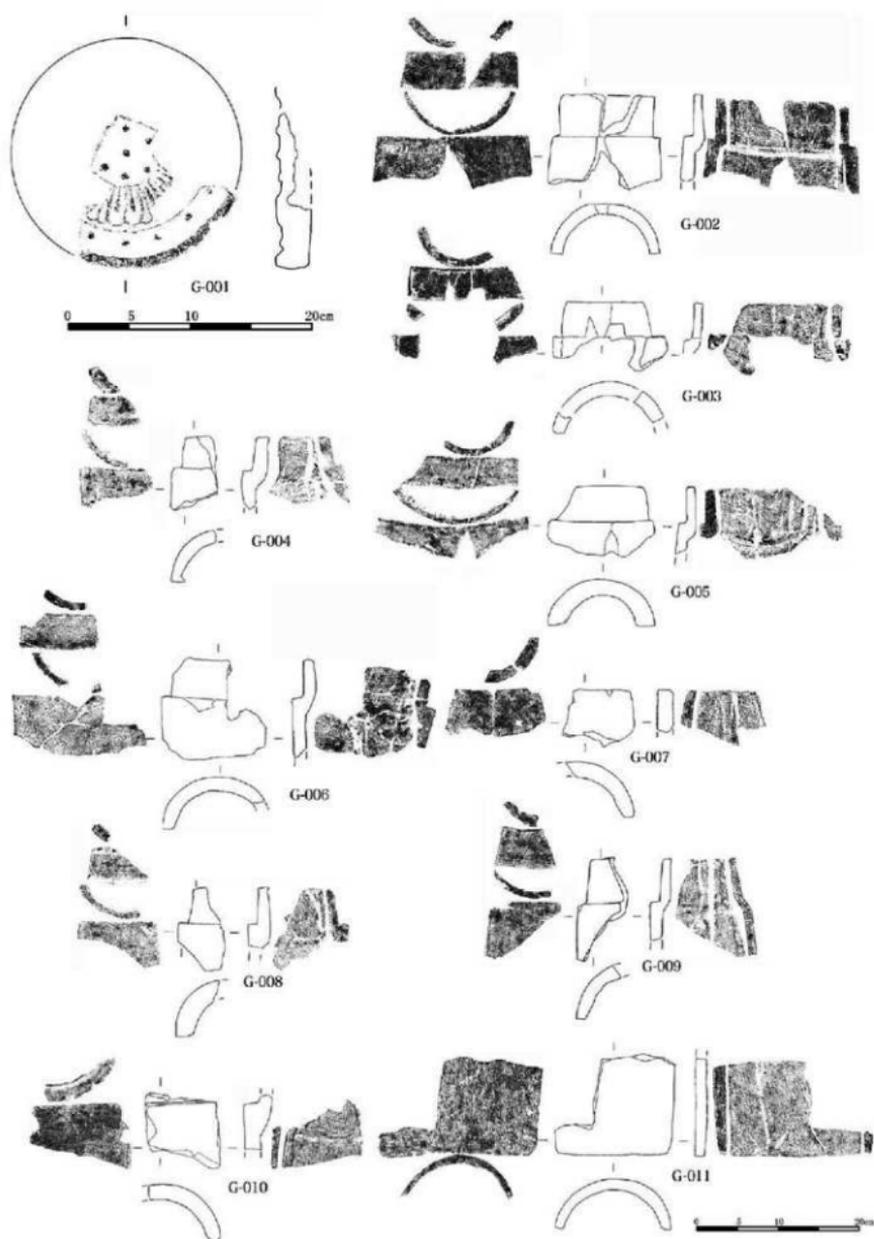
第95圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(5)



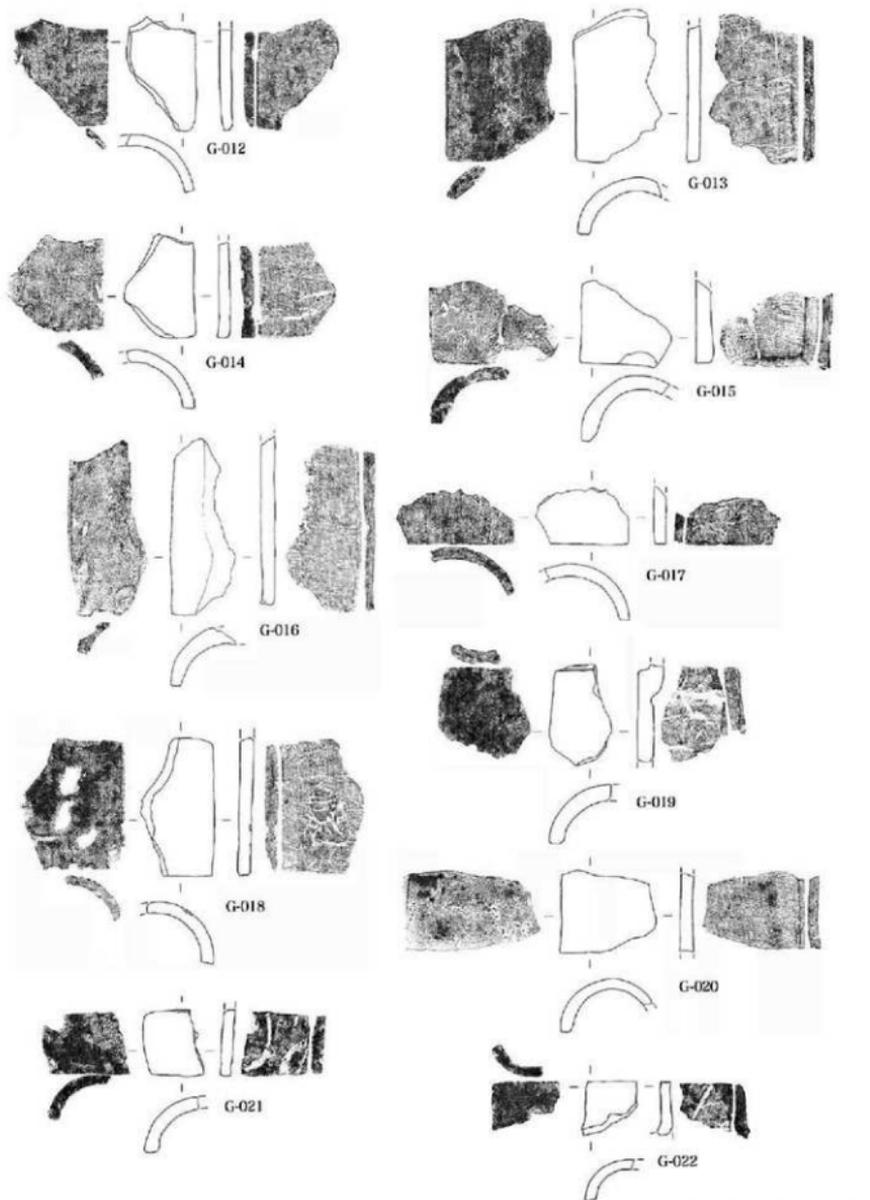
第96圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(6)



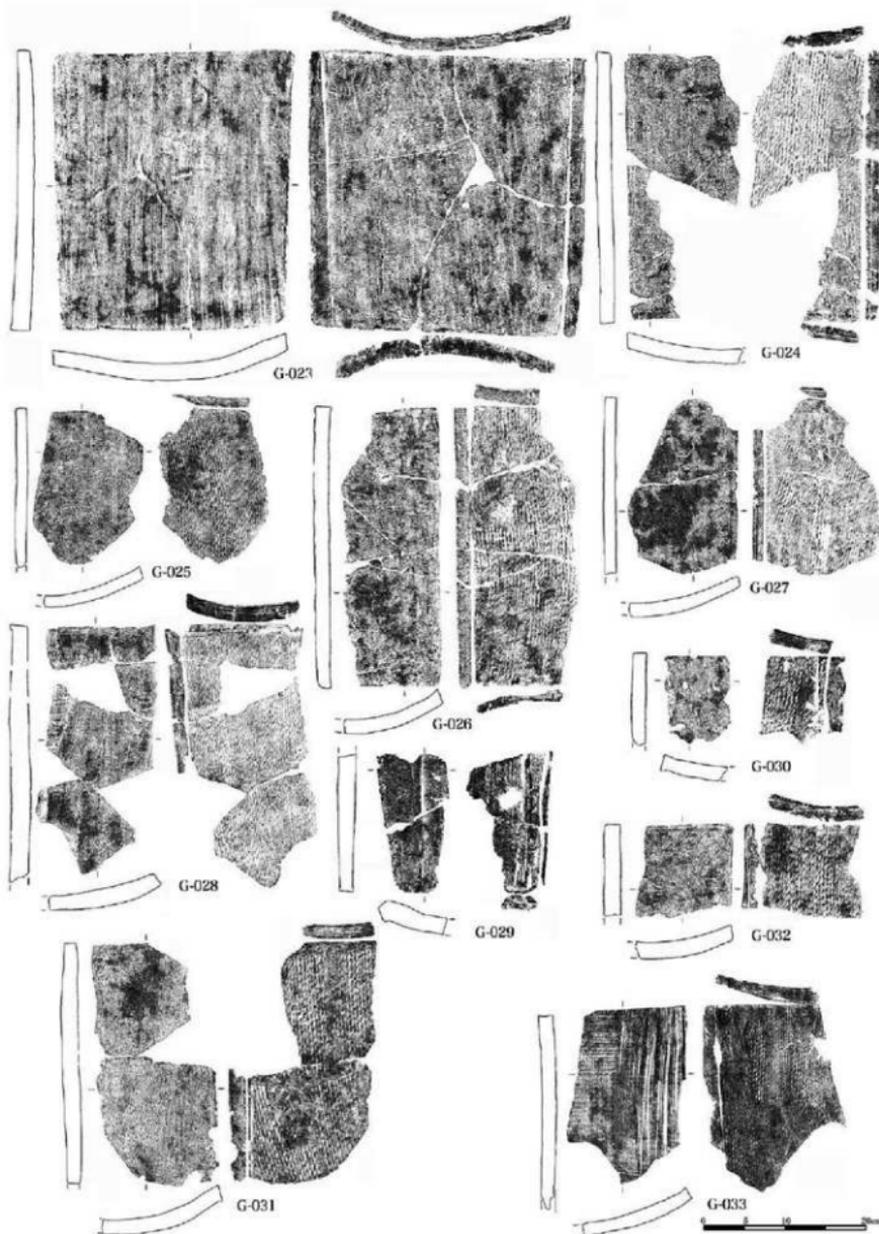
第97図 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(7)



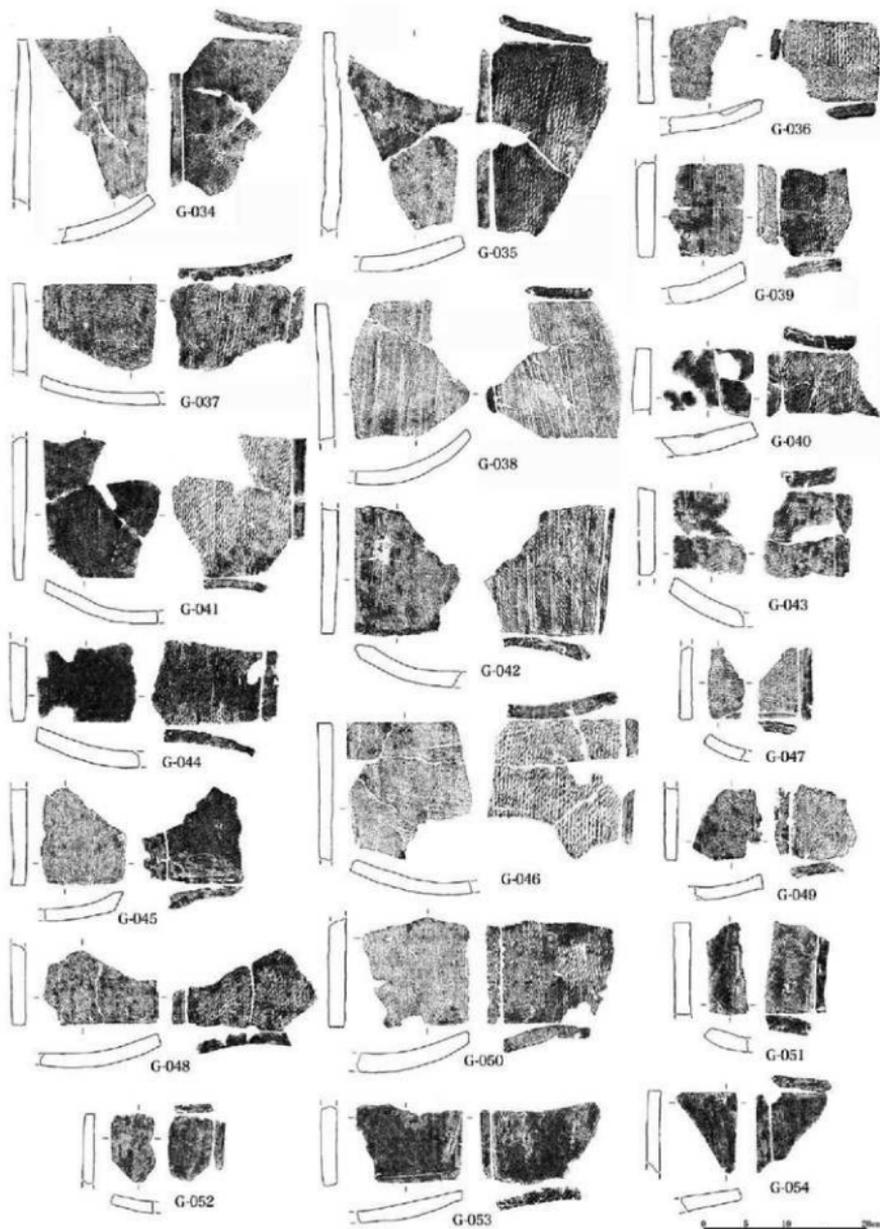
第98圖 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(8)



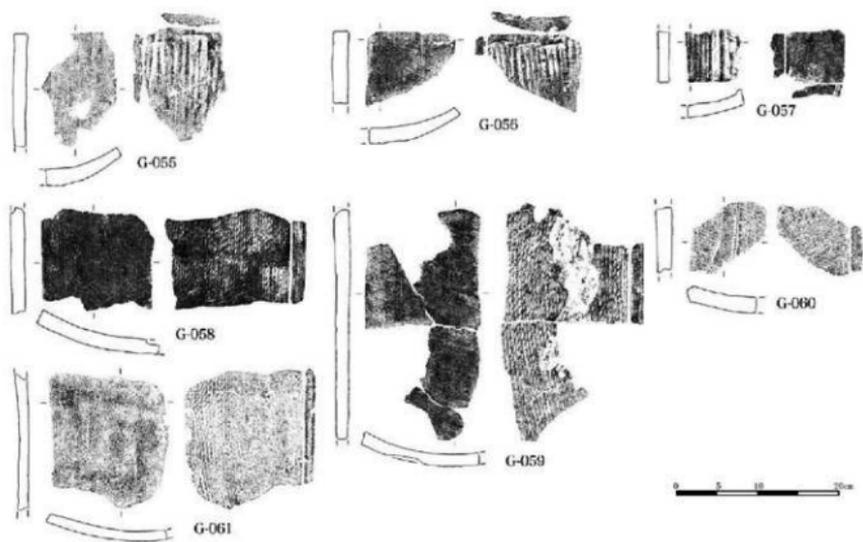
第99図 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(9)



第100図 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦実測図(10)



第101圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(11)



第102圖 史跡信濃國分寺跡僧寺南大門出土瓦実測圖(12)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考	
91 - SD-01-001	SD	01	軒丸瓦	19.0		2.5	酸化炭 焼成	1/5	白・褐色粗砂粒を含む	5Y5/2灰オリーブ			r4.5に幅0.9の区 画溝を入れ、その 外周は鉛線で		
91 - SD-01-002	SD	01	丸瓦	9.0	8.0	1.7	還元炭 焼成	胴部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	10YR2/1黒	撫で	布目	稜脊痕	凹面側から浅く、 凸面側から狭く面 取る	
91 - SD-01-003	SD	01	平瓦	7.0	4.0	2.8	還元炭 焼成	狭端部	白・灰色粗砂粒を含む	5GY4/1暗オリーブ 灰	鉛撫で	布目			
91 - SD-01-004	SD	01	平瓦	10.0	4.8	2.0	還元炭 焼成	狭端部	白・褐色粗砂粒を含む	5Y5/2灰オリーブ	縄叩き目の後鉛刷 り	布目		凹面側から浅く、 凸面側から深く面 取る	
91 - SD-01-005	SD	01	鬼瓦か	9.3	4.3	4.2	還元炭 焼成	体部	0.6の白・灰色礫と白・ 灰色粗砂粒を含む	N4/ 灰	鉛撫で	布目	—		
91 - SD-02-001	SD	02	平瓦	7.8	11.5	2.4	還元炭 焼成	狭端部	白・灰色粗砂粒を含む	5GY2/1オリーブ黒	鉛撫で	布目の後鉛撫で	—		
91 - SD-03-001	SD	03	鬼瓦			6.5	還元炭 焼成	周縁部か	1.6~1.3の灰色礫と 白・灰色粗砂粒を含む	5Y6/1灰	ゴザ状の圧痕	撫で	撫で		
91 - SD-03-002	SD	03	丸瓦	16.8	12.5	2.1	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	0.8~0.2の灰色礫と 白・灰・褐色粗砂粒を 含む	10YR7/1灰白~7/3 にぶい黄橙	鉛撫で	布目の後鉛撫で	—	凹面側から面取る	
92 - SD-03-003	SD	03	丸瓦	10.3	6.6	3.0	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	白・橙・褐色粗砂粒を 含む	7.5YR5/1褐灰	鉛撫で	布目		凹面側から面取る	
92 - SD-03-004	SD	03	丸瓦	10.3	7.4	3.5	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	1.1, 0.6の橙色礫と白・ 橙・褐色粗砂粒を含む	10YR7/2にぶい黄 橙	玉縁部擦書状工具 による撫で、胴部 撫で	布目		凹面側から面取る	
92 - SD-03-005	SD	03	平瓦	11.0	9.6	1.7	酸化炭 焼成	狭端部	白・橙・褐色粗砂粒を 含む	10YR6/4にぶい黄 橙	縄叩き目+鉛撫で	鉛撫で		凸面側から面取る	
92 - SD-03-006	SD	03	平瓦	6.7	6.4	1.8	酸化炭 焼成	狭端部	灰・橙・褐色粗砂粒を 含む	7.5YR6/3にぶい褐 橙	縄叩き目	布目		凸面側から面取っ た後、凹面側から 一段に面取る	
92 - SD-03-007	SD	03	平瓦	9.3	11.4	2.2	酸化炭 焼成	狭端部	0.4~0.2の橙色礫と 白・橙・褐色粗砂粒を 含む	10YR6/3にぶい黄 橙	押型文	布目の後撫で		凹面側から狭く面 取る	
92 - SD-03-008	SD	03	平瓦	9.5	10.2	2.7	還元炭 焼成	広端部	白・灰・橙色粗砂粒を 含む	N4/ 灰	平行文工具による 叩き	鉛撫で		凹面側から狭く面 取る	
92 - SD-03-009	SD	03	平瓦	7.0	10.0	2.3	還元炭 焼成	広端部か	白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y7/1灰白	平行文工具による 叩き	布目		端部仕上げが粗く、 欠損面の可能性もあ る	
92 - SD-03-010	SD	03	平瓦	7.0	9.3	2.5	酸化炭 焼成	体部	0.7~0.2の灰色礫と 白・橙・褐色粗砂粒を 含む	10YR8/4浅黄橙	押型文	布目の後撫で		凹面側から浅く面 取る	
92 - SD-08-001	SD	08	平瓦	6.9	12.6	1.6	還元炭 焼成	狭端部	0.3の白色礫と白・褐・ 黒色粗砂粒を含む	10YR3/2黒褐	縄叩き目の後鉛撫 で	鉛撫で		凹面側から狭く面 取る	
92 - SD-08-002	SD	08	平瓦	17.3	11.5	1.7	還元炭 焼成	狭端部	0.6の橙色礫と白・橙 色粗砂粒を含む	10YR3/1黒褐	縄叩き目	布目の後鉛撫で		凹面側から面取る	
93 - SD-13-001	SD	13	丸瓦	11.2	9.5	3.3	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	0.4の白色礫と白・橙 色粗砂粒を含む	10YR5/1黒褐	鉛撫で	布目+撫で			
93 - SX-14-001	SX	14	軒丸瓦	19.2		3.2	酸化炭 焼成	瓦当面完存	0.5の橙色礫と白・褐色 粗砂粒を含む	10YR2/1黒					

第28表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(1)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考	
93 - SX-14-002	SX	14	軒丸瓦	19.0		2.8	酸化炭 焼成	瓦当面3/4	0.8~0.4の橙・灰色礫 と白・褐色粗砂粒を 含む	10YR2/1黒					
93 - SX-14-003	SX	14	丸瓦	30.1	14.3	1.7	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y4/1灰	玉縁部～胴部上位 部撫で 胴部下位 部削り	布目	横脊痕あり	—	
93 - SX-14-004	SX	14	丸瓦	15.0	15.4	1.5	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	2.5Y4/1黄灰	籠撫で	布目	右側凸面側から浅く 面取る		
94 - SX-14-005	SX	14	丸瓦	14.2	14.5	1.9	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	橙・灰色の粗砂粒を 含む	10Y3/1オリーブ灰	撫で	(玉縁部)撫で (胴部)布目		全体に煤けた様子	
94 - SX-14-006	SX	14	丸瓦	11.6	13.2	2.9	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	石英・褐色粗砂粒を 含む	5YR6/6橙	撫で	布目の後撫で	凹面側から僅かに 面取る		
94 - SX-14-007	SX	14	丸瓦	28.3	16.0	1.7	酸化炭 焼成	胴部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR4/3褐～ 10YR6/3にぶい黄 褐	籠撫で	布目	凹面側から浅く面 取る		
94 - SX-14-008	SX	14	丸瓦	5.7	13.3	2.5	酸化炭 焼成	胴部狭端	石英・白色粗砂粒を 含む	7.5YR7/4にぶい橙	籠撫で	布目+撫で	凹面側から浅く面 取る		
94 - SX-14-009	SX	14	丸瓦	9.7	7.7	2.9	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	灰・褐色粗砂粒を含む	7.5YR6/6橙	撫で	布目	—		
94 - SX-14-010	SX	14	丸瓦	9.5	5.6	1.5	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	石英・白色粗砂粒を 含む	7.5YR7/3にぶい橙	撫で	布目	—		
94 - SX-14-011	SX	14	丸瓦	14.3	7.1	2.4	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	0.6~0.2の灰色礫と 白・灰・褐色粗砂粒を 含む	7.5YR8/4浅黄橙	撫で	布目	凹面側から僅かに 面取る		
94 - SX-14-012	SX	14	丸瓦	12.3	6.3	2.4	還元炭 焼成	胴部狭端	0.5の灰色礫と灰・白色 粗砂粒を含む	5Y7/1灰白	籠撫で	布目	凹面側から浅く面 取る		
94 - SX-14-013	SX	14	丸瓦	6.0	9.8	1.5	還元炭 焼成	玉縁部	白色粗砂粒を含む	N4/ 灰	撫で	布目の後撫で	—		
94 - SX-14-014	SX	14	丸瓦	8.2	16.8	2.4	酸化炭 焼成	胴部広端	0.2の橙・褐色礫と白・ 橙・褐色粗砂粒を含む	10YR7/2にぶい黄 橙	撫で	撫で	右側面は凹面側から 浅く面取る		
95 - SX-14-015	SX	14	丸瓦	12.8	14.5	1.5	還元炭 焼成	胴部広端	粗砂粒を僅かに含む	N5/ 灰	籠撫で	布目の後撫で	凹凸両面から面取 る		
95 - SX-14-016	SX	14	丸瓦	16.3	14.8	1.5	酸化炭 焼成	胴部広端	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5YR6/6橙	籠撫で	布目+撫で	凹面側から浅く面 取る		
95 - SX-14-017	SX	14	丸瓦	23.8	12.1	1.8	酸化炭 焼成	胴部広端	白・褐色粗砂粒を含む	N4/ 灰	撫で	布目	端面籠撫で	凹面から浅く広く、 凸面から狭く面取 る	全体に煤けた様子
95 - SX-14-018	SX	14	丸瓦	12.5	8.0	1.5	還元炭 焼成	胴部広端	石英・白色粗砂粒を 含む	10YR5/3にぶい黄 褐	籠撫で	布目	端面撫で	—	
95 - SX-14-019	SX	14	丸瓦	13.8	15.1	1.5	酸化炭 焼成	胴部	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5YR6/6橙	籠撫で	布目+撫で	凹面側から浅く面 取る		
95 - SX-14-020	SX	14	丸瓦	15.5	15.3	2.4	還元炭 焼成	胴部中位	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5Y7/1灰白	籠撫で	布目	横脊痕	凹面側から浅く面 取る	
96 - SX-14-021	SX	14	平瓦	26.6	24.7	1.8	還元炭 焼成	狭端部	白・灰色粗砂粒を含む	N6/ 灰	襦叩き目	布目+撫で			

第29表 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(2)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
96 - SX-14-022	SX	14	平瓦	24.5	14.6	1.5	還元炭 焼成	狭端部	0.5の白色礫と白・灰・ 褐色粗砂粒を含む	7.5YR5/3にぶい、褐	糊叩き目 端部 側・側面側撫で	隠撫で	—	
96 - SX-14-023	SX	14	平瓦	11.0	10.6	1.8	還元炭 焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰	糊叩き目+撫で	布目+撫で	—	
96 - SX-14-024	SX	14	平瓦	18.9	15.6	1.5	還元炭 焼成	広端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐	糊叩き目 端部は 木口状工具による 掻き取り	布目の後撫で	凹面側から面取り	端部に「返し」状の 凸番あり
96 - SX-14-025	SX	14	平瓦	18.2	13.5	2.0	還元炭 焼成	狭端部	白・褐色粗砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰～6/2 灰黄	糊叩き目	木口状工具による 撫で	—	
96 - SX-14-026	SX	14	平瓦	18.0	16.5	1.5	酸化炭 焼成	広端部	白色粗砂粒を含む	5YR4/3にぶい、赤褐	糊叩き目 端部側 撫で	隠撫で	—	
96 - SX-14-027	SX	14	平瓦	13.4	16.8	2.0	還元炭 焼成	広端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR4/1褐灰	糊叩き目	木口状工具による 撫で 側面側撫で	凸面側から面取る	
96 - SX-14-028	SX	14	平瓦	11.5	14.5	2.1	酸化炭 焼成	狭端部	石英・白・褐色粗砂粒 を含む	7.5YR6/6橙	糊叩き目の後撫で	隠撫で	—	右欠損面は滑らかで 道具瓦への転用か。
96 - SX-14-029	SX	14	平瓦	18.0	16.7	2.0	酸化炭 焼成	狭端部	白・橙・褐色粗砂粒を 含む	7.5YR6/4にぶい、橙	糊叩き目の後撫で	布目の後撫で	—	
96 - SX-14-030	SX	14	平瓦	10.0	7.5	2.0	酸化炭 焼成	狭端部	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5YR6/6橙	糊叩き目 端部側 撫で	布目の後撫で	凸面側から面取る	
96 - SX-14-031	SX	14	平瓦	9.5	10.7	2.5	還元炭 焼成	狭端部	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	10Y4/ 灰～ 7.5YR6/4にぶい、橙	糊叩き目	布目の後撫で	凹面側から浅く面 取る	
96 - SX-14-032	SX	14	平瓦	15.2	14.1	1.5	還元炭 焼成	広端部	0.7の地灰色礫と白・褐 色粗砂粒を含む	10YR4/1褐灰	糊叩き目 側面・ 端部側撫で	撫で	—	
97 - SX-14-033	SX	14	平瓦	12.1	12.8	1.3	酸化炭 焼成	狭端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR5/4にぶい、黄 橙	糊叩き目の後撫で	撫で	—	
97 - SX-14-034	SX	14	平瓦	14.0	11.0	1.5	酸化炭 焼成	広端部	白色粗砂粒を含む	2.5YR6/6橙～ 10YR5/2灰黄褐	糊叩き目 端部側 撫で	布目 端部側・側 面側撫で	凹面側から短く面 取る	
97 - SX-14-035	SX	14	平瓦	12.6	14.5	2.3	還元炭 焼成	狭端部	1.0～0.4の白色礫と 白・橙・褐色粗砂粒を 含む	2.5Y7/1灰白	押型文	布目の後撫で	—	
97 - SX-14-036	SX	14	平瓦	22.8	22.7	2.0	還元炭 焼成	狭端部	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5Y8/1灰白	押型文	布目の後撫撫で	—	
97 - SX-14-037	SX	14	平瓦	9.2	13.2	1.8	還元炭 焼成	体部	0.6の灰色礫と白・灰・ 褐色粗砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄	押型文	隠撫で	—	
97 - SX-14-038	SX	14	平瓦	20.6	12.8	2.0	還元炭 焼成	体部	白・橙・褐色粗砂粒を 含む	10YR4/1褐灰	糊叩き目	撫で	—	
97 - SX-14-039	SX	14	平瓦	15.9	13.2	1.4	酸化炭 焼成	体部	0.8の白色礫と白・灰色 粗砂粒を含む	2.5YR4/1赤灰	隠撫で	撫で 側面側に浅 い返し状の凸番	—	
97 - SX-14-040	SX	14	平瓦	14.2	39.8	2.7	酸化炭 焼成	体部	0.5～0.2の灰・褐色礫 と灰・褐色粗砂粒を含 む	7.5YR8/2灰白～ 8/3浅黄橙	撫で	撫で	—	
97 - SX-15-001	SX	15	丸瓦	11.9	11.2	1.6	酸化炭 焼成	側部広端	白・灰・褐色粗砂粒を 含む	5YR7/6橙	撫で	布目	凹凸両面側から浅 く面取る	

第30表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(6)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
97 - SX-15-002	SX	15	丸瓦	16.7	8.5	1.5	酸化炭 焼成	胴部	0.9の白色礫と白色粗砂 粒を含む	5YR4/2灰褐～N4/ 灰	撫で	布目	—	
97 - SX-15-003	SX	15	平瓦	12.5	7.8	2.0	酸化炭 焼成	狭端部	石英・白・褐色粗砂粒 を含む	7.5YR4/3褐	縛叩き目	撫で	—	
98 - G-001	G	L05a03	軒丸瓦	19.0		2.3	酸化炭 焼成	瓦当面1/5	0.4の褐色礫と白・褐色 粗砂粒を含む	10YR3/1黒褐				
98 - G-002	G	K05a04	丸瓦	11.5	14.0	1.5	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄 橙	籠撫で	布目+撫で	—	
98 - G-003	G	K05a03	丸瓦	8.5	14.0	1.3	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	石英・白色粗砂粒を含 む	5YR5/6明赤褐	籠撫で	布目	—	
98 - G-004	G	K05a02	丸瓦	9.0	5.5	1.6	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	石英・白色粗砂粒を含 む	7.5YR6/6橙	籠撫で	布目	—	
98 - G-005	G	K05a01	丸瓦	8.8	13.0	2.0	酸化炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	褐色粗砂粒を含む	5YR6/8橙	撫で	布目	—	
98 - G-006	G	K05a04	丸瓦	12.2	12.7	2.6	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙	撫で	布目	凹面側から浅く面 取る	
98 - G-007	G	K05a03	丸瓦	7.1	8.8	2.1	還元炭 焼成	玉縁部	白・灰褐色の粗砂粒を含 む	2.5GY6/1オリーブ 灰	籠撫で	布目 端部露削り	凹面から浅く広く 面取る	
98 - G-008	G	K05b01	丸瓦	10.2	5.2	1.5	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	白・褐色粗砂粒を含む	5Y5/1灰	撫で	布目	—	
98 - G-009	G	L05a03	平瓦	12.5	6.0	1.6	還元炭 焼成	玉縁部～胴 部狭端	0.5の灰色礫、0.3の褐 色礫と白色粗砂粒を含 む	10Y3/2オリーブ黒	撫で	布目 側面側籠撫 で	—	
98 - G-010	G	L05a04	丸瓦	9.4	9.0	2.0	還元炭 焼成	胴部狭端	赤褐・白色粗砂粒を僅 かに含む	10YR2/1黒	籠撫で	布目	凹面側から浅く広 く、凸面側から浅 く狭く面取る	
98 - G-011	G	K05a03	丸瓦	12.4	14.2	1.4	酸化炭 焼成	胴部広端	0.5～0.2の灰褐色礫と 白・灰・褐色粗砂粒を 含む	10YR7/2にぶい黄 橙	籠撫で	布目	凹面側から面取る	
99 - G-012	G	L05a03	丸瓦	12.5	8.5	1.5	酸化炭 焼成	胴部広端	0.8の褐色礫と白・灰・ 褐色粗砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄 橙	籠撫で	布目 端部露撫で	—	
99 - G-013	G	K04a14	丸瓦	19.0	10.3	1.7	酸化炭 焼成	胴部広端	赤褐・白色粗砂粒を含 む	5YR2/2黒褐	籠撫で	布目	凹面側から狭く面 取る	
99 - G-014	G	K05j08	丸瓦	12.8	8.4	1.4	還元炭 焼成	胴部広端	長石・石英・白色粗砂 粒を含む	N4/ 灰	撫で	布目	—	
99 - G-015	G	L05a04	丸瓦	10.4	11.2	2.2	還元炭 焼成	胴部広端	0.3の橙・灰色礫と白色 粗砂粒を含む	N4/ 灰	撫で	布目 端部側を露 出	凹面側から浅く広 く面取る	
99 - G-016	G	L05a03	丸瓦	22.0	8.0	1.7	還元炭 焼成	胴部中位～ 広端	白・褐色粗砂粒を含む	5Y4/1灰	籠撫で	布目	凹面側から浅く狭 く面取る	
99 - G-017	G	K05i01	丸瓦	7.0	11.4	1.5	還元炭 焼成	胴部広端	白色粗砂粒を含む	5Y4/1灰	籠撫で	布目	凹面側から狭く面 取る	
99 - G-018	G	L05a03	丸瓦	17.0	9.0	1.5	酸化炭 焼成	胴部広端	石英・白・褐色粗砂粒 を含む	5YR6/8橙	籠撫で	布目 端部撫で	—	

第3表 史跡信濃園分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(4)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
99 - G-019	G	K04j15	丸瓦	12.3	7.5	2.0	還元炭焼成	胴部狭端	白・灰・褐色粗砂粒を含む	7.5YR4/2灰褐	隠撫で	布目	凹面側から深く面取る	
99 - G-020	G	K05g01	丸瓦	10.2	11.6	1.6	還元炭焼成	胴部	灰・白・黒色粗砂粒を含む	N4/ 灰	撫で	布目	凹面側から狭く面取る	凸面に自然軸がかかる
99 - G-021	G	L05a03	丸瓦	8.3	7.2	1.5	酸化炭焼成	広端部	白・灰・褐色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙	隠撫で	布目	—	
99 - G-022	G	K05m01	丸瓦	6.6	6.8	1.3	還元炭焼成	玉縁部	白・灰色粗砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄	撫で	布目	凹面側から狭く面取る	
100 - G-023	G	L05a03	平瓦	35.0	29.0	2.0	酸化炭焼成	ほぼ完存	0.3の灰色礫と白・灰色粗砂粒を含む	5YR3/4暗赤褐～5/4にぶい赤褐	削削りの後隠撫で	隠撫で	—	
100 - G-024	G	L05a03	平瓦	33.8	14.0	1.9	還元炭焼成	左半部	白色粗砂粒を含む	2.5Y4/1黄灰～7.5YR4/3褐	綿叩き目	刷毛目	—	
100 - G-025	G	K05i01	平瓦	19.7	12.5	1.4	還元炭焼成	広端部	石英・白色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰	綿叩き目の後隠撫で	隠撫で	—	
100 - G-026	G	K05a03	平瓦	35.1	12.3	1.8	酸化炭焼成	右半部	0.4の灰色礫と白・灰・褐色粗砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄	綿叩き目	刷毛目	—	
100 - G-027	G	L05a03	平瓦	21.8	13.8	1.8	還元炭焼成	広端部	白・褐色粗砂粒を含む	2.5Y6/1黄灰	綿叩き目	撫で	凸面側から面取りした後凹面側から狭く面取る	
100 - G-028	G	L05a03	平瓦	32.0	13.9	2.2	酸化炭焼成	広端部～体部中位	灰・橙・褐色粗砂粒を含む	5YR5/6明赤褐	綿叩き目 端部に返し状の凸番	布目の後隠撫で	—	
100 - G-029	G	K05k07	平瓦	17.0	8.4	2.0	還元炭焼成	狭端部	灰・白色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰	綿叩き目 側面に返し状の凸番あり	布目 横脊直あり側面・端部側撫で	凸面側から面取りした後凹面側から面取る	
100 - G-030	G	L05a03	平瓦	11.2	7.6	1.8	還元炭焼成	広端部	1.0の灰色礫と白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y7/1灰白	綿叩き目 側面に返し状の凸番	撫で	—	
100 - G-031	G	L05a03	平瓦	29.7	14.8	2.0	酸化炭焼成	右半部	白・灰・褐色粗砂粒を含む	5YR5/4にぶい赤褐	綿叩き目	刷毛目	—	
100 - G-032	G	K05f07	平瓦	11.5	12.0	2.0	還元炭焼成	広端部	白色粗砂粒を多く含む	5Y5/1灰	綿叩き目	木口状工具による撫で	—	
100 - G-033	G	K04n13	平瓦	24.1	16.8	1.8	還元炭焼成	広端部	白・灰色粗砂粒を含む	7.5YR6/4にぶい橙～N5/ 灰	綿叩き目＋撫で	横位の撫での後側面側を縦位の露掻き取り	—	左欠損面は丁寧に打ち欠いた様であり、製瓦への転用か。
101 - G-034	G	K05g01	平瓦	20.2	11.6	1.8	酸化炭焼成	広端部	0.4の白色礫と白・褐色粗砂粒を含む	5YR6/6橙	綿叩き目 端部側・側面側撫で	隠撫で	—	
101 - G-035	G	L05a03	平瓦	24.9	14.8	2.0	酸化炭焼成	広端部	2.9の暗赤褐色礫と灰・褐色粗砂粒を含む	10YR8/1灰白	綿叩き目＋撫で	撫で	—	
101 - G-036	G	L05a03	平瓦	10.5	11.2	1.8	酸化炭焼成	狭端部	0.6～0.4の褐色礫と白・灰・褐色粗砂粒を含む	5Y5/1灰	綿叩き目	隠撫で	—	
101 - G-037	G	K05i01	平瓦	10.8	14.5	1.5	還元炭焼成	広端部	1.0～0.2の褐色礫と白・灰・褐色粗砂粒を含む	10YR3/2黒褐	綿叩き目	布目の後隠撫で	—	
101 - G-038	G	L05a04	平瓦	17.1	14.8	1.6	還元炭焼成	広端部	白・灰・褐色粗砂粒を含む	2.5Y7/1灰白	削削り	布目＋隠撫で	—	左と下の欠損面は滑らかで道具瓦への転用か。

第3表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(5)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (径)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
101-G-039	G	K05k02	平瓦	11.7	9.3	2.4	還元炭焼成	狭端部	0.4の灰色礫と白・褐色粗砂粒を含む	5Y7/1灰白	縄叩き目	隠撫で	凸面側から面取る	
101-G-040	G	K05e04	平瓦	7.5	11.0	2.2	酸化炭焼成	広端部	白・橙・褐色粗砂粒を含む	5YR6/8橙	縄叩き目	撫で	—	
101-G-041	G	K05e03	平瓦	17.0	13.8	1.5	還元炭焼成	狭端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐	縄叩き目	布目の後撫で	—	
101-G-042	G	K04J08	平瓦	15.5	13.4	2.0	酸化炭焼成	狭端部	0.9の褐色礫と白・橙色粗砂粒を含む	7.5YR5/4にぶい褐	縄叩き目	布目	凹面側から深く、凸面側から深く面取る	
101-G-043	G	L05a03	平瓦	10.7	10.0	2.2	酸化炭焼成	広端部	白・褐・黒色粗砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙 ～5Y5/1灰	縄叩き目 側面隠撫で	木口状工具による撫で	—	
101-G-044	G	L05a03	平瓦	10.0	13.0	2.1	酸化炭焼成	狭端部	白色粗砂粒を含む	5Y5/1灰	縄叩き目+隠撫で	隠撫で	—	
101-G-045	G	L05a03	平瓦	12.0	9.6	1.5	還元炭焼成	狭端部	0.7～0.2の灰色礫と灰・褐色粗砂粒を含む	10Y2/1黒	撫で	布目	凹面側から深く、凸面側から深く面取る	端部に布目が回る
101-G-046	G	L05a03	平瓦	17.0	15.0	1.6	酸化炭焼成	広端部	石英・白・褐色粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	布目の後隠撫で	凹面側から狭く面取る	
101-G-047	G	L05a03	平瓦	9.0	5.0	1.5	酸化炭焼成	狭端部	白・橙・褐色粗砂粒を含む	7.5YR6/4にぶい橙	縄叩き目 端部に返し状の凸帯あり	膠俵状工具による撫で	凸面側から狭く面取る	
101-G-048	G	L05a03	平瓦	10.0	14.9	1.7	酸化炭焼成	狭端部	白・赤褐・黒色粗砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙	縄叩き目	隠撫で	凹面側から狭く面取る	
101-G-049	G	K05e02	平瓦	8.9	8.5	1.5	還元炭焼成	狭端部	1.7, 0.8の灰色礫と白・灰色粗砂粒を含む	10YR6/2灰黄褐	縄叩き目	隠撫で	—	
101-G-050	G	K05e01	平瓦	13.6	13.8	2.2	酸化炭焼成	狭端部	1.0の褐色礫と白・橙・褐色粗砂粒を含む	7.5YR4/1褐灰～6/4にぶい橙	縄叩き目 端部側・側面側撫で	木口状工具による撫で	—	
101-G-051	G	L05a04	平瓦	11.6	5.3	2.0	還元炭焼成	狭端部	白・灰・褐色粗砂粒を含む	10YR6/1褐灰	隠撫で	隠撫で	凹面側から面取る	
101-G-052	G	K05k03	平瓦	8.7	5.2	1.3	酸化炭焼成	広端部	白・灰色粗砂粒を含む	5YR4/25灰褐	縄叩き目の後撫で	隠撫で	凸面側から面取った後、凹面側から面取る	漆油がきわめて緩く、道具肌か
101-G-053	G	K05e06	平瓦	9.5	13.5	1.8	還元炭焼成	狭端部	石英・白・褐色粗砂粒を含む	N4/ 灰	縄叩き目 側面・端面側撫で	隠撫で	—	
101-G-054	G	L05a03	平瓦	10.2	7.5	1.6	還元炭焼成	広端部	白・灰・褐色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰	隠撫で	撫で	凸面側から狭く面取った後、凹面側から面取る	
102-G-055	G	L05a03	平瓦	13.9	9.3	1.6	還元炭焼成	広端部	白・灰色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰	平行文工具による叩き	布目	—	
102-G-056	G	K04J15	平瓦	8.7	10.7	1.8	還元炭焼成	広端部	0.7の灰色礫と白・灰色粗砂粒を含む	96/ 灰	平行文工具による叩き	布目の後隠撫で	—	
102-G-057	G	K05J01	平瓦	6.5	6.7	1.4	酸化炭焼成	狭端部	白・褐色粗砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙	撫で	平行文工具の叩き側面側に「返し」状の凸帯	—	
102-G-058	G	L05a03	平瓦	13.2	14.9	1.7	還元炭焼成	体部	0.5の灰色礫と白・灰・褐色粗砂粒を含む	2.5Y7/1灰白	縄叩き目	隠撫で	—	

第33表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(6)

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ (寸)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
102 - G-059	G	L05a03	平瓦	28.6	14.5	1.6	還元炭 焼成	体部	0.6の灰色礫と白・灰・ 褐色粗砂粒を含む	2.5Y6/1黄灰	縄叩き目	擦撫で	凹面側から狭く面 取る	
102 - G-060	G	L05a03	平瓦	8.0	8.5	1.9	還元炭 焼成	先端部	白・褐色粗砂粒を含む	5Y5/1灰	櫛歯状工具による 撫で	櫛歯状工具による 撫での後擦撫で	凹面側から面取り した後、凸面側か ら面取る	
102 - G-061	G	K05a04	平瓦	15.6	14.9	1.4	酸化炭 焼成	体部	1.0~0.6の灰色礫と 白・灰・褐色粗砂粒を 含む	10YR7/1灰白	縄叩き目+擦撫で	擦撫で	—	

第34表 史跡信濃国分寺跡僧寺南大門出土瓦観察表(7)

第3節 その他の調査

1 調査の概要

(1) 僧寺東築地塀想定ラインの調査

平成12年度に、国分1194～1197番地を対象に実施した確認調査である。幅3mのトレンチを15m、すなわち5グリッドを東西方向に設定して表土を剥ぎ、うち2グリッドを深掘りして僧寺東辺の築地塀等区画施設の確認調査を実施した。結果としては、築地塀等の区画施設は確認できなかった。



PL.49 僧寺南東部築地塀想定ライン調査西区全景(東)

(2) 僧寺南東部築地塀想定ラインの調査

国分1,195番地の現状変更(アパート建替)に伴う発掘調査である。平成15年10月20日及び10月21日に実施した。調査は、申請地内に幅3mのトレンチを西側に約15m、東側に約12mにわたって表土を剥いていったところ、GL-80cmにおいて遺構を検出した。検出した遺構は東側の調査区において、ビットが5ヶ検出、西側の調査区域において、古墳時代後期と思われる竪穴住居址が3件検出され、この住居址を切る形で、西調査区西端に栗石上の集石遺構を検出した。

この栗石上の集石遺構は、その後実施した南大門の東西ライン上に位置している。調査時の知見では、これを直接国分寺跡と結びつけるには、根拠に不足があったものの、今後の調査では、築地塀もしくは板塀の礎石根石として考えていくことも必要かと思われる。(工事は、現状の地面に40cmの盛り土をし、基礎はその上から-60cmの範囲でおさまるもので、地下遺構は保護されている。)



PL.50 同上調査東区全景(東)



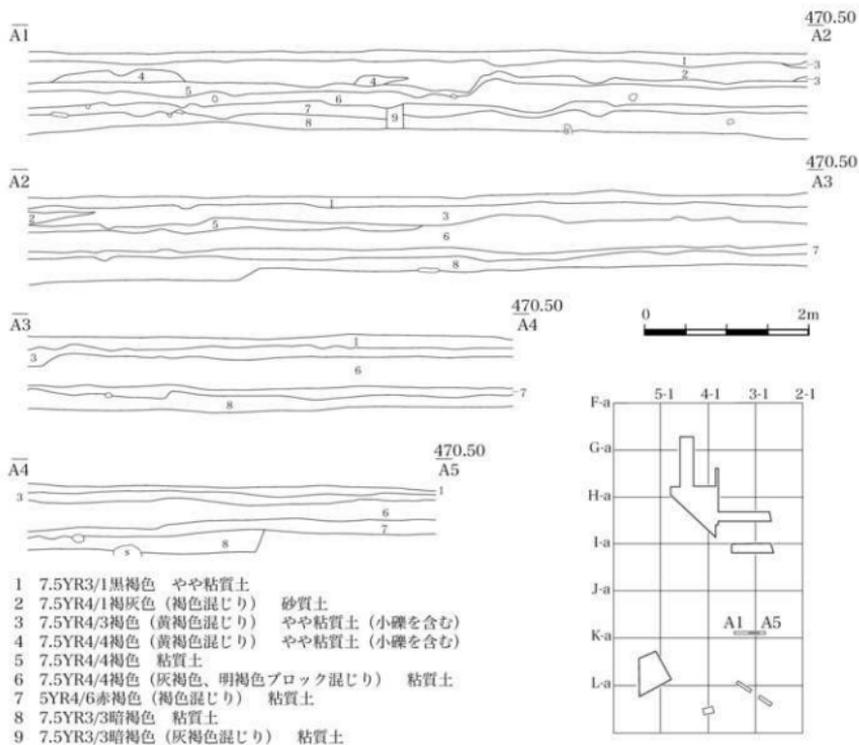
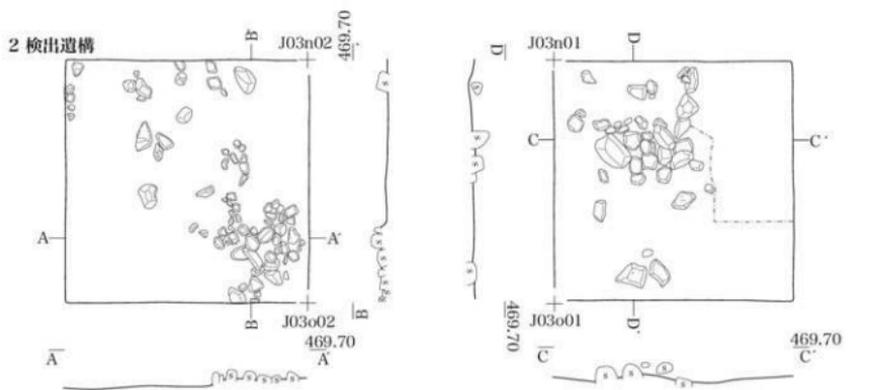
PL.51 僧寺南大門南東部調査区全景(真上)

(3) 僧寺南大門南東部の調査

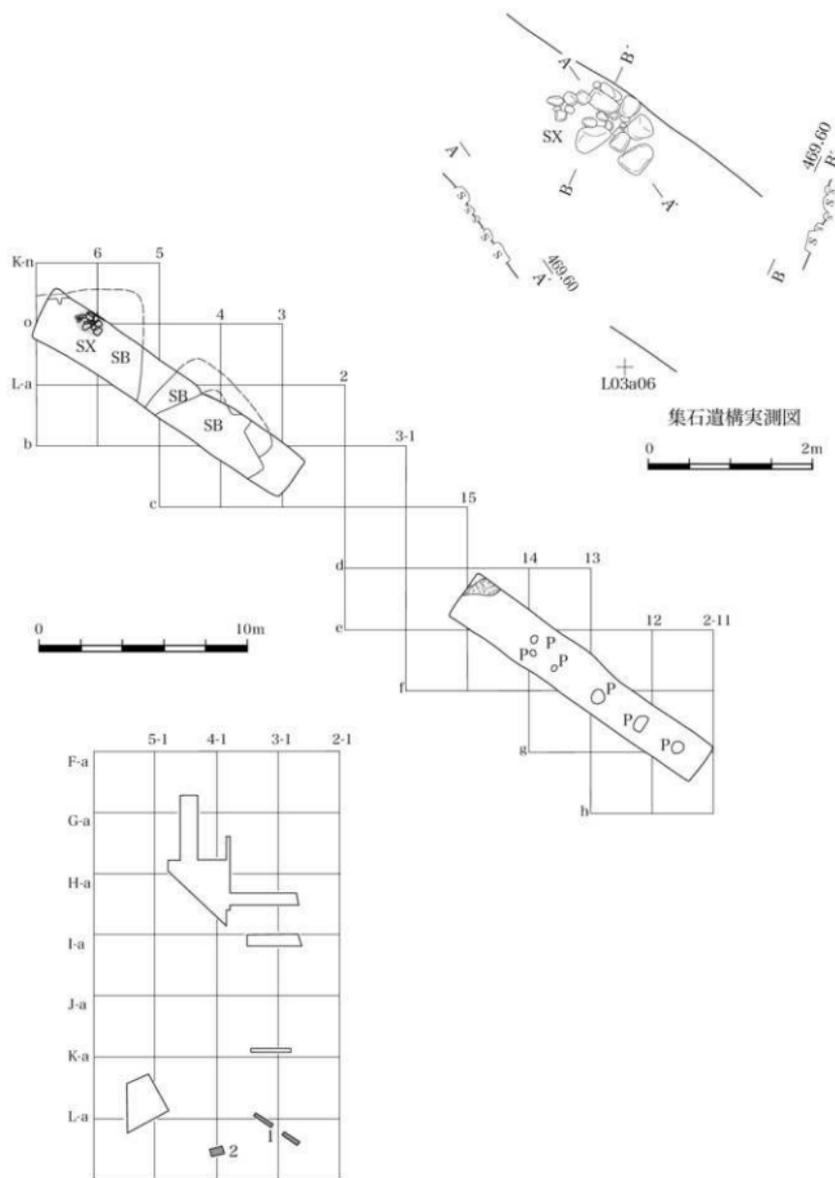
国分1,198番地の有賀邸の現状変更(住宅建替)に伴う発掘調査である。調査は、9月の末に建物敷きを対象に行った。その結果、別途示したとおり、須恵器の蓋・坏のほか、布目瓦が出土している。

四角い調査区の南東から北西への対角線上から北東半部が黒褐色の土と川原石で埋め尽くされており、場合によっては僧寺外郭の地業とも考えられる。

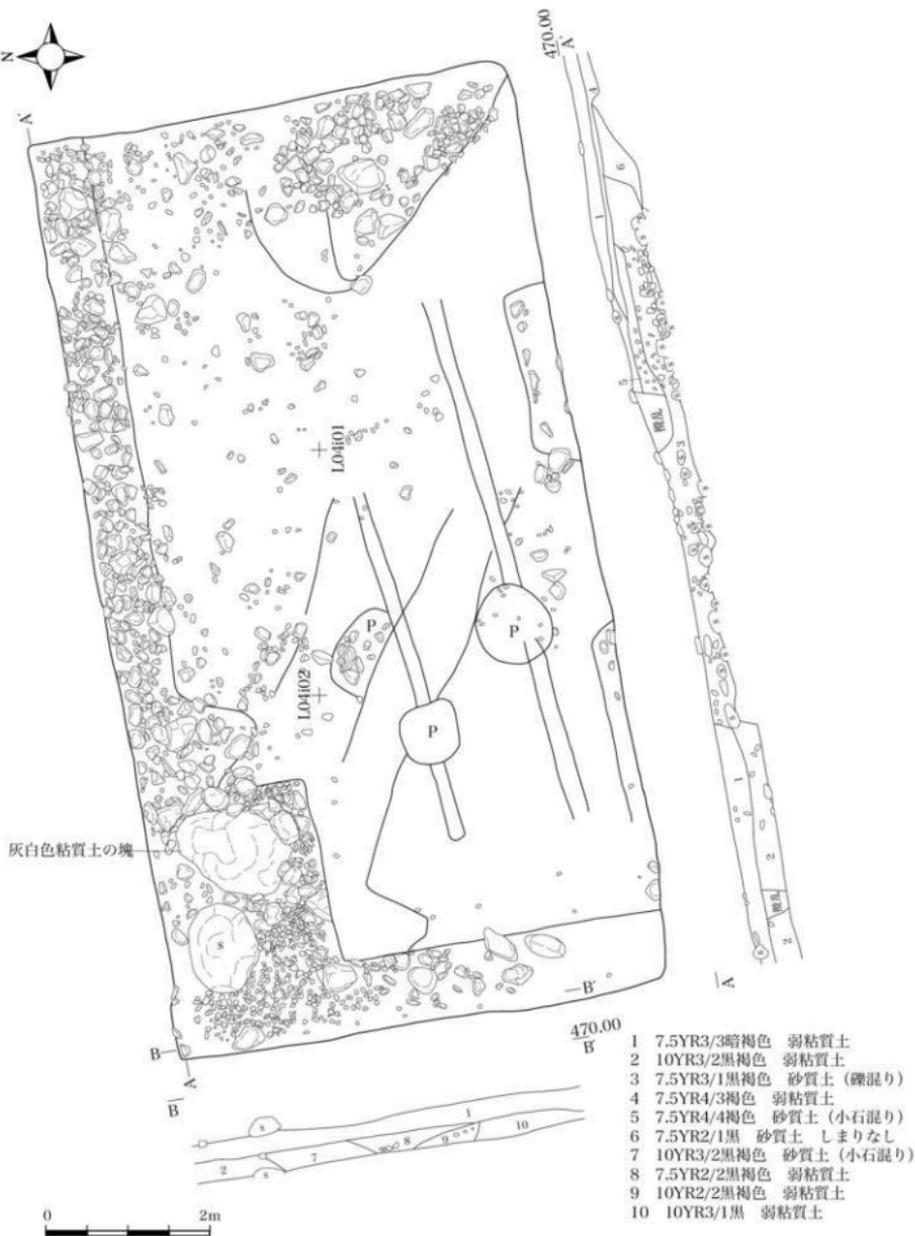
遺構としては、L字をなす溝状遺構のほか、ビットや集石が確認されたが、これらが直接国分寺に結びつくものかどうかは判然としなかった。



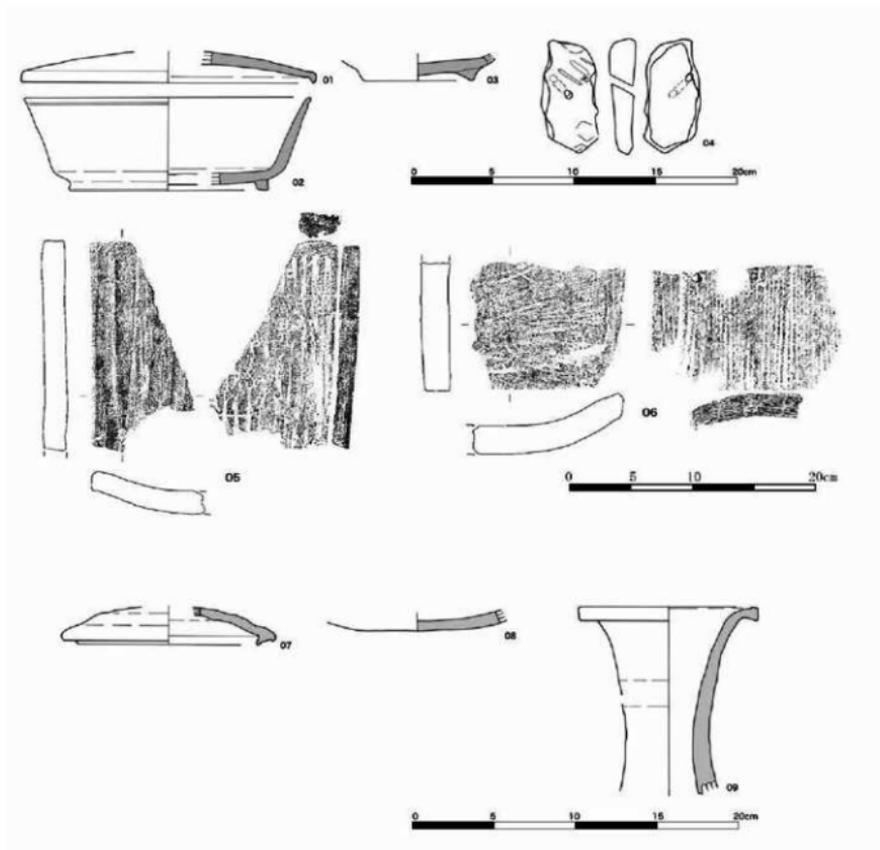
第103図 僧寺東辺築地塀想定ライン発掘調査実測図



第104図 僧寺南東部築地塙想定ライン発掘調査実測図



第105図 僧寺南大門南東部の発掘調査実測図



第106図 史跡信濃国分寺跡僧寺その他調査出土遺物実測図

図版	遺構	遺構番号	遺物種類	遺物形状	口径	高さ	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・修整	外面調整	内面調整	備考
106-07	5	国分1193 の南境、1193 の南境	磁器器	蓋	-	2.8	11.3	天井～底面1/1	0.3の礫と粗砂粒を含む	良好	015/1灰	015/1灰	轆轤成形 胴面に内側を磨しをす	轆轤による擦で	轆轤による擦で	
106-08	5	国分1193 の南境、1193 の南境	磁器器	押	-	1.1	-	底面1/2	0.3の礫と粗砂粒を含む	良好	2.015/1黄灰	2.306/1黄灰	轆轤成形 丸底突縁の底面	円筒成形の擦で 蓋による擦	轆轤による擦で	
106-09	5	国分1193 の南境	磁器器	蓋	11.0	11.6	-	口縁から底面	粗砂粒を含む	良好	017/1灰	017/1灰	口縁部を白土で塗り、口縁部をつくる	轆轤による擦で	轆轤による擦で	

図版	遺構	遺構番号	種類	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
106-04	G	国分1198	石製品	石製模造品	7.0	3.5	1.4	36.8	

図版	遺構	遺構番号	瓦種類	長さ(寸)	幅	厚さ	焼成	残存	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	側面調整	備考
106-05	国分1198	-	平瓦	17.2	9.1	1.7	還元炭焼成	広端部	0.4の白色礫と白・橙・褐色粗砂粒を含む	10YR5/2灰黄橙～7.5YR6/4こぶい橙	押型文	布目の後撫で	凹面側から狭く面取る	
106-06	国分1198	-	平瓦	10.5	12.1	2.3	還元炭焼成	狭端部	白・灰色粗砂粒を含む	7.5YR2/2黒褐	溝印き目	布目 端部側撫で	凹面側から浅く、凸面側から深く面取る	

図版	遺構	遺構番号	遺物種類	口径	高さ	底径	残存	胎土	焼成	外面色調	内面色調	成形・修整	外面調整	内面調整	備考	
106-01	6	国分1198	磁器器	蓋	-	1.9	18	天井～底面1/7	0.3の礫、白色粗砂粒を含む	良好	2.015/1黄灰～6/20こぶい黄	2.016/1こぶい黄	轆轤成形	(天井部上位)轆轤による磨削り(天井部下部)底面による擦で	轆轤による擦で	01とセットか
106-02	6	国分1198	磁器器	押	17.4	6	12.4	口縁～底面1/8	0.3の礫、白色粗砂粒を含む	良好	015/1黄灰	016/1黄	轆轤成形 付け高台 底面から磨削して体部は白土で塗り、口縁部は炭焼成を施す。	(口縁～体部)轆轤による擦で(高台部)底面による擦で(底面)内側を磨削する	轆轤による擦で	01とセットか・内側部は炭焼成
106-03	6	国分1198	磁器器	押	-	1.6	6.9	体部下部～底面1/2	黒石・白色ほかの粗砂粒を含む	やや不良	0106/1黄灰	10YR7/1灰白	轆轤成形 付け高台 高台部の付け方が擦で、接合部がはっきり見える。	(体部)轆轤による擦で(高台部)底面による擦で(高台部)底面を磨削する	轆轤による擦で	

第35表 史跡信濃国分寺跡僧寺その他調査出土遺物観察表

第四章 ヘラ描き文字・出土瓦の考察

第1節 僧寺跡北東域出土のヘラ描き文字について

僧寺跡北東域の調査の結果、「佐久」、「井」、「大」とヘラ描きされた須恵器が6点出土して注目された。このうちヘラ描き文字の「佐久」は2点、「井」は1点、「大」は3点出土している。(以下本章中の図は第107図参照)

1 ヘラ描き文字「佐久」

図1のヘラ描き文字「佐久」は、須恵器杯の底部(底部径10.6cm・器高2.9cm)に線刻されている。底部は回転ヘラ削りの後、ナデ調整されている。文字のヘラ描きされた範囲は縦3.3cm、横2.0cmで、幅0.5mm前後の細い線刻である。「久」の右下のはらいの一部が須恵器の欠損によりわずかに欠失している。図2のヘラ描き文字「佐久」は、須恵器壺の頸部の破片とみられる縦10cm、横6.9cmの小破片に、縦3.4cm、横2.5cmの範囲で、幅0.8mm前後の細い線刻でヘラ描きされている。これらの須恵器の「佐久」のヘラ描きは、信濃国分寺尼寺金堂跡で出土した平瓦の伊那郡を示す「伊」のヘラ描き(図3)や、信濃国分寺1号瓦窯跡から出土した軒平瓦の更級郡を示す「更」のヘラ描き(図4・註1)と同様に、「佐久郡」の郡名を示したものと考えられる。

この佐久郡の郡名については、中野市の高丘陵古窯址群の清水山窯跡1号灰原から、「佐攸郡」(図5)と書き慣れた達筆でヘラ描き(註2)された無頸壺が出土している。この無頸壺は8世紀前半に位置付けられ、佐久の郡名を記載した最古の資料とされている。なお、平安時代前期の貞観八年(886)、二月二日の条の『三代実録』に佐久の郡名が記されており、この頃までには「佐久」が用いられていることがうかがえる。

2 ヘラ描き文字「井」

また図6の「井」のヘラ描き文字は、須恵器杯の小破片(縦3.3cm、横4.5cm)の口縁部に近い個所に、縦2.3cm、横2.1cmの範囲に、幅0.5～1.0mm前後で線刻されている。この「井」の筆順は先に縦2本の線をヘラ描きし、次に横2本の線をヘラ描きしている。これは正式な筆順ではなく、文字を書く知識のなかった工人がヘラ描きした可能性が推測される。この「井」のヘラ描きについては、中野市の8世紀前半に築造された清水山窯跡群から合計128点の「井」、2点の「高井」のヘラ描き文字資料が出土(註3)しており、高井郡の郡名を示したものと考えられている。これらの「井」は筆順も様々であり、筆跡の分類から最低6人の工人の手によるものと推定されている。こうした筆跡から工人は文字を書く知識が無く、「高井」の文字を真似て写したと推定されている。

通常、郡名を略して一文字で表す場合は最初の文字を使用する 경우가多いが、文字を知らない工人が書く際に「高」より画数の少ない「井」が使用されたと考えられている。こうした事例は下野国分寺跡や武蔵国分寺跡出土の郡名瓦にもみられる。下野国分寺跡では「寒川郡」が「川」、「梁田郡」が「田」、武蔵国分寺跡では「秩父郡」が「父」の文字で示されている。この清水山窯跡群出土のヘラ描き文字「井」の中には図7のように、信濃国分寺跡北東域から出土した図6の「井」と筆順が同じで、同様の箇所にヘラ描きされた資料も含まれており、図6の資料も高井郡の郡名を示したヘラ描きと推測される。

3 ヘラ描き文字「大」

図8の「大」のヘラ描き文字は大型の高台付須恵器底部(底部径13.1cm)の向かって右寄りの位置に、縦1.6cm、横1.8cmの範囲に、幅1.0～2.0mm前後で線刻されている。図9の「大」のヘラ描き文字は須恵器

の坏蓋片に、縦1.6cm、横2.1cmの範囲に、幅1.0～2.0mm前後で線刻されている。図10の「大」のへら描き文字も須恵器の坏蓋に線刻されている。これらの「大」も書き慣れた、熟練した筆使いの文字といえる。この「大」については郡名に該当するものが無く、意味は不明である。ただし『日本書紀』に記された小県郡嬢の里の大伴連忍勝の仏教説話などから、「大伴」などの人名を簡略化した「大」、あるいは吉祥文字としての使用なども推測される。なお、今回出土した須恵器は、その形状から8世紀後半から9世紀前葉にかけての遺物と考えられる。

4 高丘丘陵古窯址群と依田古窯址群

ところで、中野市の清水山窯跡群から北方へ約350m程離れた地点には、8世紀第二四半期に須恵器の後に平瓦、丸瓦を焼成した池田端2号窯跡が所在していた。これらの平瓦、丸瓦は、桶巻造りの平瓦や玉縁の無い無段式の丸瓦であり、信濃国分寺跡出土瓦と比較すると一段階古式である。この平瓦と類似した平瓦は須坂市の左願寺廃寺跡から出土しており、この窯跡から南方へ約6kmほどの左願寺廃寺へ供給された可能性が考えられる。これらの窯跡群から西側約800mの地点には、現在の千曲川の流路があり、千曲川を用いて県内の各所に須恵器や瓦を運搬したと推測される。この清水山窯跡群付近から信濃国分寺跡が所在する上田市国分付近までの千曲川流路の長さは約60kmある。現在、信濃国分寺跡出土の須恵器や瓦類については、その多くが8世紀後半から9世紀前葉まで生産した依田古窯址群から供給されたと考えられている。が、7世紀中葉から9世紀前葉まで生産が継続したこの高丘丘陵古窯址群から、千曲川の舟運を利用して須恵器などが少量ではあるが運搬された可能性も考えられる。また池田端2号窯跡に関与した瓦工（がこう・瓦を作る工人）が、8世紀中葉の信濃国分寺造営に際して依田古窯址群に移り、造東大寺司から招来された瓦工の技術的な指導を受けて、畿内系の軒瓦や丸瓦、平瓦を製作した可能性も、当時重要な交通路であった千曲川が存在を考えると可能性の一つとして推測される。

なお、清水山窯跡群出土の高井郡の郡名のへら描きについて、多数の「井」のへら描き資料の詳細な検討から、須恵器の発注者からの要請により高井郡を示すために記された記号と考えられている。このため郡名が記載された須恵器は郡以上の組織である国単位の組織での使用が予定され、その発注者もしくは生産主体者は郡を統括するものであり、清水山窯跡郡は官窯的な性格を有した窯と指摘（註2）されている。

5 文字瓦からみた郡名へら描き文字の意味

武蔵国分寺跡、下野国分寺跡、多賀城跡などから多数出土する郡名を記した文字瓦については、これまで多くの研究（註4）がある。この郡名の意味について、瓦は税の負担体系による貢進物で、造瓦経費を負担した郡名を示す（註5）、瓦を寄進するための仏教的な作善行為で、知識物（寄進された物）としての性格をもつ（註6）などの説がある。前者の説では、瓦への記名は郡が直接各郡の瓦屋（がおく・工房や窯など瓦生産をする場）に瓦を発注してその経費を納めた場合であり、無記名の瓦は郡が国司の主導する造寺所（寺院を造る機関）に経費を納め、造寺所から瓦屋に一括して瓦を発注した場合とする説（註7）が出されている。多賀城跡の郡名文字瓦についても瓦生産の経費の負担を示すものと考えられている。

また、下野国分寺跡出土文字瓦の研究から、その生産した瓦屋は国府が運営する官営工房とし、国分寺の建立以降は国府や郡衙への瓦供給は同一の瓦屋から供給されたと考え、郡名文字瓦が国府跡で少ないのは郡名を瓦に記名しない時期に国府所用瓦は生産されたためと考察されている。この下野国分寺の文字瓦の郡名は瓦工の出身郡の名前と考え、雑徭（ぞうよう・成年男子に課せられた労役）で瓦工が編成されたとする説（註8）が提示されている。なお、下野国分寺創建期には自郡の瓦屋で自郡の瓦を生産する際は無記名で、複数の郡の瓦を生産する場合は郡名が記名されることが解明されている。さらに雑徭の代納による瓦の調達が行われ、文字瓦について雑徭の代納が指摘（註9）されている。国司、郡司には雑徭を徴用する権限があるため、郡ごとに雑徭の代納

として造瓦の経費負担をしたと考えられている。

こうした文字瓦の研究を援用すると、北東城から出土した郡名へう描き入りの須恵器は、国単位の国分寺の造営に際して、その郡が郡ごとに須恵器の生産経費を負担したことを示したものの、あるいは国分寺に須恵器を寄進する仏教的な善行為を郡ごとに示したもののなどの推測が可能である。なお、信濃国分寺所用の須恵器の生産窯跡は、へう描きされた須恵器や、古窯址群の造営時期、国分寺跡との距離などから現時点では主として依田古窯址群の可能性が高いが、今後の詳細な検討が必要といえる。

第2節 僧寺北東城出土の瓦類について

僧寺北東城からはH地区、G地区を中心に、軒丸瓦4点、軒平瓦3、丸瓦45点、平瓦74点、鬘斗瓦2点が出土している。このうち軒丸瓦は創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦が3点、蕨手文（わらびてもん）軒丸瓦が1点、軒平瓦は均整唐草文（きんせいからくさもん）軒平瓦が出土している。これらの瓦類128点のうち、H地区では103点、G地区では17点が出土し、ほとんどの瓦がこの地区に集中し、瓦葺きの建物がこの付近に存在していた可能性が推測される。以下、特に特徴的な蕨手文軒丸瓦や平瓦について、検討してみたい。

1 蕨手文軒丸瓦

図12の蕨手文軒丸瓦は瓦当面の直径が17.0cm～18.2cmと推定される。内区径は8.0cm、外区幅は4.0cm、外縁の高さは0.5cmである。瓦当文様の保存状態は良く、范抜けも良好である。瓦当面の中心に円点を置き、その円点を通る細長いS字状の文様を4本配しており、その形状から蕨手文と称されている。外区には蕨手文を2本ずつ組にして配し、その外側に珠文を配置し、外縁は素文である。

瓦当裏面には丸瓦部凹面から連続すると考えられる布目痕が認められ、一本造り軒丸瓦に分類される。この文様と同一の軒丸瓦は、僧寺跡北方、僧寺講堂東北、僧寺東側回廊跡、尼寺跡東門地区などから出土しており、文様・形状の酷似から同范瓦の可能性が考えられる。この軒丸瓦は、信濃国分寺の伽藍周辺部の建物造営や、後の補修用瓦として用いられたと考えられる。八葉複弁蓮華文軒丸瓦が畿内系の端整な文様であるのに対して、在地系の特色ある文様で、中国や高句麗系の雲文を表現したものととも考えられている。（註10）これと同一文様の軒丸瓦が、埴科郡坂城町の土井ノ入窯跡と込山廃寺から出土している。

2 平瓦

僧寺跡北東城からは、平瓦が74点出土し、凸面の調整方法から10種類に分類される。このうち縄叩き目の平瓦は43点、縄叩きの後に撫で調整が施された平瓦が2点、縄叩きの後に木口状工具による撫で調整の平瓦が2点、縄叩きの後にへう削りを施した平瓦が1点、押型文の平瓦が10点、平行文工具による叩き目の平瓦が3点、網目状工具による叩き目の平瓦が1点、へう等による撫で調整の平瓦が10点、へう削りが1点、工具形状が不明の叩き目の平瓦が1点出土している。こうした平瓦は、僧寺金堂跡や講堂跡、尼寺金堂跡などから出土した平瓦と同様に縄叩き目が多く、種類や形状がほぼ同一のものと考えられる。

なお今回の調査では、この北東城から僧寺築地堀跡や区画施設などの明確な遺構は確認できなかった。ただし、千曲川の河原石とみられる拳大から人頭大までの石を用いた石敷遺構やI地区、G地区では掘立柱建物跡が5棟検出されている。このうち石敷遺構は段丘下の湿地帯を地固めて造成し、伽藍敷地を整備した地業の痕跡、何らかの屋外施設の跡、庭園遺構の可能性などの推測がなされ、今後の解明が課題とされている。またI地区の建物中軸線が南北方向で、ほぼ僧寺跡と一致する2間×3間の2棟の掘立柱建物跡については、国分寺伽藍に関係した建物跡や、大衆院、政所院など国分寺付属施設の建物跡の可能性も考えられる。

第3節 僧寺南大門跡付近出土瓦類、暗渠排水遺構について

1 軒丸瓦・丸瓦・平瓦

平成16年6月から10月まで僧寺の南大門跡推定地が調査され、その結果南大門の礎石の根石と考えられる集石遺構が10箇所で検出され、ほぼ想定された地点に南大門跡が確認された。検出された南大門の規模は、間口3間(10.5m)、奥行き2間(6.6mもしくは6.9m)あり、八脚門であることが解明された。この南大門の調査では、当初瓦の出土量が少なく、屋根材が椽皮(ひわだ・ヒノキなどの薄い板)や柿板(こけらいた・ヒノキなどの薄い板)で葺き、棟の最上部のみを瓦葺きにした可能性が考えられた。が、調査の最終段階で信濃国分寺創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦(はちようふくべんれんげもんのきまるがわら)が周辺から3点出土し、また平瓦、丸瓦片の出土もみられ、金堂、講堂、中門等と同様に瓦葺きの可能性が考えられている。

図11は瓦当面がほぼ完形の、八葉複弁蓮華文軒丸瓦で、南大門跡東南隅より出土している。瓦当面の直径は19.2cm～19.3cmで、信濃国分寺跡出土軒丸瓦の標準値18.8cmより5mm程大きい、大振りの軒丸瓦である。僧寺講堂跡からもこの19.2cm前後の軒丸瓦が数点出土している。蓮華文の范抜けは良好で、外区内縁の16個の珠文、中房の1+6の蓮子の形も鮮明である。内区の蓮弁は豊かに反りをもたせ、端正に仕上げられている。周縁部の内側には14条程度の斜状の筋目が認められ、瓦当范の木目痕と推測される。また瓦当部は印籠付けの技法で丸瓦部に接合され、丸瓦部の凹面には布目痕が残存している。

こうした創建期の信濃国分寺軒丸瓦は、奈良の東大寺所用瓦(奈良文化財研究所平城宮跡瓦編年の軒丸瓦6235形式)と文様や製作技法が酷似している。このため造東大寺司に属する瓦工を招来して造瓦が行われ、東大寺などの所用瓦の文様を忠実に模して、大和か信濃で新たに范型を製作して造瓦したと考察(註11)されている。

また図13の四葉単弁蓮華文軒丸瓦は南大門跡北側から出土している。瓦当面の直径は18cm程度と推定され、厚さは2.5cmで、約1/5が残存している。これと同一の文様の軒丸瓦は、尼寺金堂跡から2点出土している。どちらも完形品ではないがこれらの資料から推定すると、弁面に小さな芯を2本あしらい、花卉の間に珠文を3点ずつ配した四葉の単弁蓮華文の軒丸瓦と考えられる。これらの3点は、文様・形状の酷似から同范瓦の可能性が考えられる。

南大門跡付近の調査からは、上述した創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦が3点、鬼瓦片が2点、丸瓦が45点、平瓦が74点出土している。丸瓦はすべて玉縁付きとみられ、凹面に布目痕を有し、凸面をへら等で撫で調整している。平瓦は凸面調整の方法で8種類に分類されている。このうち細叩き目の平瓦が39点、細叩きの後にへら撫で調整を施した平瓦が4点、細叩きの後に撫で調整した平瓦が3点、細叩きの後にへら削りを施した平瓦が1点、へら等による撫で調整の平瓦が14点、へら削りの平瓦が1点、平行文工具の叩き目の平瓦が5点、押型文の平瓦が6点、櫛歯状工具による撫で調整の平瓦が1点出土している。このうち南大門跡のグリッドからは、丸瓦21点、平瓦39点の合計60点が出土している。ただし、金堂、講堂、中門などと比較すると瓦の出土量は少量であった。この理由としては、10世紀における平将門の乱の後、一段上の段丘上に信濃国分寺が移転した際に、礎石や瓦を含めた主要な資材を再利用した、また国分神社等其他の寺社の建築資材に再利用したなどの可能性が考えられる。

2 暗渠排水遺構

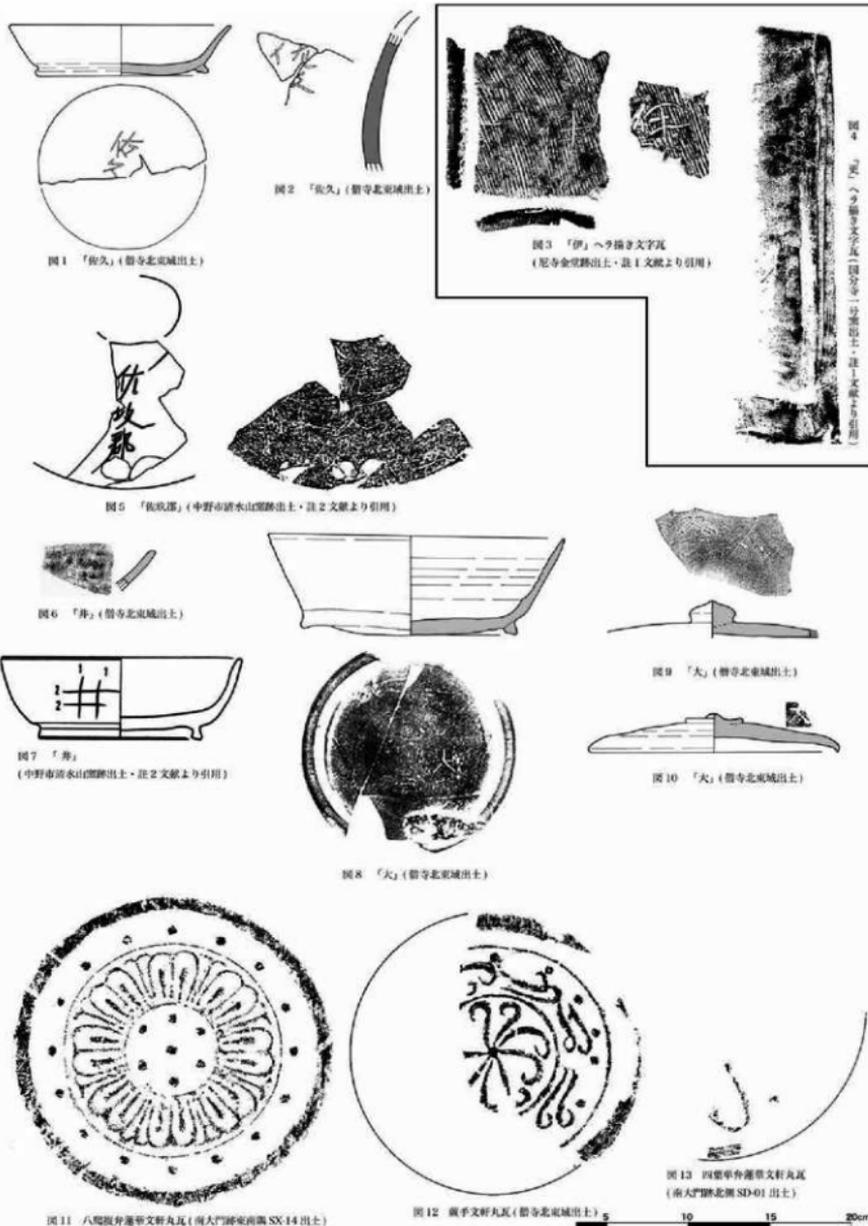
僧寺南大門跡は、昭和46年の調査終了時点で想定された場所とほとんど同一の地点で確認された。この南大門と接続する築地遺構については、南大門東側の推定線上に一部硬化面が検出されたが、今回は明確な遺構は検

出されなかった。

今回の調査では、南大門跡の根石間を南北方向に貫くように幅約2.4m、深さ約0.7mの暗渠排水遺構が検出された。この暗渠排水遺構は溝を掘った後に根石の下端まで拳大から人頭大の川原石を詰め、その後上部に根石を据えて暗渠溝を砂や土で埋めて突き固めたと推定された。またこれと平行な同規模の暗渠排水遺構が南北に2条確認された。さらに調査区の北半部には東西方向の暗渠排水遺構が多数出土している。こうした遺構の中には瓦や少量の土師器、須恵器などが含まれていた。この地域は南側に緩く傾斜しており、降雨時には雨水が溜まりやすいため、大規模な暗渠排水施設を必要としたと推測される。この南大門跡の南側の段丘下には、東西に東山道ルートが推定されており、この東山道を出水から保護するためにも、上段に溜まる大量の水を排水する設備が必要であったと考えられる。

註

- 1 上田市教育委員会 1974『信濃国分寺一本編一』吉川弘文館
- 2 鶴田典昭他 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 清水山窯跡 池田端窯跡他』長野県埋蔵文化財センター
- 3 註2と同じ
- 4 大川清 1973「東国国分寺造営時における造瓦組織の研究—瓦磚文字を中心として—」『国士館大学人文学会紀要』5
山路直充 2005「文字瓦の生産—七・八世紀の坂東諸国と陸奥国を中心にして—」『文字と古代日本3 流通と文字』吉川弘文館
- 5 註4 大川清文獻
- 6 宮崎礼 1938「武蔵国分寺」『国分寺の研究』上巻 考古学研究会
- 7 大川清 2002『古代造瓦組織の研究』日本窯業史研究所
- 8 大橋泰夫 2001「下野の瓦生産について」『栃木県考古学会誌』22
- 9 山中敏史 2003「地方官衙と労働力編成」『日本史研究』487
- 10 村上和夫 1983「葺手文瓦当のロマン—信濃国分寺尼寺址出土の葺手文鏡瓦の考察(一)—」『千曲』36号
森郁夫 1986「古代信濃の畿内系軒瓦」『信濃』第38巻9号
- 11 山崎信二 2003「平城宮・京と同范の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社

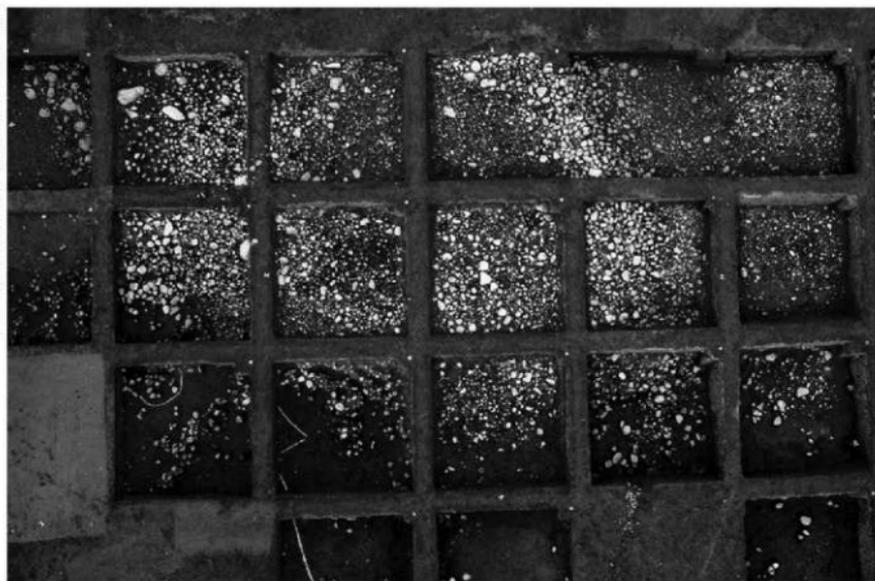


第107図 ヘラ描き文字・出土瓦の考察実測図

写真図版



PL.52 平成14年度調査区全景(真上)



PL.53 平成 14 年度調査 段状集石遺構(真上)



PL.54 平成 14 年度調査 段状集石遺構(北)



PL.55 平成 14 年度調査 段状集石遺構 (南西)



PL.56 平成 14 年度調査 段状集石遺構 (南東)



PL.57 平成14年度調査区東側地業下の溝跡(南東)



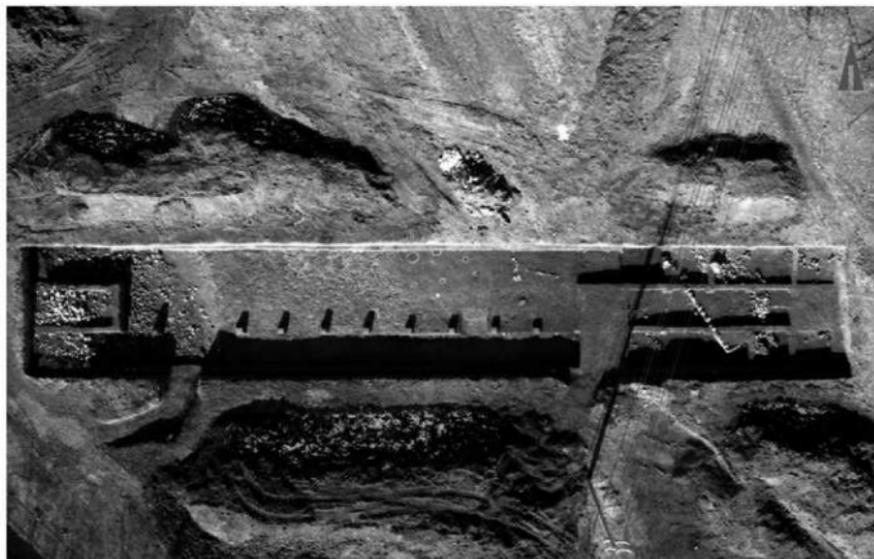
PL.58 平成14年度調査区東側地業下の溝跡セクション(北西)



PL.59 平成15年度発掘調査区全景(真上)



PL.60 平成 15 年度 G 地区全景 (真上・写真右が北)



PL.61 平成 15 年度 H 地区全景 (真上)



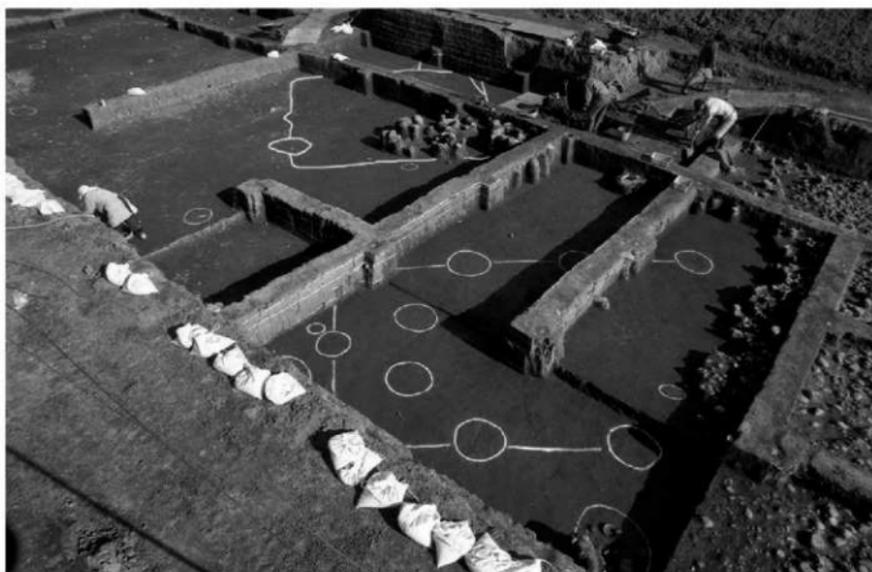
PL.62 平成 15 年度 I 地区全景 (真上)



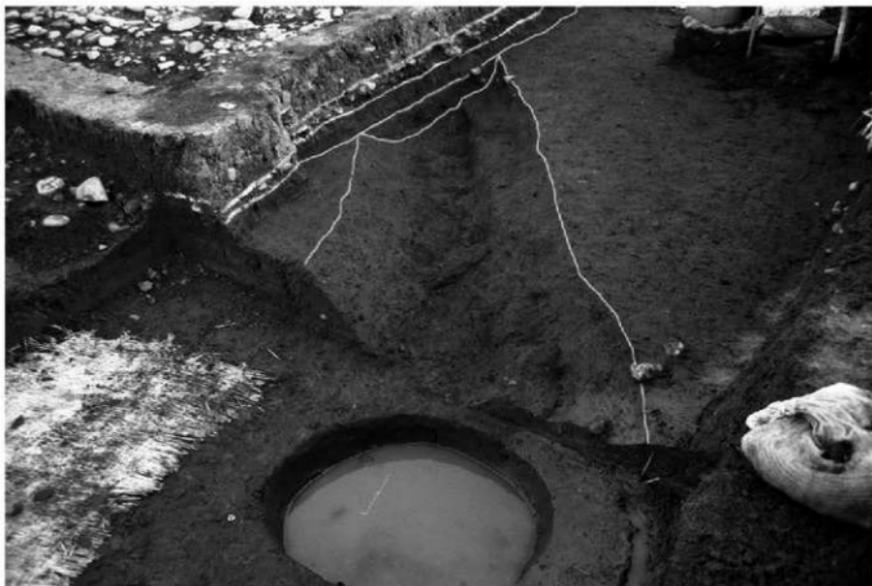
PL.63 平成 15 年度 G 地区全景 (南)



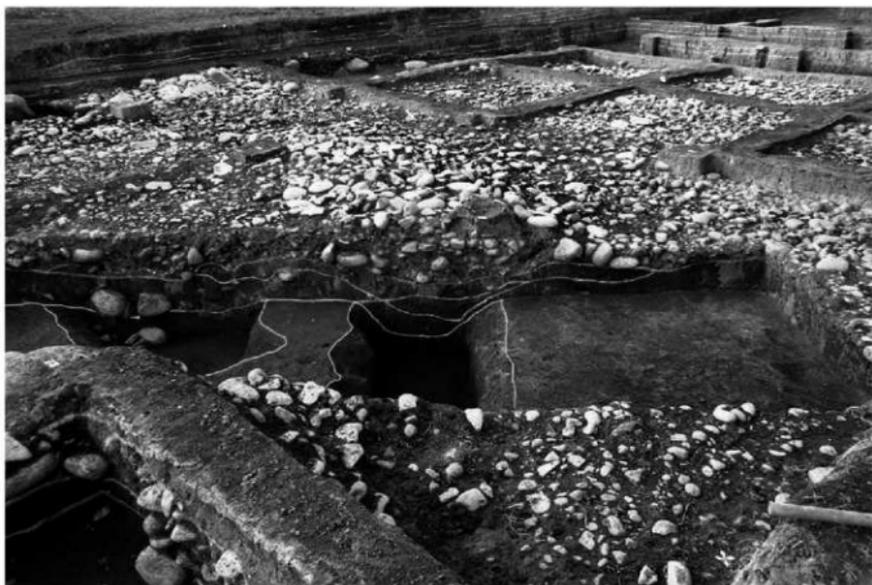
PL.64 平成15年度G地区段状集石遺構(北東)



PL.65 平成15年度G地区竪穴住居址と掘立柱建物址(南西)



PL.66 平成 15 年度 G 地区石敷遺構下溝跡(北西)



PL.67 平成 15 年度 G 地区段状集石遺構下溝跡(南東)



PL.68 平成15年度H地区(東)



PL.69 平成15年度H地区地業下溝跡(西)



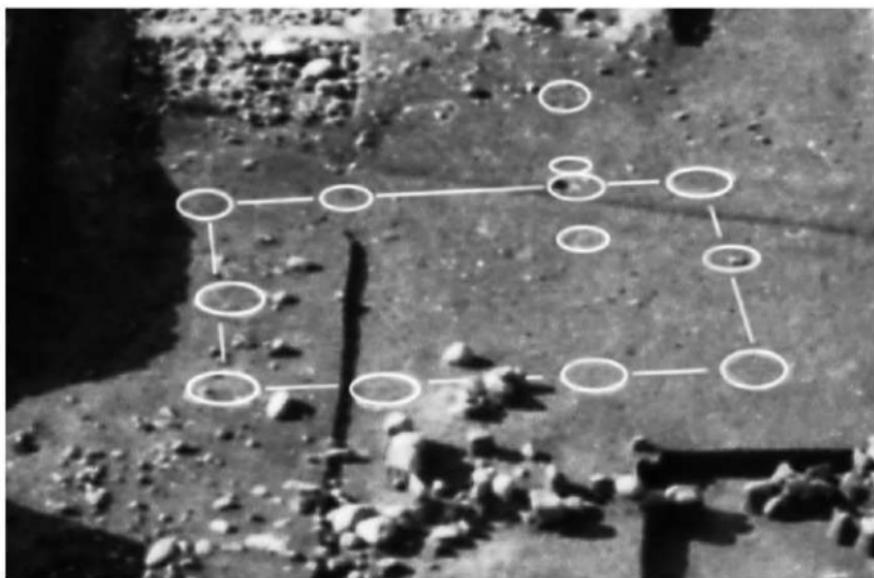
PL.70 平成15年度H地区石積遺構(南西)



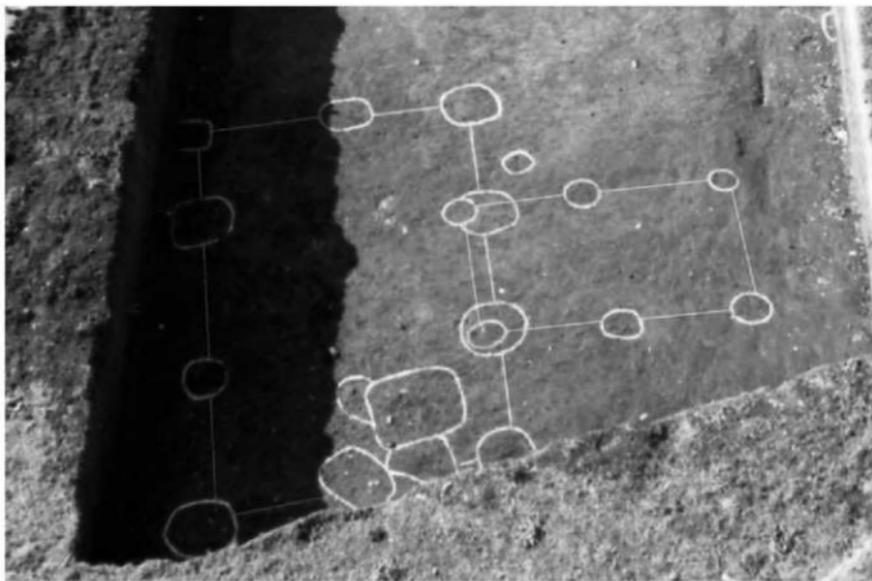
PL.71 平成15年度H地区石積遺構(真上・写真上が南)



PL.72 平成15年度I地区(東)



PL.73 平成15年度I地区ST-02(東)



PL.74 平成15年度I地区ST-04.05(東)



PL.75 平成15年度調査区と僧寺築地塙想定ライン(東)



PL.76 国分寺北東城調査モザイク航空写真



01



07



02



10



05



12



06



13

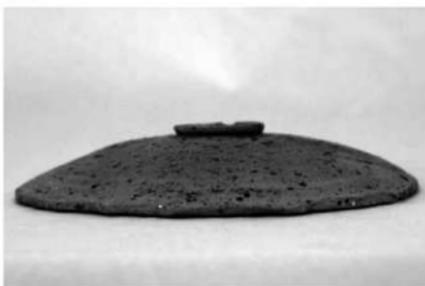
PL.77



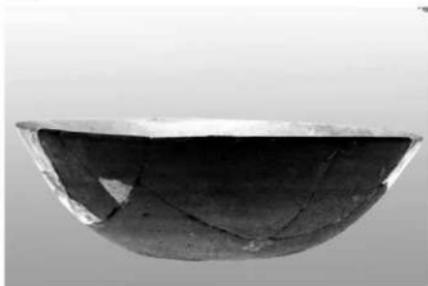
14



28



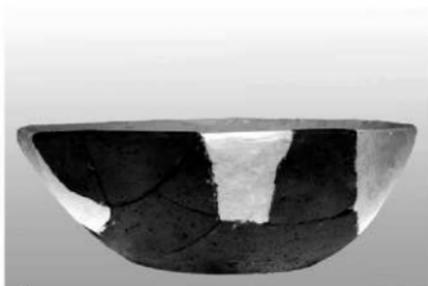
19



30



26



31



27



36

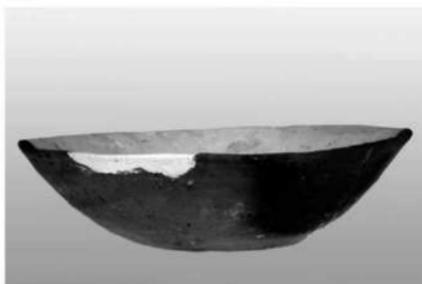
PL.78



37



42



39



43



40



44



41



45



46



51



48



62



49



63



50



64



65



73



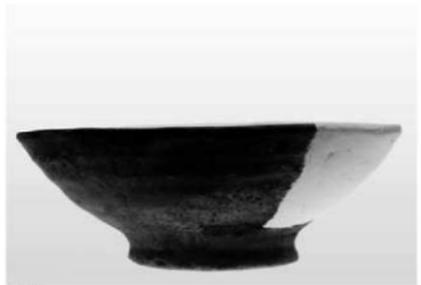
67



83



69



85



71



86

PL.81



90



97



93



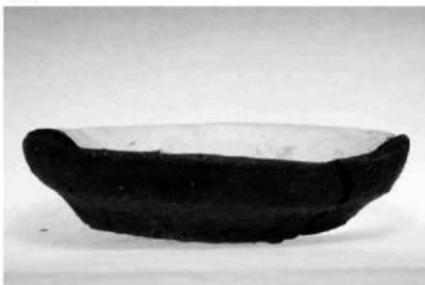
98



95



104



96



116



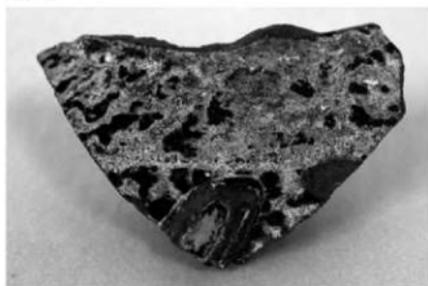
124



170



145



177



149



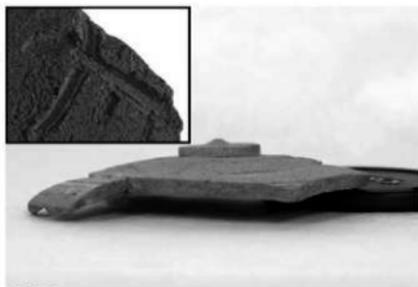
179



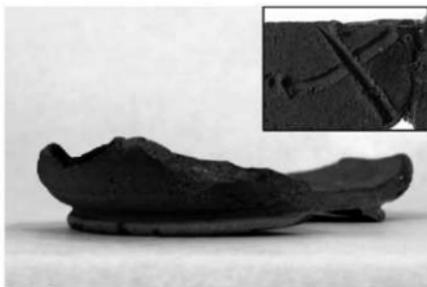
165



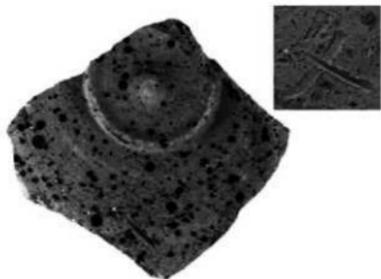
180



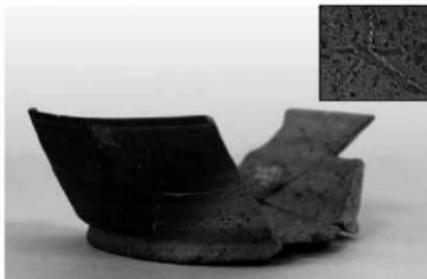
183



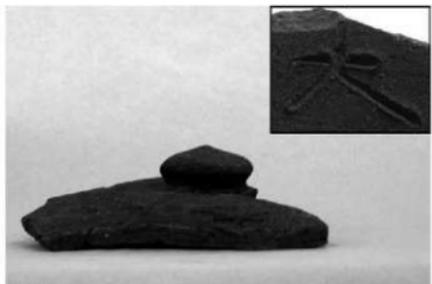
190



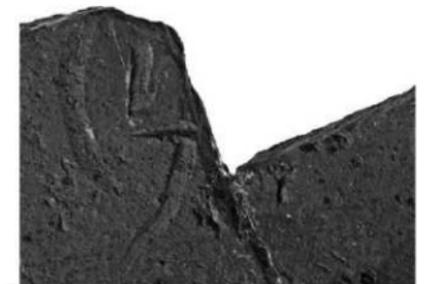
184



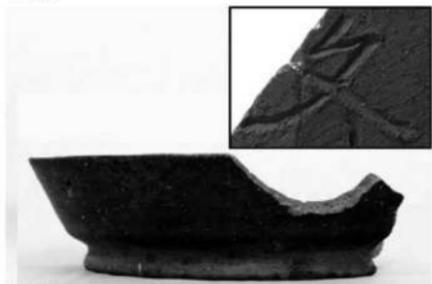
191



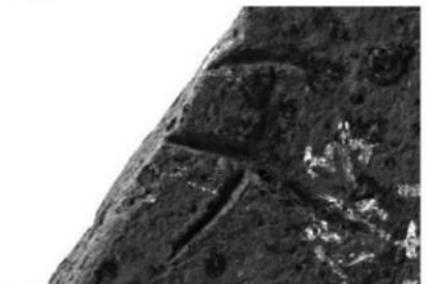
185



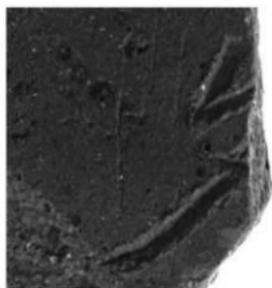
192



188



193



194



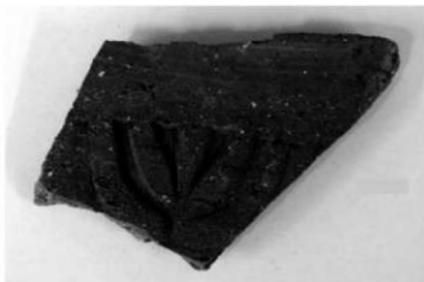
199



196



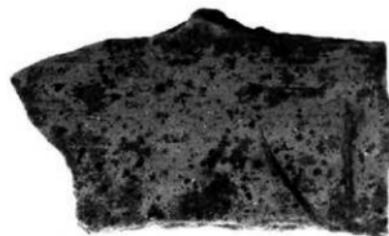
200



197



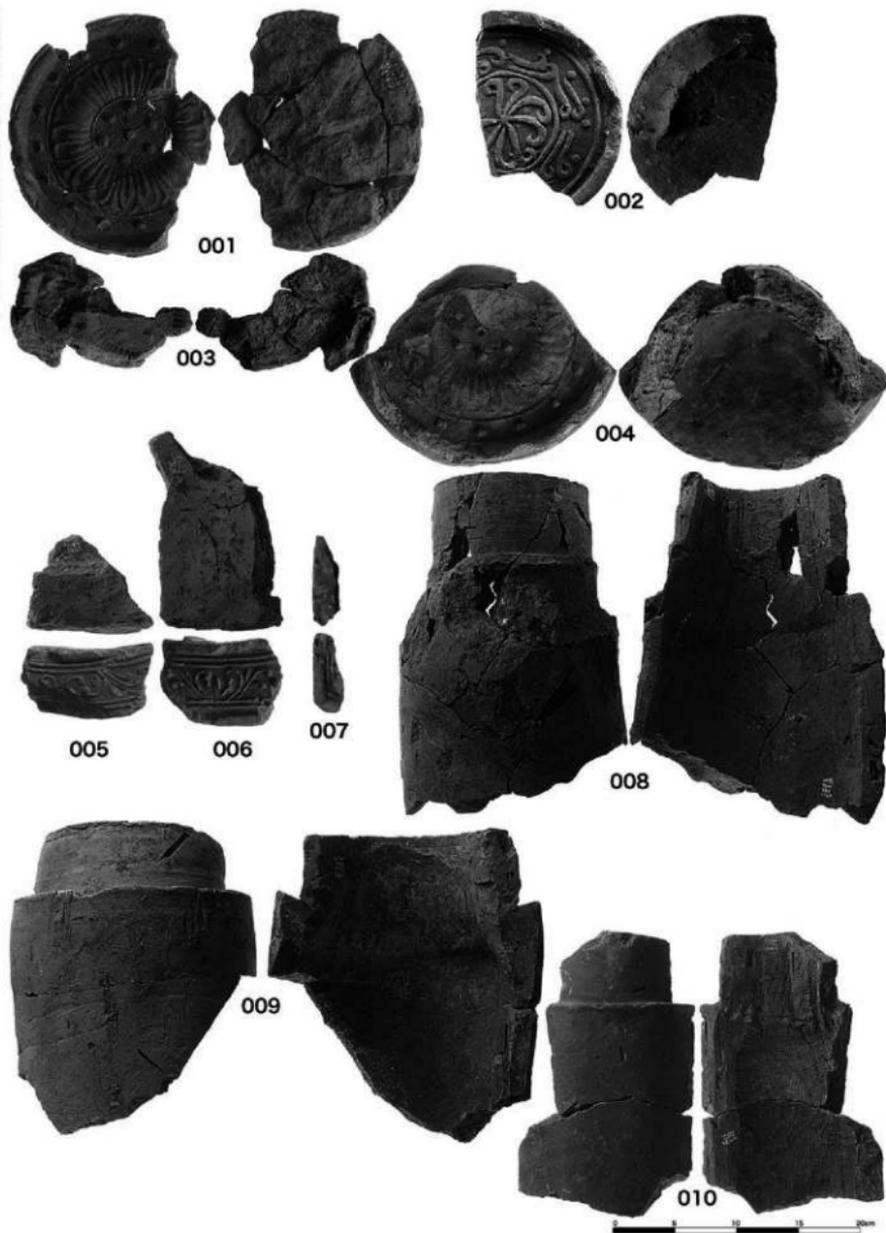
201

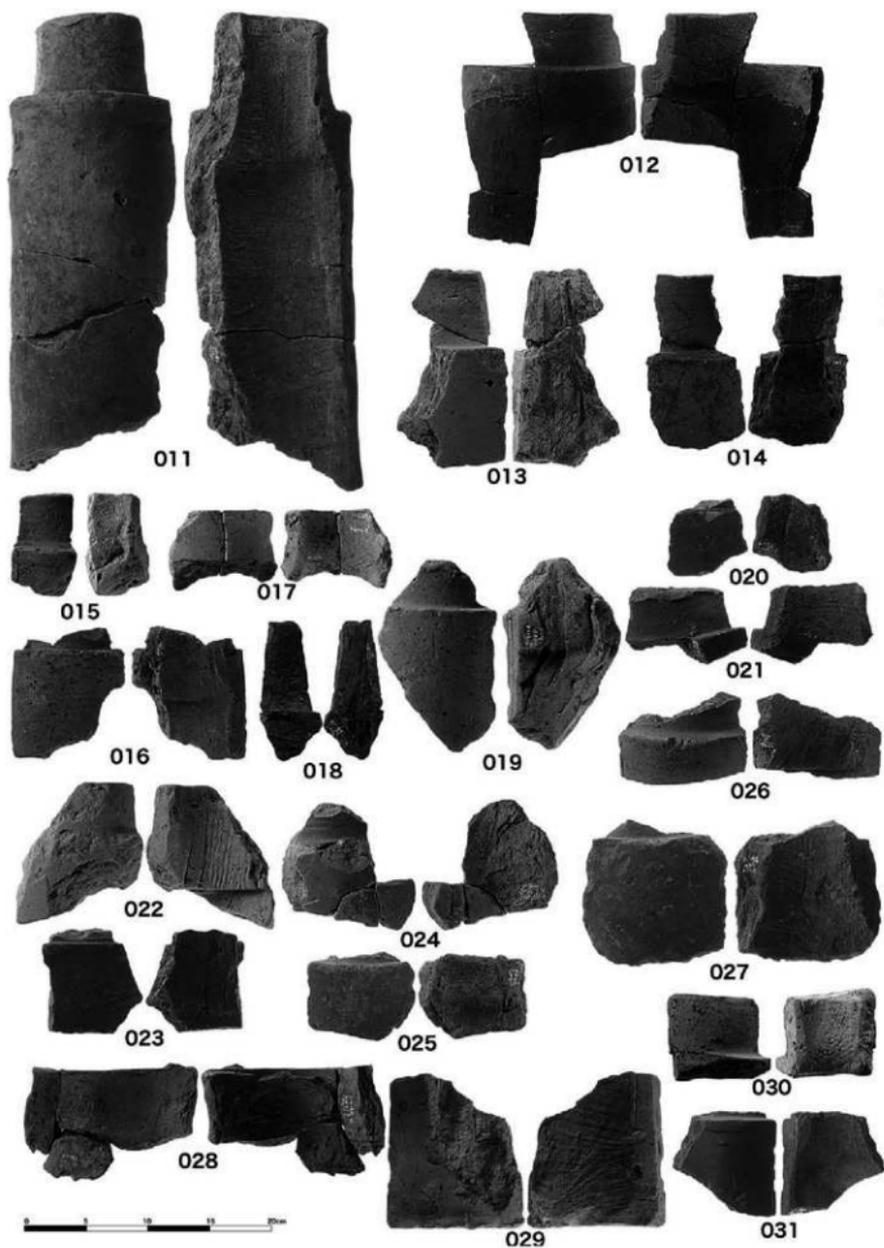


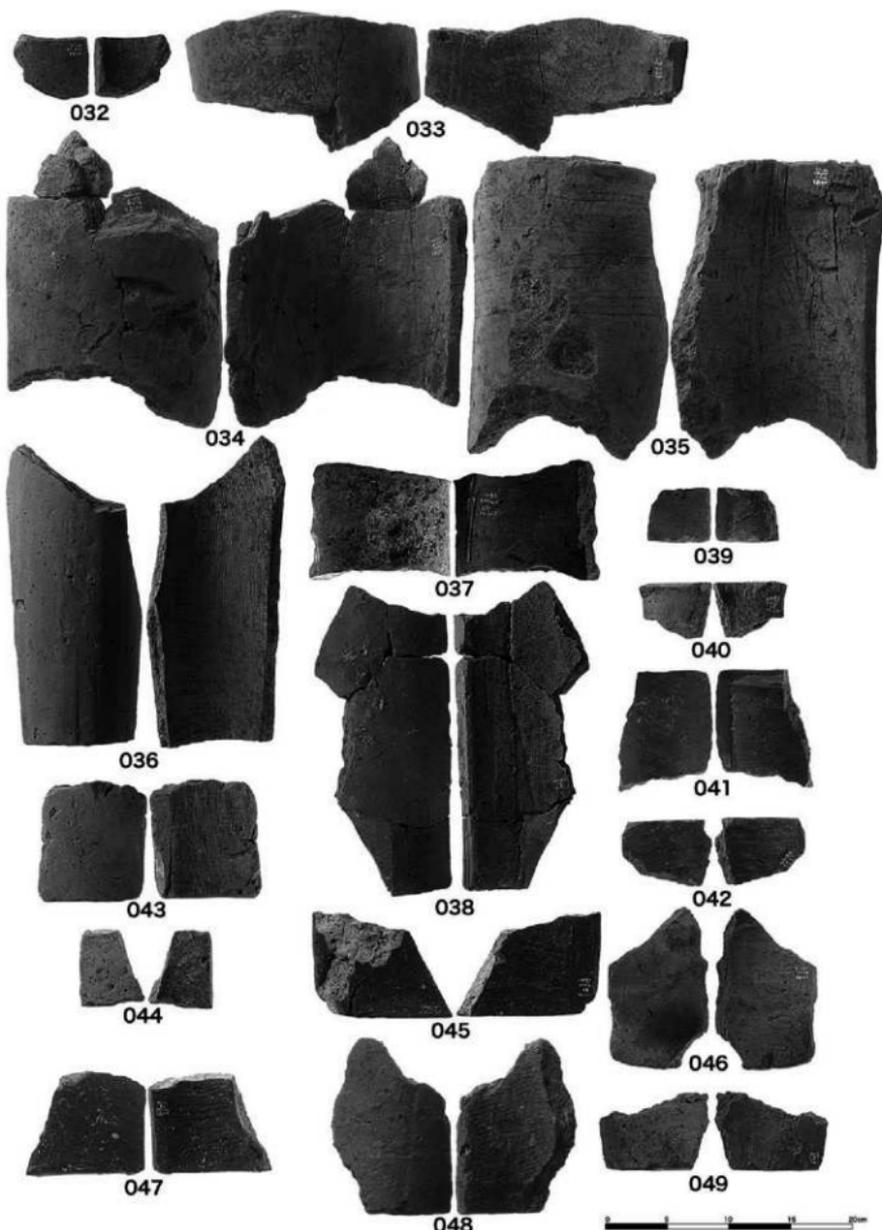
198



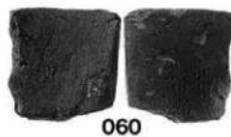
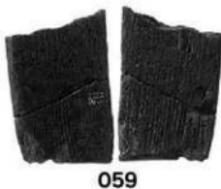
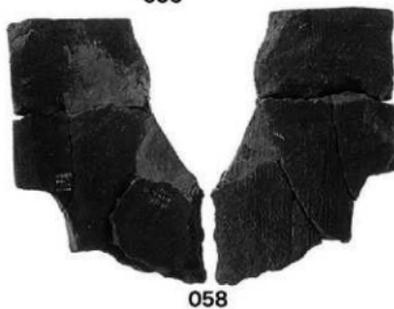
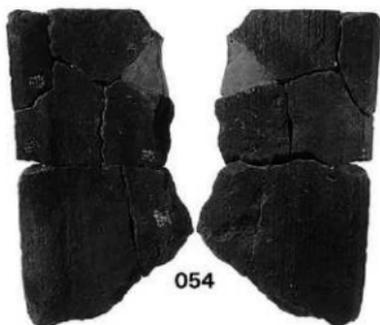
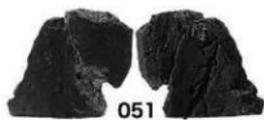
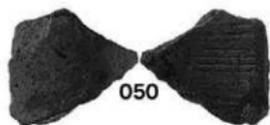
204

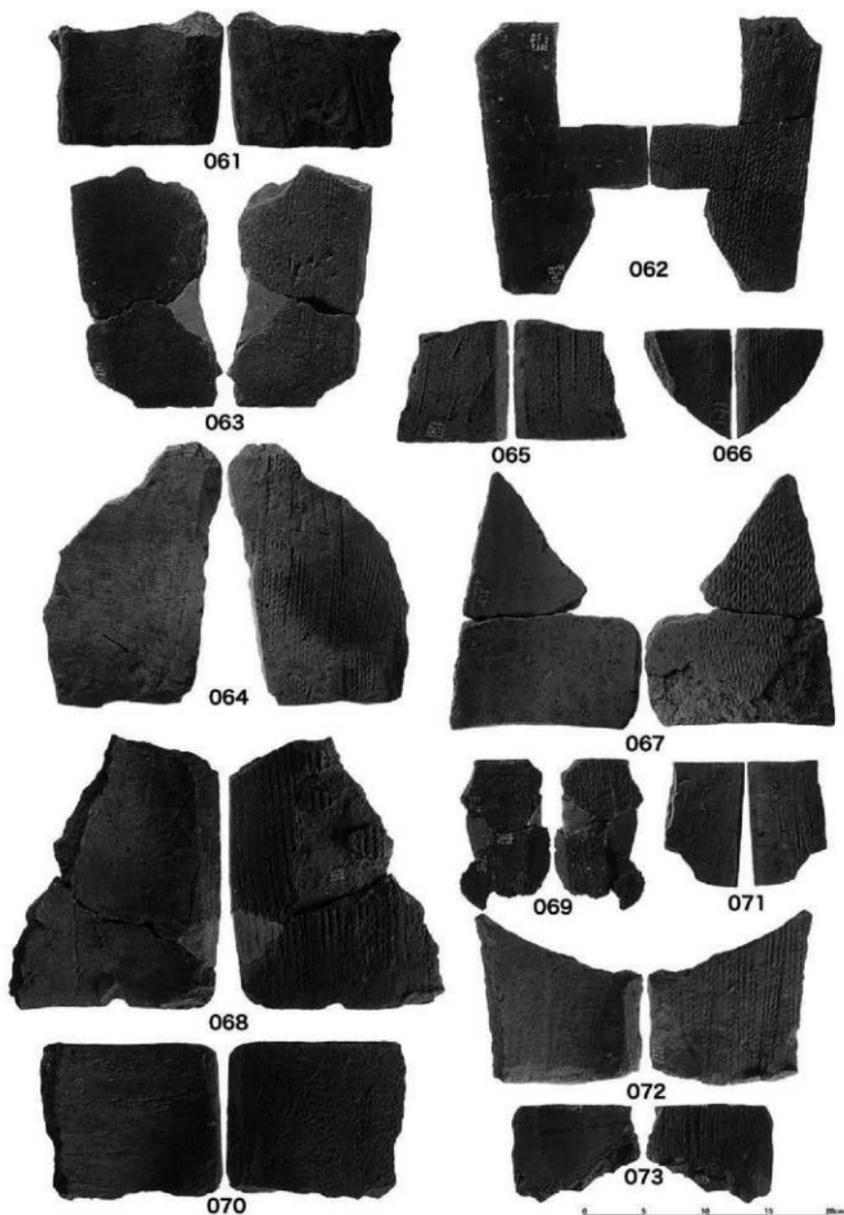


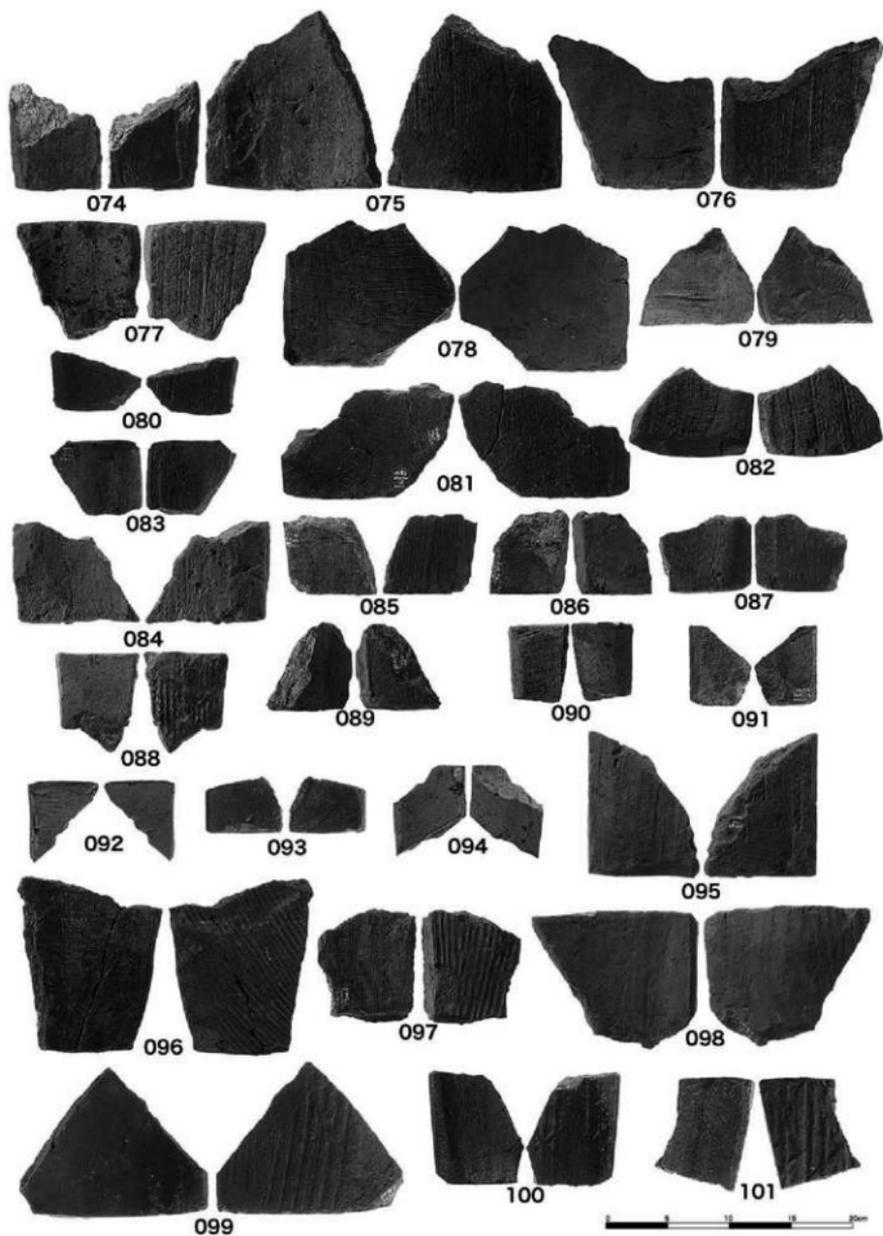




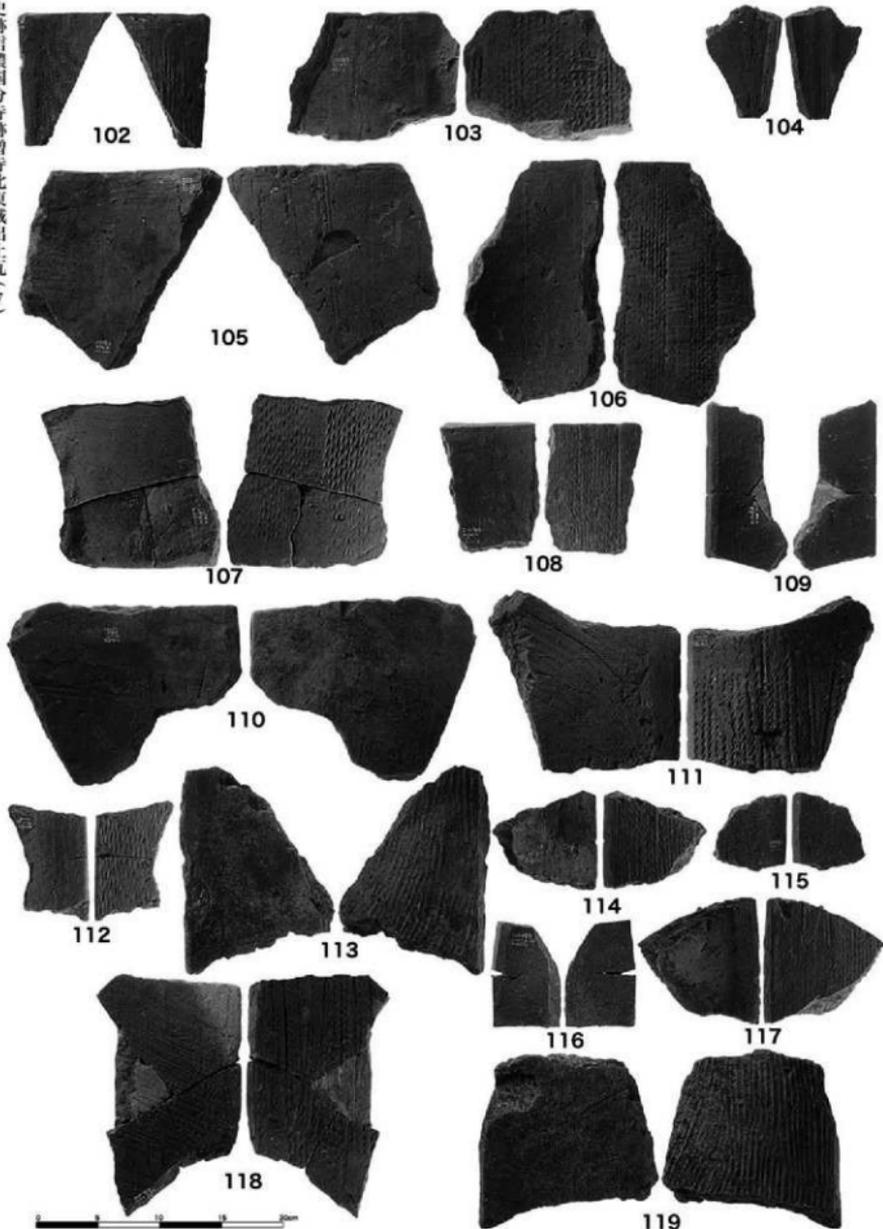
PL.88







PL.91





120



121



122

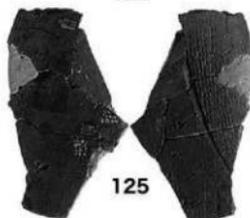


123

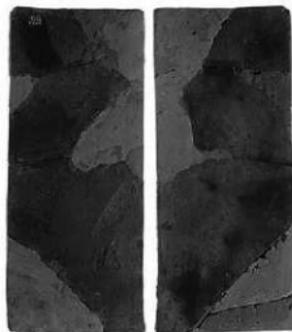


124

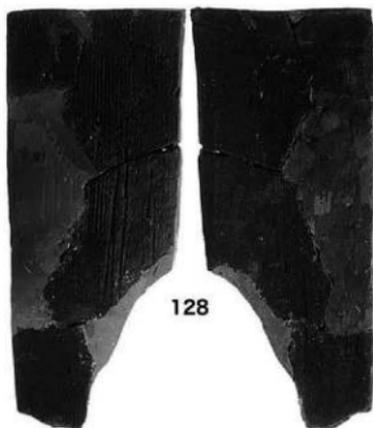
126



125



127



128





PL.94 南大門跡調査区から中門・金堂・講堂跡中軸線と現国分寺



PL.95 平成 16 年度調査区全景 (真上)



PL.96 南大門跡遺構(南)



PL.97 南大門跡遺構(東)



PL.98 南大門跡遺構(北)



PL.99 南大門根石 SX-01 と暗渠排水遺構 SD-01 のセクション(南)



PL.100 南大門根石SX-06と暗渠排水遺構SD-01のセクション(南東)



PL.101 暗渠排水遺構SD-01セクション(排水溝内部で石組を構える 南)



PL.102 暗渠排水遺構 SD-01 セクション (排水溝内部で石組を構える 西)



PL.103 暗渠排水遺構 SD-02 セクション (南)



PL.104 暗渠排水遺構 SD-02 セクション(内部にトンネル状を設ける 南)



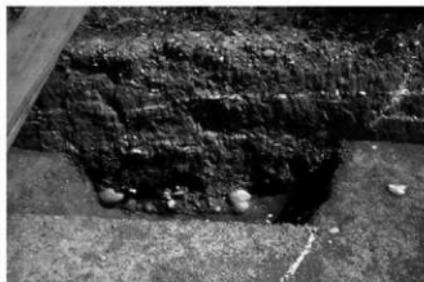
PL.105 暗渠排水遺構 SD-02(内部にトンネル状石組 北)



PL.106 暗渠排水遺構 SD-02 セクション(北)



PL.107 暗渠排水遺構 SD-03B セクション(北)



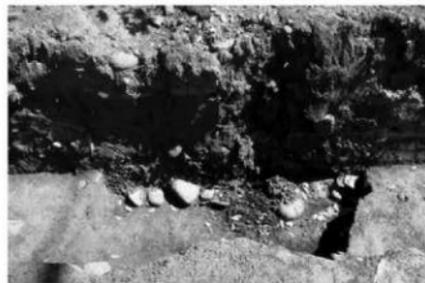
PL.108 暗渠排水遺構 SD-04 セクション(西)



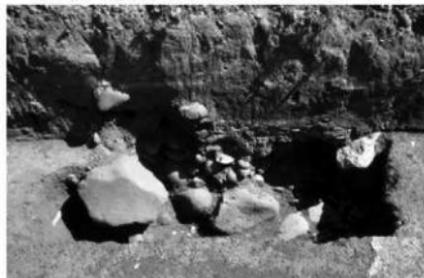
PL.112 暗渠排水遺構 SD-09 セクション(西)



PL.109 暗渠排水遺構 SD-06 セクション(西)



PL.113 暗渠排水遺構 SD-10 セクション(西)



PL.110 暗渠排水遺構 SD-07 セクション(西)



PL.114 暗渠排水遺構 SD-11 セクション(西)



PL.111 暗渠排水遺構 SD-08 セクション(西)



PL.115 暗渠排水遺構 SD-12 セクション(西)



PL.116 暗渠排水遺構 SD-13 セクション (西)



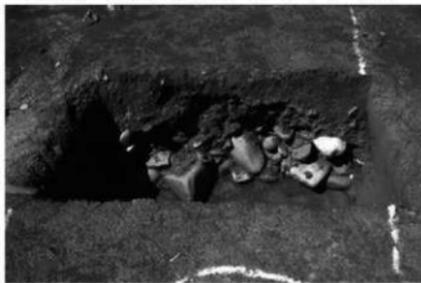
PL.120 暗渠排水遺構 SD-18 セクション (西)



PL.117 暗渠排水遺構 SD-15 セクション (西)



PL.121 暗渠排水遺構 SD-19 セクション (西)



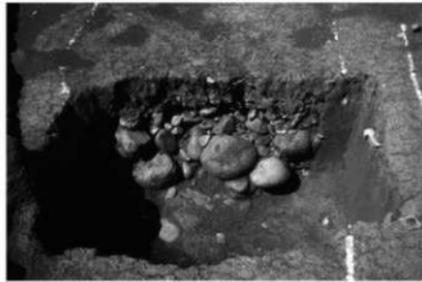
PL.118 暗渠排水遺構 SD-16 セクション (西)



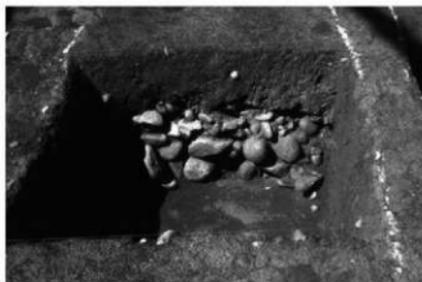
PL.122 暗渠排水遺構 SD-20 セクション (西)



PL.119 暗渠排水遺構 SD-17 セクション (西)



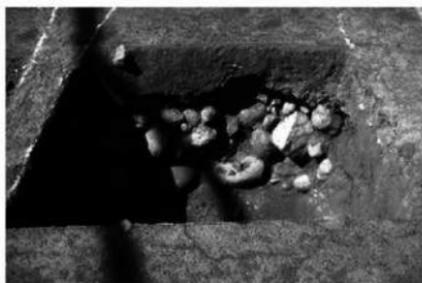
PL.123 暗渠排水遺構 SD-21 セクション (西)



PL.124 暗渠排水道構 SD-24 セクション (東)



PL.126 暗渠排水道構 SD-26 セクション (東)



PL.125 暗渠排水道構 SD-25 セクション (東)



PL.127 SX-12(北)



PL.128 SX-12(西)



PL.129 瓦集中 SX-14(北東)



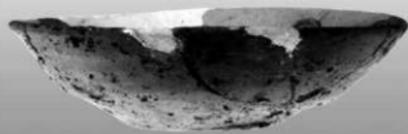
PL.130 瓦集中 SX-14(北東)



01



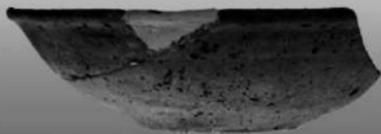
05



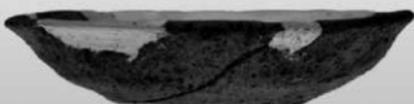
02



06



03



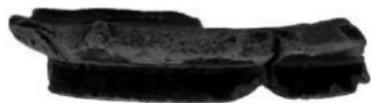
09



04



10



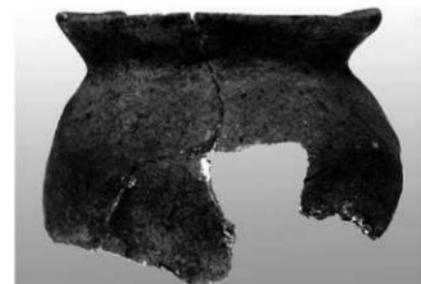
12



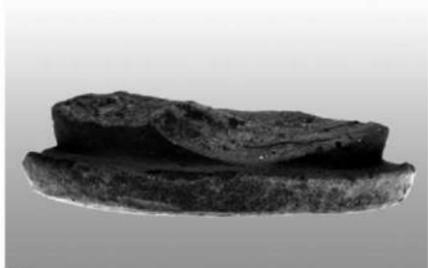
17



13



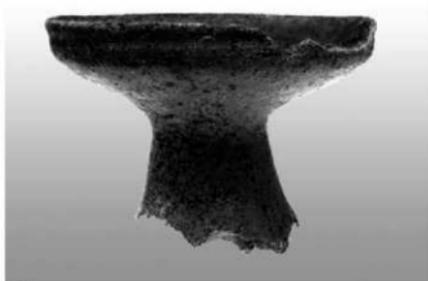
20



15



23



16



25



SD-01-001



SD-01-002



SD-01-003



SD-01-004



SD-01-005



SD-02-001



SD-03-001



SD-03-002



SD-03-003



SD-03-004



SD-03-005



SD-03-006



SD-03-007



SD-03-008



SD-03-009



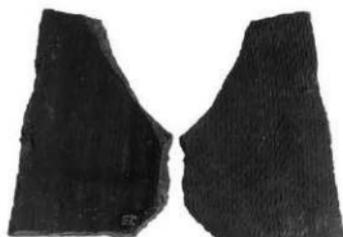
SD-03-010



SD-08-001

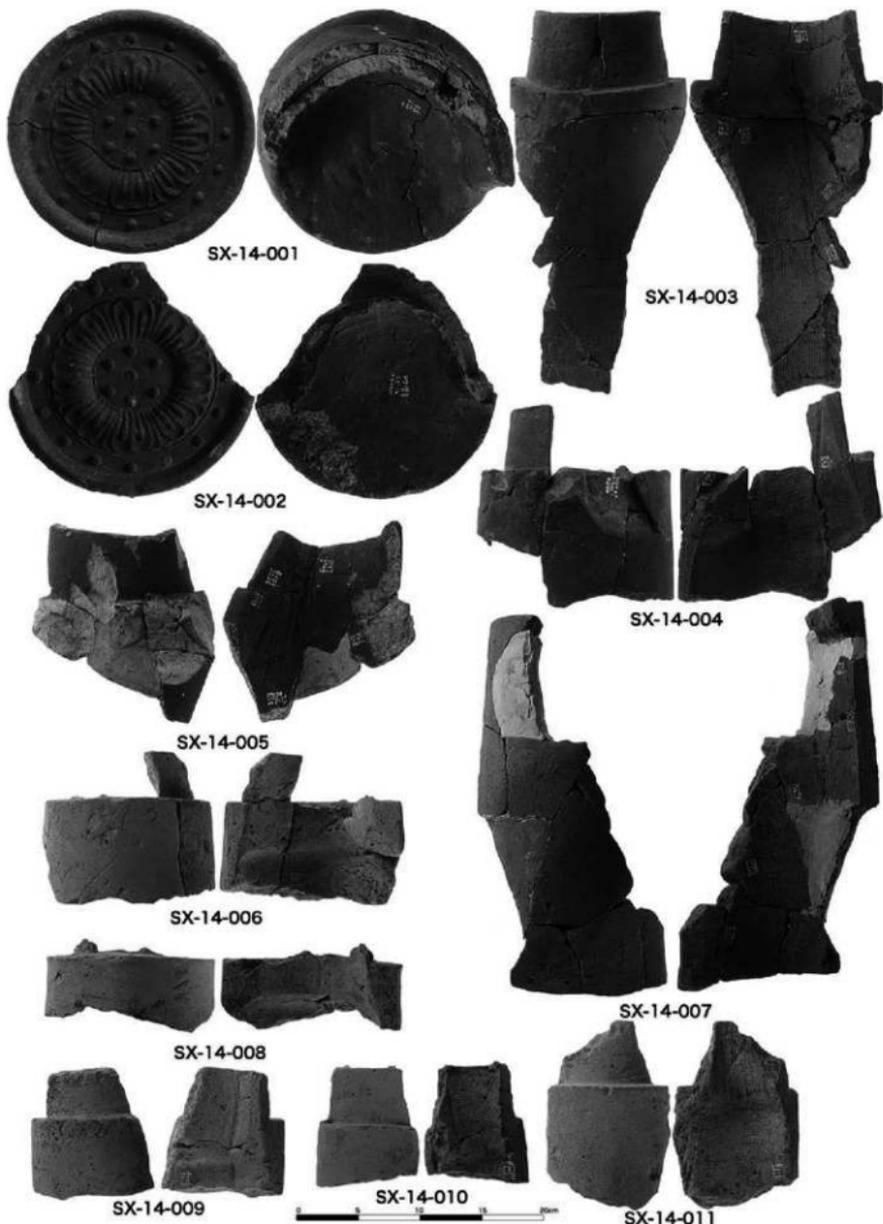


SD-13-001



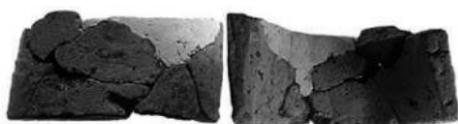
SD-08-002







SX-14-012



SX-14-014



SX-14-013



SX-14-015



SX-14-016



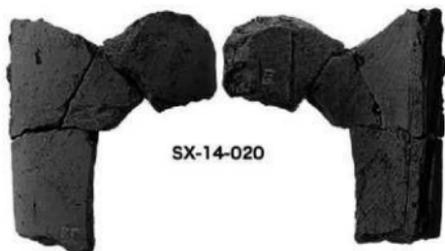
SX-14-017



SX-14-018



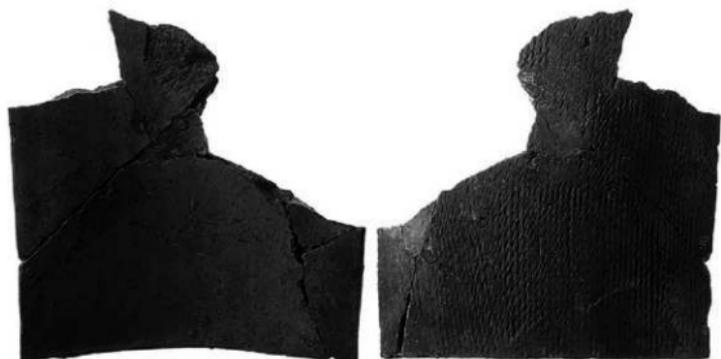
SX-14-019



SX-14-020



H16 現地説明会



SX-14-021



SX-14-022



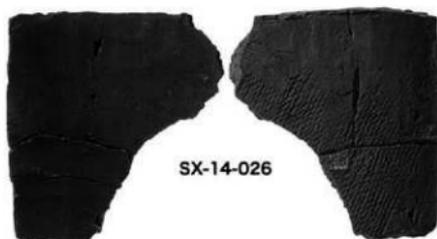
SX-14-023



SX-14-024



SX-14-025



SX-14-026





SX-14-027



SX-14-028



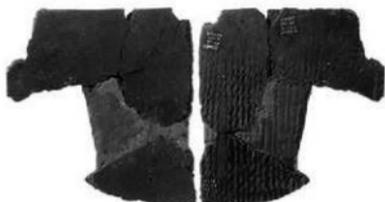
SX-14-029



SX-14-030



SX-14-031



SX-14-032



SX-14-033



SX-14-034



SX-14-035



SX-14-036

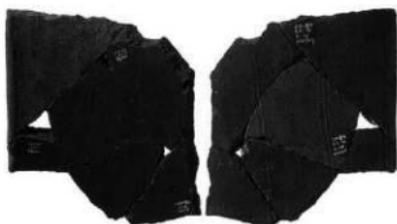


SX-14-037

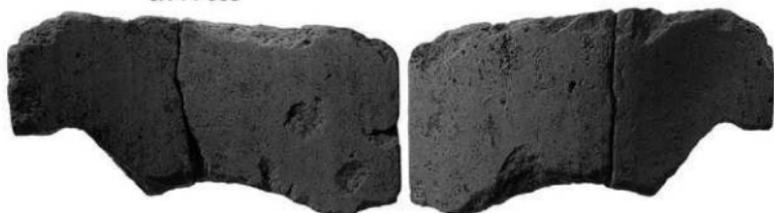




SX-14-038



SX-14-039



SX-14-040



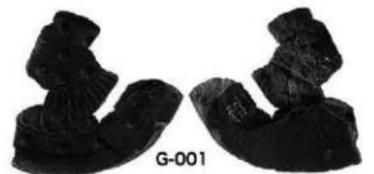
SX-15-001



SX-15-002



SX-15-003



G-001



G-002



G-003

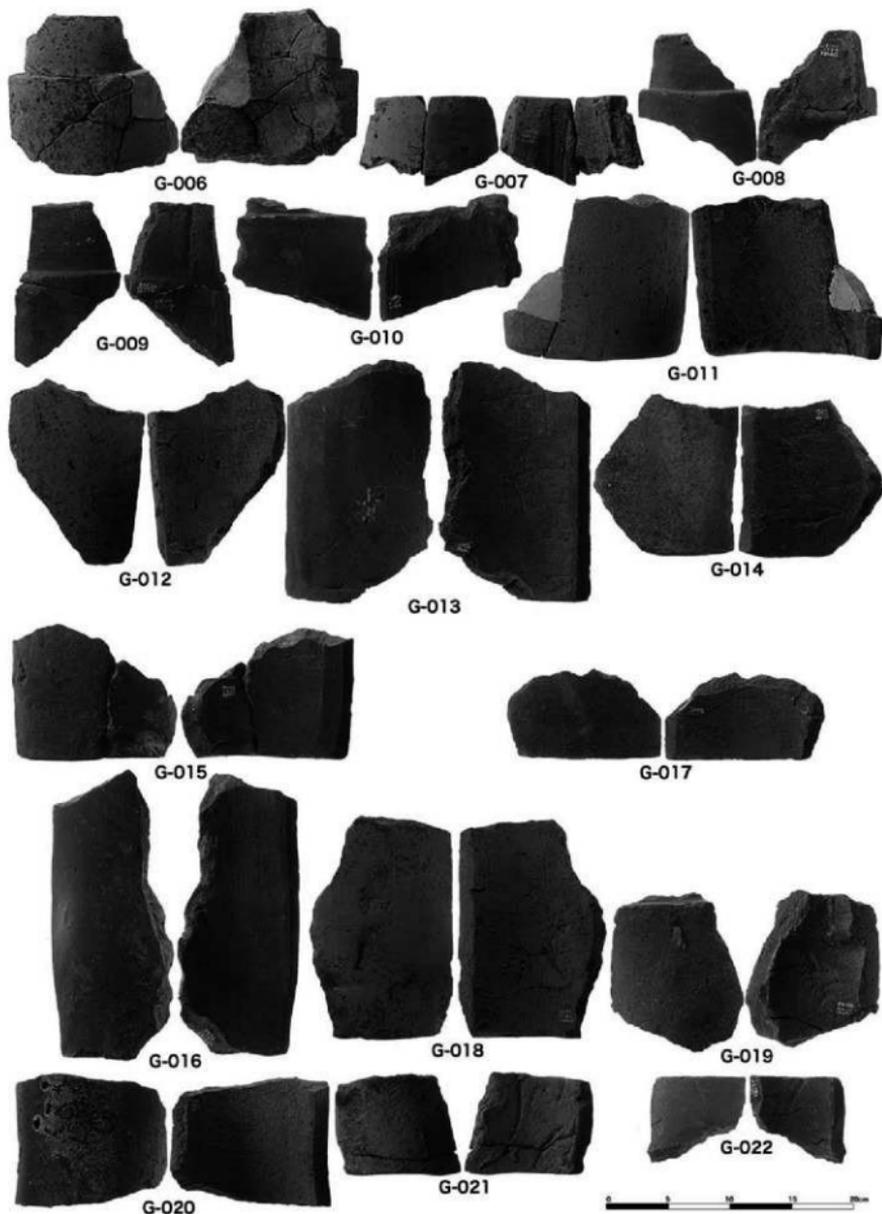


G-005



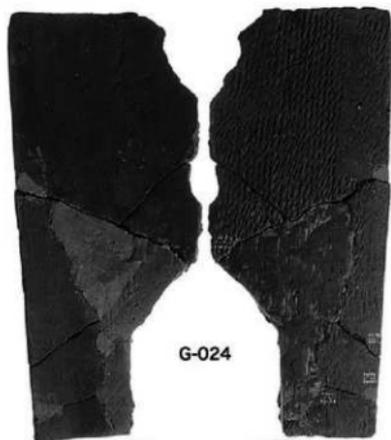
G-004



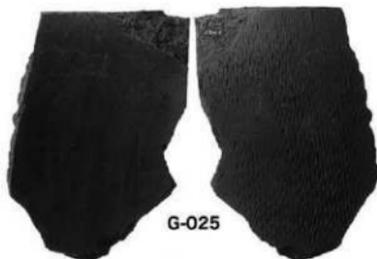




G-023



G-024



G-025



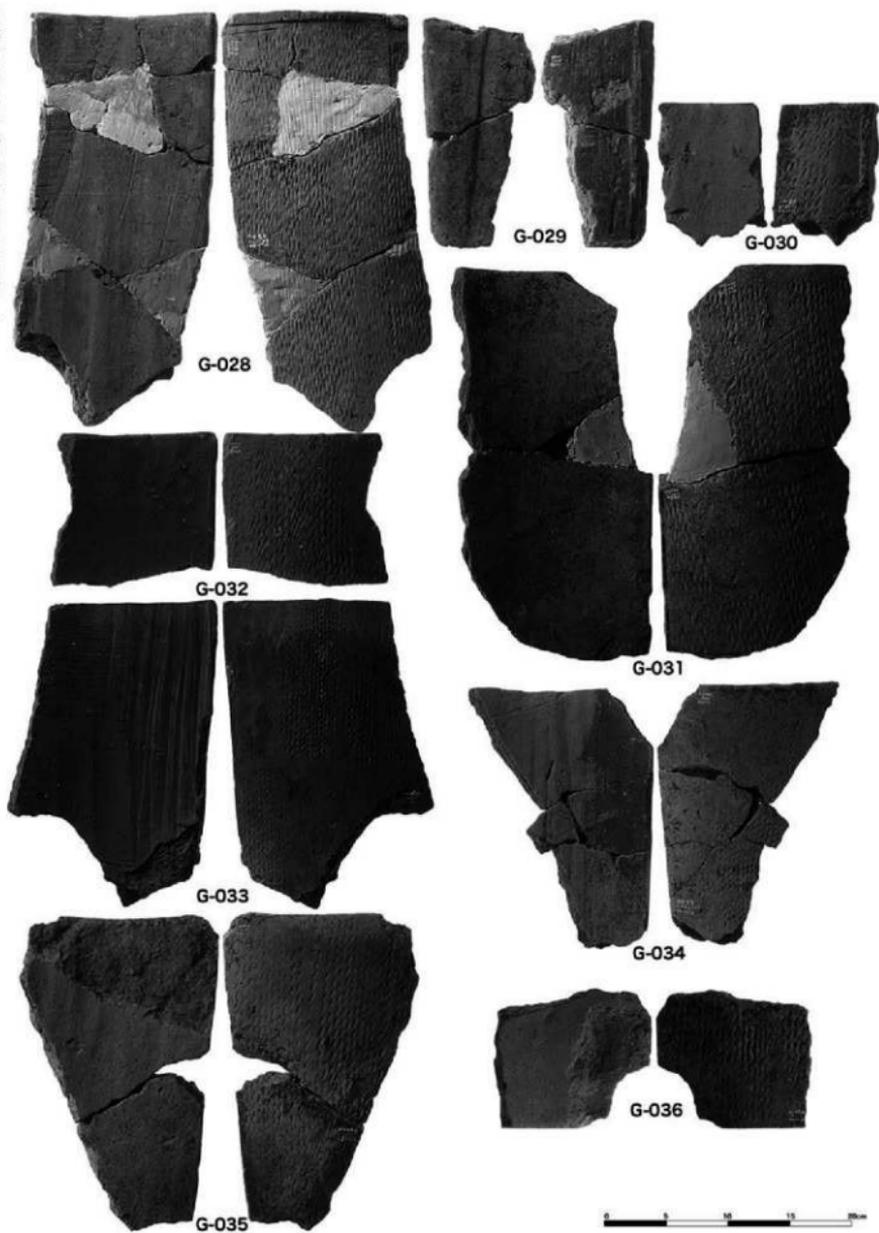
G-027

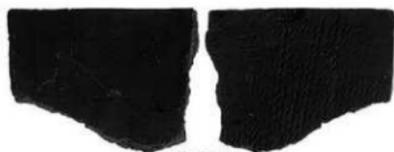


G-026

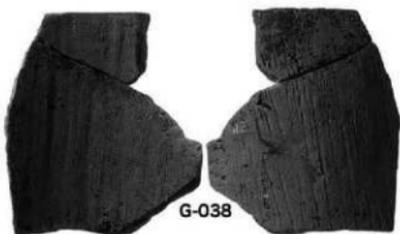


PL.140





G-037



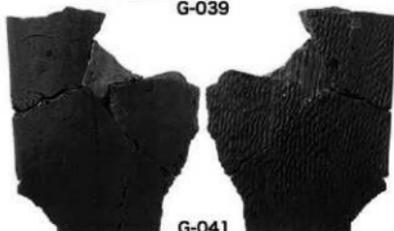
G-038



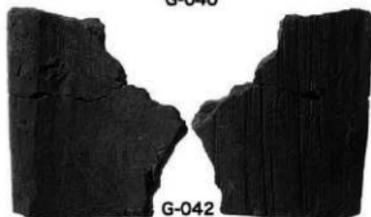
G-039



G-040



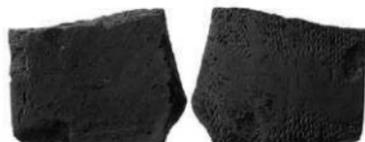
G-041



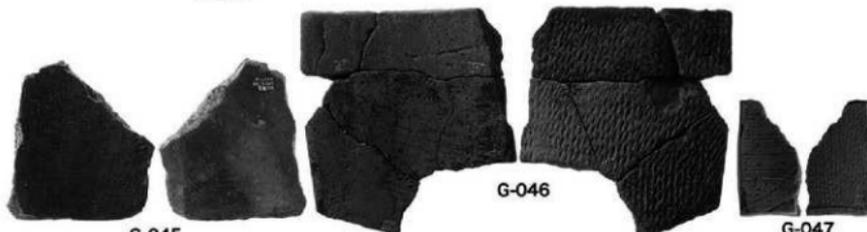
G-042



G-043



G-044



G-045

G-046

G-047



G-048



G-049





G-050



G-051



G-052



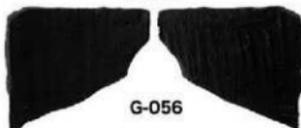
G-053



G-054



G-055



G-056



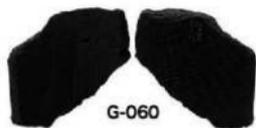
G-057



G-058



G-059



G-060



G-061





05



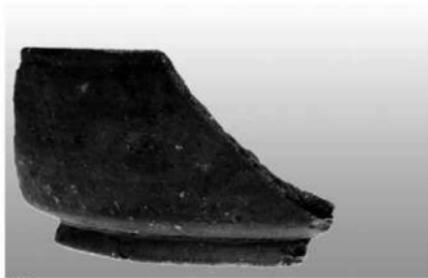
06



01



04



02



07



03



09

報告書抄録

ふりがな	しせきしなのこくぶんじあと
書名	史跡信濃国分寺跡
副書名	平成14(2002)年度～平成17(2005)年度記念物保存修理事業に伴う史跡信濃国分寺跡僧寺北東域及び僧寺南大門推定地発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第100集
編著者名	中沢徳士
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目4番74号 TEL0268(23)5102
発行年月日	西暦2006年2月28日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
信濃国分寺跡	上田市大沼町分子二堂 1100,1101,1102,,1103, 1159,1160,1191,1201, 1202 (枝番号略)	20203	36° 22' 50"	138° 16' 24"	平成14年10月 11日～ 平成16年11月 19日	4,000 m ²	記念物保存 修理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
信濃国分寺跡	寺院	古代及び古墳時代後期～中世	礎石遺物跡 竪穴住居址 掘立柱遺物址 ピット 暗渠排水	土師器・須恵器・ 布目瓦・灰釉陶器・ 緑釉陶器・磁器	僧寺南大門跡の確定

上田市文化財調査報告書第100集

史跡 信濃国分寺跡

平成14(2002)年度～平成17(2005)年度記念物保存修理事業に伴う
史跡信濃国分寺跡僧寺北東域及び僧寺南大門推定地発掘調査報告書

発行日 平成18年(2006)2月28日

発行 上田市・上田市教育委員会

長野県上田市天神二丁目4番74号 TEL0268(23)5102

印刷 中沢印刷株式会社